岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第34冊

鹿田遺跡　12

― 第20次A地点・25次調査 ―

（岡山大学病院中央診療棟他新営に伴う発掘調査）

2018年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

１．墓１出土青磁碗（図53－１）

２．墓１出土青磁碗（図53－２）

序

鹿田遺跡では、2012年度に古代の絵馬が出土して以来、新聞の紙面を賑わす遺物が次々と姿を現わすこととなりました。絵馬に続いたのが中世の烏帽子の発見です。墓の中に、烏帽子を被った人物が埋葬されていました。

それは、岡山大学病院中央診療棟新営工事に伴う鹿田遺跡第25次発掘調査においてです。調査範囲は旧病棟の場所に重複しており、建設当時の大規模な基礎工事によって遺跡の多くは破壊されていました。調査可能な部分は調査対象面積の約30％弱で、残存部も大半が幅１m弱の帯状であり、まとまった広がりは限定的でした。そうした中で、全容をとどめていた墓の存在は奇跡的といえるかもしれません。

烏帽子の残存状況は極めて良好で、折烏帽子であることもはっきりとわかります。この烏帽子を被った人骨の分析や埋納された美しい青磁の碗などから、豊かな品を愛用した熟年の武士の姿が蘇ってきます。また、成人１体と子供の頭部が納められた不可解な埋葬も注目されるところです。こうした人骨の様子は、今から750～850年前に「鹿田」の地で活躍した人物像について、より具体的な手がかりを与えてくれました。その他にも、現代の基礎工事で細かく分断された溝群を丹念に拾い上げた本調査によって、中世後半の土地区画について精度の高い復元が可能となった点も重要です。

小さな積み重ねが大きな成果に結びつく、そういう調査だったように思えます。大規模な破壊が予想されても、そこかしこに痕跡は残っています。それを大事にすることの大切さを改めて感じる次第です。

発掘調査後、烏帽子は人骨や埋納遺物とともに保存処理が行われ、かつての美しい輝きを取り戻しました。青磁碗も修復され、いずれも博物館などの展示で活用されています。このたび、こうした遺物の保存処理そして報告書の刊行までを完了できましたのも、多くの方々のご支援・ご尽力の賜物でございます。最後になりましたが、関係各位および関係各機関に対して厚く御礼申し上げます。

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
センター長（理事）　菅　　誠　治
副センター長　　山　本　悦　世

目　　次

第１章　歴史的・地理的環境 ……（山口雄治）　1
第１節　遺跡の位置と周辺遺跡 …… 1
第２節　鹿田遺跡 …… 3
ａ．構内座標の設定 …… 3
ｂ．遺跡の概要 …… 3

第２章　調査に至る経緯と概要 …… 9
第１節　調査に至る経緯と経過 ……（岩﨑志保・野崎貴博）　9
ａ．調査に至る経緯 …… 9
ｂ．調査体制 …… 9
ｃ．調査経過 …… 10
第２節　調査の概要 ……（山口）　12

第３章　調査の記録 …… 14
第１節　調査地点と層序 ……（山口）　14
ａ．調査地点の位置 …… 14
ｂ．層序 …… 15
ｃ．地形復元 …… 19
第２節　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物 …… 20
ａ．井戸 ……（山口）　20
ｂ．土坑 ……（野崎）　28
ｃ．溝と畦畔 ……（山口）　29
ｄ．焼土溜まり ……（山口）　34
第３節　中世前半（平安時代後期～鎌倉時代）の遺構・遺物 …… 35
ａ．井戸 ……（野崎）　35
ｂ．土坑 ……（野崎・山口）　43
ｃ．墓 ……（山口）　44
ｄ．溝 ……（山口・岩﨑）　51
ｅ．ピット群 ……（山口）　60
第４節　中世後半（室町時代）の遺構・遺物 …… 61
ａ．井戸 ……（岩﨑）　64
ｂ．溝 ……（岩﨑・野崎）　67
第５節　近世（江戸時代）の遺構・遺物 ……（岩﨑）　71
ａ．井戸 …… 73
ｂ．土坑 …… 74
ｃ．溝 …… 77
第６節　包含層ほかの出土遺物 ……（山口）　78

第４章　自然科学的分析
第１節　鹿田遺跡第25次調査出土の中世人骨 ……（高椋浩史）　79
第２節　鹿田遺跡第25次調査出土漆製品の塗膜構造調査 ……（㈱吉田生物研究所）　84

第３節　鹿田遺跡第25次調査出土折敷の樹種調査 …… (㈱吉田生物研究所)　87
第４節　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土木製品類と自然木の樹種 …… (能城修一)　88
第５節　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土種子と種子圧痕 …… (山口・沖　陽子)　98
第６節　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土動物遺存体 …… (江川達也)　101

第５章　結語 …… (山口)　103

遺構一覧表 …… 104

写真図版

挿図目次

第１章
図１　周辺遺跡分布図 …… 2
図２　発掘調査地点と構内座標 …… 4
第２章
図３　調査開始状況 …… 11
図４　調査風景（第25次調査） …… 12
図５　遺構全体図 …… 13
第３章
図６　調査地点位置図 …… 14
図７　土層断面位置図 …… 15
図８　調査区断面１ …… 16
図９　調査区断面２ …… 17
図10　調査区断面写真 …… 18
図11　弥生時代～古墳時代初頭遺構全体図 …… 21
図12　井戸１ …… 22
図13　井戸１出土遺物１ …… 23
図14　井戸１出土遺物２ …… 24
図15　井戸１出土遺物３ …… 25
図16　井戸２ …… 26
図17　井戸２出土遺物１ …… 27
図18　井戸２出土遺物２ …… 28
図19　土坑１ …… 28
図20　土坑２ …… 29
図21　調査区北東部検出遺構 …… 29
図22　溝１断面 …… 30
図23　溝２断面 …… 30
図24　溝３～５断面 …… 30
図25　溝５出土遺物 …… 31
図26　溝６ａ断面 …… 31
図27　溝６ｂ断面 …… 31
図28　調査区西部検出遺構 …… 32
図29　溝７～９断面 …… 32
図30　調査区南東部検出遺構 …… 32
図31　畦畔１・２・溝10～12断面 …… 33
図32　溝13断面 …… 34
図33　溝14断面 …… 34
図34　溝15断面 …… 34
図35　溝16断面 …… 34
図36　焼土溜まり …… 35
図37　中世前半遺構全体図 …… 36
図38　中世前半遺構全体図－北東部－ …… 37
図39　中世前半遺構全体図－西部－ …… 37
図40　中世前半遺構全体図－南東部－ …… 37
図41　中世前半遺構全体図－南西部－ …… 38
図42　井戸３ …… 39
図43　井戸３出土遺物１ …… 40
図44　井戸３出土遺物２ …… 41
図45　井戸３出土遺物３ …… 42
図46　井戸４・土坑３・土坑３出土遺物 …… 43
図47　土坑４ …… 44
図48　土坑５ …… 44
図49　墓１ …… 45
図50　烏帽子出土状況 …… 46
図51　墓１木棺四隅の鉄釘出土状況 …… 46
図52　墓１土器出土状況 …… 46
図53　墓１出土遺物１ …… 47
図54　墓１出土遺物２ …… 48
図55　墓１出土遺物３ …… 49

図56　墓２ …… 50
図57　墓２白磁出土状況・出土遺物 …… 50
図58　溝17断面 …… 51
図59　溝17出土遺物 …… 52
図60　溝18断面 …… 52
図61　溝19断面・出土遺物 …… 52
図62　溝20断面 …… 53
図63　溝21断面 …… 53
図64　溝22断面・出土遺物 …… 53
図65　溝23断面 …… 54
図66　溝24断面 …… 54
図67　溝25断面・出土遺物 …… 54
図68　溝26断面 …… 55
図69　溝26出土遺物 …… 56
図70　溝27断面 …… 57
図71　溝28断面 …… 57
図72　溝29断面 …… 58
図73　溝30断面 …… 58
図74　溝31・32断面 …… 58
図75　溝33断面 …… 58
図76　溝34断面 …… 59
図77　溝35断面 …… 59
図78　溝36断面 …… 59
図79　溝37断面 …… 59
図80　柱材・礎板出土ピット断面 …… 60
図81　ピット出土遺物１ …… 60
図82　ピット出土遺物２ …… 61
図83　中世後半遺構全体図 …… 62
図84　中世後半遺構全体図－西部－ …… 63
図85　中世後半遺構全体図－南東部－ …… 63
図86　井戸５ …… 64
図87　井戸６ …… 65
図88　井戸６出土遺物 …… 66
図89　溝38断面・出土遺物 …… 67
図90　溝39断面 …… 67
図91　溝40断面 …… 68
図92　溝40拡張部 …… 68
図93　溝40出土遺物 …… 69
図94　溝41断面 …… 70
図95　溝42断面 …… 71
図96　近世遺構全体図 …… 72
図97　井戸７ …… 73
図98　井戸７出土遺物 …… 74
図99　土坑６ …… 74
図100　土坑７ …… 74
図101　土坑８ …… 75
図102　土坑９ …… 75
図103　土坑10 …… 75
図104　土坑11 …… 76
図105　土坑12 …… 76
図106　土坑13 …… 77
図107　土坑14・出土遺物 …… 77
図108　溝43断面 …… 77
図109　包含層出土遺物 …… 78
第４章
第１節
図１　１号人骨の出土状況 …… 79
図２　１号人骨の頭部の出土状況 …… 80
図３　２号人骨の出土状況 …… 80
図４　３号人骨の出土状況 …… 81
図５　１号人骨（歯牙） …… 83
図６　２号人骨（前頭骨） …… 83
図７　３号人骨（前頭骨・左側頬骨） …… 83
第２節
図１　資料№１ …… 84
図２　№１断面 …… 85
図３　№１断面拡大 …… 85
図４　№１断面拡大（上） …… 86
図５　№１断面拡大（下） …… 86
図６　№１断面 …… 86
図７　№１断面拡大 …… 86
図８　№２断面 …… 86
図９　№２拡大 …… 86
第３節
図１　顕微鏡写真 …… 87
第４節
図１　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(1) …… 94
図２　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(2) …… 95
図３　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(3) …… 96
図４　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(4) …… 97
第５節
図１　出土種子 …… 99
図２　土器圧痕の位置・拡大写真とSEM画像 …… 100
第６節
図１　ウシ、目不明（ウシもしくはウマ） …… 102

表　目　次

第３章
表１　調査区断面における各層位標高一覧 …… 18
第４章
第２節
表１　調査資料 …… 84
表２　漆器の断面観察結果表 …… 84
第３節
表１　岡山県鹿田遺跡出土木製品同定表 …… 87
第４節
表１　樹種一覧 …… 91
表２　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査で
出土した木製品類と自然木の樹種 …… 93
第５節
表１　検出種子一覧 …… 99
表２　種子圧痕同定結果一覧 …… 99
第６節
表１　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査
出土動物遺存体種名表 …… 101
表２　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査
出土動物遺存体属性表 …… 101

図 版 目 次

図版１　弥生・古墳時代遺構全景
図版２　古墳時代の井戸
図版３　弥生・古墳時代の溝・畦畔・焼土溜まり
図版４　中世前半の井戸(1)
図版５　中世前半の井戸(2)・墓(1)
図版６　中世前半の墓(2)
図版７　中世前半の墓(3)・溝(1)
図版８　中世前半の溝(2)
図版９　中世前半の溝(3)・ピット
図版10　中世後半の井戸・溝(1)
図版11　中世後半の溝(2)・近世の井戸
図版12　近世の土坑(1)
図版13　近世の土坑(2)
図版14　弥生・古墳時代の井戸・溝出土遺物
図版15　中世前半の井戸・墓出土遺物
図版16　中世～近世の井戸・溝出土遺物
図版17　古墳時代～中世の木器
図版18　中世の木器
図版19　木簡・土製品・石製品・金属製品

例　言

1．本書は岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが、岡山大学病院中央診療棟他新営に伴って実施した鹿田遺跡第20次Ａ地点および25次調査の発掘調査報告書である。両調査地点は、岡山市北区鹿田町２丁目５番１号に所在する。
　・第20次調査Ａ地点の発掘調査期間は2009年６月～８月、調査面積は632㎡である。
　・第25次調査の発掘調査期間は2014年１月～８月、調査面積は2,545㎡である。
2．発掘調査は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター運営委員会の指導のもとに行われ、報告書作成に関しても運営委員会の指導を得た。委員・幹事諸氏に御礼申し上げる。
3．本書作成に当たっては、下記の諸氏にご教示・ご協力いただいた。近世陶磁器：乗岡実（岡山市教育委員会）、石材同定：鈴木茂之（岡山大学大学院自然科学研究科）、人骨同定：高椋浩史（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）、木材同定：能城修一（明治大学黒耀石研究センター）、種子同定：沖陽子（岡山大学大学院環境生命科学研究科）、動物遺存体同定：富岡直人・江川達也（岡山理科大学）、貝類同定：福田宏（岡山大学大学院環境生命科学研究科）、鉄器のＸ線写真：丸山敏則（岡山大学大学院保健学科）、木簡判読：今津勝紀・徳永誓子（岡山大学大学院社会文化科学研究科）このうち、高椋氏・能城氏・江川氏・沖氏からは玉稿を賜った。記して感謝申し上げる。
4．発掘調査時の遺構実測・写真撮影は、調査体制の項で記載する調査研究員が行った。
5．報告書作成に当たっての主な担当は以下の通りである。
　＜遺物＞土器・土製品・石器・金属器：（実測・浄書・観察表）有賀紅美、西本尚美
　　（実測補助）岩崎志保・野崎貴博・山口雄治
　　木製品：（実測・浄書）野崎・有賀・西本、（観察表）野崎
　　写真撮影：野崎
　＜遺構＞浄書：岩崎・野崎・山口
　なお、遺物の整理・遺構下図作成は第20次Ａ地点を野崎が、第25次地点の弥生～中世前半を山口が、中世後半～近世を岩崎が行った。
6．本書の執筆分担は目次に示した。
7．編集は山本悦世（副センター長）・清家章（調査研究室長）の指導のもと、山口が担当した。
8．発掘調査の概要は『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009・2014』に一部報告しているが、本書をもって正式なものとする。
9．本書で使用した地形図は、建設省国土地理院発行の1／25000の地形図「岡山北部」と「岡山南部」(平成６年度発行）を合成して使用したものである。
10．本書に掲載した記録・出土遺物は全て本センターで保管している。

凡　例

1．本書で用いる高度値は海抜表高であり、方位は国土座標Ⅴ座標系（日本測地系）の座標北である。
2．遺物番号は遺構別に番号を付するが、土製品にはＴ、石器にはＳ、木器にはW、金属器にはMを付して通し番号とする。
3．遺物に関するデータは観察表にまとめて、原則、実測図を組み合わせて掲載している。
　拓本は、内・外面を掲載する場合は、左側に外面、右側に内面を置く。片面の場合は外面を基本とする。
　観察表の表記基準は以下の通りである。
　①　胎土は、微砂：砂粒径0.5㎜以下、細砂：0.5～１㎜、細礫：２㎜以上
　②　法量の単位は「㎝」である。数値の差が３㎜以下の場合は、平均値とし、以上の場合は併記した。
4．土層注記では鉄分をFe、マンガンをMnと表記した。一般的なものは省略している。また、下記の記号を用いて含有量を示している。
　◎：顕著な含有、○：含有、△：少量の含有
5．巻末図版の遺物番号は、本文中の遺物番号に一致する。

第１章　歴史的・地理的環境

第１節　遺跡の位置と周辺遺跡

鹿田遺跡は、岡山市街地の南部に位置する岡山大学鹿田地区（岡山市北区鹿田町２丁目５番１号）のほぼ全域にわたって広がる縄文時代～近世の複合遺跡である。その位置は、岡山県中央部を走る旭川が形成した岡山平野の南端部にあたり、河口近くに形成された三角州帯上に立地している。現在の旭川は、本遺跡の東方約１㎞を児島湾に向けて南流しているが、かつては岡山市街地の北東から南西にかけて幾筋かの河道となって網流していたと考えられる。また、本遺跡は海岸線から北に約7.5㎞程度の距離をもつが、中世以前には、遺跡の南側近くに瀬戸内海の影響が強く及んでいたことが想定される。

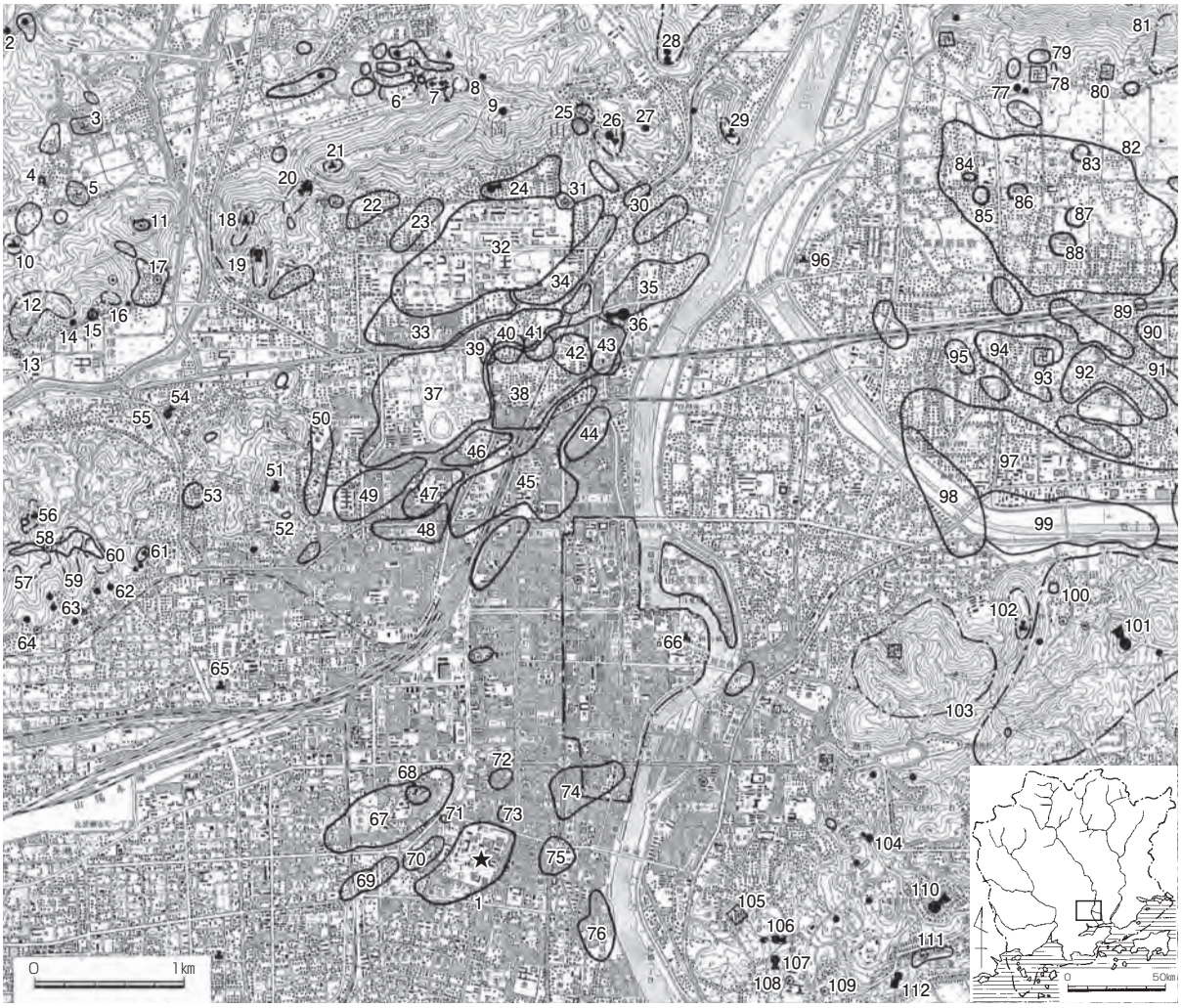
遺跡周辺における人間の生活は旧石器時代にまで遡り、旭川を挟んで対岸の操山山塊ではナイフ形石器が採集されている[1]。縄文時代では、本遺跡が所在する平野部北端を区切る半田山丘陵南端に位置する朝寝鼻貝塚で前期の生活痕跡が確認される[2]。こうした人間活動が広がりをみせるのは、縄文時代中期以降である。竪穴住居や貯蔵穴群などが残る中期中葉～後期中葉の津島岡大遺跡[3]、旭川を挟んで後期中葉の貯蔵穴群などが調査された百間川沢田遺跡[4]は、その代表的遺跡である。いずれも丘陵裾付近に形成された集落であるが、これらの遺跡は、一時的な中断を挟みながらも、弥生時代早期（突帯文土器の段階）につながっていく。

弥生時代前期では、津島岡大遺跡[5]～津島遺跡周辺[6]あるいは百間川沢田遺跡～原尾島遺跡[7]において水田遺構が調査されている。早期とされる津島江道遺跡の水田時期についての評価は確定していない[8]が、水稲農耕の情報が岡山平野にかなり早い段階でもたらされ、受容されていたことは確実であろう。

集落では、前期前半は津島遺跡[9]に限定的であるが、その後、南方遺跡[10]・雄町遺跡[11]・百間川沢田遺跡[12]・同原尾島遺跡[13]などが出現する。さらに数が増加していくのは中期後半以降である。中期後半～後期前葉の沖積作用の進行に伴う微高地形成と連動するように新たな集落が展開する。その結果、旭川西岸域における遺跡の分布は、半田山と京山丘陵のもとに広がる北群と臨海性の高い南群に二分される。前者では、三角州の形成に伴うかのように、前期末葉～中期前半の代表的集落である南方遺跡から絵図遺跡[14]や上伊福九坪遺跡[15]へと場所が移動し、後期には津島遺跡[16]や伊福定国前遺跡[17]などを含めた広がりに中核的集落が形成される。後者では、中期後葉に鹿田遺跡[18]、後期には天瀬遺跡[19]が加わり、遺跡群のまとまりをみることができる。一方、旭川東岸では、雄町遺跡などのように前期から後期に至る継続性の高い遺跡が多いという特徴が指摘されるが、同平野の南端に位置する百間川遺跡群では、中期に同兼基・今谷遺跡[20]、後期に同原尾島遺跡[21]へと中心が移動する。

旭川下流域における墳墓は、弥生時代末～古墳時代前期にはいると平野部周囲の丘陵あるいは山塊上に数多く築かれているが、こうした弥生墳丘墓や前方後円（方）墳は、複数の首長系列の存在を示唆する。鹿田遺跡のある旭川河口付近の古墳時代の首長系列としては、遺跡を見下ろす操山山塊の尾根上に位置する操山109号墳・網浜茶臼山古墳[22]の系列を当てることができる[23]。造墓活動は古墳時代前期後半頃に最盛期を迎え、神宮寺山古墳[24]、金蔵山古墳[25]、湊茶臼山古墳[26]という全長150ｍ級の前方後円墳を生み出す。それらを最後に、前方後円墳の築造は急速に衰退するが、古墳時代後期に入ると周囲の山塊に中小の横穴式石室墳が群集して築かれるようになる。

古墳時代前期の集落は、百間川遺跡群や津島遺跡一帯に認められるように、弥生時代後期からの状況が、遺跡・遺構数の増加傾向を伴いつつ踏襲される。しかし、中期以降には規模が縮小する傾向が、旭川西岸の南群に顕著に認められ、海側に近い鹿田遺跡周辺では遺跡は消滅する。旭川東岸の百間川遺跡群周辺でもそうした傾向が認められる。鹿田遺跡のように古墳時代前期まで安定した生活拠点であった集落の衰退には、古墳にみる首長系列の消長と軌を一にする状況がみてとれる。



1．鹿田遺跡（縄文～近世）
2．富原西奥古墳（古墳）
3．荒神廃寺（飛鳥～平安）
4．上の段窯跡（奈良）
5．矢望城廃寺（奈良）
6．佐良池古墳群（古墳後期）
7．擂鉢池古墳群（古墳後期）
8．奥池古墳群（古墳後期）
9．ダイミ山古墳（古墳中期？）
10．蜂矢城（室町）
11．坊主山遺跡（古墳～室町）
12．中楢津古墳群（古墳後期）
13．貝塚（不明）
14．若宮八幡裏古墳（古墳）
15．東楢津貝塚（不明）
16．東楢津１号・２号墳（古墳後期）
17．首部（白山神社）首塚（鎌倉～室町？）
18．烏山城（笹ヶ迫城）跡（室町）
19．七つ坦墳墓・古墳群（弥生～古墳）
20．都月坂墳墓・古墳群（弥生～古墳）
21．半田山城（戦国）
22．津島福居遺跡（古墳～室町）
23．お塚（様）古墳（古墳中期）
24．津島東遺跡（縄文～室町）
25．津島東３丁目第１地点(弥生・古墳)
26．一本松古墳（古墳中期）
27．不動堂古墳
28．宿古墳群（古墳前期・後期）
29．妙見山城跡（戦国）
30．釜田遺跡（弥生他）
31．朝寝鼻貝塚（縄文前～後期）
32．津島岡大遺跡（縄文中期～近世）
33．津島新野遺跡（弥生）
34．津島江道遺跡（縄文～近世）
35．北方長田遺跡（弥生～近世）
36．神宮寺山古墳（古墳前期）
37．津島遺跡（弥生～近世）
38．北方上沼遺跡　他（弥生～近世）
39．北方下沼遺跡（弥生～室町）
40．北方横田遺跡（弥生～室町）
41．北方中溝遺跡（弥生～室町）
42．北方地蔵遺跡（弥生～近世）
43．北方藪ノ内遺跡（弥生～近世）
44．広瀬遺跡（弥生）
45．南方遺跡他（弥生～近世）
46．絵図遺跡（弥生～平安）
47．上伊福遺跡（弥生・古墳）
48．上伊福（立花）遺跡（弥生～室町）
49．上伊福遺跡・伊福定国前遺跡（弥生～近世）
50．上伊福西遺跡・尾針神社南遺跡（弥生～平安）
51．津倉古墳（古墳前期）
52．妙林寺遺跡（弥生）
53．石井廃寺（奈良？～室町）
54．青陵古墳（古墳前期）
55．十二本木塚古墳
56．富山城跡（室町～江戸）
57．矢坂山西古墳群（古墳後期）
58．矢坂山山頂遺跡（弥生）
59．矢坂山東古墳群（古墳後期）
60．正野田古墳群（古墳後期）
61．関西高校裏山古墳群
62．若宮古墳（古墳後期）
63．乞食谷古墳（古墳後期）
64．貝塚（不明）
65．高柳城跡（室町？）
66．岡山城跡（室町～近世）
67．大供本町遺跡（古代～近世）
68．大供東浦遺跡（弥生～室町？）
69．鹿田本町遺跡（仮称）（鎌倉～室町？）
70．鹿田遺跡（県立岡山病院）遺跡（平安～鎌倉）
71．散布地（旧名：大供遺跡)(弥生)
72．大供中道遺跡（弥生～室町）
73．散布地（弥生他）
74．天瀬遺跡（弥生～近世）
75．新道遺跡（奈良～近世）
76．二日市遺跡（弥生～近世）
77．唐人塚古墳（古墳後期）
78．賞田廃寺（飛鳥～室町）
79．賞田廃寺窯跡（奈良）
80．浄土寺（奈良～室町）
81．湯迫古墳群（古墳前期）
82．備前国府関連遺跡
83．北口遺跡（弥生～室町）
84．備前国庁跡（奈良～平安）
85．備前国府推定地（南国長）遺跡（弥生～鎌倉）
86．南古市場遺跡（奈良～平安）
87．ハガ（高島小）遺跡（奈良～室町）
88．中井・南三反田遺跡・古墳群（弥生～室町）
89．雄町遺跡（弥生～古墳）
90．乙多見遺跡（弥生）
91．関遺跡（弥生）
92．赤田東遺跡・関遺跡(弥生～室町)
93．幡多廃寺（飛鳥～平安）
94．赤田西遺跡（弥生～室町）
95．原尾島遺跡（弥生～室町）
96．中島城跡（室町）
97．百間川遺跡群（縄文～近世）
98．百間川原尾島遺跡（縄文中期末～近世）
99．百間川沢田遺跡(縄文中期～近世)
100．操山219号遺跡（旧石器）
101．金蔵山古墳（古墳前期）
102．妙禅寺城跡（戦国）
103．操山古墳群（古墳後期）
104．操山103号墳（古墳前期）
105．網浜廃寺（飛鳥～平安）
106．網浜茶臼山古墳（古墳前期）
107．操山109号墳（古墳前期）
108．操山202号遺跡（平安～奈良）
109．貝塚（鎌倉～室町？）
110．湊茶臼山古墳（古墳前期）
111．湊荒神遺跡（奈良～室町）
112．大塚山経塚（鎌倉～室町）

図１　周辺遺跡分布図（縮尺1/50,000、1/3,750,000）

古代国家完成期の政治状況を反映する国府や寺院関連遺跡については、旭川東岸における発掘調査成果から、備前国府の関連官衙と考えられるハガ遺跡[27]、創建期が飛鳥時代にさかのぼり平城宮式瓦も出土した賞田廃寺[28]、総柱建物や道路あるいは「上三宅」や「市」が書かれた墨書土器・「官」の刻印須恵器などが出土した百間川米田遺跡[29]などがあげられる。また、旭川河口付近では、平城宮式瓦が確認されている網浜廃寺[30]が知られる。その対岸では、８世紀の火葬遺構などが報告された新道遺跡[31]、そしてその西約500mに８世紀後半の井戸から絵馬が出土した鹿田遺跡[32]が続く。こうした状況の背景にみえてくる旭川河口を介した人々の交流が、本遺跡と関わりの深い鹿田庄成立の重要な要因となったと想定できる。

平安～鎌倉時代には、鹿田遺跡周辺は、地割り方向を手がかりにした歴史地理学の研究や発掘調査成果から摂関家殿下渡領である鹿田庄の故地に比定されている。鹿田遺跡の詳細は後述するが、同地域を構成する新道遺跡では12世紀後半頃の井戸から「□□御庄久延弁」と書かれた木簡が出土[33]し、また、南東１㎞の旭川河口岸に位置する二日市遺跡でも井戸などが確認されている[34]。旭川東岸では、百間川遺跡群において該期の集落遺跡が知られている。こうした状況は、鎌倉時代における溝などの大形化などにみる集落景観の変化を経て室町時代にも概ね継続する。大供本町遺跡でも同時期の屋敷地の並びが調査されている[35]。

江戸時代には、岡山城や城下町の整備に伴う集落の再編、あるいはその後の海浜部での大規模な干拓によって、鹿田遺跡の状況は大きく変化する。海岸線は南へと後退し、鹿田遺跡周辺は屋敷地から耕地が広がる農村地帯へと変貌を遂げる。その後、1921（大正10）年に、岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校や岡山県立病院が建設された。これに伴って、遺跡は厚さ0.6～１mの造成土に覆われた。現在、都市開発の進行によって遺跡周辺は市街地となっている。

第２節　鹿 田 遺 跡

ａ．構内座標の設定

本センターでは、岡山大学鹿田地区構内において、周囲の市街地および構内建物の主軸に合わせた構内座標を設置して調査あるいは記録を行っている（図２）。この構内座標は、2002年度までは日本測地系による国土座標第Ⅴ座標系に基づいて、南北・東西軸座標値（Ｘ＝－149,800m、Ｙ＝－37,400m）を原点とし、南北軸をN-15°-Eに振ったものを使用していた。その後、2002年４月１日に改正された測量法の施行に伴い、2003年度以降に刊行する報告書では座標値を世界測地系へ変更することとした[36]。その結果、構内座標の原点は、Ｘ＝－149,456.3718m、Ｙ＝－37,646.7700mの数値にあたることとなった。

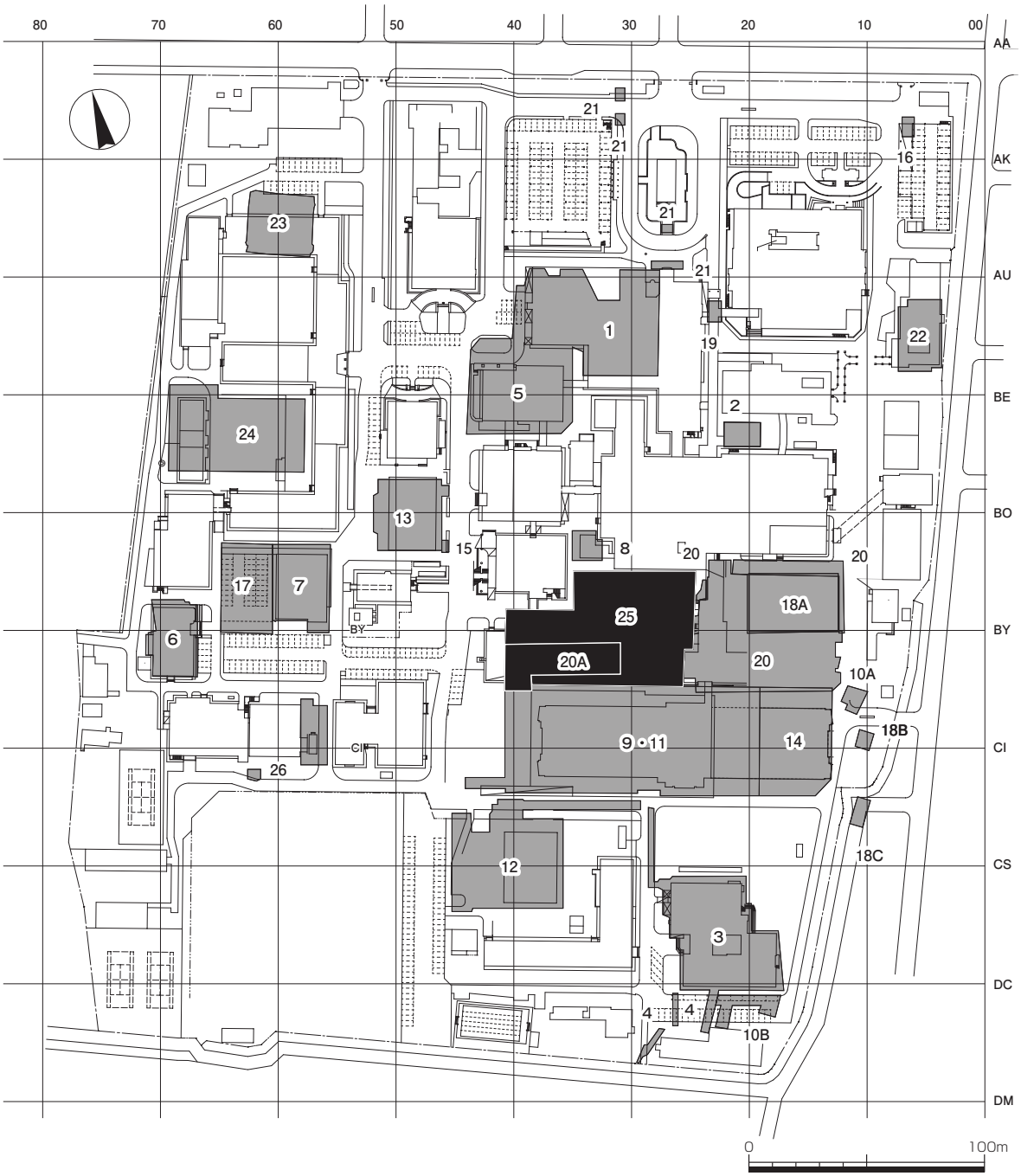
構内では座標原点から一辺５mの正方形の区割りを設定し、原点を通る東西ラインをAA、それより南へ５mごとの東西ラインをAB、AC、…AZ、BA、BB…、のごとく付番し、また原点を通る南北ラインを00、それより西へ５mごとの南北ラインを01、02、03…、と付番する。これらのラインによって形成される５m四方の区画名は、その東北コーナーで交わる２方向のライン名を組み合わせて、AA00区、AB01区、AC02区…、と呼称する。

ｂ．遺跡の概要

2017年度までに27次にわたる発掘調査が行われている本遺跡は、弥生時代中期末葉・後期前半～古墳時代初頭、飛鳥時代、奈良時代後半～平安時代前期、平安時代後期～戦国時代に集落が営まれた遺跡である。また、古代～中世では、藤原摂関家殿下渡領鹿田庄の故地とされる。

【土地形成と集落展開】

本遺跡出土土器で最も古く遡る時期は縄文時代中期末であり、それに続くのが弥生時代早期・前期である。い



1　第１次調査：外来診療棟
2　第２次調査：NMR-CT室
3　第３次調査：医療短期大学部【校舎】
4　第４次調査：医療短期大学部【配管】
5　第５次調査：管理棟
6　第６次調査：アイソトープセンター
7　第７次調査：基礎研究棟
8　第８次調査：RI治療室
9　第９次調査：病棟
10　第10次調査：共同溝関連
11　第11次調査：病棟
12　第12次調査：エネルギーセンター
13　第13次調査：総合教育研究棟
14　第14次調査：病棟
15　第15次調査：総合教育研究棟【外溝】
16　第16次調査：立体駐車場エレベーター
17　第17次調査：基礎研究棟
18　第18次調査：中央診療棟
19　第19次調査：渡り廊下
20　第20次調査：中央診療棟関連
21　第21次調査：外来診療棟周辺他環境整備
22　第22次調査：地域医療総合支援センター
23　第23次調査：JFホール（本調査地点）
24　第24次調査：医歯薬融合棟
25　第25次調査：中央診療棟（Ⅱ期）
26　第26次調査：動物実験施設

※建物名称は調査次の呼称による。

図２　発掘調査地点と構内座標（縮尺1/3,000）

ずれも第１次調査地点で出土している[37]。出土点数は各１点で極めて少量である点は、該期の人間活動の痕跡が希薄であったことを示すと同時に、各時期において陸地が存在した可能性を示唆する。こうした状況から、本遺跡は旭川河口に形成された縄文時代の砂堆をベースにした臨海性の高い集落遺跡と評価される。

その後、近年の調査から、地形面での大きな変化は弥生時代中期中頃～後期初めに起きたことが分かってきた。同時期に急速な土砂の堆積が微高地を形成し（第23次調査地点[38]）、中期中頃には河道が多量の土砂によって埋没している（第12次調査地点[39]）。こうした沖積作用の進行が、本地点における微高地形成に大きな影響を与えたことは、その後の集落形成からも窺うことができる。

最初に集落が形成されたのは第１次調査地点（岡山大学病院外来診療棟）である。弥生時代中期末葉には、このごく限定された範囲に遺構が形成されており、東西50～60m・南北50m程度の比較的小さな居住域が復元される。後期に入ると、居住域は東側（第19次・22次調査地点[40]）と南側（第５次・２次・18次調査地点[41]）に広がり、東西220m・南北100m程度の範囲に拡大する。古墳時代初頭には、東側の広がりは影を潜め、西側（第17次調査地点[42]）に居住域が展開する。居住域周辺域（第12次・13次・20次調査各地点[43]）には、土器溜まりの形成が顕著となる。また、南側（第９次・11次・14次調査地点）には後期～古墳時代初頭の水田域が確認されており[44]、同時期には、海岸線までは一定の距離があったことが想定される。一方、北側（第21次[45]・23次調査地点[46]）の調査では、最も安定した微高地である第１次調査地点の北側が、深い谷地形あるいは河道が中世段階まで存在したことが明らかとなっている。

このように、弥生時代中期後葉～古墳時代において、鹿田遺跡は旭川西岸部のなかで、北側の遺跡集中域から切り離されて海に突き出したような場所に形成され、沖積作用の影響を受けながら居住域が展開した状況が復元される。

平安時代前期においてもこうした地形に大きな変化は確認できない。遺跡の南側は第１次調査地点と１m程度の比高を残している。こうした地点が耕作地として利用されるのは中世以降である。

10世紀における集落の中断を経て、集落が改めて成立する平安時代後期（11世紀～12世紀）の集落構造は以前とは全く異なる。現在の地割りに沿った方向を示す溝で区切られた屋敷地の集村景観が復元される[47]。特に、12世紀には、東西方向について１町単位を基にした方形地割りがなされ、敷地北端と南端のやや低い地域には耕作地の広がりが確認される（第16次調査地点ほか）。さらに、鎌倉時代には、溝で区切られた開放的な屋敷地から、大形の溝を屋敷地周辺にめぐらせた閉鎖的屋敷地空間へと変化する[48]。屋敷地の拡大も特徴的である。該期の屋敷地は、溝で区画された敷地に数棟の建物群と井戸の構成が一般的であり、中には墓を有する場合がある。瓦器や東播系の遺物や輸入陶磁器など、各地域からの流通品が数多く出土しており、流通拠点の様相をうかがわせる。瓦や呪符木簡、そして銅鋺などは宗教的建物の存在を彷彿とさせる。こうした状況は、殿下渡領「鹿田庄」の実態を反映していると考えられる。

鎌倉時代末には、屋敷地の配置は、第９次・11次・14次調査地点付近を軸に東西方向に並ぶ傾向を強め16世紀に至る。街道の存在も見え隠れしているようである。江戸時代（17世紀）に入ると、屋敷地から耕作地へと遺跡の様相は大きく変化する。各調査地点において畦畔や野壺などが認められる。時代背景を考えると、江戸時代開始前後に行われた岡山城下町の再編による影響が想定される。ただし、18世紀には第18次調査Ｂ地点に船着き場[49]や第18次調査Ａ地点周辺に屋敷地が存在した可能性があり、近代に続く大庄屋の存在を想定させる資料が増えてきている。

【海・河川との関係】

本遺跡は旭川西岸平野の南端付近で、海に突き出すような地形に立地していることは前述したとおりである。弥生時代～古墳時代には、海との関連を窺わせる製塩土器や土錘・石錘が数多く出土する。また、瀬戸内海南岸や畿内からの搬入土器の存在も注目される。旭川西岸における集落の中で、一定の役割をもつ場所であったと考

えられる。

その後も、平安時代前期の橋、そして同時代後期に属する傀儡回しの人形頭である猫形木製品[50]や鎌倉時代末～室町時代初めに属する猿形木製品[51]などは人や物資の盛んな流通を示しており、瓦器や国内外からの陶磁器類・砥石や石鍋など多様な出土品とあわせて、海運・水運の結節点に形成された流通拠点としての役割を担う集落の一端を端的に示している。

【藤原摂関家殿下渡領「鹿田庄」との関係】

鹿田庄の成立時期については不明な点もあるが、『興福寺縁起』によれば、弘仁４（817）年に興福寺南円堂で行われた法華会の料米72石を「鹿田地子」で当てたとされている[52]。同時期の資料としては、第１次発掘調査地点（岡大病院外来診療棟）付近で確認された建物群や大形井戸（おおよそ８世紀後半～９世紀代初め）のみであったが、近年集落の西端に位置する第24次調査地点で８世紀後半の井戸が加わった[53]。その内部からは絵馬が２枚重なって出土している。こうした資料は鹿田庄成立期前後における本遺跡の性格を考える上で重要な手がかりになろう。また、中世における流通拠点的性格も、鹿田庄の性格を考える上で重要である。加えて、近年の調査では、本書で報告する13世紀後半～末の烏帽子や第20次調査地点で16世紀の猿の水滴が出土しており[54]、本地点の管理者が武士であったことをうかがわせる。

本章は、下記報告の文章に一部加筆・修正したものである。
山本悦世編　2017『鹿田遺跡10』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

註

⑴　鎌木義昌　1962「第一編　原始時代」『岡山市史（古代編）』
⑵　富岡直人　1998『朝寝鼻貝塚発掘調査概報』加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書２
⑶　a　山本悦世編　1992『津島岡大遺跡３』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第５冊
　　b　阿部芳郎編　1994『津島岡大遺跡４』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第７冊
　　c　岩﨑志保編　2005『津島岡大遺跡16』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第21冊
⑷　a　二宮治夫編　1985『百間川沢田遺跡２　百間川長谷遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告59
　　b　平井　勝編　1993『百間川沢田遺跡３』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告84
⑸　山本悦世編　2004『津島岡大遺跡14』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第19冊
⑹　a　津島遺跡調査団　1969『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』
　　b　岡山県教育委員会　1970『岡山県津島遺跡調査概報』
　　c　島崎　東ほか　1999『津島遺跡Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告137
　　d　平井　勝　2000『津島遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告151
　　e　島崎　東ほか　2003『津島遺跡４』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告173
　　f　岡本泰典ほか　2004『津島遺跡５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告181
　　g　岡田　博編　1998『北方下沼遺跡　北方横田遺跡　北方中溝遺跡　北方地蔵遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告126
　　h　高田恭一郎編　2000『北方地蔵遺跡２　北方藪ノ内遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告149
　　i　柳瀬昭彦　1988「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開―資料集―』日本考古学協会静岡大会実行委員会
　　j　柳瀬昭彦　1988「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開―資料集―』日本考古学協会静岡大会実行委員会
⑺　a　宇垣匡雅編　1999『百間川原尾島遺跡３』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88
　　b　平井　勝編　1995「百間川原尾島遺跡４」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告97
⑻　a　高畑知功　1988「津島江道遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』18
　　b　草原孝典　1999「津島江道（岡北中）遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要　1997（平成９）年度』
⑼　前掲註⑹ａ～ｆ文献
⑽　a　岡山市遺跡調査団　1971『南方遺跡発掘調査概報』
　　b　岡山市遺跡調査団　1981『南方（国立病院）遺跡発掘調査概報』
　　c　柳瀬昭彦・岡本寛久　1981『南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告40
　　d　安川　満編　2016『南方遺跡』岡山市教育委員会
⑾　高橋　護・正岡睦夫ほか1972「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』１
⑿　前掲註⑷ａ文献

⑬　a　江見正巳ほか　1980『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39
　b　正岡睦夫編　1984『百間川原尾島遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告56
　c　柳瀬昭彦編　1996『百間川原尾島遺跡５』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告106
　d　高田恭一郎編　2008『百間川原尾島遺跡７　百間川二の荒手遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告215
⑭　内藤善史編　1996『絵図遺跡　南方遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告110
⑮　a　中野雅美　1984「上伊福（ノートルダム清心女子大学構内）遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14
　b　中野雅美・根木修　1986「上伊福九坪遺跡」『岡山県史』考古資料編
⑯　前掲註⑹ａ～ｆ文献
⑰　a　杉山一雄編　1998『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告125
　b　金田善敬編　2005『伊福定国前遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告188
　c　亀山行雄編　2010『伊福定国前遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告224
⑱　吉留秀敏・山本悦世編　1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第３冊
⑲　出宮徳尚　1986「天瀬遺跡」『岡山県史』考古資料編
⑳　高畑知功　1982『百間川兼基遺跡１・百間川今谷遺跡１』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告51
㉑　前掲註⒀文献
㉒　宇垣匡雅　1990「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査―吉備の前期古墳Ⅲ―」『古代吉備』第12集
㉓　松木武彦　1993「岡山平野における弥生～古墳時代の地域集団」『鹿田遺跡３』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第６冊
㉔　神谷正義・安川　満　2007『神宮寺山古墳　網浜茶臼山古墳』岡山市教育委員会
㉕　西谷真治・鎌木義昌　1959『金蔵山古墳』倉敷考古館
㉖　近藤義郎　1986「湊茶臼山古墳」『岡山県史』考古資料編
㉗　草原孝典　2004『ハガ遺跡』岡山市教育委員会
㉘　高橋伸二　2005『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会
㉙　岡山県教育委員会　1982『百間川当麻遺跡２』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52
㉚　a　中野雅美　1977「吉備における平城宮式瓦について」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16
　b　草原孝典　2002「鹿田庄の設置背景」『新道遺跡』岡山市教育委員会
㉛　草原孝典　2002『新道遺跡』岡山市教育委員会
㉜　南健太郎編　2018『鹿田遺跡11』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第33冊
㉝　前掲註㉛文献
㉞　出宮徳尚　1985「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35　日本考古学協会
㉟　岡山市教育委員会　2006『大供本町遺跡発掘調査現地説明会資料』
㊱　光本　順　2004「日本測地系から世界測地系への移行に伴う構内座標の変更について」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2002』
㊲　前掲註⒅文献
㊳　南健太郎編　2016『鹿田遺跡９』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第31冊
㊴　山本悦世　2001「鹿田遺跡第12次調査」『岡山大学構内遺跡調査研究年報』18
㊵　a　野崎貴博　2010「鹿田遺跡第19次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2008』
　b　岩﨑志保　2012「鹿田遺跡第22次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2011』
㊶　a　前掲註⒅文献
　b　松木武彦・山本悦世　1997『鹿田遺跡４』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第11冊
　c　山本悦世ほか　2008「鹿田遺跡第18次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2007』
㊷　山本悦世　2008「鹿田遺跡第17次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2006』
㊸　a　前掲註㊴文献
　b　光本　順編　2010『鹿田遺跡６』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第26冊
　c　山本悦世ほか　2011「鹿田遺跡第20次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2009』
㊹　a　山本悦世編　2018『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第32冊
　b　岩﨑志保　2014『鹿田遺跡８』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第29冊
㊺　光本　順　2012「鹿田遺跡第21次調査」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要2010』
㊻　前掲註㊳文献
㊼　a　山本悦世　2007「中世の集落構造と推移―鹿田遺跡の場合―」『鹿田遺跡５』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊
　b　山本悦世　2015「鹿田遺跡の土地区画と岡山平野の条里関連遺構」『条里制・古代都市研究』30　条里制・古代都市研究会
㊽　前掲註㊼文献
㊾　光本　順　2013「第18次調査Ｂ・Ｃ地点」『鹿田遺跡７』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第28冊
㊿　前掲註㊾文献
(51)　山本悦世　2007『鹿田遺跡５』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第23冊

(52) 「鹿田」の初出は817（弘仁４）年、興福寺南円堂で行なわれた法華会の料米72石を「鹿田地子」であてたとする記事、「鹿田庄」の初出は900（昌泰３）年、鹿田庄の地子を興福寺長講会料にあてたとする記事にみられるもので、いずれも『興福寺縁起』による。
鈴木景二　2002「備前国鹿田庄・荒野史料と絵図」『新道遺跡』岡山市教育委員会

(53) 前掲註(32)文献

(54) 前掲註(43)ｃ文献

第２章　調査に至る経緯と概要

第１節　調査に至る経緯と経過

ａ．調査に至る経緯

本調査は、岡山大学病院中央診療棟改築に伴う発掘調査である。同工事にあたっては、予定敷地内に建つ病院や厨房棟を撤去する必要があった。病院機能を損なわないように同建物類の解体あるいは建設工事を進めるため、調査対象範囲を２期に分けて発掘することとなった。Ⅰ期目は、2007（平成19）年度に第18次調査として行った。その後、2009年度にはⅡ期目の調査が予定された。その面積は、共同溝部分では第20次調査Ａ地点として632㎡、本体工事地点では第20次調査Ｂ地点として2,482㎡であり、本書で報告する第20次調査Ａ地点では調査員２名が担当することとなった。調査地に建設されていた既存の旧病棟建物は、調査に先立って地上部は解体・撤去されていたが、地中には大型で堅固な基礎構造物をのこしていた。これらを造成土除去の際に同時に撤去するとなると、基礎の周囲にのこると想定される遺跡の損壊も免れないおそれがあったため、これらをのこした状態で造成土および攪乱土を除去して調査することとなった。

さらに2013～2014年度において、第20次調査Ａ地点の南北において調査を実施することとなった。面積は、2,545㎡である。周辺工事の関係で、南側のⅠ工区、北側のⅡ工区に分けて調査を行うこととなったが、調査開始前に建設工事に伴う事前の土壌調査によって予定地内に部分的に汚染土壌があることが判明した。その対処については、本学の工事担当者により善後策が検討され、法令に基づいて発掘作業上の安全への配慮も含めた対応策を講じた。比較的高い汚染箇所は基礎間の狭小な部分であったため、その範囲は攪乱とみなし調査対象外とした。Ⅰ工区では調査員２～３名、Ⅱ工区では３名で調査を開始し、調査の後半には４～５名が担当することとなった。

本書では、Ⅱ期工事の西側半分、第20次調査Ａ地点と第25次調査について報告する。

ｂ．調査体制

【第20次調査Ａ地点】

調 査 主 体	岡山大学	学　　長	千葉　喬三
調 査 担 当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	北尾　善信
調査研究員（調査主任）		助　　手	光本　　順
〃		〃	野崎　貴博

【第25次調査】

調 査 主 体	岡山大学	学　　長	森田　　潔
調 査 担 当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	センター長	門岡　裕一
調査研究員（調査主任）		助　　教	岩﨑　志保
〃		〃	山口　雄治
〃		〃	野崎　貴博
〃		〃	南　健太郎
〃		教　　授	山本　悦世

運営委員会

＜委員＞第20次発掘調査年度（2009年度）

財務・施設担当理事（センター長）　北尾　善信
大学院社会文化科学研究科教授
（副センター長）　新納　　泉
大学院社会文化科学研究科教授　久野　修義
大学院自然科学研究科教授　柴田　次夫

＜委員＞第25次発掘調査年度（2013・2014年度）

財務・施設担当理事（センター長）　門岡　裕一
大学院社会文化科学研究科教授
（副センター長）　新納　　泉
大学院社会文化科学研究科教授　久野　修義
大学院社会文化科学研究科教授
松木　武彦（2013年度）
大学院医歯薬学総合研究科教授　大塚　愛二

＜委員＞報告書作成年度（2017年度）

財務・施設担当理事（センター長）　菅　　誠治
埋蔵文化財調査研究センター教授
（副センター長）　山本　悦世
大学院社会文化科学研究科教授・附属図書館長
今津　勝紀
大学院社会文化科学研究科教授　新納　　泉
大学院医歯薬学総合研究科教授　大塚　愛二
大学院環境学研究科教授
（調査研究専門委員）　沖　　陽子
埋蔵文化財調査研究センター教授
（調査研究室長）　山本　悦世
施設企画部長　山下　隆幸

大学院環境生命科学研究科教授・附属図書館長
沖　　陽子
大学院自然科学研究科教授
（調査研究専門委員）　鈴木　茂之
施設企画部長　秋山　明寛（2013年度）
須崎　茂弘（2014年度）

大学院環境生命科学研究科教授　加藤　鎌司
大学院医歯薬学総合研究科教授　大橋　俊孝
大学院自然科学研究科教授
（調査研究専門委員）　鈴木　茂之
大学院社会文化科学研究科教授
（調査研究室長）　清家　　章
施設企画部長　松山　忠生

c．調査経過

第20次調査Ａ地点の発掘調査

2009年６月１日から造成土除去を開始し、６月16日に完了した。発掘調査は６月18日から開始した。大型の基礎構造物の合間にのこされた調査対象域は断続的かつ狭小で、包含層や遺構は分断されていた。また、調査に伴う掘削および排土の搬出、排水処理等、多くの作業においても困難をともなう環境下での調査となったが、弥生時代、中・近世の遺構を確認することができた。

基礎構造物以外の部分の調査は７月31日に終了、８月５日から基礎の撤去作業と並行して基礎の下部にのこされた遺構の調査を実施し、８月24日にすべての作業を終了した。

第25次調査の発掘調査

Ⅰ工区　2014年１月６日より造成土除去を開始し、２月26日に終了した。当初は建物基礎を除去する計画であったが、予定していた工法では困難と判明したため調査終了後の撤去に変更となった。それに伴って基礎下部については立会調査で対応することとした。2014年２月28日から発掘調査を開始した。基礎等の破壊によって多くが失われており、ほぼ中世面からの調査となった（図３）。近世・中世の遺構検出を３月後半までに終え、その後弥生時代の遺構面の精査に入り、４月17日に終了した。

Ⅱ工区　2014年３月15日から造成土除去を開始し、５月23日に終了した。造成土除去が終了した北東部から５月８日に調査を開始し、６月からは全面に調査を拡大した。近世・中世の井戸・溝・柱穴等の遺構調査を順次終了し、７月中旬から弥生時代後期～古墳時代初期の井戸や溝・畦畔の調査を進め、８月22日にすべての調査を終了

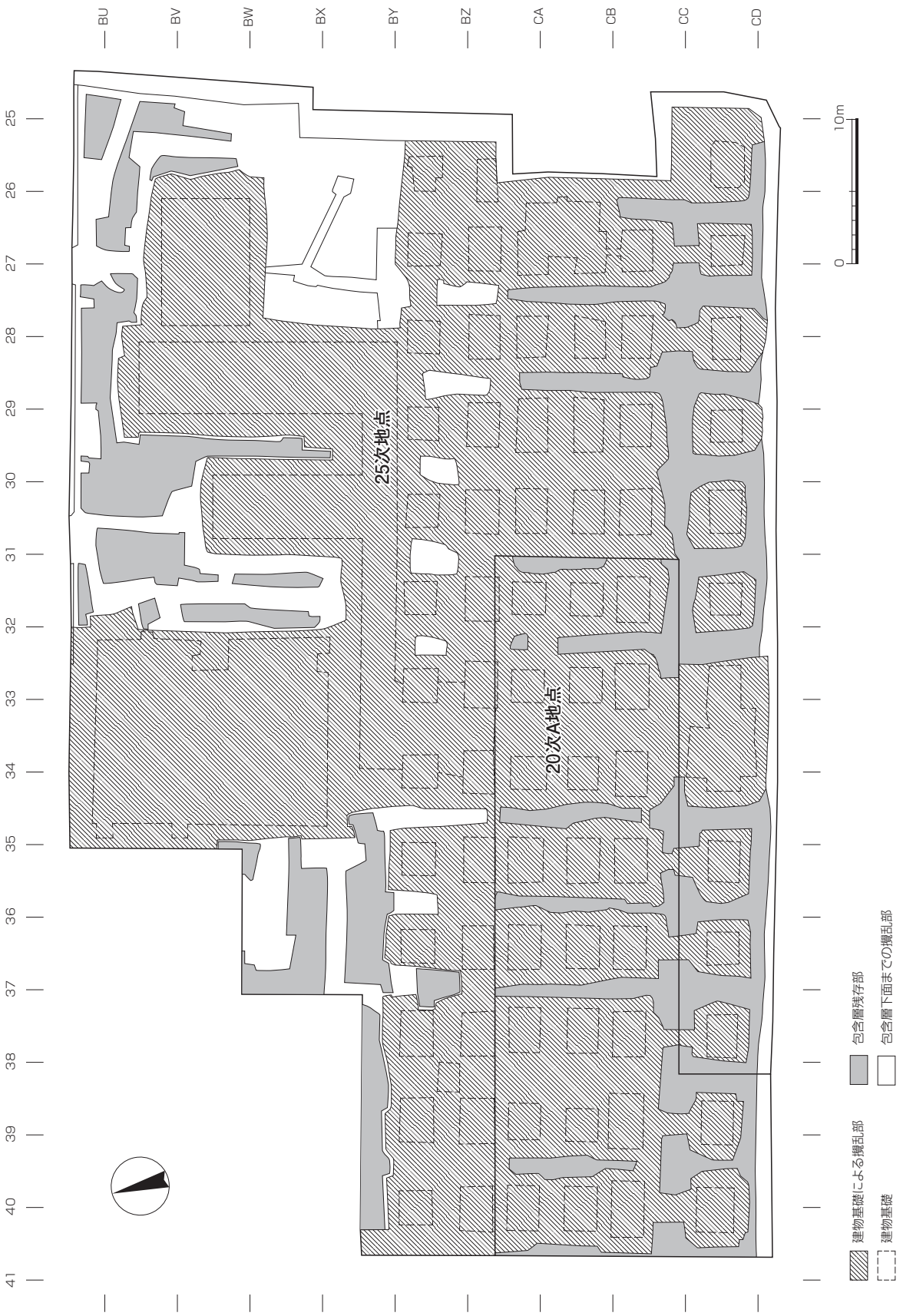


図３　調査開始状況（縮尺1/400）

した。

Ⅱ工区で検出した２基の中世墓に関しては、その残存状況および内容が良好であったため、慎重な調査・分析を加えることとした。人骨の記録・取り上げについては土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの髙椋浩史氏の協力を得て、７月14・15日に両墓の人骨の記録および取り上げを実施した。また、墓１からは頭骨に烏帽子が被さった状態で出土した。非常に良好な形で残存していたため、人骨及び周辺遺物とともに土ごと切り取ることとした。併せて、墓１の墓壙下に埋納された木製品についても、同様の切り取り作業を実施した。それに際しては、吉田生物研究所に分析・保存処理を委託し、７月30日に作業を行った。

７月12日には現地説明会を開催した（図４）。良好な状況で墓から出土した烏帽子をはじめとする中世までの調査状況を紹介した。当日の見学者は200名に達した。烏帽子に関しては非常に注目を集め、報道でも多数取り上げられた。調査においては、岡山大学考古学研究室の留学生２名も参加した。

ａ．墓１調査風景　　ｂ．現地説明会の様子

図４　調査風景（第25次調査）

なお、Ⅰ工区・Ⅱ工区のいずれにおいても本調査終了後に、基礎の撤去作業に伴って下面の立会調査を実施した。調査員１名で中世溝の残存部の調査にあたり、遺物を回収した。

第２節　調査の概要

以下では、両調査を合わせた報告とする。本調査においては、弥生時代後期～古墳時代初頭、平安時代後期～江戸時代そして大正時代までの遺構が確認された。

弥生時代後期～古墳時代初頭（図５上）：＜９～６層に対応＞

弥生時代後期では溝９条・畦畔、古墳時代初頭では井戸２基・土坑２基・溝７条畦畔・畦畔・焼土溜まり１基が検出された。弥生時代後期～古墳時代初頭の地形は、調査区中央～南西部が最も低くなっており、南～南東部で一度緩やかに高くなった後に第９・11次調査区の水田域へと続く様相を呈する。畦畔は、第９・11次調査区へと続く調査区南部において検出された。畦畔は２面確認できたが、その範囲はごく一部に留まった。溝は調査区全体に広がり、小規模な溝と掘り方のしっかりした主要な用水路と判断されるものに分けられる。また、弧を描く溝も確認した。土坑は調査区南西部、焼土溜まりは北部で確認された。井戸は標高の高い北東部において２基検出された。

中世前半＜平安時代後期～鎌倉時代＞（図５中）：＜５層に対応＞

井戸２基・土坑３基・墓２基・溝21条・ピットが検出された。平安時代後期の可能性のある遺構は溝１条のみであり、同時期の遺構は極めて稀薄である。平安時代末～鎌倉時代では、第９・11次調査地点から続く南北方向の大形の溝に区切られた屋敷地の広がりが確認された。溝の西側に井戸、東側に墓２基が検出された。烏帽子を

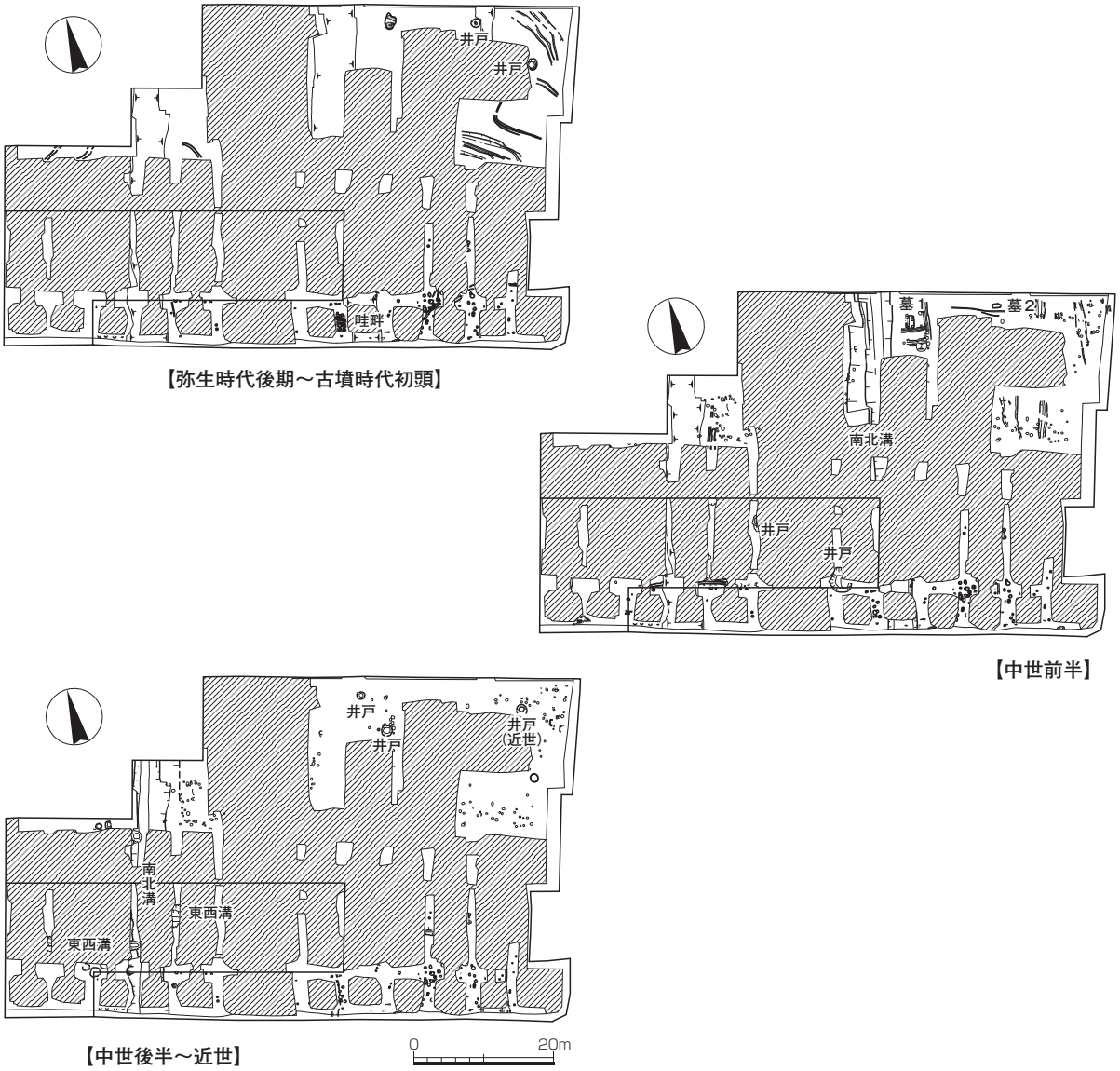


図５　遺構全体図（縮尺1/1,000）

着装した状態で埋葬された墓１と成年と若年以前の遺体が一緒に埋葬された墓２である。本調査地点に南接する第９・11次調査区では、溝の東側で井戸、西側で墓が確認されている。これらが両屋敷地内に存在する状況が明らかとなった。

中世後半＜室町時代＞（図５下）：＜４層に対応＞

井戸２基・溝５条・ピットが検出された。遺構は調査区の西半部で多く確認される。南北方向の大形の溝は西へ移動する。それに東西溝が連結されて屋敷地を区切っている。井戸も前段階より調査区北側に移動しており、第９・11次調査区で指摘されたように屋敷地の再編・拡大をうかがわせる。井戸の廃絶時期は16世紀中頃であることから、屋敷地の終焉もこれとほぼ同時期だった可能性が考えられる。

近世＜江戸時代＞（図５下）：＜３層に対応＞

井戸１基・土坑９基・溝１条が検出された。溝は前段階のものを踏襲している。屋敷地廃絶後の時期にあたり、遺構は稀薄となっている。本地点は、以後耕作地へと変化している。

第３章　調査の記録

第１節　調査地点と層序

ａ．調査地点の位置

本調査地点は、岡山大学鹿田地区のほぼ中央部に位置する。鹿田地区の構内座標ではBT24区～CD40区である。岡山大学病院の旧東西病棟の西地点にあたる（図６）。

報告済みの調査地点との関係は以下の通りである。南側は第９・11次調査地点が接し、約80m離れて第３次調査地点がある。北側約130mには第１次・５次調査地点があり、第８次調査地点は10mの距離にある。西側には、第６次・７次調査地点が約180mはなれてある。未報告ではあるが、近接する調査済みの調査地点は、東側に第18次・20次調査Ｂ・Ｄ地点が本地点と接しており、南側では100m離れて第12次調査地点が位置する。

本地点の北側の第１次調査地点[1]周辺は、弥生時代中期以降の集落が形成される鹿田遺跡の中で最も安定した微高地である。それに対して、南側の第９・11次調査地点[2]では水田域が見つかり、第３次調査地点[3]では古くは河道が入るような、やや低い場所にあたる。本地点は、こうした高位部と低位部との境にあたる地点である。

また本地点南部にあたる第９・11次調査地点および第14次調査地点[4]では、弥生時代の水田域のほかに、11世紀～16世紀の屋敷地が報告されている。また、西側の第６次・７次調査地点[5]では古墳時代初頭の竪穴住居のほか、12世紀～14世紀の屋敷地が報告されている。本地点は、こうした調査成果をつなぐ地点である。

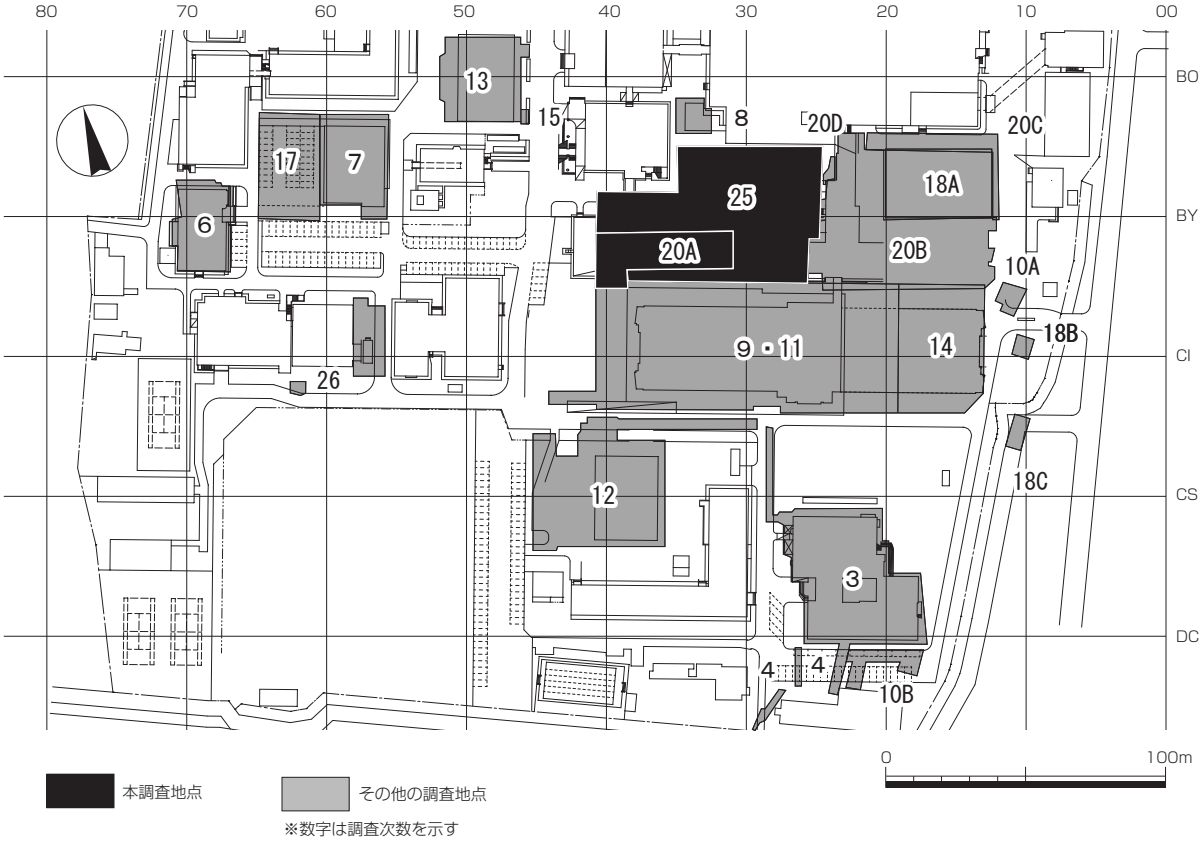


図６　調査地点位置図（縮尺1/3,000）

b．層序

本調査地点は、年度を隔てて２回の調査が行われたことに加えて、近現代の破壊が調査区内の大部分に及んでいたこともあり、調査区の通し断面の記録は断片的にならざるを得なかった。ここでは、調査区の外周断面をもとに、層位と地形について報告する（図７～10、表１）。

＜１層＞（現代）　1922年（大正11年）に始まる岡山医科大学建設に伴って形成された造成および現代にいたる造成土である。上面は、北側で標高2.3m、南側で同2.4m前後を測る。厚さは１m程である。

＜２層＞（近代）　灰白褐色砂質土である。既往の調査成果から明治～大正期の耕作土と評価される。上面は標高1.55m、土層の厚さは0.08mを測る。調査区BT32区でのみ確認できた。遺物は出土していない。

＜３層＞（近世）　暗灰色砂質土である。一部では鉄分の沈着が多く褐色がかる部分もある。調査区の大半で破壊を受け、＜２層＞と同様に一部でのみ確認できる。上面の標高は1.45m～1.55mで、0.1mの高低差をもつ。土層の厚さは0.1m前後を測る。調査区南東部・北東部が高く、南西に向かってさがる地形を呈する。遺物はコンテナ（28㍑/箱）１／５箱程度が出土した。近世陶磁器類を含むがいずれも小片である。遺構は井戸・土坑・溝が検出された。近世の耕作土と考えられる。

＜４層＞（中世後半）　淡灰色～淡灰褐色砂質土である。一部に鉄分を多く含み褐色を強めるところがある。上面は標高1.25m～1.5mで、0.25mの高低差をもつ。最も高い地点は調査区北東部および南東部で標高1.5m、北西部では同1.4m、南西部では同1.25mである。全体に東側が高く、南西へ向かって低くなる。土層の厚さは、0.1m程度である。

出土遺物はコンテナ（28㍑/箱）２箱程度である。本地点では最も多い出土量であったが、ほとんど小片である。土師器片が非常に多く、少量の備前焼や近世陶磁器を含んでおり、中世前半～近世の遺物が出土した。しかし、本層では15世紀～16世紀中頃の溝や井戸などが検出されているため、近世の遺物は混入と判断される。出土遺物のほとんどが小片であることや、時期幅をもつことから、本層は屋敷地再編に伴って形成された土層と理解される。時期は中世後半と考えられる。

＜５層＞（中世前半）　暗茶褐色～褐色砂質土である。全体に黄色砂質ブロックを含む。一部では下層が暗色がかり、２～３層に細分することが可能である。上面は標高1.15m～1.4m前後で、0.25mの高低差をもつ。土層の厚さは0.1m～0.2mである。調査区内で最も高い地点は北西部および北東部であり、標高1.4m前後を測る。南

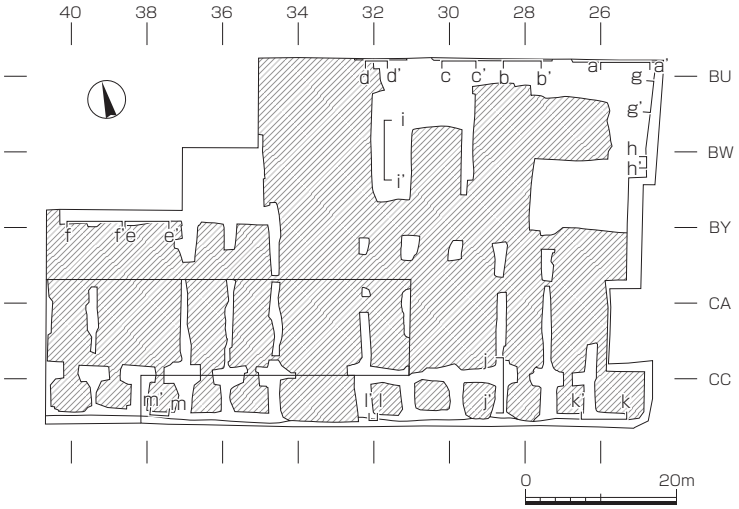


図７　土層断面位置図（縮尺1/1,000）

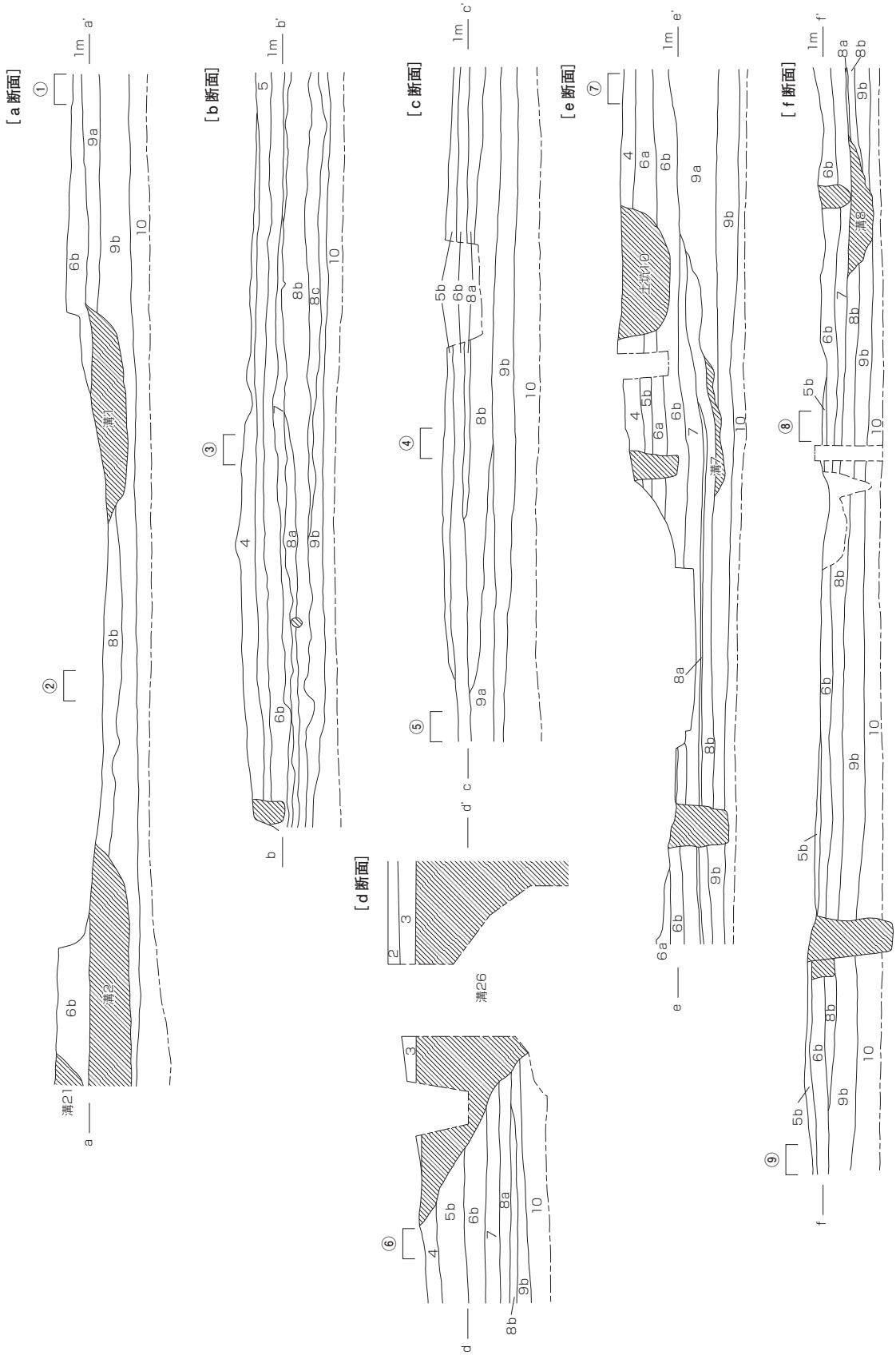
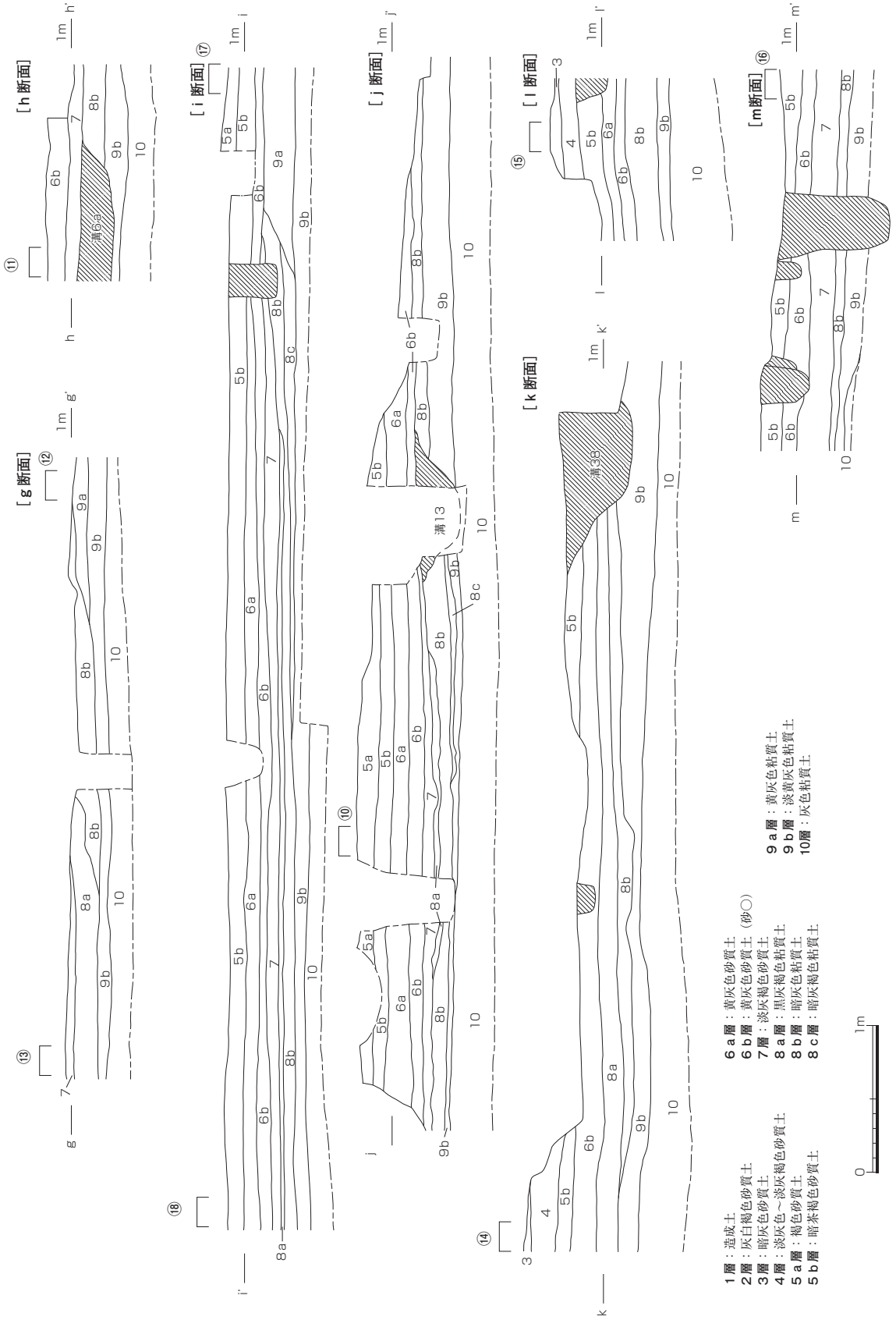
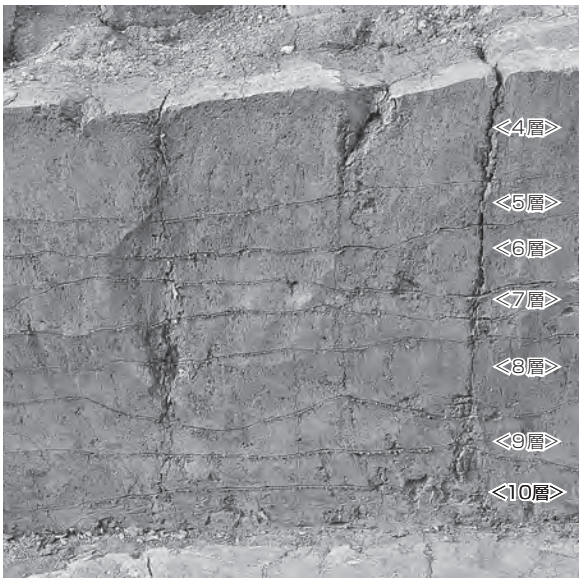


図8　調査区断面1（縮尺1/40）

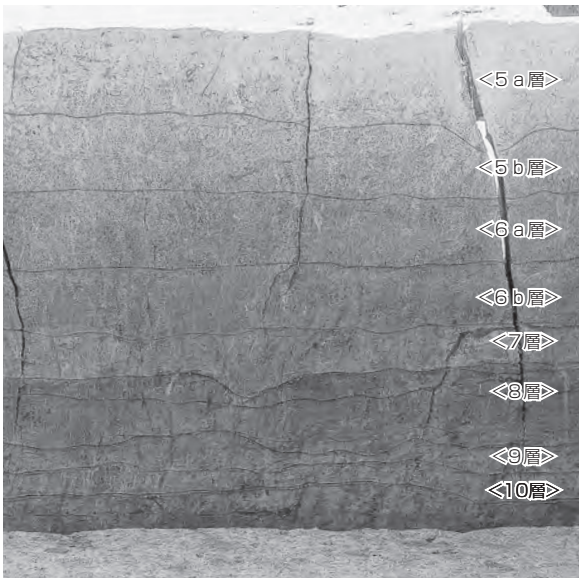


※○番号は表１と対応する

図９　調査区断面２（縮尺1/40）



c断面（北壁）　（南から）



ｊ断面　（西から）

図10　調査区断面写真

表１　調査区断面における各層位標高一覧（数字は標高ｍ）

断面位置	北壁									南壁			東壁				中間部	
	f		e	d	c		b	a		m	l	k	j	h	g		i	
	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③	②	①	⑯	⑮	⑭	⑩	⑪	⑫	⑬	⑰	⑱
＜２層＞	－	－	－	1.53	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
＜３層＞	－	－	－	1.45	－	－	－	－	－	－	1.35	1.56	－	－	－	－	－	－
＜４層＞	－	－	1.36	1.3	－	－	1.25	－	－	－	1.25	1.5	－	－	－	－	－	－
＜５層＞	1.1	1	1.28	1.21	－	1.15	1.15	－	(1.4)	1.12	1.1	1.34	1.25	－	－	－	1.16	1.12
＜６層＞	1.05	0.97	1.17	1.02	1.08	1.1	1.1	－	1.14	0.96	1	1.24	1	1.18	－	－	0.93	1
＜７層＞	－	0.92	－	0.88	－	－	1.01	－	－	0.85	－	1.12	0.8	1.05	－	1.03	－	0.82
＜８層＞	－	0.87	－	0.79	－	1.03	0.96	0.9	－	0.7	0.85	1.04	0.73	0.9	－	0.98	－	0.76
＜９層＞	0.95	0.78	1.05	0.66	0.98	0.85	0.81	0.8	1.05	0.65	0.62	0.9	0.6	0.78	1	0.8	0.85	0.64
＜10層＞	0.78	0.7	0.6	0.6	0.76	0.69	0.72	0.7	0.74	0.5?	0.55	0.76	0.55	0.68	0.78	0.77	－	0.54

※　断面位置は図８・９と一致する
（　）は周辺の値を示す

東部では標高1.34ｍ、南西部では同1.26ｍとさらに低くなる。

出土遺物はコンテナ（28㍑/箱）１／３箱程度であり、すべて小細である。吉備系土師器椀を最も多く含み、ほかに弥生～古墳時代初頭の土師器や近世陶磁器、備前焼が確認される。本層で検出されている遺構は、南北方向の大形溝（溝26）や井戸３、墓１といった12世紀～14世紀初頭の遺構を中心に、他に11世紀後半に遡る遺構も含む。従って、本層は11世紀後半には形成され、14世紀前半まで堆積したものと考えられる。本層は、遺構・遺物

の状況が＜４層＞と共通しており、11世紀の屋敷地形成に伴って造成された土層と考えられる。

＜６層＞（古墳時代初頭）　黄灰色砂質土である。鉄分、マンガンの沈着が顕著である。下層ほど砂質を含む傾向があり、２層に細分することが可能である。上面は、標高0.95m～1.25mで、0.3mの高低差をもつ。北東部および南東部がもっとも高く標高1.25m前後、北西部では同1.1m前後であるが、南西部では同0.95mを測る。全体として南西部へ低くなる地形である。土層の厚さは0.1～0.2m程度である。

出土遺物は、13号ポリ袋１袋程度であり、いずれも小片である。その時期は弥生時代後期～古墳時代初頭である。また、北東部において検出された２基の井戸も古墳時代初頭に属する。

＜７層＞（古墳時代初頭）　淡灰褐色砂質土である。上面は標高0.75m～1.05m前後で、0.3m程の高低差をもつ。本層は全体に広がっておらず、低位部にのみ堆積している。調査区南東部では確認できないが、＜６層＞とほぼ同様の地形を呈する。土層の厚さは0.5m～0.15mで、低位部ほど厚く堆積している。

出土遺物は、13号ポリ袋１／２袋程度である。弥生時代後期～古墳時代初頭の土器片が認められることから、古墳時代初頭と理解しておきたい。

＜８層＞（古墳時代初頭）　黒灰褐色～暗灰褐色粘質土である。３層に細分が可能である。上層ほど暗色がかり、粘性が強くなる。湿地的な環境が広がっていたと考えられる。上面の標高は0.7m～１m前後で、0.3m程の高低差をもつ。本層は後述する＜９層＞の低位部に堆積している。調査地点北東部および南東部では標高1.05m前後であるが、中央部および南西部が0.75m～0.8mと低くなっている。土層の厚さは0.1m～0.15mである。

出土遺物は13号ポリ袋１／３袋程度で、いずれも小～細片である。弥生時代後期～古墳時代初頭の土器が認められる。遺構は溝や畦畔が検出された。同時期における湿地環境を考えると、水田の耕作土を形成する土層と考えられる。

＜９層＞（弥生時代後期）　淡黄灰色粘質土である。砂が少量含まれており、堅くしまっている。下層ほど鉄分の含有が少なく２層に細分ができる。上層の＜８層＞とは色調において明瞭に区別される。上面は標高0.6m～1.05mであり、0.45mの高低差をもつ。調査区北東部では標高１m前後であり、ゆるやかな起伏をもちながらBT30区付近まで続き、BT32区で0.65mとなり急激に落ち込んでいる。調査区北西部は１m前後であることから、再び緩く地形が上がる様子を見ることができる。また調査区南東部では、標高0.92mが中心となる。一方調査区南西端部では0.65m、調査区中央部～南部（BW31、CB28区）では0.6m前後となっており、非常に低い。北東部・北西部・南東部が高く、中央部～南西部にかけて低位部が存在しているといえる。土層の厚さは0.1～0.45mである。

出土遺物は13号ポリ袋１／４袋程度が出土したのみである。いずれも細片で弥生時代後期の土器片である。遺構は溝と畦畔を検出している。

＜10層＞（弥生時代後期以前）　灰色粘質土である。下層ほど暗色がかる。上面は、標高0.4m～0.75m前後であり、0.35m程の高低差をもつ。概ね＜９層＞と同様の地形を呈する。遺物は出土していないが、弥生時代後期以前の堆積層と考えられる。

c．地形復元

本調査区では、一貫して調査区の北東部・南東部・北西部が高く、中央部および南西部に低位部をもつ地形が復元できる。しかしながら、その比高差については時期によって異なりがある。ここでは上に示したデータから、各時期の地形について復元してみたい。

弥生時代～古墳時代初頭にかけては、＜10層＞～＜６層＞が相当する。＜10層＞段階では調査区北東部・北西部・南東部に標高0.75m程度の高まりが形成されており、中央部および南西部では0.5m程度の低位部が存在する。その高低差は0.25m程度である。以後、基本的にはこのような地形が継続する。＜９層＞になっても地形は大きく変わらないが、高位部では1.05m、低位部では0.6mとなり、高低差が0.45mへと拡大する。＜８層＞および

＜７層＞は、この＜９層＞段階の低位部に概ね堆積しており、土質から湿地状を呈していた環境であったことがうかがわれる。＜７層＞段階では高低差が0.25m程度となり、徐々に低位部が埋没していく様子をみることができる。＜６層＞になると、こうした傾向は一層強まり、高低差が0.15m程となる。以上のような地形環境の中で、溝や畦畔は地形に沿うかたちで展開し、井戸は北東部の高位部に構築されたと考えられる。

＜５層＞段階になると、屋敷地形成に伴う造成が行われたと考えられる。基本的に南西部に向かって下がるという前段階の地形が踏襲されているが、調査区中央に広がる低位部との高低差はさらに縮小したものと考えられる。CB32区で検出された中世前半の井戸は検出面が1.4m程となっており、これまで高位部であった調査区北東部・北西部・南東部とほとんど変わらない標高となっている。これは、＜４層＞においても同様であったと考えられ、さらに＜３層＞においても引き継がれる。

註

(1) 吉留英敏・山本悦世編　1988『鹿田遺跡Ⅰ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第３冊
(2) 山本悦世編　2017『鹿田遺跡10』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第32冊
(3) 山本悦世編　1990『鹿田遺跡Ⅱ』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第４冊
(4) 岩﨑志保編　2014『鹿田遺跡８』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第29冊
(5) a　松木武彦・山本悦世編　1997『鹿田遺跡４』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第11冊
　　b　山本悦世編　2007『鹿田遺跡５』岡山大学構内遺跡発掘調査報告書第23冊

第２節　弥生時代～古墳時代の遺構・遺物

検出面は＜10層＞～＜６層＞である。本時期に属する遺構は、＜９層＞では溝９条・畦畔、＜８層＞では土坑２基・溝６条・畦畔・焼土溜まり１基、＜７層＞では溝１条、＜６層＞では井戸２基である（図11）。＜９層＞の遺構は弥生時代後期、＜８層＞～＜６層＞の遺構は古墳時代初頭に属すると考えられる。＜９層＞において確認された溝の一部は、＜８層＞においても位置が踏襲されていること、＜９層＞～＜８層＞段段の畦畔があることから、＜９層＞～＜８層＞は水田として連続的に利用されていたと考えられる。

以下、個別遺構の説明に当たっては、＜10層＞～＜６層＞検出遺構を合わせて記載することとする。

ａ．井戸

井戸１（図12～15、図版３）

調査区北東部のBV25区に位置する。遺構の上半部１／３は攪乱によって破壊されている。検出面は＜６層＞である。上面は標高1.04m、底面は同－0.5m、深さは1.54mを測る。平面形は円形を呈する。南北幅は1.6mで、東西幅は西側の消失によって1.35mを残しており、1.6m程度の規模が復元できる。全体として直径1.6m程度の規模と考えられる。底面は直径0.8m程度の円形を呈する。掘り方は、底面からほぼ垂直に立ち上がった後、上部に向けて緩やかに開口する。南側には一部段を有する。

埋土は31層に分層し、８群にまとめた。１群は１～４層、２群は５～10層、３群は11層～15層、４群は16層～18層、５群は19層～23層、６群は24層～27層、７群は28・29層、８群は30・31層である。１群は鉄分を多く含む褐灰色系の砂質土で、３層に炭を多く含む。２群は灰色系の粘質土である。５～８層は土器片・炭・暗灰色のブ

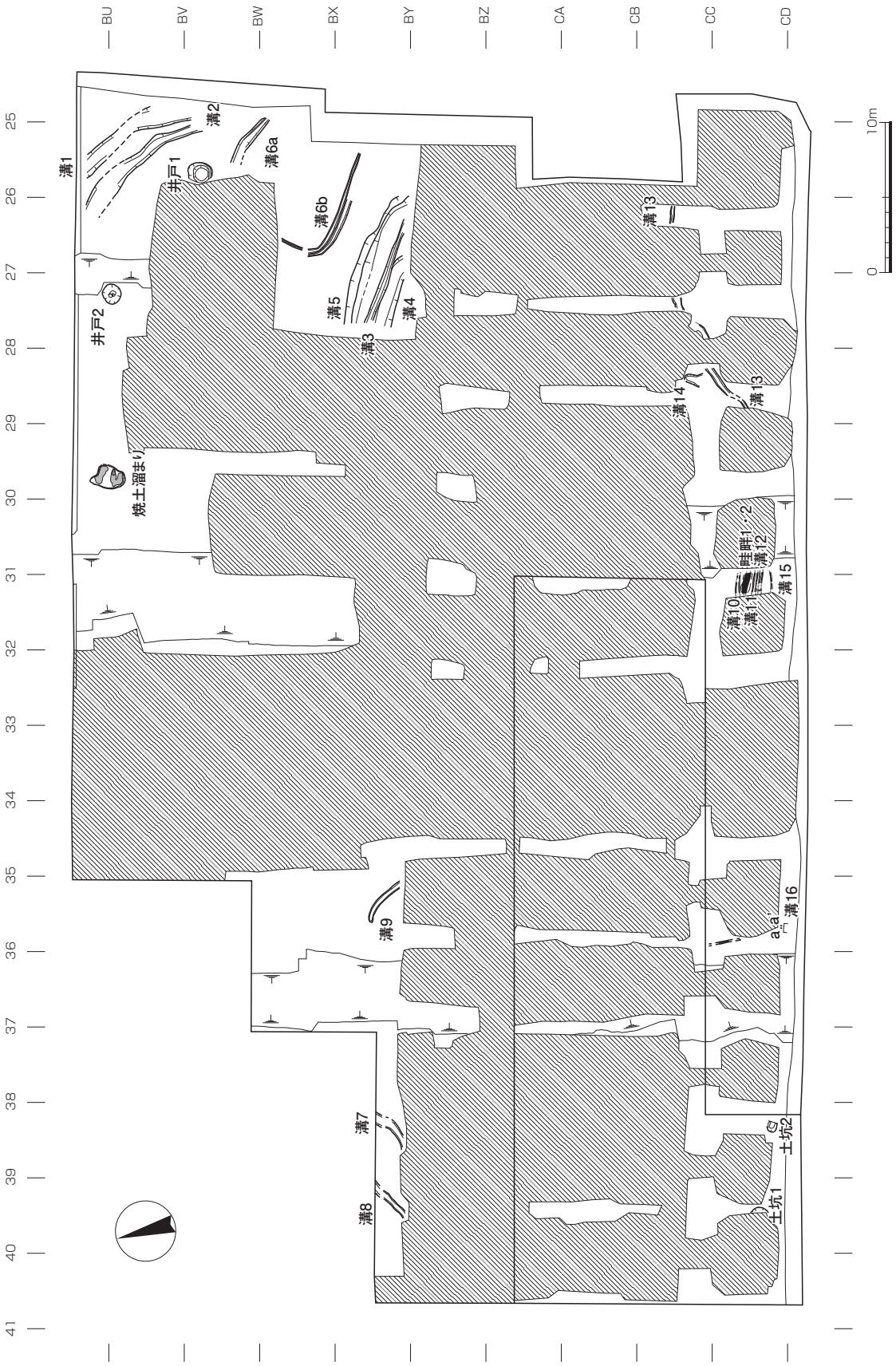


図11　弥生時代～古墳時代初頭遺構全体図（縮尺1/400）

ロックを含む一方、９・10層は炭の含有量が増え、土色は暗色～黒色となり、焼土片が混じる。特に10層は炭と焼土片を多く含む。３群は暗灰色系の粘質土と壁際に堆積する灰褐色の砂質土で構成される。11層は炭を多量に含む12層の影響を受けて全体に暗い色調を呈し、灰色の粘土ブロックを含む。14・15層は灰色系の粘質土で、土器片、木製品、砂、炭を含む。土器は特に15層に多い。４群は灰色系の粘質土で構成される。全体に黒灰色のブロックを含み、下層ほど暗色を強め炭の含有量が増加する。５群は、黒～暗灰色系の粘質土で全体に炭や木質片が混じる。多量の炭を包含する23層からは土器や礫に加え、炭化した材や杭が集中して出土している。６群は、淡灰色～灰色系の粘質土であり、全体に明るい色調を呈している。炭や木質を少量含むのみで、遺物も出土せず、全体に含有物が少ない。７群は暗灰色の粘質土であり、ヤマトシジミとハイガイを多く含む点を特徴とする。貝は劣化が進んでおり殻長や殻高といったデータを得ることができないが、概ね３㎝以内に収まる。８群は暗灰色粘土であり、下層ほど砂を含む。

以上の状況から、埋没過程を復元すると以下のようになる。８群は井戸使用に堆積したものと考えられる。その後、井戸の廃棄に際して貝や木質を含んだ６～７群まで堆積させた後、５群の下層である23層付近で土器や木製品が投入され炭と木質を含んだ土で埋められる。その後、比較的汚れのない４群を置き、３群下層の15層付近において再び土器片を含む土が投入される。さらに上層の２群において、12層と９・10層のように炭や焼土を多量に含む土も投入される。それを再び２群の粘質土で埋め、１群の砂質土で最終的な埋没へと進む。本井戸では

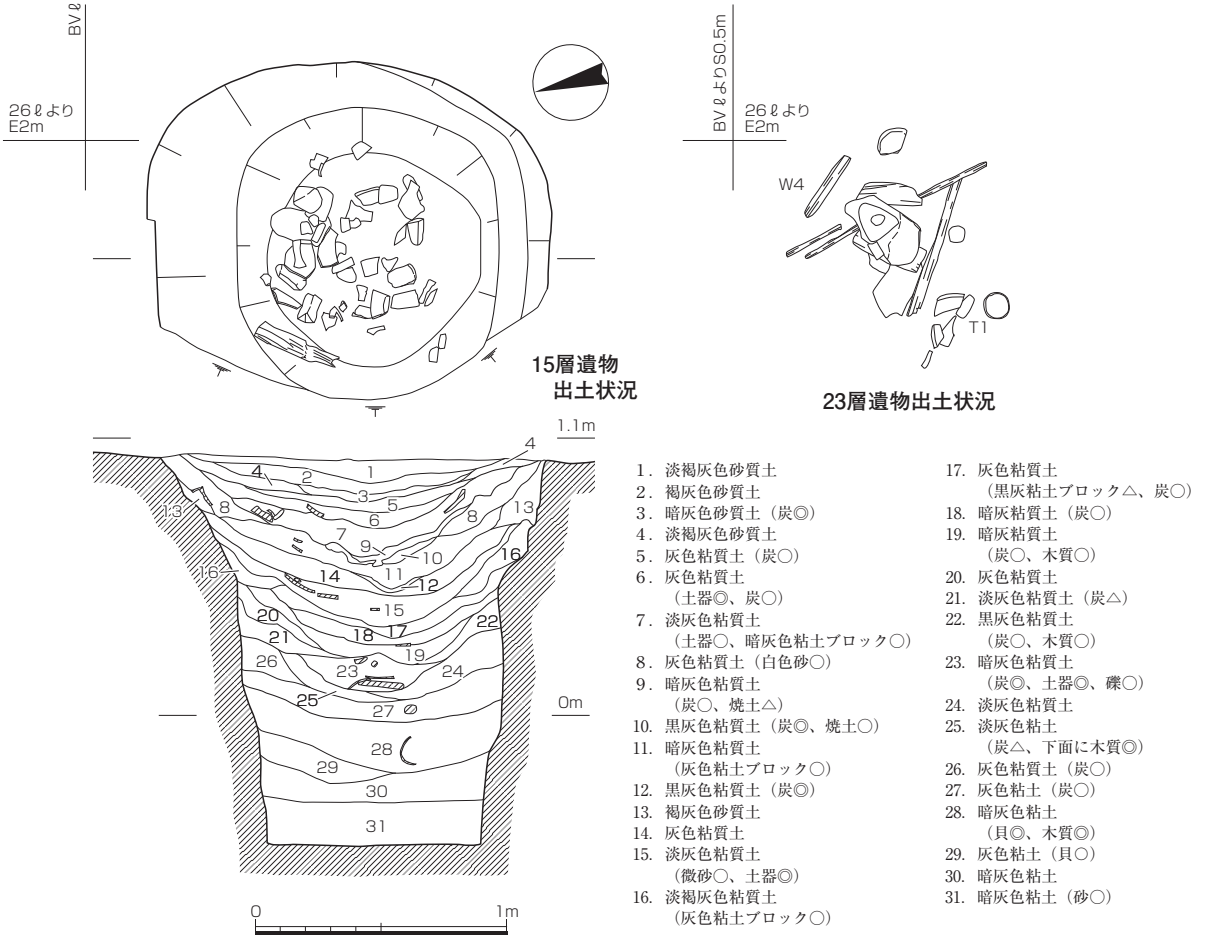
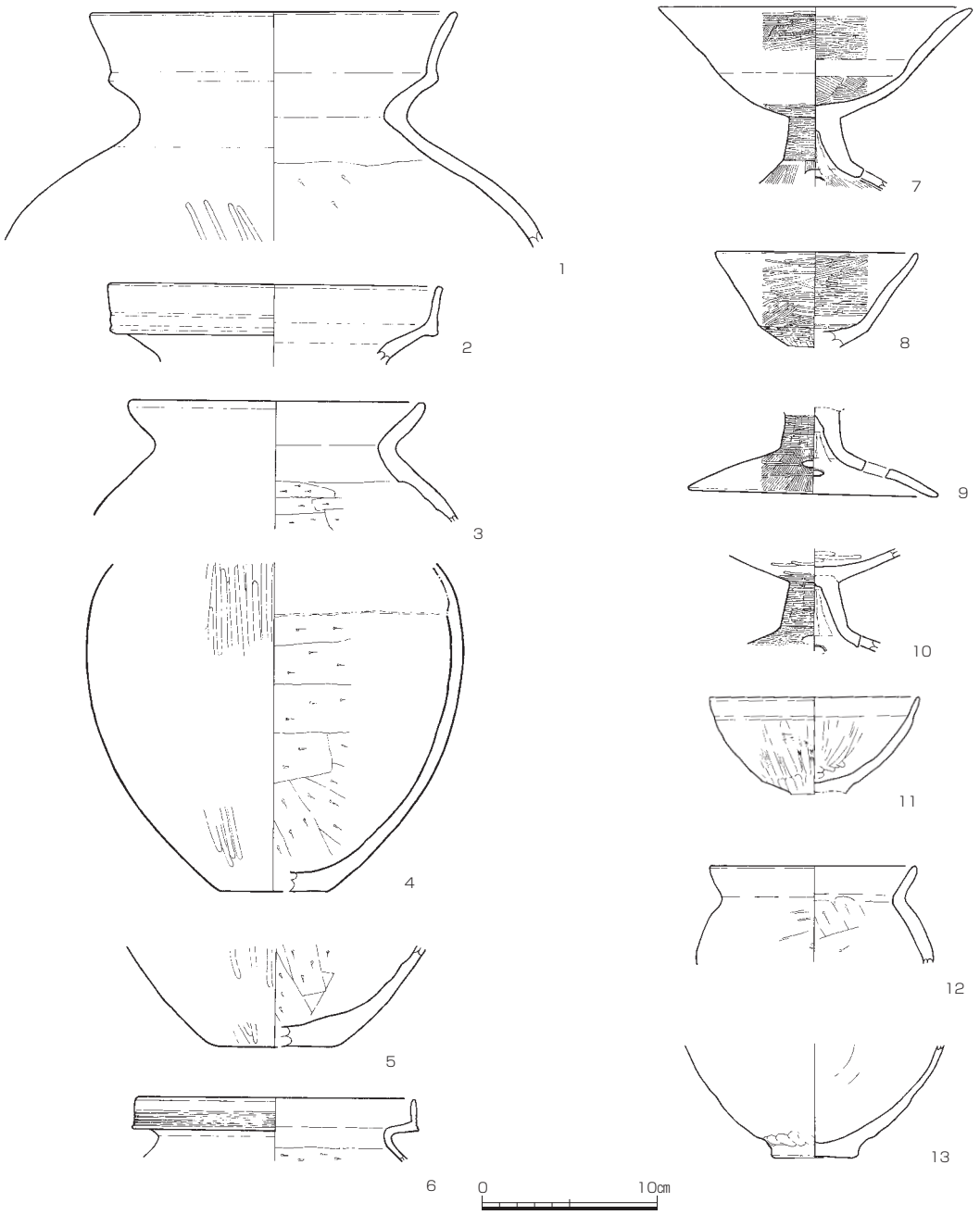


図12　井戸１（縮尺1/30）



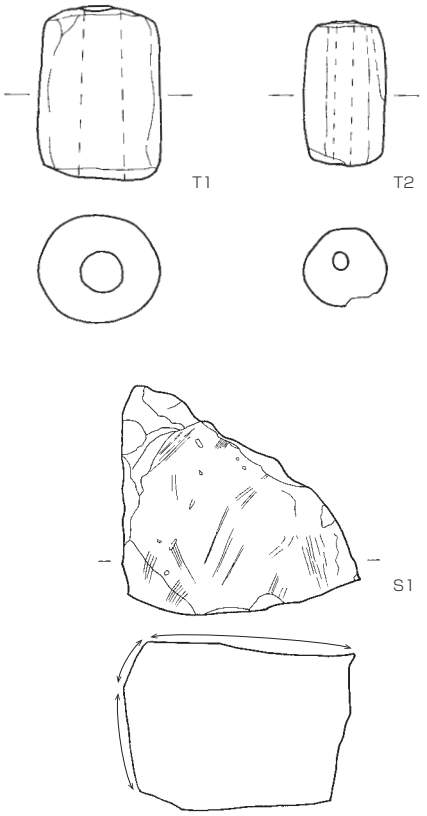
遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器・壺	21	－	－	口－ 胴1/2	(内)篦ケズリ(外)篦ミガキ、内外面磨滅	微砂　赤色粒	淡橙灰
2	土師器・壺	19	－	－	1/5	(口)横ナデ	微砂　赤色粒	淡黄灰
3	土師器・壺	16.6	－	－	1/6	(口)横ナデ(内)篦ケズリ(外)ナデ、外面器壁剥落	微砂　黒色粒	淡褐
4	土師器・壺	－	6	－	1/5	(内)篦ケズリ(外)篦ミガキ、外面煤付着	微砂	暗褐
5	土師器・壺	－	6.4	－	1/3	(内)篦ケズリ(外)篦ミガキ、全面に黒斑・煤付着	微砂	灰褐
6	土師器・甕	15.9	－	－	1/3	(口)横ナデ(内)篦ケズリ、口縁部に7条櫛描沈線	微砂	灰褐
7	土師器・高杯	－	－	－	－	(内)篦ミガキ・ハケ目(脚内)絞り目(外)ハケ目・篦ミガキ、円孔1ヵ所残存、器壁剥落	微砂	橙
8	土師器・高杯	11.7	－	－	4/5	(内)篦ミガキ (外)篦ミガキ・受け部はミガキ下にケズリ痕	微砂	橙淡灰
9	土師器・高杯	－	14	－	－	(脚内)絞り目(外)篦ミガキ、円孔4ヵ所、外面剥落・内面磨滅	微砂	淡橙灰
10	土師器・高杯	－	－	－	－	(内)(外) 篦ミガキ(脚内)絞り、内外摩滅、穿孔3ヵ所残存	微砂	橙灰
11	土師器・高杯	11.5×12	－	－	1/1	(口)横ナデ(内)(外) 篦ミガキ、脚部表面剥離	微砂　赤色粒	赤褐
12	土師器・鉢	11.8	－	－	1/5	(口)横ナデ(内)篦ケズリ(外)ハケ後ナデ、内外面磨滅	微砂　白色礫	灰褐
13	土師器・鉢	－	4.6×5	－	1/1	(内)(外)ナデ・オサエ、外面煤付着	細砂　礫	灰褐

図13　井戸１出土遺物１（縮尺1/4）

大形の土器が底面に置かれるといった明確な井戸廃棄時の祭祀行為の痕跡をうかがうことはできなかったが、土層の堆積や包含物に明確なパターンを形成している点は明らかであり、そこには何かしらの祭祀行為の一端が現れている可能性を考えたい。

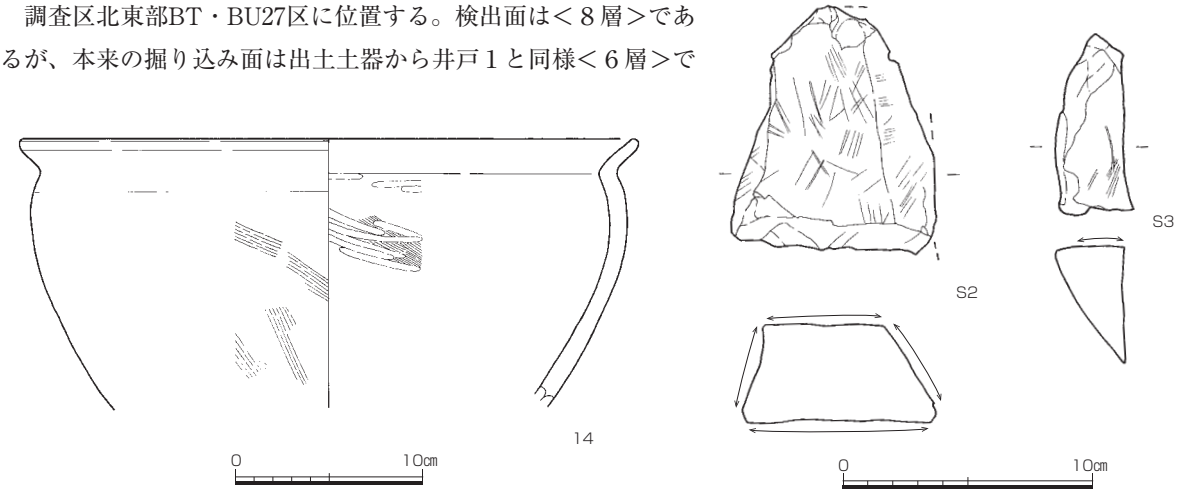
遺物は、コンテナ（28㌔/箱）１箱分が出土した（図13～15）。壺・鉢・甕・高杯に加え、図化は困難であったが、表面タタキ調整をもつ甕片が出土している。他に土錘（図14－Ｔ１・Ｔ２）と砥石（同－Ｓ１～３）も含まれる。Ｓ２は明瞭な擦痕を残し４面を砥ぎ面として利用している。Ｓ３は小片のため擦痕が明確ではないが、表面の状態から砥石として報告する。比較的大型の破片遺物（図13－１・４）は15層と23層から出土した。木製品は杭・丸木を加工した木材・炭化材であり（図15）、後者の層から集中的に出土した。杭には両端加工のもの（図15－Ｗ４～６）と片面加工のもの（図15－Ｗ７～９）がある。樹種はツブラジイとナシ亜科などがある。炭化材は、長さ25㎝程の加工木であり、２点出土している。

本井戸の時期は、出土遺物から古墳時代初頭に属すると考えられる。



井戸２（図16～18、図版２）

調査区北東部BT・BU27区に位置する。検出面は＜８層＞であるが、本来の掘り込み面は出土土器から井戸１と同様＜６層＞で

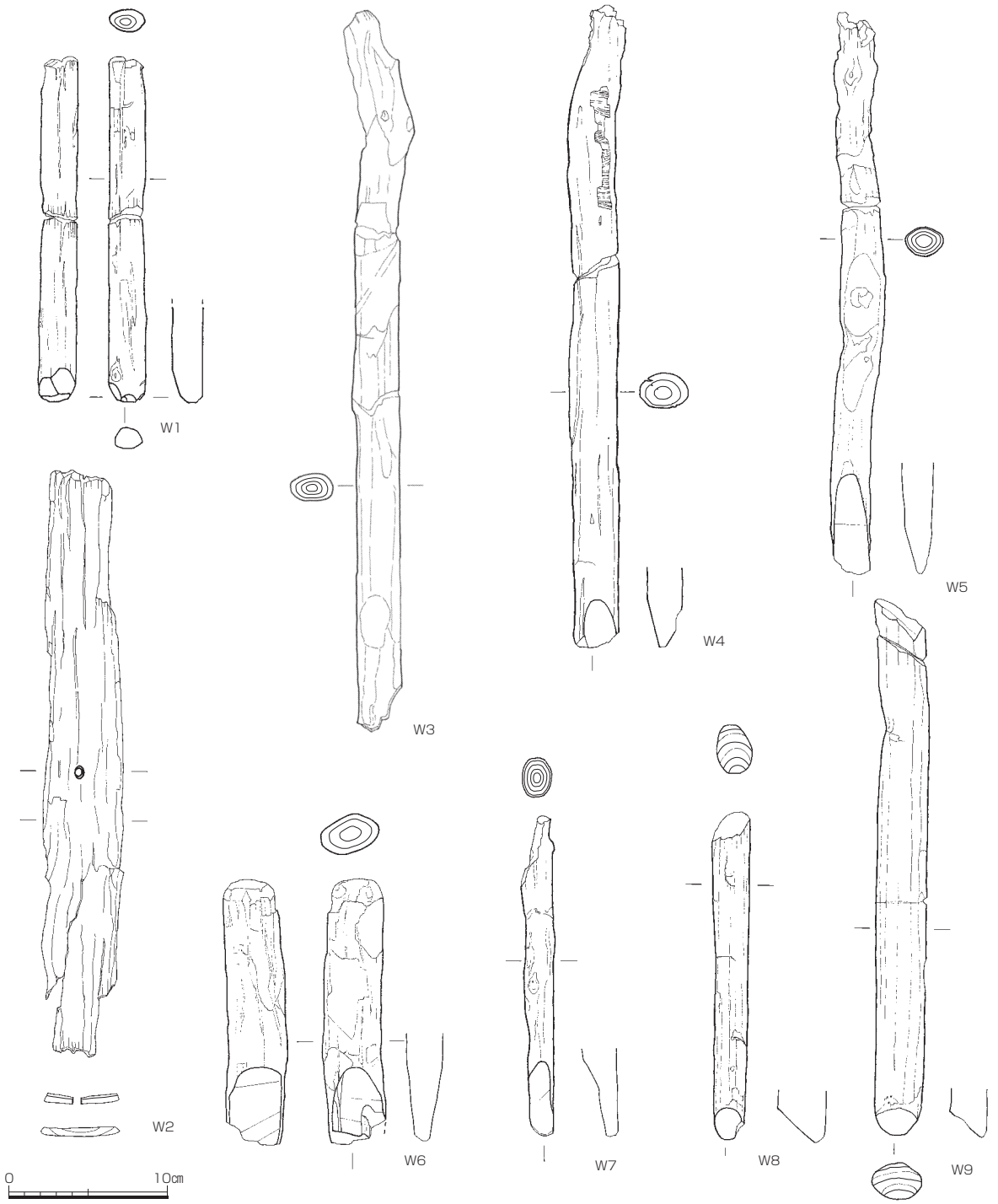


遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
14	土師器・鉢	33	－	－	1/4	(口)横ナデ(内)ハケ目後ミガキ(外)ハケ目	微砂	淡橙灰

遺物番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	重量（g）	形態・手法他	胎土	色調
T1	土錘	7	4.8	4.3	141.2	管状土錘、孔径(上)1.5×1.5cm　(下)1.6×1.7cm、ナデ	微砂	暗灰褐
T2	土錘	5.8	3.3	3.1	54.6	管状土錘、孔径(上)7×8mm　(下)8×8mm、ナデ	微砂	淡黄褐

番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	重量（g）	石材	形態・手法他
S1	砥石	8.6	9.2	8.7	785.3	安山岩	3面に研磨面、砥面凹面、上下欠損
S2	砥石	9.7	6.6	4	336.1	粘板岩	4面に研磨面、砥面凹面、上下欠損
S3	砥石	5.9	4.7	2.4	75.2	安山岩	1面に研磨面、四周欠損

図14　井戸１出土遺物２（縮尺1/4・1/3）



番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W1	加工木	21.5	2.4	1.4	ツブラジイ	丸木	上端欠損、先端部多方向からの加工
W2	板材	36.8	5	0.6	カキノキ属	板目	四周欠損、中央部に穿孔(0.5cm)1ヵ所
W3	杭	45.3	3	1.7	ヤマハゼ	丸木	上下端欠損
W4	杭	40.3	3	2.2	カエデ属	丸木	上端部炭化・欠損、先端部両側に手斧痕
W5	杭	35.2	2.6	1.7	ナシ亜科	丸木	上端欠損、先端部両側に手斧痕
W6	杭	16.7	3.6	2.4	コナラ属アカガシ亜属	丸木	上端欠損、先端部両側に手斧痕、一部面取り加工
W7	杭	20.1	2	2.4	ナシ亜科	丸木	上端欠損、先端部片側に手斧痕
W8	杭	20.6	2.2	3	ツブラジイ	丸木	上端欠損、先端部片側に手斧痕、柄の可能性
W9	杭	33.7	3.1	2.4	ツブラジイ	丸木	上端欠損、先端部片側に手斧痕、柄の可能性

図15　井戸１出土遺物３（縮尺1/4）

あったと考えられる。上面は標高0.88m、底面は同－0.59m、深さは1.47mを測る。平面形は東西1.3m、南北1.25mの円形を呈し、底面も直径0.6m程度の円形を呈する。断面形は、西側に段をもつ逆台形であるが、0.7m付近から緩やかに開口する。

埋土は12層に分層し、４群にまとめることができる。１群は１～２層、２群は３～６層、３群は７～10層、４群は11・12層である。１群は、灰色を基調とする粘質土である。鉄分を含み褐色を帯びる。対して２層は暗い色調を呈し、砂を包含する。２群は暗灰色粘質土と灰色粘質土であり、鉄分が少量混じる。６層は明灰色粘質土ブロックを含みながら周囲に堆積し、井戸中央部を炭の包含が目立つ５層が堆積する。４層は６層と非常によく似ており、３層は炭の混じる粘質土である。３群は炭を含む暗灰色～黒灰色の粘土である。９層では土器や人頭大

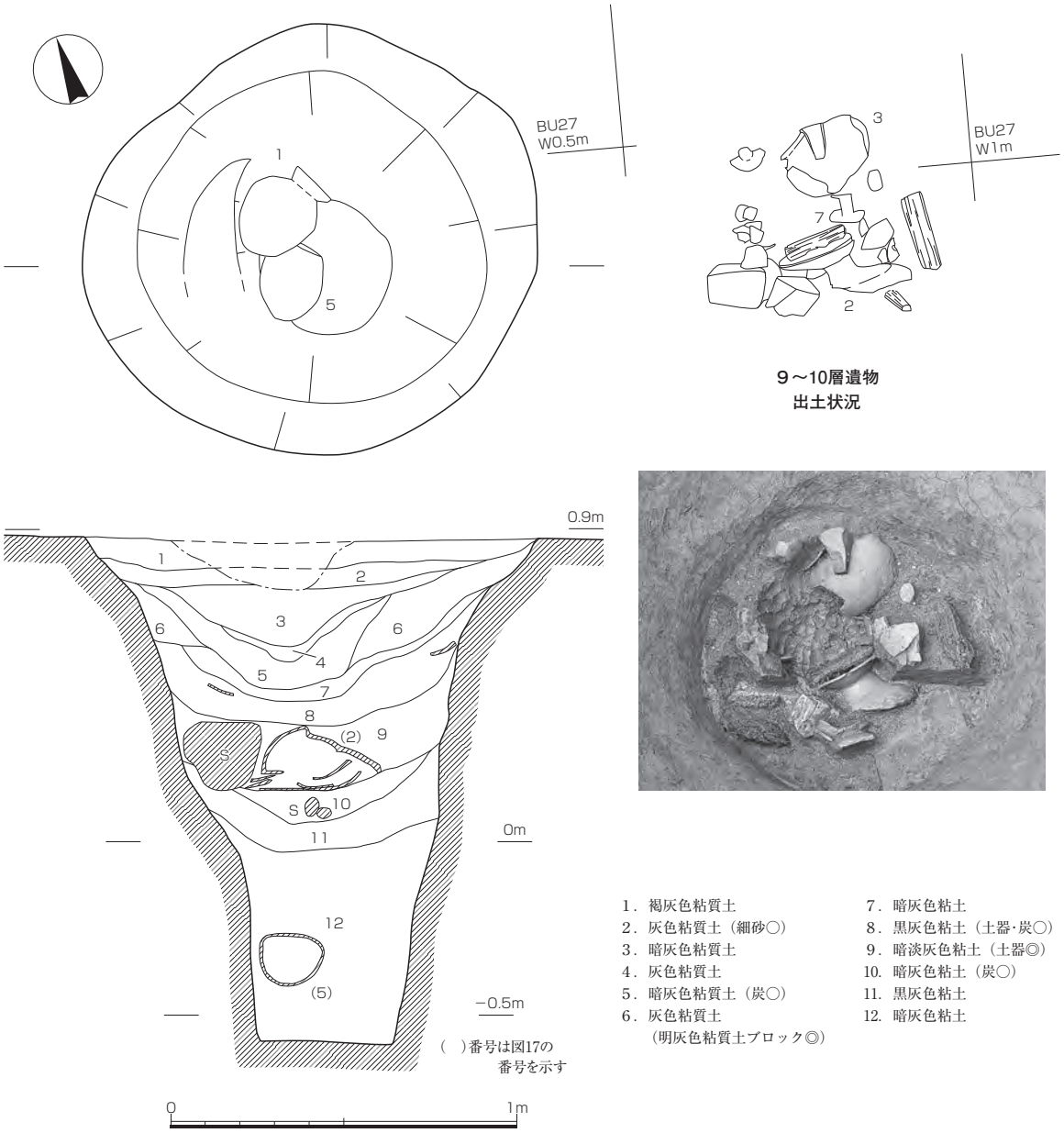


図16　井戸２（縮尺1/30）

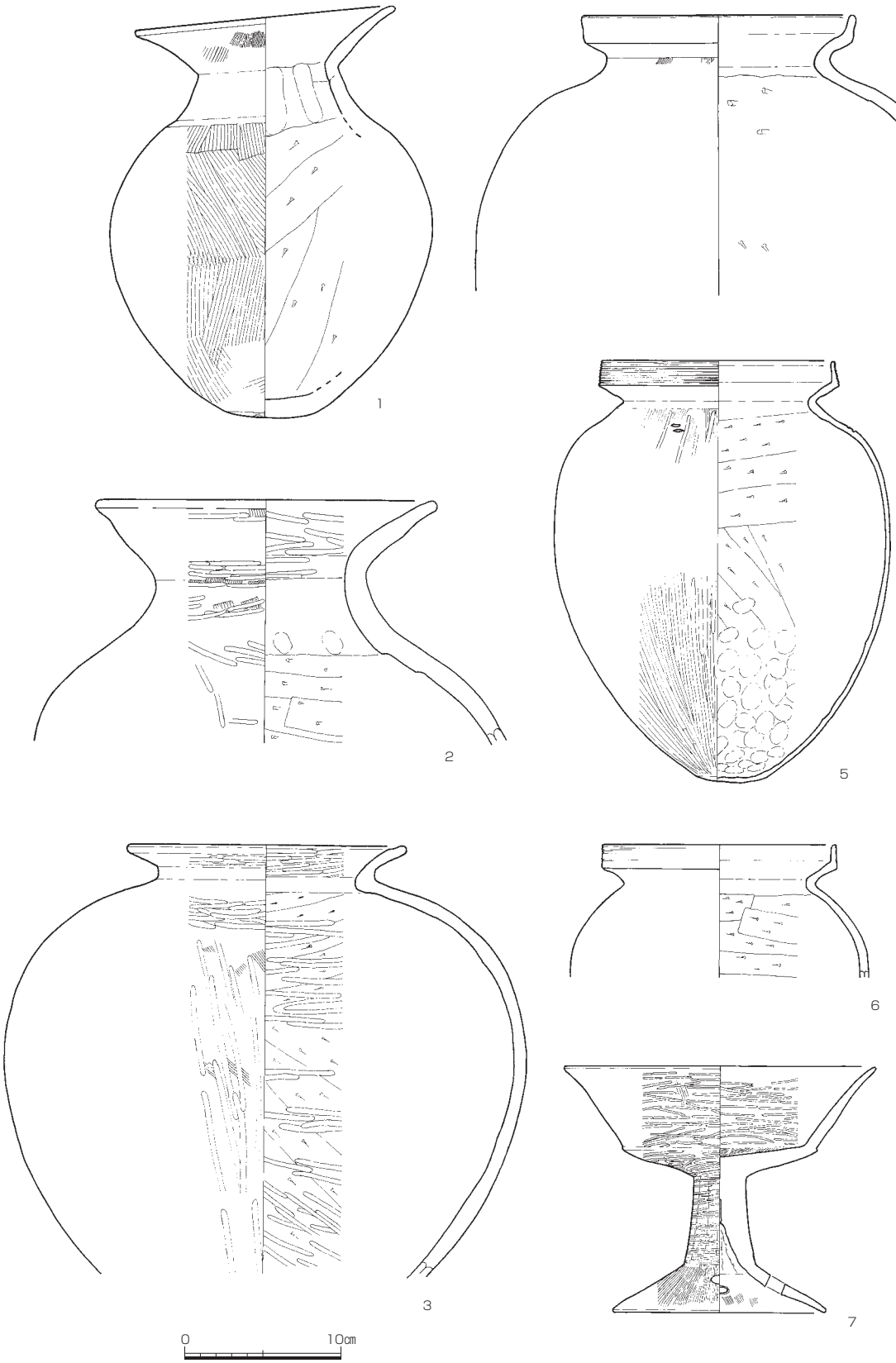


図17　井戸２出土遺物１（縮尺1/4）

井戸２出土遺物（図17）観察表

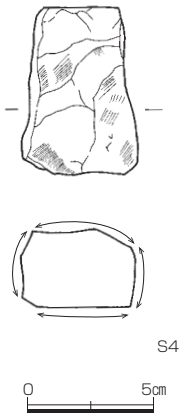
遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器・壺	16.8	5.4	25.7	1/1	(口)横ナデ(内)篦ケズリ(外)ナデ・ハケ目	微砂	淡灰褐
2	土師器・壺	22	－	－	口1/1頸1/2	(口)横ナデ(内)篦ミガキ・篦ケズリ(外)ハケ目後篦ミガキ、内面煤付着、外面磨滅	微砂	淡橙灰
3	土師器・壺	18	－	－	1/3	(口)横ナデ(内)篦ミガキ・篦ケズリ(外)ハケ目後篦ミガキ	微砂　赤色粒	灰褐
4	土師器・壺	17.4	－	－	1/2	(内)篦ケズリ、剥落で調整不明	細砂　礫	淡褐
5	土師器・甕	15	4.5	27.1	口1/3底1/1	(内)篦ケズリ・オサエ(外)ハケ目後篦ミガキ、櫛描沈線9条、肩部に刺突文2ヵ所、外面煤	微砂	灰橙
6	土師器・甕	15	－	－	1/5	(口)横ナデ(内)篦ケズリ、外面磨滅で調整不明、口縁部に数条の櫛描沈線	細砂	灰橙
7	土師器・高杯	20	13.8	15.6	口1/8底1/4	(杯内外)篦ミガキ(脚内)オサエ・ハケ目(脚裾外)ハケ目、杯外面黒斑、円孔3ヵ所残存	微砂	淡褐

の礫、自然木などが一面に出土した。遺物は、壺（図17－２・３）、高杯（同－７）などの大形の破片を含む。その他に、長さ15～25cm程度の炭化した丸木や割り材７点が出土した。樹種はシャシャンボ・クワ属・スギである（第４章４）。なお９層を挟む10層および８層においても土器小片や炭がごく少量出土する。４群は炭やブロック・砂を含まない黒灰色～暗灰色の粘土である。12層の中層において、完形の壺（図17－1）と甕（同－５）が横位で置かれていた。

以上の状況から、本遺構の埋没過程を復元すると以下のようになる。まず、比較的汚れのない４群中に完形の壺と甕が置かれた。その後、10層を堆積させ、その上面において土器片や人頭～こぶし大の礫、木材が投入される。そして８・７層で埋められる。なお、３群の土層中には炭が含まれているが、極めて多いわけではなく焼土などは含まれていないことから、井戸内で燃焼行為があったとは考えにくい。その上層に、２群と１群の土が順次投入され、埋没が完了する。

遺物は、コンテナ（28㍑/箱）３箱分で、壺・鉢・甕・高杯が出土した（図17・18）。他に砥石（図18－Ｓ４）と石錘片がある。完形の壺と甕以外はほとんど３群において出土したものである。

本井戸の時期は、出土遺物から古墳時代初頭に属すると考えられる。



番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	重量（g）	石材	形態・手法他
S4	砥石	6.7	4.6	3.1	71.6	安山岩	5面に研磨面、砥面凹面、ほぼ完存

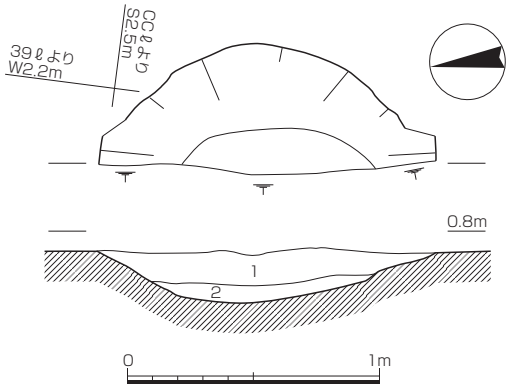
図18　井戸２出土遺物２（縮尺1/3）

ｂ．土坑

土坑１（図19）

CC39区で検出した。西側を攪乱で失っている。検出時の標高は0.73mで、＜８層＞にあたる。平面形は円形で、南北長は1.35m、東西の残存長は0.52mである。断面形は浅い皿状で、底面の標高は0.52m、残存する深さは0.22mである。埋土は２層に分層され、いずれも＜８層＞に類似する暗褐色系の粘質土で、粘質土ブロックを多く含んでいる。

遺物は出土していない。本遺構の時期は検出面から古墳時代初頭に属すると考えられる。



1．暗茶褐色粘質土（淡灰色粘質土ブロック○）
2．暗褐色粘質土（明黄色砂質土ブロック◎）

図19　土坑１（縮尺1/30）

土坑２（図20）

CB39区で検出した。調査区壁面にかかっており、調査区内で検出されたのは遺構の西半部である。検出時の標高は0.58

mで、＜８層＞にあたる。平面形は、長円形を呈するものと考えられる。規模は東西長0.67m、幅0.62mが残存する。断面形は椀状で、底面の標高は0.32m、残存する深さ0.25mである。

埋土は２層に分層される。１層は暗灰褐色砂質土で、＜８層＞の色調に近似する。２層は使用段階の流入土と考えられる灰黄色砂質土である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は検出面から古墳時代初頭に属すると考えられる。

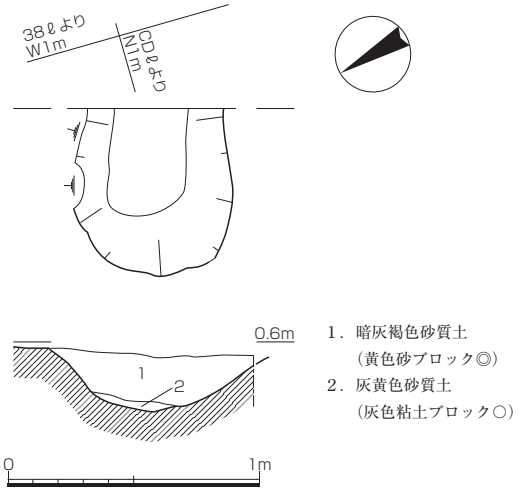


図20　土坑２（縮尺1/30）

c．溝と畦畔

調査区北東部・南東部・西部では＜９層＞および＜８層＞において溝を検出した（図11・21・28・30）。北東部では北西－南東方向、南東部では北東－南西方向、西部では北西－南東方向・北東－南西方向であり、古地形に沿って走っている。溝は、掘り込みの深いものと浅いものに分類が可能であり、前者では隅丸方形に回ると考えられる溝（溝６）も検出した。２本が平行して走る溝１と２、および溝７と８は、層位が異なっているが、西側に数m離れて同様の溝が構築されており、継続的に利用されていたことがうかがわれる。

また、調査区南部では＜８層＞段階の畦畔と＜９層＞段階の畦畔と考えられる遺構が一部で検出された。周辺では撹乱が多く確認できなかったが、本調査地点の南に隣接する第９・11次調査地点においても、大畦畔・円形高まり・円形溝群などの水田域が報告されている。少なくともCCライン以南には畦畔が明確に形成されていたものと考えられる。

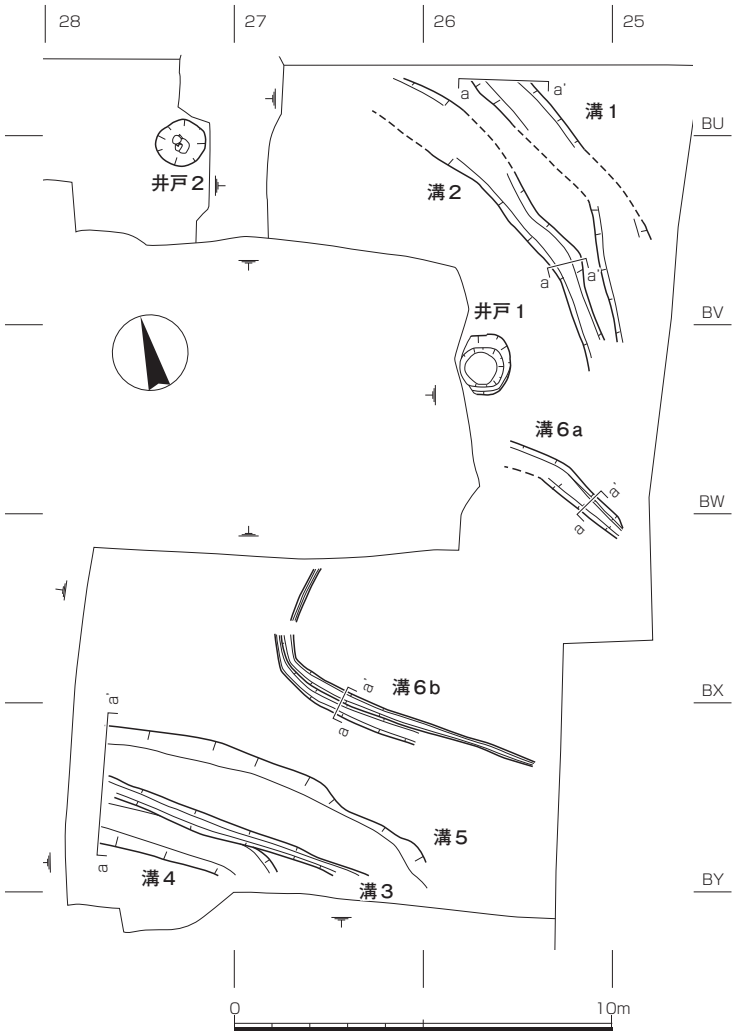


図21　調査区北東部検出遺構（縮尺1/200）

調査区北東部検出溝

溝１（図21・22、図版３）

調査区北東部のBT～BU25区に位置する。＜９層＞の落ち際に当たる。＜９層＞の上面から掘り込まれている

ことを調査区壁面で確認した。傾きN23°Wに走る溝で、上面は標高1.05m、底面は同0.75m、深さ0.3mを測る。幅は1.4mで底面は皿状を呈する。埋土は３層に分層される。１層は暗色を帯び＜８層＞に似る暗灰色砂質土で、２・３層は灰褐色を基調とする砂質土である。遺物は出土していない。

本溝の時期は、掘削面から弥生時代後期と考えられる。

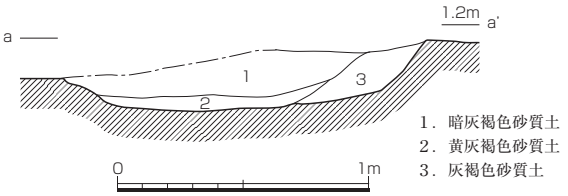


図22　溝１断面（縮尺1/30）

溝２（図21・23、図版３）

調査区北東部のBT～BV25区、溝１の西１mに位置する。＜８層＞の上面から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。傾きN19°Wの溝であり、溝１と併走する。上面は標高0.95mを測る。底面は北側で同0.8m、南側で同0.75mであり、南に向かって下がっている。深さは0.2mを測る。幅は0.5mで、断面は椀状を呈する。埋土は３層に分層され、灰色を基調とする砂質土と粘質土である。下層から上層へ褐色を強め、１層は鉄分の沈着が多く橙色を帯びる。遺物は出土していない。

本溝の時期は、掘削面から古墳時代初頭と考えられる。

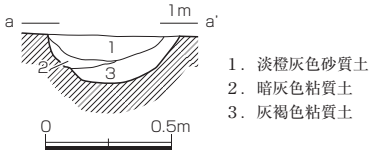


図23　溝２断面（縮尺1/30）

溝３（図21・24、図版３）

調査区北東部南側のBX26・27区に位置する。＜９層＞上面で検出し、溝４と溝５を切っている。傾きN55°Wの溝であり、直線的に伸びている。調査区北部～西部にかけて、この溝に接続するような遺構は見いだせなかった。上面は標高0.95m、底面は同0.75m、深さ0.2mを測る。幅は0.63mで、断面は椀状を呈する。埋土は３層に分層される。１層は砂質土で、２・３層は灰褐色を基調とする粘質土であるが、下層ほど暗色を強める。遺物は出土していない。

本溝の時期は、検出面から弥生時代後期と考えられる。

溝４（図21・24、図版３）

調査区北東部南側のBX26・27区に位置する。＜９層＞上面で検出し、溝３に北側を切られている。傾きN55°Eの溝であるが、BYライン周辺で南へ向けてカーブする。溝３と同様に、調査区北部～西部にかけて、この溝に接続する遺構は見いだせなかった。上面は標高1.08m、底面は同0.80m、深さ0.28mを測る。幅は1.15m以上で、断面は皿状を呈する。埋土は４層に分層される。下層に堆積する３・４層は、暗灰色～灰色の粘質土で砂質土ブロックを少量含む。上層の１・２層は砂質土である。遺物は出土していない。

本溝の時期は、検出面から弥生時代後期と考えられる。

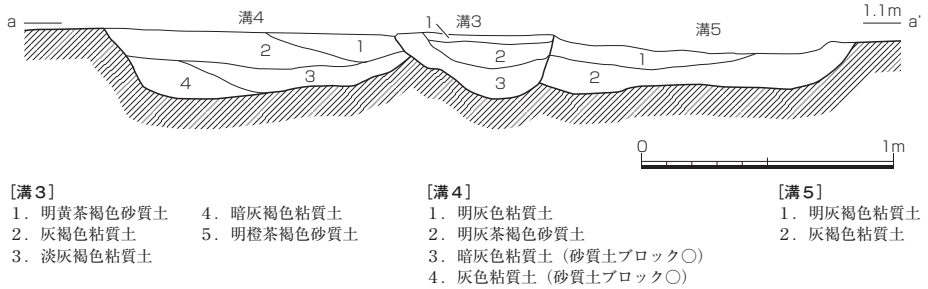
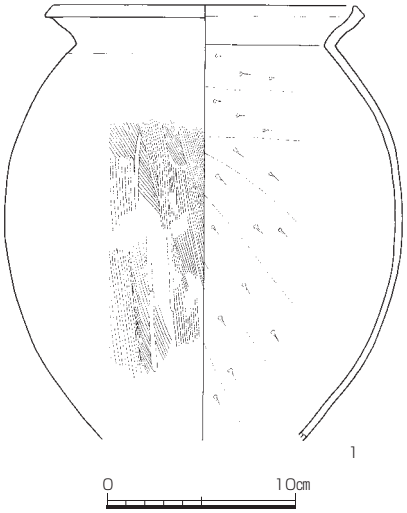


図24　溝３～５断面（縮尺1/30）

溝５（図21・24・25、図版３）

調査区北東部南側のBX26・27区に位置する。＜９層＞上面で検出し、溝３に南側を切られている。傾きN55°Wの溝であるが、溝４と同様にBYライン周辺で南へ向けてカーブする形状を呈する。北西方向にのびているが、調査区北部～西部においてこの溝に接続するような遺構は見いだせなかった。上面は標高1.05m、底面は同0.80m、深さ0.25mを測る。幅は1.2m以上で、断面は皿状を呈する。溝の走行方向および断面形態が溝４とよく酷似している。埋土は灰褐色を基調とする粘質土であり、２層に分層される。後期後葉の甕が１点出土した。

本溝の時期は、検出面および出土遺物から弥生時代後期後葉と考えられる。



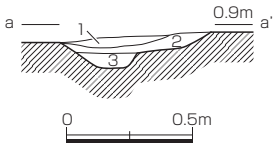
遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	弥生土器・甕	16	－	－	1/1	(口)横ナデ(内)篦ケズリ(外)ハケ目、外面煤付着、磨滅	微砂	淡橙褐

図25　溝５出土遺物（縮尺1/4）

溝６（図21・26・27、図版３）

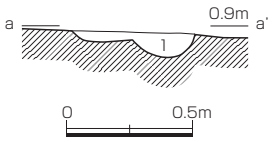
調査区北東部のBV25～BX26区に位置する。＜８層＞上面から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。攪乱によって一部破壊されているが、走行方向および断面形状から同一の溝と判断し、北側を溝６ａ、南側を溝６ｂとして報告する。南北8.6mの隅丸方形を呈する溝と考えられる。上面はａ・ｂともに標高0.88m、底面はａでは同0.72m、ｂでは同0.78m、深さは0.1～0.16mを測る。幅は0.5～0.6mで、断面は椀状の底をもつ二段掘りである。埋土は灰色粘質土であるが、溝６ａ断面では３層に分層され、下層へ向けて暗色を帯びる。遺物は出土していない。本溝の時期は、掘削面から古墳時代初頭と考えられる。

本遺構は、本地点の南に接する第９・11調査地点において検出された円形溝群と非常に良く似ている。これらの遺構は、円形の高まりの周囲に平坦面をもつ溝で構成されており、その規模は６～８m程度の規模をもつものである。したがって、本遺構も溝の内側に本来高まりがあったことが想定されるが、攪乱等によって削平されたと考えられ、詳細は不明である。



1．灰色粘質土
2．明灰色粘質土
3．暗灰色粘質土

図26　溝６ａ断面
（縮尺1/30）



1．暗灰色粘質土

図27　溝６ｂ断面
（縮尺1/30）

調査区西部検出溝

溝７（図28・29、図版３）

調査区西部BX38区に位置する。＜９層＞から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。本遺構は東側にある＜９層＞の落ち際に構築されたものである。傾きN61°Eの溝であり、上面は標高0.75m、底面は同0.71m、深さ0.04mを測る。幅は0.35mで、断面は皿状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土で砂質土をブロック状に少量含む。遺物は出土していない。

本溝の時期は、掘削面から弥生時代後期と考えられる。

溝８（図28・29、図版３）

調査区西部BX39区に位置する。＜８層＞から掘り込まれていることを断面で確認した。傾きN57°Eの溝であ

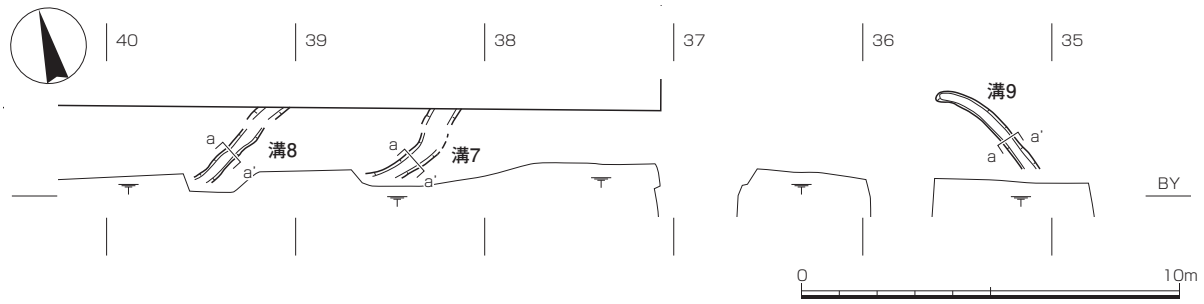


図28　調査区西部検出遺構（縮尺1/200）

り、上面は標高0.79m、底面は同0.71m、深さ0.08mを測る。幅は0.35mで、断面は緩やかな段をもつ椀状を呈する。埋土は２層に分層される。両層とも粘質土であり若干の砂を含む。２層には砂質土がブロック状に含まれる。遺物は出土していない。

本溝の時期は、掘削面から古墳時代初頭と考えられる。溝７の後に同方向に構築された溝であり、溝１・２と同様の関係をもつ。

溝９（図28・29、図版３）

調査区西部BX35区に位置する。＜９層＞上面で検出した。傾きN25°Wの溝であるが、北側では収束する。上面は標高0.73m、底面は同0.65m、深さ0.08mを測る。幅は0.3mで、断面は椀状を呈する。埋土は暗灰褐色粘質土で砂を若干含む。遺物は出土していない。

本溝の時期は、検出面から弥生時代後期と考えられる。

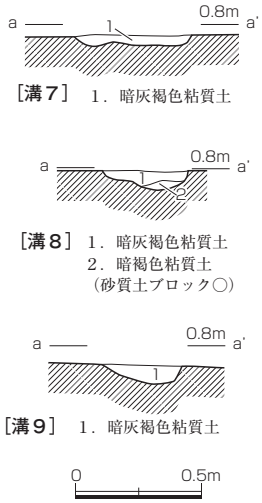


図29　溝７～９断面
（縮尺1/30）

調査区南部検出畦畔・溝

畦畔１（図30・31、図版３）

調査区南部CC31区に位置する。畦畔１は南に向かって下がる＜９層＞上面に東西方向に形成されている。＜８層＞を耕作土とし、上部には＜７層＞が堆積する。畦畔は２段階にわたり構築されていることから、第１段階を

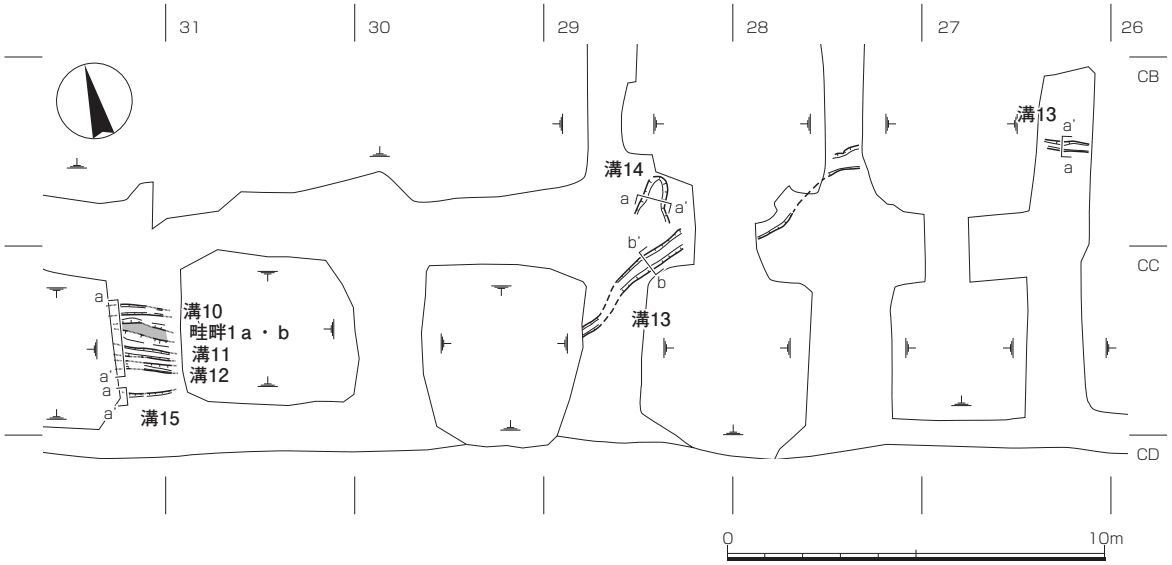


図30　調査区南東部検出遺構（縮尺1/200）

畦畔１ａ、第２段階を１ｂに分けて説明することとする。

畦畔１ａは、上面が標高0.88m、下面が北側で同0.83m、南側で同0.78mであり、高さは0.14mである。幅は0.4m程度である（図31）。＜９層＞上面に３・４層を盛って構築されている。３・４層は、＜９層＞に非常に良く似た黄灰褐色粘質土を基本とし、上層へ向かって暗色がかる。＜９層＞由来の土を盛ったものと考えられる。＜８ｂ層＞は耕作土となる。

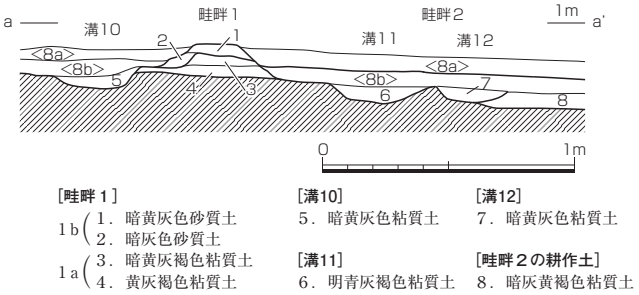


図31　畦畔１・２・溝10～12断面（縮尺1/30）

畦畔１ｂは、上面が標高0.92m、下面が北側で同0.85m、南側で同0.83mであり、高さは0.1m程度である。幅は0.35m程度である。畦畔１ａ上に１・２層を盛って構築されている。１・２層は暗黄灰色～暗灰色の砂質土を基本とし、＜８層＞をブロック状に含む。このことから、畦畔１ａを加工して連続的につくられたことがわかる。＜８ａ層＞が耕作土となる。

なお、畦畔１ａと１ｂを平面で認識することはできなかったが、両者の土層の連続性を鑑みるに、これらは畦畔利用時における補修を示している可能性が高い。周囲で確認することはできなかったが、平面形態や方向に大きな差異はないものと考えられる。時期は古墳時代初頭と考えられる。

畦畔２（図30・31、図版３）

畦畔１の南側において、＜９層＞上面に形成された畦畔２を検出した。溝12によって南側を削平されている。＜９層＞の上面が段をもって南へ下がっており、８層とした＜８ｂ層＞の下にある暗灰黄褐色粘質土が耕作土と考えられる。畦畔１よりも古い段階の畦畔の存在が示唆される。上面の標高は不明であるが、下面は0.65mである。東西方向に走っていると考えられるが、破壊が大きいこともあり、詳細は不明である。時期は弥生時代後期と考えられる。

溝10・11・12（図30・31、図版３）

溝10は、畦畔１ａの北側に接して、畦畔１ａの４層から掘り込まれて構築されていることを確認した。上面は標高0.83m、底面は同0.75m、深さは0.1m程度を測る。幅は0.35mで東西方向に走り、断面は浅い皿状を呈する。埋土は１層で、暗黄灰褐色粘質土である。

溝11は、畦畔２の北側に接して＜９層＞を掘り込んで構築されていることを確認した。上面は標高0.77m、底面は同0.68m、深さ0.1m程度を測る。幅は0.45mで東西方向に走る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は１層で、明青灰色粘質土である。

溝12は、畦畔１ａより南側に0.65m離れて、東西方向に確認された。畦畔２を切り＜９層＞を掘り込んで構築されている。上面は標高0.8m、底面は同0.69m、深さ0.1m程度を測る。幅は0.45mで、東西方向に走る。断面は皿状を呈する。埋土は１層で、暗黄灰色粘質土である。

ここで、畦畔とこれらの溝について整理しておきたい。まず、＜９層＞上面において確認された畦畔２と溝11は弥生時代後期に属すると考えられる。その後、＜９層＞由来の土を盛って畦畔１と溝10が構築された。これらは＜８層＞段階の遺構と考えられることから、その時期は古墳時代初頭に属する。溝12は畦畔２を切っており、＜８ｂ層＞によって覆われていることから、その時期は弥生時代後期と考えられる。この溝に接する畦畔は確認できなかった。古墳時代初頭における畦畔１の構築に伴って破壊を受けた可能性があるが、詳細は不明である。ここでは、これらの畦畔と溝が水田域として長期間にわたり利用されたものであると評価しておきたい。

溝13（図30・32、図版３）

調査区南東部のCB26～CC28区に位置する。＜８層＞から掘り込まれていることを調査区断面から確認した。緩やかなカーブを描く北東－南西方向の溝であり、両端を撹乱によって失っている。ａ断面では上面が標高0.82m、底面が同0.76m、深さ0.06mを測る。幅は0.24mで、断面は椀状を呈する。一方ｂ断面では、上面が標高0.75m、底面が同0.7m、深さ0.05mを測り、幅0.56mで断面は皿状を呈している。底面レベルは西側のｂ断面の方が低くなっており、層序で述べた西への傾斜と整合的である。埋土は、ａ断面では２層に分かれる粘質土であるが、ｂ地点では淡灰色の砂質土となっている。遺物は出土していない。

本溝の時期は、掘削面から古墳時代初頭と考えられる。

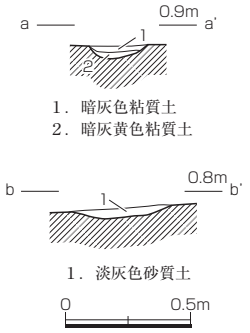


図32　溝13断面（縮尺1/30）

溝14（図30・33、図版３）

調査区南東部のCB28区に位置する。＜８層＞上面で南北1.1m程が検出された。上面が標高0.9m、底面が同0.8m、深さ0.1mを測る。幅は0.6mで、断面は浅い椀状を呈する。埋土は黄灰色砂質土である。溝の南側が撹乱によって破壊されているものの、溝13のｂ断面と規模・断面形状・埋土に共通する点が多いことから、溝13に接続する可能性がある。遺物は出土していない。

本溝の時期は、検出面から古墳時代初頭と考えられる。

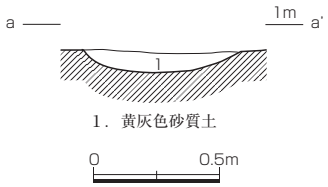


図33　溝14断面
（縮尺1/30）

溝15（図30・34、図版３）

調査区南部のCC31区、溝12の南側約0.5mに位置する。＜７層＞上面で検出された。畦畔１ｂの耕作土を切って構築されている。東西方向の溝で長さ１m程確認したが、南側半分も破壊を受けており詳細な規模は不明である。上面が標高0.9m、底面が同0.65m、深さ0.25mを測る。幅は0.23m以上で、断面は椀状を呈している。埋土は４層に分層される。砂質土を基本とし、上層から下層に向かって砂の含有率が減少する一方、粘質土ブロックの含有率が増えていく。

土器小片が13号ポリ袋１／４袋分出土したが、時期を特定することは困難であった。本溝の時期は、検出面から古墳時代初頭と考えられる。

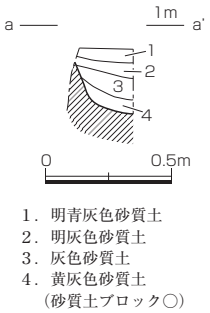


図34　溝15断面
（縮尺1/30）

調査区南西部検出溝

溝16（図11・35）

調査区南西部のCB～CC35区に位置する。＜９層＞上面から掘り込まれていることを調査区壁面で確認した。南北方向の溝であり、上面が標高0.75m、底面が同0.5m、深さ0.25mを測る。幅は0.3～0.5mで、断面は椀状を呈している。溝の北側の底面レベルは0.65mであり、南に向かって傾斜している。埋土は１層で＜８層＞に似た暗褐灰色粘質土である。遺物は出土していない。

本溝の時期は、掘削面から弥生時代後期と考えられる。

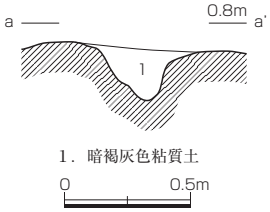


図35　溝16断面
（縮尺1/30）

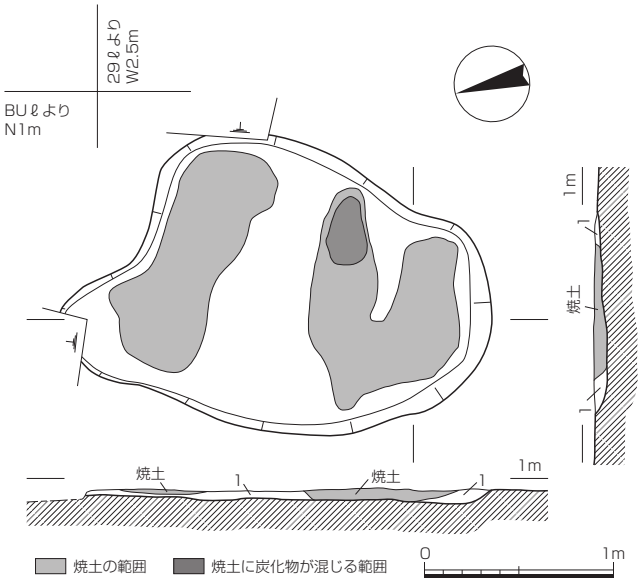
ｄ．焼土溜まり

調査区北側のBT・BU29区に位置する。＜８層＞上面において検出された。上面は標高0.95m、底面は同0.87mであり、深さ0.08mを測る（図36）。北および東側の一部を撹乱によって破壊されているが、平面形は南北2.28m、

東西1.6mの不正楕円形を呈しており、断面は浅い皿状である。埋土は焼土のブロックと少量の焼土を含む土層に分けることができる。焼土は北側と南側にそれぞれ集中域がある。北側では、およそ0.5m×1.2mの範囲に焼土の堆積が集中しており、その底面には１層が堆積している。一方南側ではおよそ0.8m×1.2mの範囲に焼土が厚く堆積している。また、東側の一部では、焼土に炭を含む0.2m×0.35mの範囲も確認された。

本遺構は焼土が多く、他の包含物は全体に少ない。また、土坑底部や壁面では被熱面は確認できなかった。従って、本遺構は焼土などを廃棄した土坑と考えられる。

本遺構の時期は、検出面から古墳時代初頭と考えられる。



1．暗灰茶褐色砂質土（焼土△）

図36　焼土溜まり（縮尺1/40）

第３節　中世前半（平安時代後期～鎌倉時代）の遺構・遺物

＜５層＞に対応する遺構群であり、井戸２基・土坑３基・墓２基・溝21条・ピット群を検出した（図37）。ピット群は＜４層＞との分離が明確とは言い難いため、具体的な検出数を述べることは難しい。南北方向に走る大形の溝26によって調査区は東西に分けられ、屋敷地の存在を示す遺構が溝の両側に配されている。東側では墓２基、西側では井戸２基・土坑３基が検出された。南接する第９・11次調査区においても、この南北方向の大形溝は検出されており、その西側では井戸４基・墓２基、東側では井戸４基や土坑５基などが確認されている。両地点を合わせれば、西側では井戸６基・墓２基・土坑３基で、東側では井戸４基・墓２基・土坑５基となり、ほぼ同様の数値を示す。

ａ．井戸

井戸３（図37・42～45、図版４）

CB・CC31・32区で検出した。建物基礎の設置などによって北東から中央・南辺・西辺が破壊を受けて失われている。検出時の最高所の標高は約1.4mで、＜５層＞にあたる。検出当初は１基の井戸と認識し、調査を進めたが、断面観察の結果、２基の井戸がほぼ同じ位置で切り合っていることがわかり、それぞれを新段階、古段階と呼称した。平面的な位置は、新段階が古段階の掘り方の東側寄りに位置する。残存する東辺のうち、中央から北側にかけての緩く弧状をえがく範囲をのぞき、古段階の掘り方内にほぼ収まる関係にある。

平面形は、検出ラインおよび傾斜変換ラインの形状を参考とすると、ラインが弧状を呈する新段階は円形、直線状を呈する古段階は多角形と推定される。残存規模は古段階が東西3.32m、南北3.62m、新段階は断面から復元される東西幅が約2.7m、南北は不明である。

断面形は、いずれも筒状の下半部に、外方にむかって広がる上半部が付いたＹ字状を呈する。なお、底面より

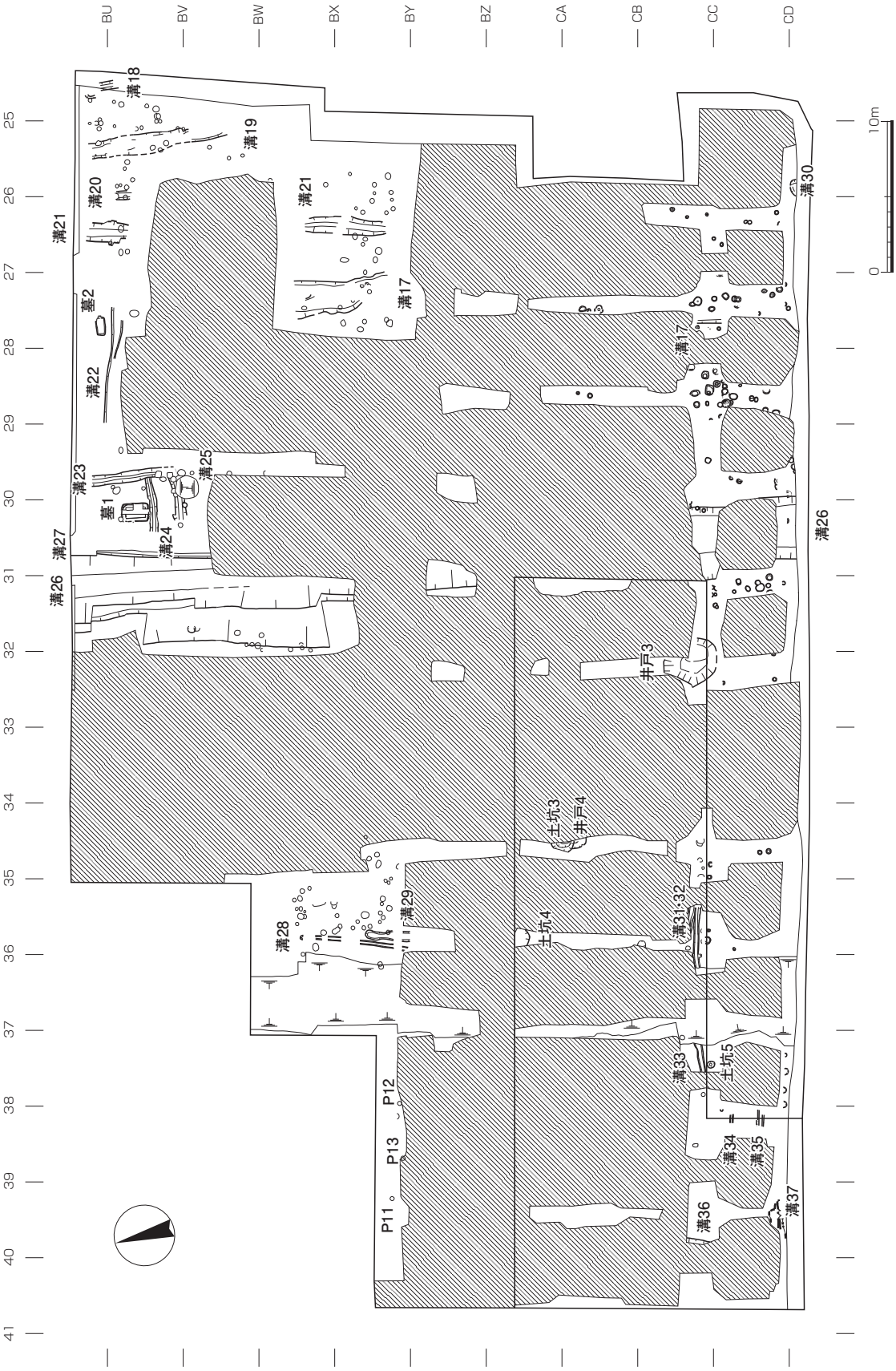


図37　中世前半遺構全体図（縮尺1/400）

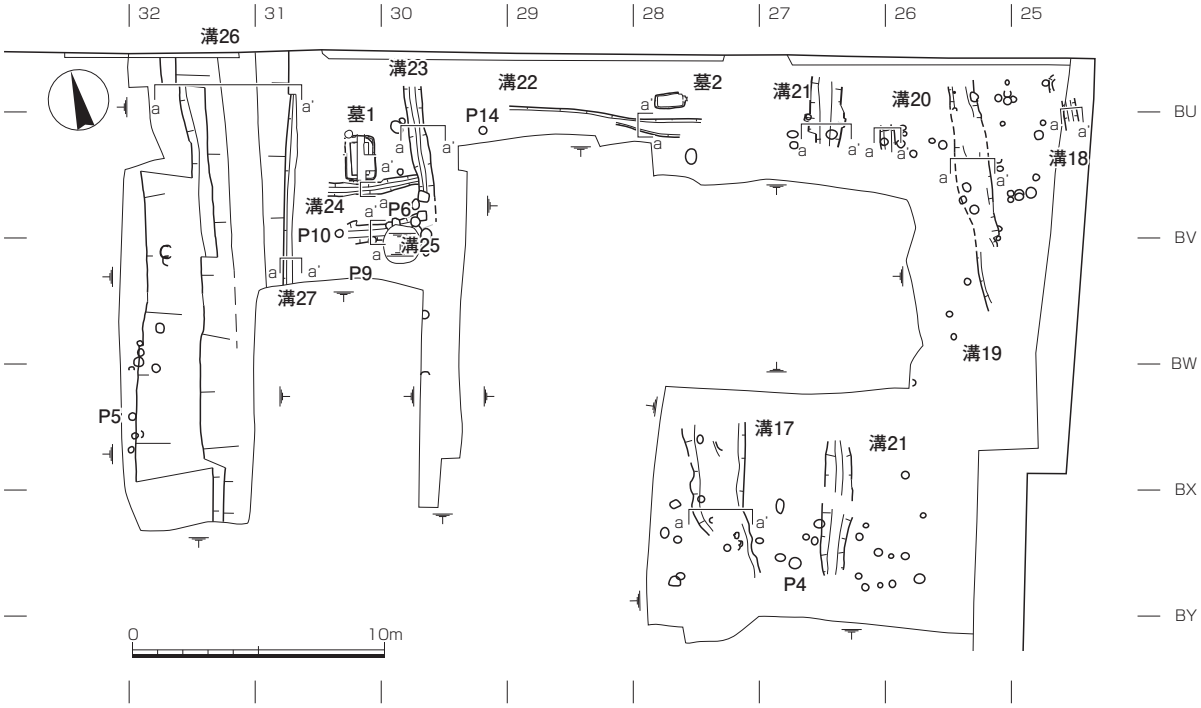


図38　中世前半遺構全体図－北東部－（縮尺1/300）

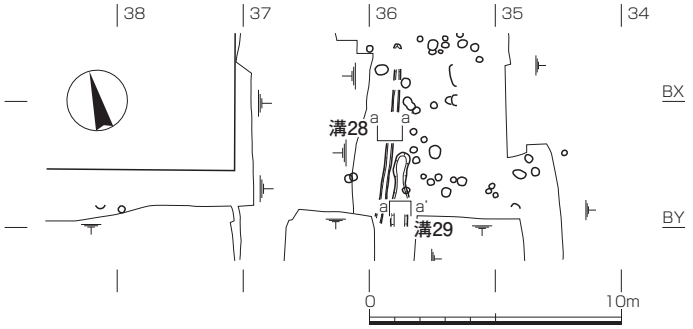


図39　中世前半遺構全体図－西部－（縮尺1/300）

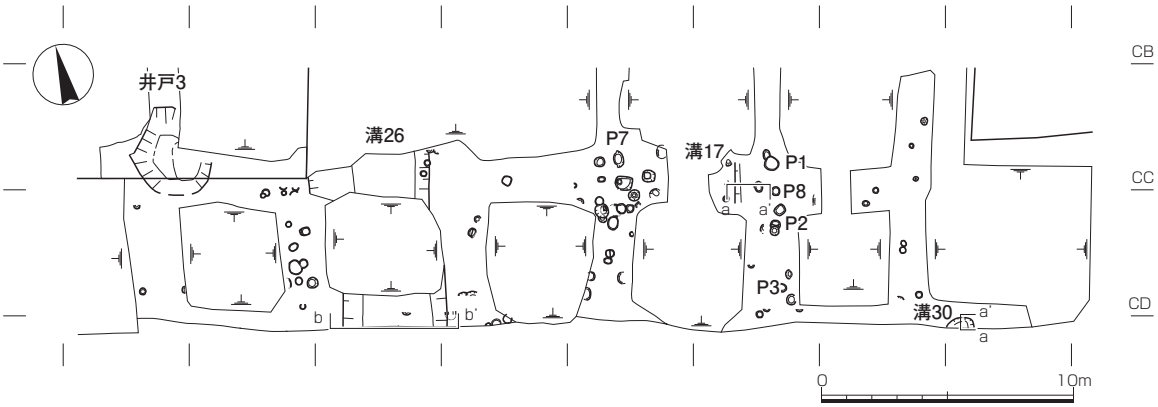


図40　中世前半遺構全体図－南東部－（縮尺1/300）

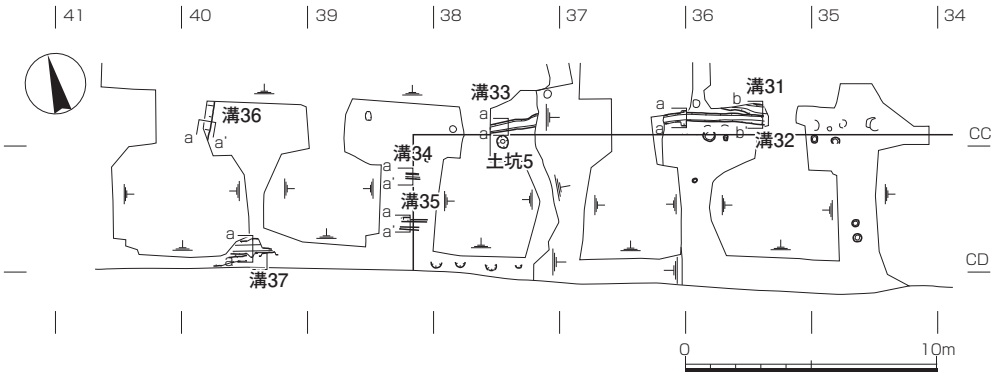


図41　中世前半遺構全体図－南西部－（縮尺1/300）

約0.3m上方では、えぐれが認められた。底面の標高は古段階が－0.52m、新段階が－0.57m、深さは古段階が1.92m、新段階が1.97mである。

埋土は新段階が43層（１～43層）、古段階が18層（44～61層）に分層される。まず、新段階の埋土では、おもに砂および砂質土で構成される上半部（１～24層）とおもに粘土および粘質土で構成される下半部（25～43層）に大別できる。さらに、上半部のうち７～11層は粘土ブロックや粘質土でレンズ状の堆積層を構成する一単位と認識でき、この層群を挟んで上位に位置する１～６層、下位に位置する12～24層の砂・砂質土群に分離される。同様に、下半部のうち32層および34層は黒褐色の炭層で、両者に挟まれた33層の粘土層を合わせた３層を一単位とみると、25～31層の粘土・粘質土層、35～43層の粘土層に細分できる。これらの層群を上位から新Ⅰ～新Ⅵ群と呼称する。

古段階の埋土についても土質を基軸に分類すると、上半部が砂質土で構成される44～53層、下半部が粘土で構成される54～61層の２群に大別される。これらの層群も新段階と同様に、上位から古Ⅰ・古Ⅱ群と呼称する。

遺物の包含状況について、完形で据え置かれたとみられる土器は、新Ⅳ群の25・26層および31層、古Ⅱ群の56・58・59、60・61層から出土し、古Ⅱ群のうち、59層を除いた層では木製品も共伴している。出土状況の詳細について、新Ⅱ群のうち、25・26層では掘り方壁面に沿って吉備系土師器椀が分布し、井戸の中央部には認められない。31層では、炭層である32層の層理面上で、井戸の中央部にあたる位置を中心に吉備系土師器椀、土師器の台付皿が分布する。古Ⅱ群のうち、56層は井筒部と上方へ開く斜面部との境にあたる土層で、井筒部にあたる位置から吉備系土師器椀が出土した。周辺には板状木製品が散在する。58層では、横位に置かれた長さ約40㎝の扁平な割石の上面に吉備系土師器椀１点が伏せた状態で置かれていた（図版４－６）。その北約0.8mの井筒掘り方際では、底板が外れた状態の曲げ物、穿孔のある板材が検出された。59層では、長さ20～30㎝大の礫を用い、両側は縦位、片小口は横位に配置し、一方を開放してコの字状の空間を作出し、そこから縦位に置いた吉備系土師器椀１点が出土した（図版４－７）。古段階最下層にあたる60・61層では、井戸中央部で検出された木製品（柄杓、下駄）の西約0.3mで吉備系土師器椀１点が出土した。古Ⅱ群における遺物出土状況の特徴として、木製品と共伴すること、吉備系土師器椀の埋納に礫を用いることが挙げられる。

遺物は土器３箱、木器２箱が出土した。土器は土師質土器を主体に、椀・杯・小皿・台付皿・脚台が出土し、図示している。その他、土師質鍋、竈、須恵質土器の小片が出土している。

木製品の多くは、検出時にすでに破損しており、原形を保ったままでの取り上げはできなかったが、製作技術を示す加工痕や、器種を類推する手がかりとなる加工痕が観察される部品を図示した（図44・45）。W15～18は曲物で、内面に縦・斜方向のケビキを有する側板を樺皮で綴じ（W18）、目釘で底板と結合（W17）、側板には２枚の挿木が挿入される（W15・16）。W20～24は、内面に縦・斜方向のケビキを有する側板（W21）を、目釘によっ

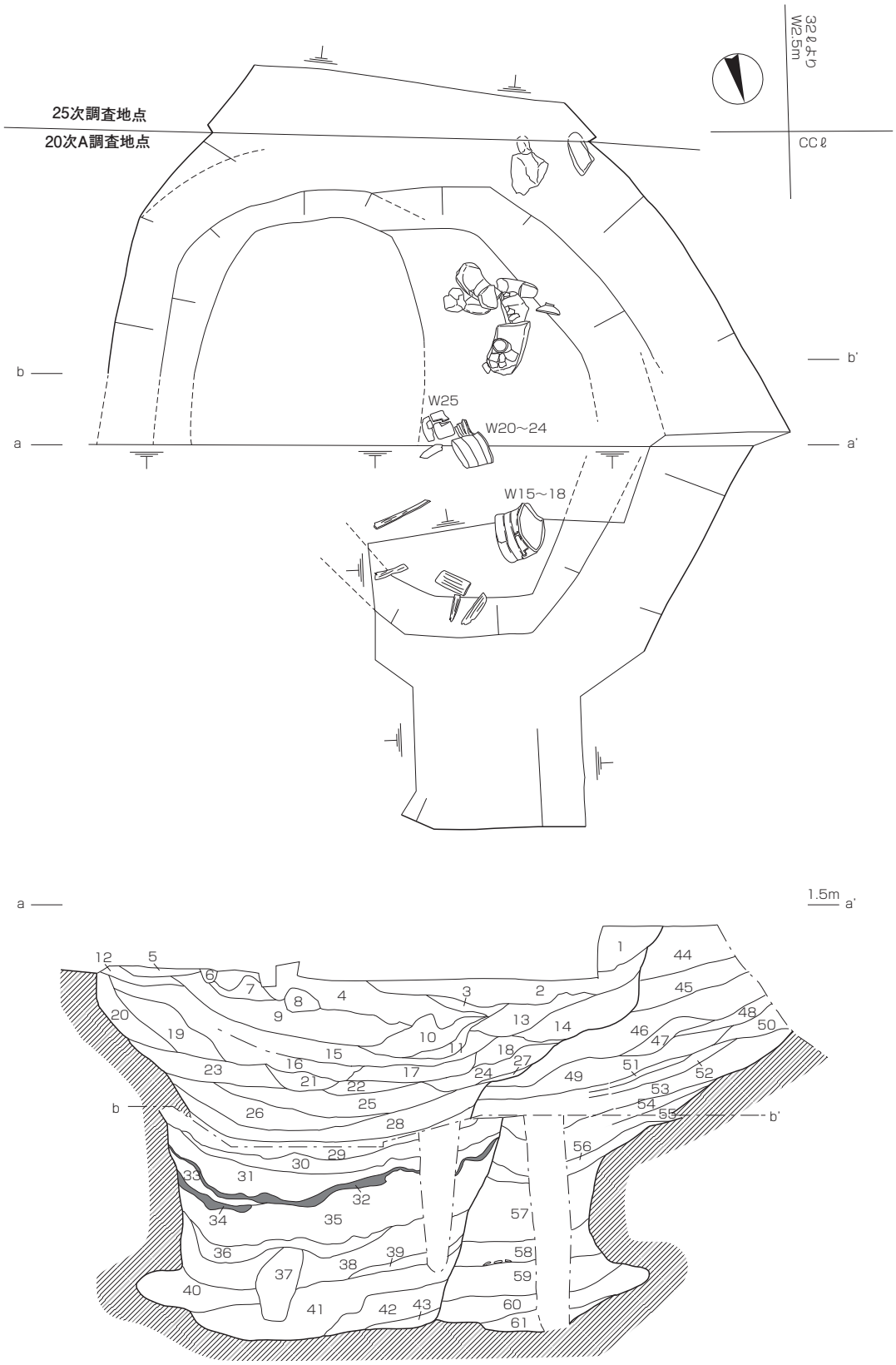
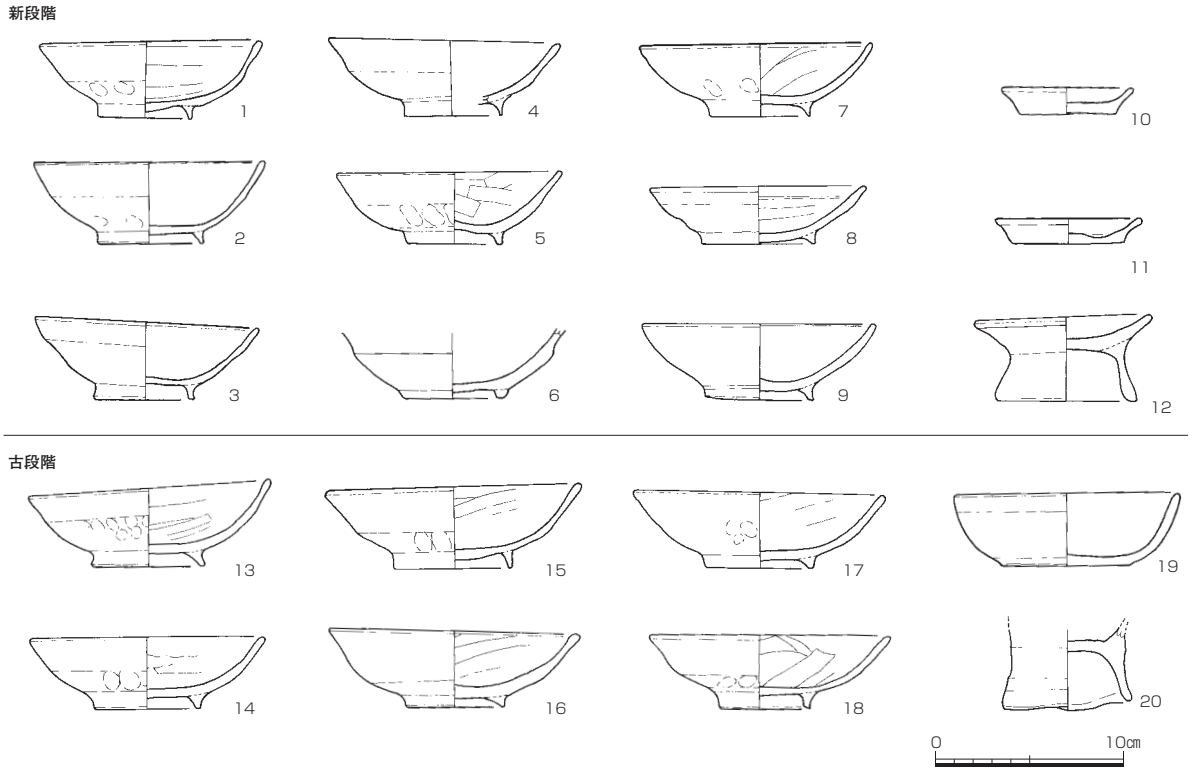


図42　井戸３（縮尺1/30）

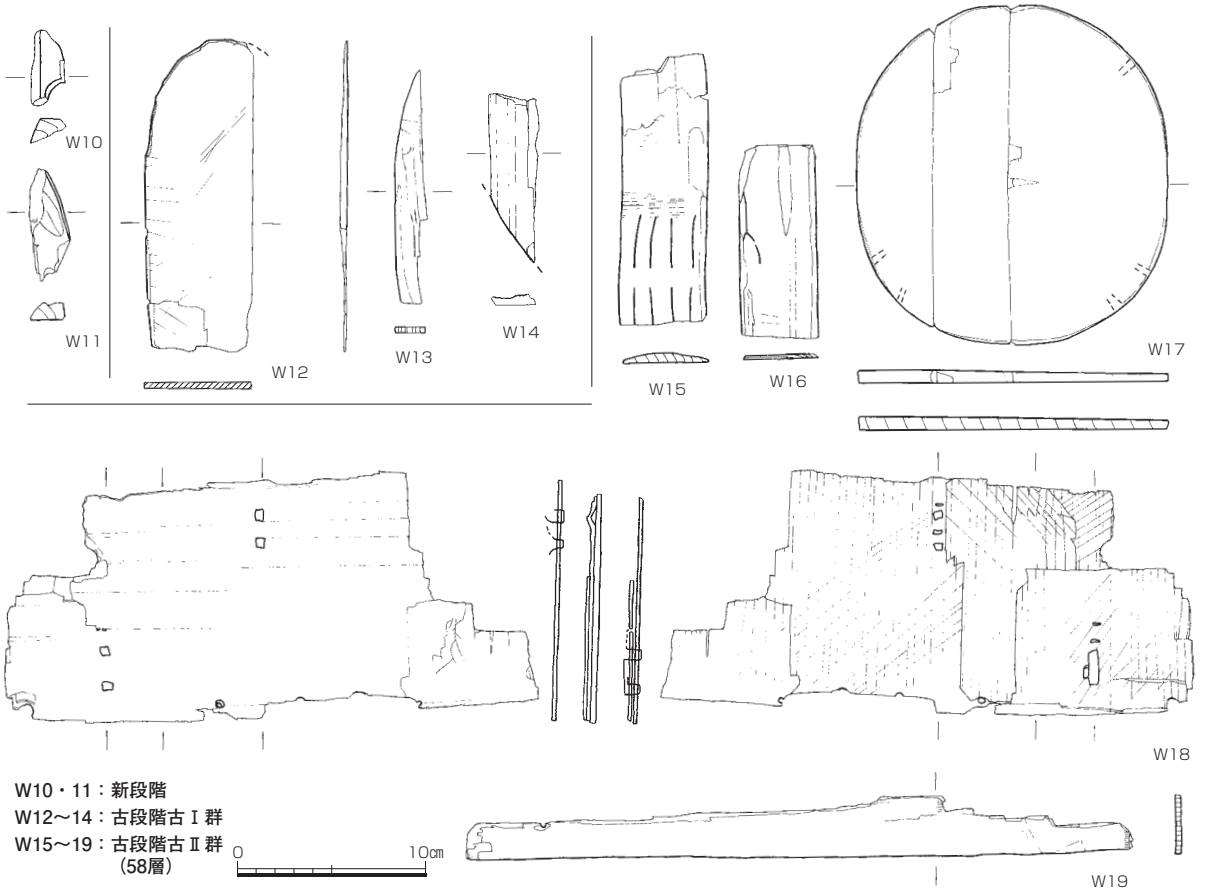


遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器・椀	11.6×12.3	5.1	3.8～4.2	1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ・オサエ、外面重ね焼き痕	微砂	乳白
2	土師器・椀	12.2	5.6	4.3	口1/4底1/1	(内)ナデ(外)ナデ・オサエ、外面重ね焼痕	微砂	淡橙
3	土師器・椀	11.9	5.2	3.8～4.3	口1/2底1/1	(内)ナデ(外)ナデ・オサエ、内面重ね焼痕、外面亀裂	微砂　礫	淡黄褐
4	土師器・椀	12.3	5.5	3.7～4.4	口2/3底1/1	(内)(外)ナデ、内外面煤付着	微砂	灰褐
5	土師器・椀	12	5	3.8～4.2	1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ・オサエ、外面重ね焼き痕	微砂	暗灰橙
6	土師器・椀	－	5.1	－	2/3	(内)(外)ナデ、高台歪み	微砂	淡橙灰
7	土師器・椀	12.5	5.4	3.5～4.3	1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ・オサエ、内面重ね焼痕	微砂	暗黄褐
8	土師器・椀	11.5	6	3	口1/6底1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ	微砂	淡橙白
9	土師器・椀	12.4	5.7	4	口(－)底1/1	(内)(外)ナデ、内面重ね焼痕	微砂	淡橙
10	土師器・皿	7	5.1	1.2	1/1	(内)(外)ナデ(底外)ヘラキリ	微砂	灰
11	土師器・皿	7.2×7.8	5.5×5.9	1.3	1/1	(内)(外)ナデ(底外)ヘラキリ後板目痕	微砂	淡橙
12	土師器・台付皿	9.4	7.3×7.8	4.4	1/1	(外)(内)(脚内)ナデ	微砂　赤色粒	淡橙
13	土師器・椀	12.9	5.8	3.8～4.7	1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ・オサエ、高台歪み	微砂	淡黄橙
14	土師器・椀	12.0	5.4	3.7～4.1	口1/3底1/3	(内)工具ナデ(外)ナデ・オサエ、内面重ね焼痕	微砂	淡橙灰
15	土師器・椀	13.3	6.4	4.4	口1/2底5/6	(内)工具ナデ(外)ナデ・オサエ	微砂	淡白橙
16	土師器・椀	13.4	5×5.4	3.7～4.2	口2/3底1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ、内面重ね焼痕	微砂	淡白褐
17	土師器・椀	13.5	5.7	3.9～4.4	口1/2	(内)工具ナデ(外)ナデ・オサエ	微砂	淡灰褐
18	土師器・椀	12.5	5×5.4	4.2	1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ・オサエ	微砂	淡褐
19	土師器・杯	12	6.7	3.8～4.2	口1/2底部1/1	(内)(外)ナデ(底外)回転ヘラキリ	微砂　赤色粒	淡橙灰
20	土師器・脚台	6.9	－	－	3/5	(内)(外)ナデ、上部に皿がつく可能性あり	微砂	淡赤灰

図43　井戸３出土遺物１（縮尺1/30）

図42の土層注記

1．暗緑灰色砂質土
2．明灰色砂質土
3．明茶褐色砂質土
4．淡灰白色粘土
5．黄褐色粘土ブロック混灰色粗砂
6．明灰色砂質土
7．暗灰色粘土
8．暗灰色粘土
9．暗灰茶褐色粘質土
10. 明茶褐色土
11. 明黄茶褐色土
12. 灰茶褐色砂質土
13. 明灰色砂質土
14. 明灰茶褐色砂質土
15. 暗灰褐色砂質土
16. 灰茶褐色砂質土
17. 灰黄色砂質土
18. 灰色土
19. 明灰褐色砂質土
20. 灰褐色砂質土
21. 明灰褐色砂質土
22. 淡緑灰色砂質土
23. 暗灰褐色砂質土
24. 明緑灰色砂質土
25. 明緑灰色粘質土
26. 緑灰色粘質土
27. 灰色粘土
28. 暗灰色粘土
29. 暗灰褐色粘質土
30. 暗灰色粘質土
31. 暗灰褐色粘土
32. 黒褐色炭層
33. 明灰褐色粘土
34. 黒褐色炭層
35. 明緑灰色～明灰色粘土
36. 暗灰色粘土
37. 明緑茶褐色粘土
38. 暗緑灰褐色粘土
39. 明灰色粘土
40. 暗灰褐色粘土
41. 暗灰色粘土
42. 暗緑褐色粘土
43. 暗灰茶褐色粘土
44. 明茶褐色砂質土
45. 茶褐色砂質土
46. 明灰茶褐色砂質土
47. 明灰白色砂質土
48. 明灰茶褐色砂質土
49. 明茶褐色砂質土
50. 茶褐色砂質土
51. 明灰色砂質土
52. 淡灰白色砂質土
53. 淡灰茶褐色砂質土
54. 灰色粘質土
55. 緑灰色粘土
56. 明緑灰色粘土
57. 灰色粘土
58. 暗緑灰色粘土
59. 暗灰色粘土
60. 暗灰褐色粘土
61. 灰茶褐色粘土



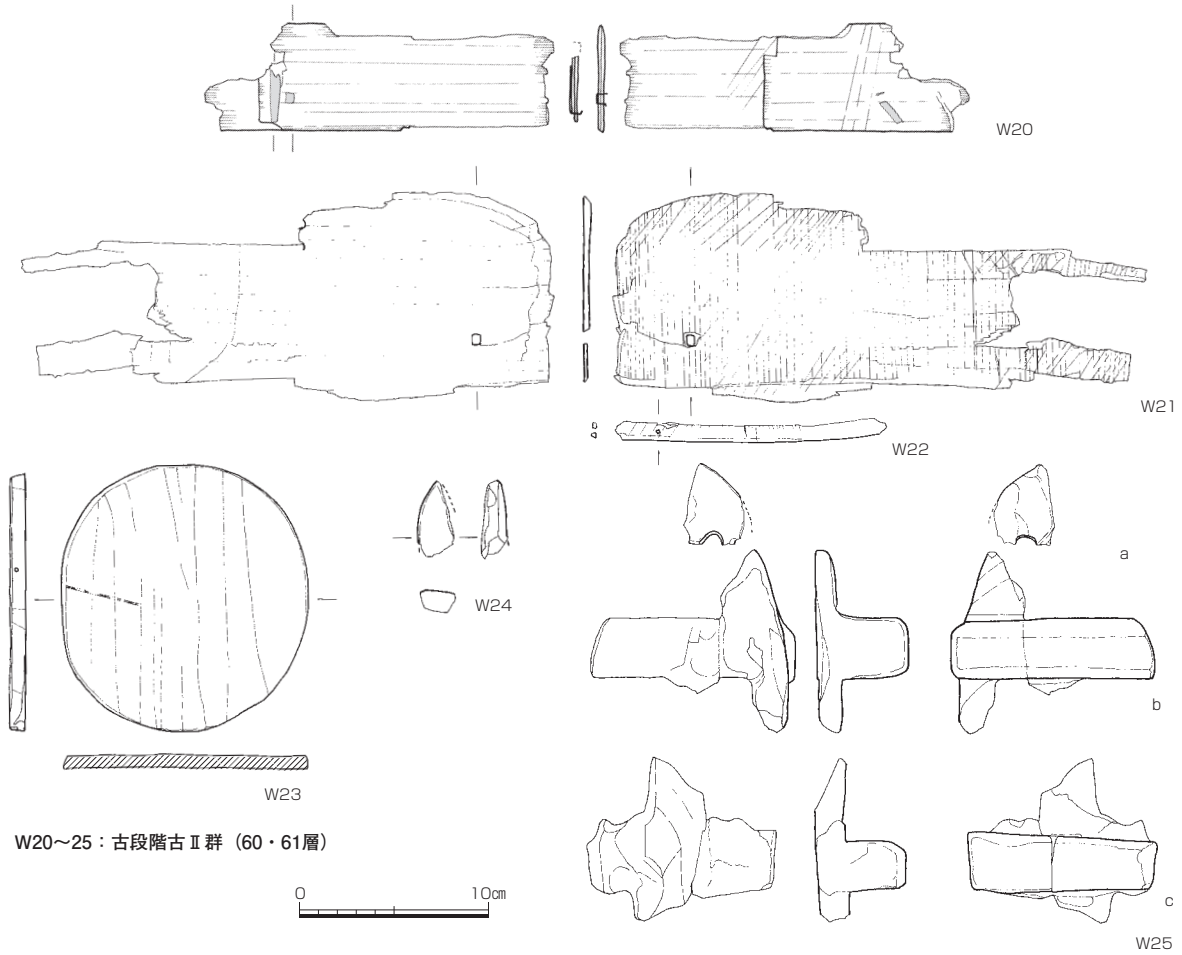
番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W10	板材	4	1.8	1.1	ケンポナシ属	割材	上面・左端を平滑に面取り、下部に穿孔
W11	棒状加工材	6	2	0.9	ケンポナシ属	割材	裏面・右端を平滑に面取り、上下・左端欠損
W12	板状加工材	15.5	5.7	0.35	ヒノキ	柾目	円頭形、上部側面に加工痕、表面左側を中心に擦痕
W13	板状加工材	12.5	1.7	0.3	スギ	板目	側縁湾曲、表裏面平滑、表面一部面取りの可能性
W14	板材	9	2.4	0.5	ヒノキ	柾目	四周欠損
W15	曲物挿木	14.5	4.5	0.5	ヒノキ	柾目	上下欠損、表面加工痕・擦痕、側縁面取り
W16	曲物挿木	10.3	4.1	0.5	ヒノキ	柾目	上下欠損、表面加工痕・擦痕
W17	曲物底板	18	16.5	0.8	ヒノキ	柾目	目釘孔側縁に5ヵ所、中央の割れを相釘で接ぐ
W18	曲物側板	12.2	23.4	0.2	ヒノキ	柾目・板目	側板は最大3枚重なる。樺皮綴じは2列、側板下端に5ヶ所の目釘孔(1ヶ所0.2×0.3cmの目釘孔完存)、側板に縦・斜め方向のケビキ
W19	板材	35.4	3.2	0.3	ヒノキ	柾目	上下欠損、表裏面平滑、孔1ヶ所あり

図44　井戸３出土遺物２（縮尺1/4）

て底板と結合するもの（W22・23）で、斜方向の疎らなケビキを施して曲げたタガ（W20）を伴う。共伴したW24は、三方を削りだし、先端を尖らせている。径約14cmの底板から求められる法量と、W21に認められる約５mm四方の方形孔がW24の刺突による貫き孔とすれば、これらは柄杓を構成する部品と考えられる。

遺物の時期について、吉備系土師器椀の器形はともに浅く扁平で、低い高台であり、その法量は口径12～13cm、器高約４cmである。井戸の埋土形成過程のなかで最も古い古Ⅱ群最下層である60・61層出土の吉備系土師器椀（図43下段）、遺物出土層のなかで最も新しい新Ⅲ群25・26層出土の吉備系土師器椀（図43上段）、堆積の過程のなかでは両者の間に位置づけられるその他の吉備系土師器椀についても同様の特徴を有しており、この井戸では、古段階の埋没、新段階の掘削・使用、新段階の埋没完了までの時間幅を長く見積もらなくてもよいと考えられる。

本井戸の時期は出土遺物から、新段階、古段階ともに13世紀後半に位置づけられる。



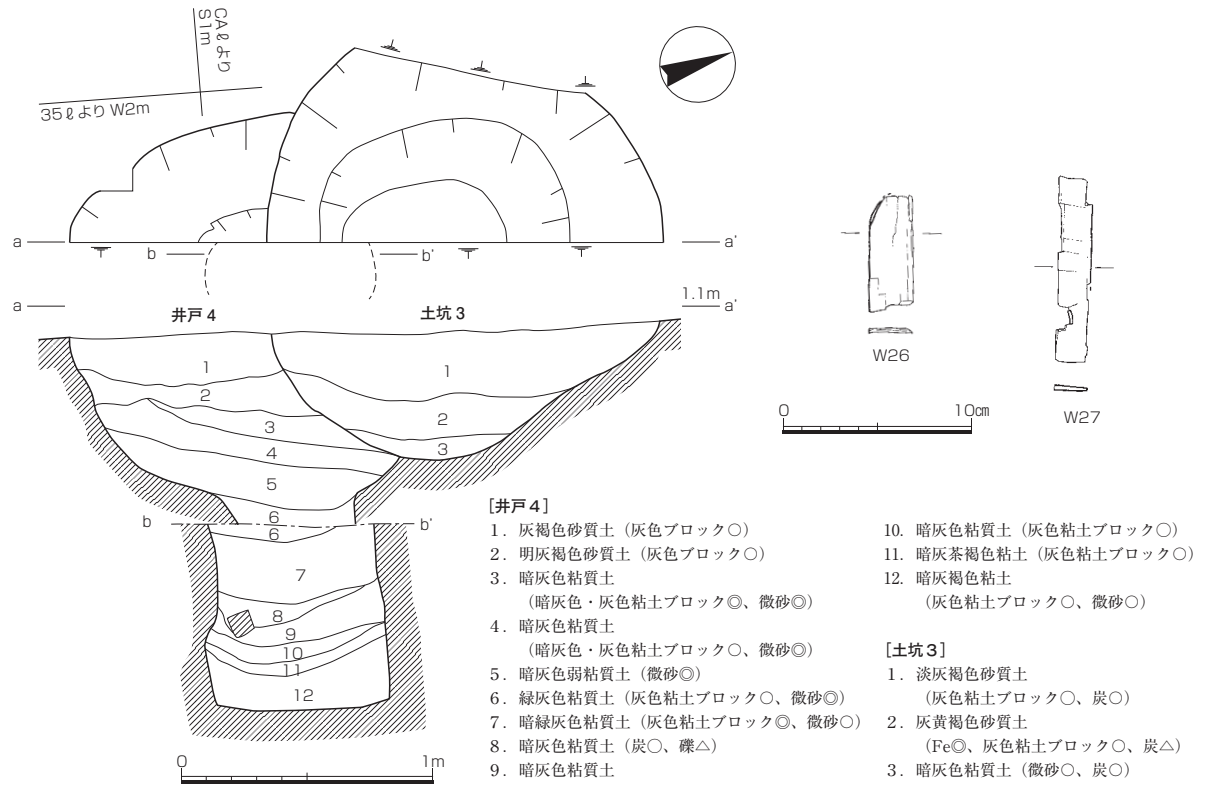
番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W20	曲物側板	5.7	18.5	0.3	ヒノキ	柾目	ナナメ方向にケビキ、樺皮残存、上端・側縁欠損
W21	曲物側板	10.9	28.4	0.2～0.4	ヒノキ	柾目	柄杓柄先端部貫入孔(0.5cm)、側板に縦・斜め方向のケビキ
W22	板材	0.9	14.5	0.25	ヒノキ	柾目	方形の目釘打ち抜き孔(0.2cm)、縦・斜め方向のケビキ、側縁欠損
W23	曲物底板	14.2	13	0.8	スギ	柾目	目釘穴、目釘１カ所残存
W24	柄杓の柄	4	1.35	1.2	ケンポナシ属	割材	柄杓の柄先端部、３面に面取り、下端欠損
W25	下駄	a：4.3	a：3.2	a：1.5	ヒノキ	柾目	a は前壺孔、b は前歯、c は後歯で同一個体、歯の高さ3.4cm
		b：9.7	b：10.8	b：5			
		c：8.6	c：10	c：4.6			

図45　井戸３出土遺物３（縮尺1/4）

井戸４（図37・46、図版５）

CB35区で検出した。東側の上半部は攪乱で大きく失われている。検出時の標高は1.03mで、＜５層＞にあたる。平面形は下半の筒部が円形を呈することから、上面も円形の可能性が高い。残存値は南北1.25m、東西0.6mである。断面形はＹ字型を呈する。底面の標高は0.29m、深さは1.51mである。

埋土は12層に分層され、堆積状態および土質から、３群に大別できる。１群は１・２層で、灰褐色を基調とする砂質土で構成される。５cm大の灰色ブロックを包含する。２群は３～５層で、暗灰色粘質土で構成される。細かな暗灰色粘土ブロックに加え、いずれも白色微砂を多く含んでいる。３群は筒部に堆積する６～12層で、粘質土および粘土で構成される。このうち、８層には被熱礫および炭の包含がみられ、これを境に上下の土層の色調が異なる。上位の６・７層は緑灰色を基調とする粘質土で、細かな灰色粘土ブロック・白色微砂を含む。８～12層は暗灰色を呈する粘土・粘質土である。灰色粘土ブロックや白色微砂の包含はみられるが、顕著ではない。８



番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W26	加工木	9.8	1.8	0.2	スギ	板目	4本の縦方向のケビキ、下端・側面欠損
W27	板材	6.1	2.4	0.2	スギ	板目	両端・右側面欠損、表裏面平滑

図46　井戸４・土坑３・土坑３出土遺物（縮尺1/30・1/4）

層段階で火を用いた祭祀が執行された可能性が考えられる。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出面から中世前半に属すると考えられる。

b．土坑

土坑３（図37・46）

調査区CB35区で検出した。東側１／２は攪乱で失われている。検出時の標高は約1.05mで、＜５層＞にあたる。平面形は円形と推定される。残存規模は南北1.55m、東西0.86mである。断面形はわずかな傾斜変換がみられるが、すり鉢状を呈し、底面の標高は0.5m、深さは0.56mである。

埋土は３層に分層される。最下の３層は白色微砂を含む暗灰色弱粘質土である。１・２層は灰褐色系の色調を呈する砂質土で、５㎝大の灰色粘土ブロックを包含しており、埋め戻し土の可能性がある。

遺物は土師器小片が出土した。木製品として板材７点が出土し、２点を図化した。本遺構の時期は、検出面および出土遺物から中世前半に属すると考えられる。

土坑４（図37・47）

調査区BZ35区で検出した。北側は調査区外に延び、大半は攪乱で失われている。検出時の標高は0.94mで、＜５層＞にあたる。平面形は不明である。残存規模は南北0.62m、東西1.18mである。断面形は、弧状を呈する緩やかな法面が底面に連続し、丸底状を呈するものと推定される。検出できた最深部の標高は0.63m、残存する深さは0.31mである。

埋土は３層に分層される。１層の下面は明確な層理面をなしている。１・３層は灰色を基調とする粘質土で、灰色粘土ブロックを含む。２層は暗褐色砂質土で、粘土や砂のブロックを多く含むなど、混じりの多い土である。また、鉄分の沈着、マンガンの凝集が顕著である。

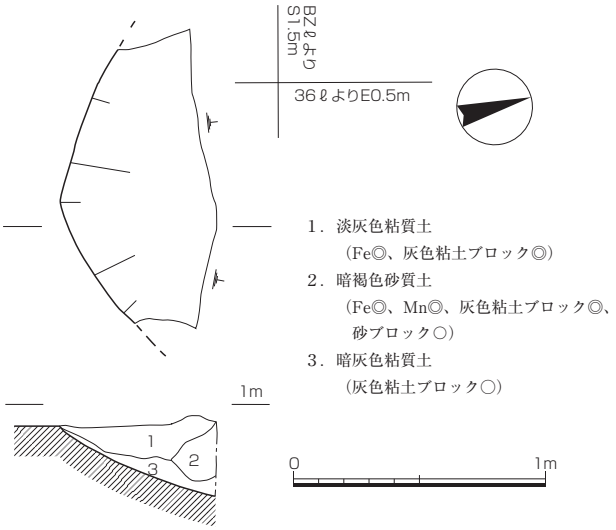


図47　土坑４（縮尺1/30）

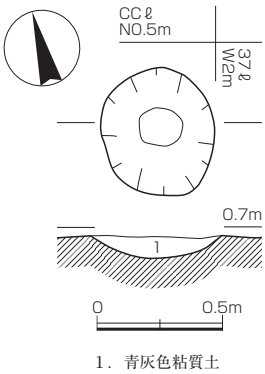


図48　土坑５（縮尺1/30）

遺物は中世前半の土師質土器小片が出土した。本遺構の時期は、出土遺物から中世前半に属すると考えられる。

土坑５（図37・48）

調査区南西部のCB37区に位置する。＜９層＞で検出した。検出面の標高は0.67m、底面は同0.57m、深さ0.1mを測る。平面形は径0.5×0.45mの円形を呈し、埋土は青灰色粘質土１層である。断面形は椀状をなす。遺物には吉備系土師器椀の小片など約30点が出土した。

本遺構の検出面は＜９層＞であるが、出土遺物から判断し、帰属時期は中世前半と考えられる。

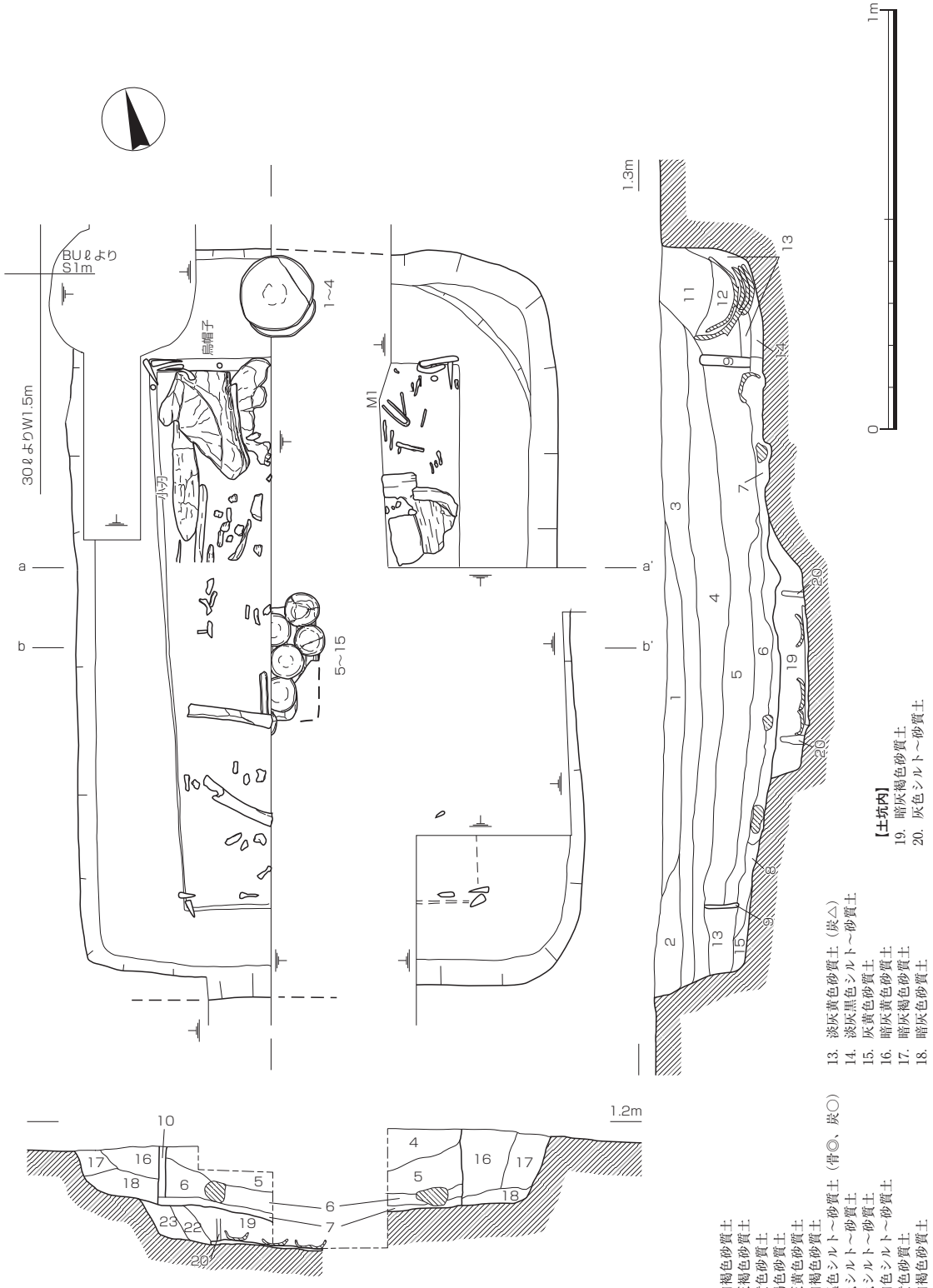
c．墓

墓１（図37・38・49～55、図版５・６）

調査区北部のBU30区に位置する。本遺構の一部は調査時の断ち割りで消失している。墓壙内に木棺が埋置された木棺墓である。棺内には１体の人骨と、烏帽子・小刀・毛抜があり、人骨頭部北側の棺外には白磁皿と青磁碗が重ねて置かれていた。また、木棺の中央下部には遺物埋納土坑が付属していた。

検出面は＜５層＞である。上面は標高1.25m、墓壙下面は同１m、深さ0.25mを測る。墓壙の平面形は隅丸長方形を呈し、その規模は、上面で1.79m×1.12m、底面では1.69m×1.03mである。掘り方は箱状を呈し、主軸は南北方向を示す。

木棺構造：内部に置かれた木棺の形態は、棺材を示す厚さ１～２㎝程の灰色粘土の痕跡（図49、７～10層）から推定することができる。７層が棺底、９層が小口板、10層が側板と考えられ、外寸で1.31m×0.72mを測り、高さ0.08～0.12mを確認した。本遺構の東側では明瞭な形で確認することはできなかったが、長方形の組み合わせ木棺が復元される。その構造は、まず７～10層と鉄釘の位置関係から、底板の上に小口板と側板がのる状態が考えられる。鉄釘は木棺の四隅に集中して出土しており、標高１m～1.05mに23点が出土した。その中で、M10・15、釘ａ・ｂ・ｃは釘頭を下にした状態で出土しているため、底板の上に小口板・側板がのる構造は明らかである。次に、小口板と側板の関係を横位で出土した鉄釘から見てみたい（図51）。木棺北西部では、横位の鉄釘が５点あり、最も下部で確認されたＭ４・21は重複しており釘頭を西にする。なおM20は烏帽子の上部に張り付くように出土したため、検出レベルは最も下位となるが、動いている可能性が高い。南西部では、木棺上で鉄釘が２点出土しており、Ｍ９が釘頭を西にする。M14は釘頭を北に向けている。南東部では、出土した２本（Ｍ７・13）と



※東西断面は、墓坑はa-a'ライン、埋納土坑はb-b'ラインで断面を記録

【墓内】
1. 淡灰白褐色砂質土
2. 暗淡灰褐色砂質土
3. 暗灰黄色砂質土
4. 暗灰褐色砂質土
5. 暗淡灰黄色砂質土
6. 淡灰白褐色砂質土
7. 淡灰黒色シルト～砂質土（骨◎、炭○）
8. 淡灰色シルト～砂質土
9. 黒灰色シルト～砂質土
10. 淡灰白色シルト～砂質土
11. 暗灰黄色砂質土
12. 淡灰白褐色砂質土
13. 淡灰黄色砂質土（炭△）
14. 淡灰黒色シルト～砂質土
15. 灰黄色砂質土
16. 暗灰黄色砂質土
17. 暗灰褐色砂質土
18. 暗灰色砂質土

【土坑内】
19. 暗灰褐色砂質土
20. 灰色シルト～砂質土

図49　墓1（縮尺1/15）

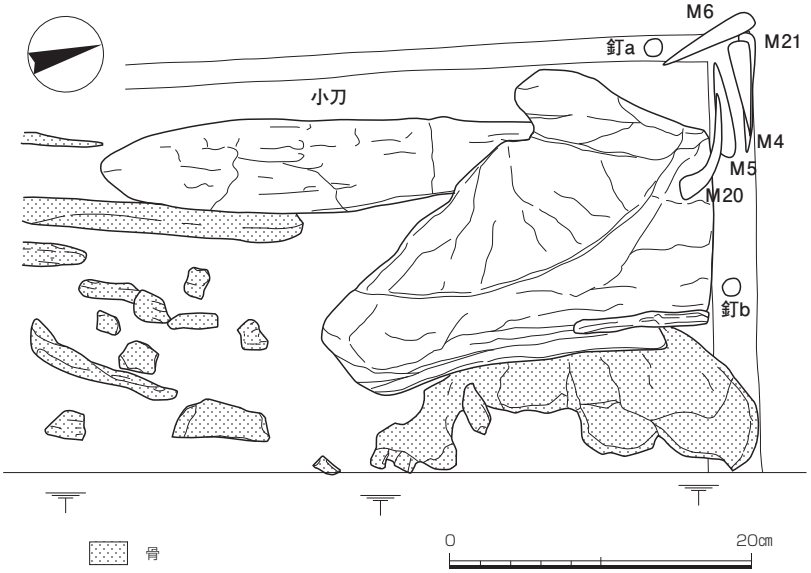


図50　烏帽子出土状況（縮尺1/5）

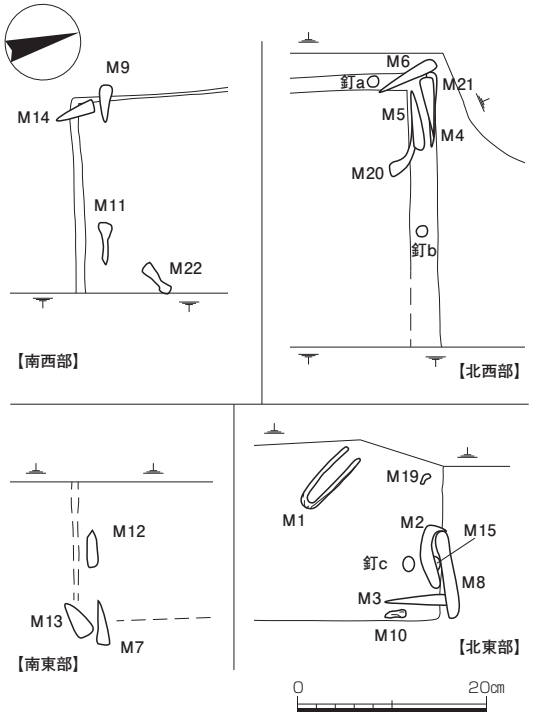


図51　墓１木棺四隅の鉄釘出土状況（縮尺1/8）

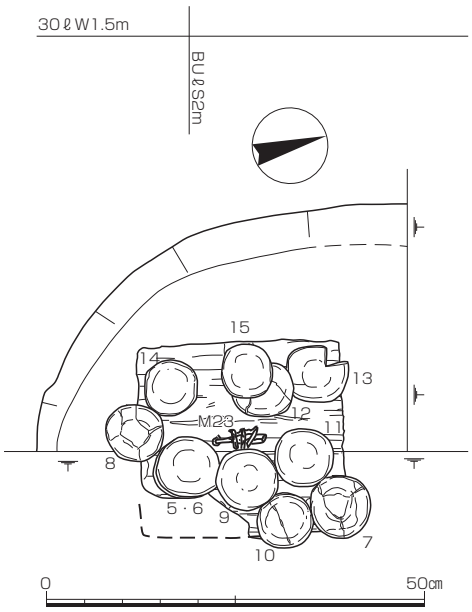


図52　墓１土器出土状況（縮尺1/10）

も釘頭を東に向けている。北東部では４点出土したが、方向に統一性を見いだせない。このような横位の鉄釘出土状況から、小口板と側板の関係は、北東部が不明確ではあるものの、小口の外側に側板を留める構造であることが推測される。なお、蓋板は確認できなかったが、四隅以外で出土した鉄釘（M11・12・22）から蓋板の存在は示される。

遺物出土状況（木棺内）：木棺床面（図49、７層）からは、人骨と着装品および副葬品が出土した。北西の隅で

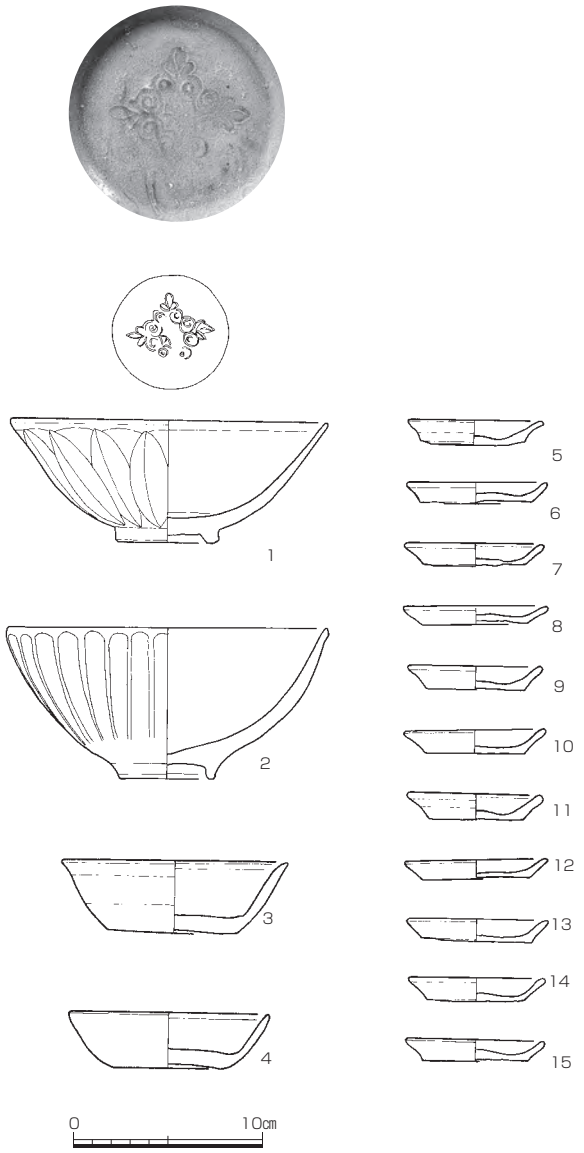
見つかった頭蓋骨は比較的よく残存しているものの、四肢骨は部分的に残っているのみである。頭蓋骨は、後頭部を木棺小口に接するように出土しており、首を南にかしげるような状態であった。木棺の規模や人骨の配置から、屈葬と考えられる。

頭蓋骨の頭部側では折烏帽子が出土した。折烏帽子は幅25cm、高さ17cmの範囲につぶれた状態で検出された。頭骨を包むように出土したことから、着装した状態と判断される。表面には布目上の凹凸が残り、塗膜の顕微鏡観察からは紙の繊維が観察された（第４章２）。このことから、烏帽子の素地には、紙と布が用いられており、紙芯布張りであることが判明した。塗膜は、鉱物を含んだ漆がまず下地として塗られ、その上に透明漆が４～５回に渡って塗り重ねられており、つやのある黒色を呈している。

また、折烏帽子の下に一部重複するような状態で小刀が出土した。頭部の西側で木棺の長軸に沿って置かれていた。切先は南を向き、木質で覆われているため鞘に納められた状態と考えられる（図版15）。長さは約34cm、幅は6.5cmを測る。これら頭蓋骨・折烏帽子・小刀を含む木棺の北西部は、平面調査を行った後、下層の土ごと切り取って保存処理を行った。そのため、鉄釘の一部と小刀の詳細な記録は行えていない。

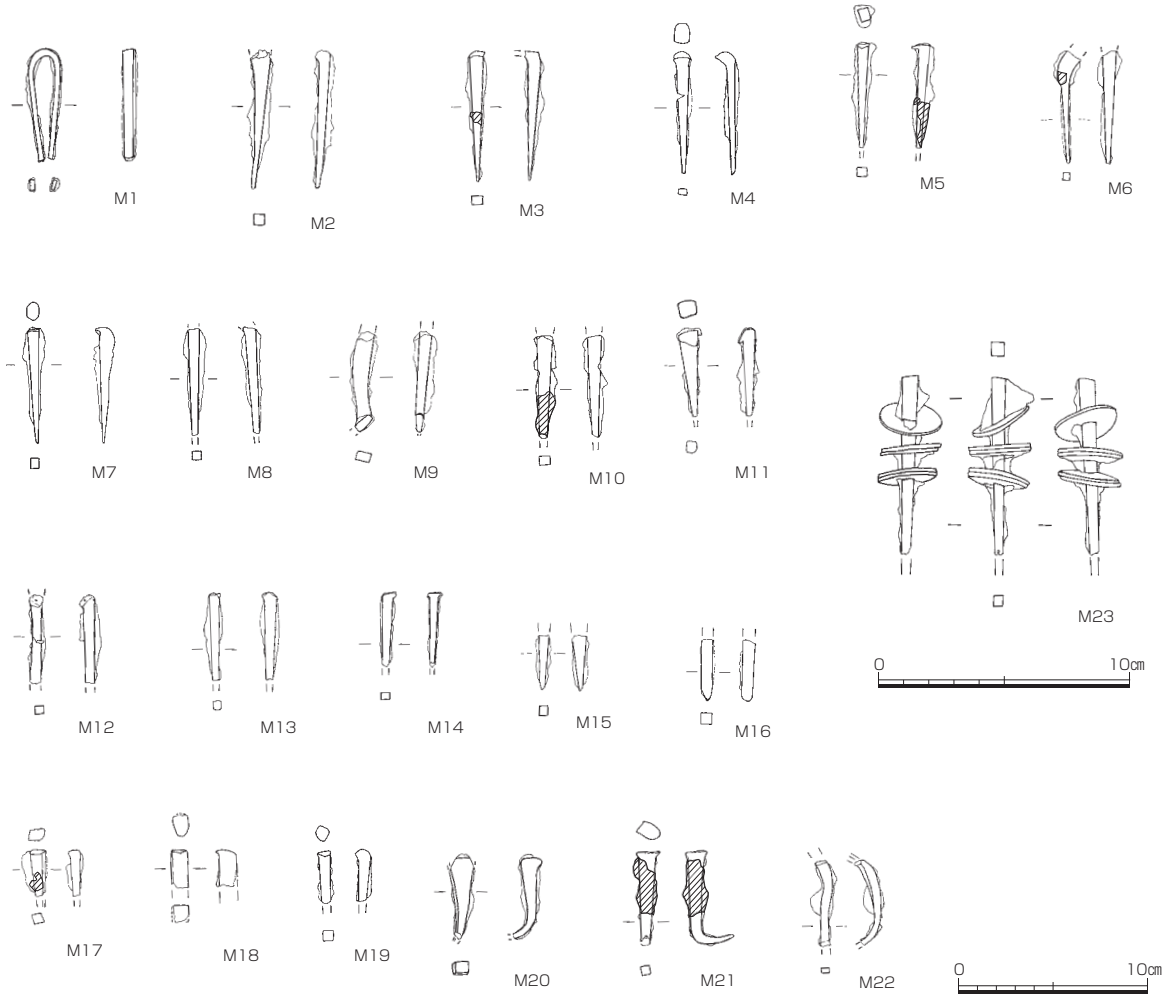
頭蓋骨の東側では、毛抜が確認された（図51）。長さ６cmを測る（図54－Ｍ１）。

遺物出土状況（木棺外）：木棺の北側には、棺外に



遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	青磁・碗	16.5×17.0	5.4	6.5	1/1	内外面施釉、畳付け・高台内部は露胎、見込みに草花文、外面に鎬が明瞭な連弁文	精緻	灰褐(釉)暗青緑
2	青磁・碗	16.9	5	8	1/1	内外面施釉、畳付け・高台内部は露胎、外面に鎬連弁文	精緻	灰褐(釉)オリーブ
3	白磁・皿	12.0	6.8	3.8	1/1	内外面施釉・貫入、口剥ぎ	精緻	青白(釉)透明
4	白磁・皿	10.6	5.6	2.9	1/1	(内)ナデ、内外面施釉、底面露胎・重ね焼痕、口剥ぎ、体部下半凹凸あり	精緻	青白(釉)透明
5	土師器・皿	7.1	5.5	1.3	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後板目痕、内面磨滅	微砂　黒色粒	淡橙
6	土師器・皿	7.4	6	1.1	1/2	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後板目痕	微砂　黒色粒	淡橙
7	土師器・皿	7.4	5.4	1.7	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂	淡橙
8	土師器・皿	7.6	5.7	1	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ	微砂	淡灰褐
9	土師器・皿	7.1	5.2	1.2	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂　黒色粒	淡黄褐
10	土師器・皿	7.4	5.2	1.3	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂　黒色粒	淡橙褐
11	土師器・皿	7.3	4.9×5.3	1.4	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後板目痕	微砂	淡橙褐
12	土師器・皿	7.5	5.7	1	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂	淡橙
13	土師器・皿	7.4×7.7	5.9	1.2	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂	淡橙
14	土師器・皿	7.3	5.2	1.3	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂	淡橙
15	土師器・皿	7.3	5.7	1.1	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂	淡橙

図53　墓１出土遺物１（縮尺1/4）



番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	重量(g)	特徴
M1	毛抜き	5.9	1.7	0.6	7	1本の金属の棒を2つに折り曲げた形状
M2	釘	7.4	1	0.6	9	角釘、頭部一部欠損、下端に向けて細くなる
M3	釘	6.9	0.7	0.5	6.2	角釘、頭部残存、下端に向けて細くなる
M4	釘	6.5	0.4	0.3	5.2	角釘、頭部残存、下端に向けて細くなる
M5	釘	5.6	0.5	0.5	7	角釘、頭部残存、下端に向け細くなる、木質残存
M6	釘	5.5	0.7	0.4	6.6	角釘、上下欠損、下端に向け細くなる、木質残存
M7	釘	6.1	0.5	0.6	6.6	角釘、頭部残存、下端に向けて細くなる
M8	釘	5.4	0.8	0.5	5.5	角釘、頭部残存、下端に向け細くなる
M9	釘	5.3	0.8	1	7.1	角釘、上下欠損、下端に向け細くなる
M10	釘	5.6	0.5	0.6	6.6	角釘、頭部残存、下端に向け細くなる、木質残存
M11	釘	4.7	0.9	0.5	5.7	角釘、頭部残存、下端に向け細く尖る
M12	釘	4.7	0.5	0.5	5.1	角釘、上下欠損
M13	釘	4.6	0.4	0.5	5.2	角釘、頭部残存、下端に向け細くなる
M14	釘	4	0.6	0.5	2.4	角釘、頭部残存、下端に向け細くなる
M15	釘	3	0.8	0.6	2.8	角釘、上部欠損、下端に向け細くなる
M16	釘	3.2	0.6	0.7	2.9	角釘、上部欠損
M17	釘	2.4	0.7	0.5	3	角釘、頭部残存、下端に向け細くなる、木質残存
M18	釘	2.1	1	0.9	2.8	角釘、頭部残存
M19	釘	2.8	0.6	0.6	2.4	角釘、頭部残存、下端に向け細くなる
M20	釘	4.5	1.2	0.6	5.9	角釘、頭部残存、下端に向け細くなる、先端部は直角に曲がる
M21	釘	5	0.8	0.5	8.1	角釘、頭部残存、下端に向け細く尖る、先端部は直角に曲がる、木質残存
M22	釘	4.5	0.4	0.3	6.1	角釘、上下欠損、端部は曲がる。
M23	鉄芯	23.9	0.5	0.5	22.7	先細りの角釘に計5枚の銭を通している。2枚の銭が錆で接着しているため、1枚・2枚・2枚に分かれた状態を呈する。銭の種類は元豊通寶・熙寧元寶。
	銭	2.5	2.5	0.16		

図54　墓１出土遺物２（縮尺1/4・1/3）

番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W28	折敷	26.1	28	0.1	ヒノキ	不明	表面の組織のみがわずかに残る

図55　墓１出土遺物３（縮尺1/4）

白磁皿２点と青磁碗２点が下から図53－３・４・２・１の順で４段重ねとなって出土した。白磁皿は２点が入れ子状態で重ねられ、その上に青磁碗２点が重ね置かれていた。青磁碗はそれぞれ外面に蓮弁文をもつ龍泉窯系の碗である。

墓壙下の土坑：木棺底板（図49、７層）を除去した後に、木棺中央やや西寄りで土坑が確認された。上面は標高0.98m、底面は同0.9m、深さ0.08mを測る。掘り方は箱状を呈する。南北は幅0.61m、東西は墓の東側では確認することができなかったことから概ね0.6m前後の規模が復元できる。頭蓋骨・折烏帽子を保存処理のために切り取ったため、本土坑の北側も欠損したが、本遺構の形態は円形を呈すると考えられる。木棺中央部直下に構築されていることから、本木棺墓に付属するものといえる。

本土坑からは、底面に置かれた26.1cm×28cmのヒノキ製の折敷の上に、鉄芯の通された銭５枚とその周囲を囲む様に土師器皿11枚が出土した（図52～55、第４章３）。断面観察から、折敷の端部に５cm程垂直に立ち上がる灰色粘土（図49、21層）が観察されたことから、折敷は箱状を呈していた可能性がある。銭には、宋銭である元豊通寶、熙寧元寶が確認できた。

埋土の状況：木棺下部の土坑の埋土は１層で、暗灰褐色砂質土である。遺物を埋置した後、墓壙内に木棺が配される。５・６層および11～18層は淡灰色を基調とする砂質土で棺安置後の埋め戻し土、１～４層は暗灰褐色を基調とする砂質土で土器や炭の小片を含むため棺の陥没後の流入土と考えられる。また、本来ならば５・６層中に木棺蓋の痕跡が確認できるはずだが、前述したように認識することはできなかった。遺構埋め戻し土は全体に汚れが少ないため、丁寧に埋められたことが予想される。

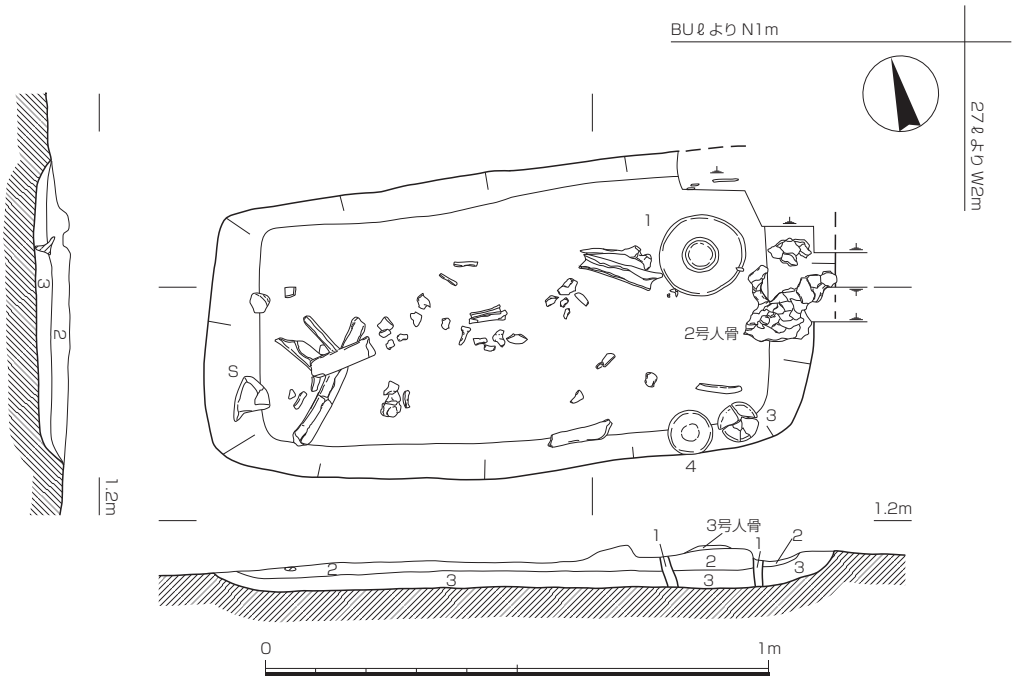
墓の特徴と被葬者：本遺構は、木棺の底部に遺物埋納土坑をもつ特異な構造を呈する点、着装された折烏帽子および棺外に副葬された４点の輸入陶磁器とその出土状況など、埋葬にあたって特別な扱いがなされたことがうかがわれる。被葬者は、歯牙の咬耗の程度から、熟年と推測される（第４章１、１号人骨）。性別は不明であるが、烏帽子のあることから男性の可能性が極めて高い。

本遺構の時期については、13世紀前半と後半の青磁碗（図53－１・２）があるが、前者には明瞭な使用痕が残るため、伝世品と考えられる。白磁皿（同－３・４）は13世紀後半と考えられる。また、木棺下部の土坑内から出土した小皿は13世紀後半～末と考えられる。したがって、本遺構の時期は、13世紀後半～末と考えておきたい。

墓２（図37・38・56・57、図版７）

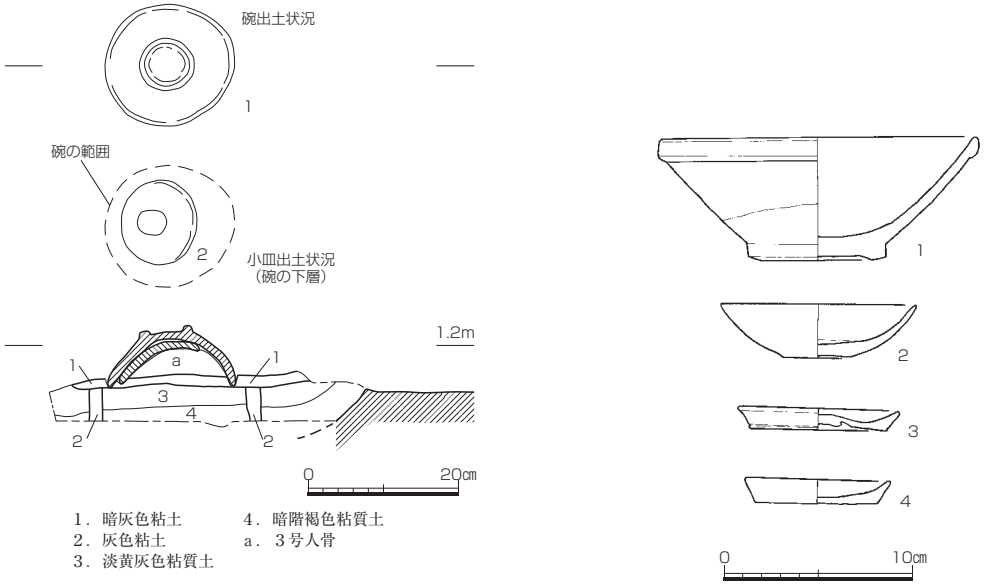
調査区北部のBY27区に位置する。木棺痕跡や釘を確認することができなかったことから、土壙墓と考えられる。主軸は東西方向をとる。人骨は２体出土し（第４章１）、２号人骨は墓壙中央部、３号人骨は白磁碗・皿の内部より頭蓋骨のみ確認された。

＜５層＞掘り下げ中に確認した。上面は標高1.08m、底面は同0.91m、深さ0.17mを測る。平面形は隅丸方形を呈し、上面で1.23m×0.6m、底面で1.01m×0.51mを測る。掘り方は緩やかな皿状を呈する。埋土は２層で構成さ



1．灰色粘土　2．淡黄灰色粘質土　3．暗階褐色粘質土

図56　墓２（縮尺1/15）



1．暗灰色粘土　4．暗階褐色粘質土
2．灰色粘土　a．３号人骨
3．淡黄灰色粘質土

遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	白磁・碗	16.5	7.2	6.5	1/1	削り出し高台、内外面施釉、外面下半から露胎、内面貫入	精緻	灰白(釉)透明
2	白磁・皿	10.3	3.6	2.8	1/1	(底外)篦ケズリ、内外面施釉、底部露胎、細かな貫入、見込みに段	精緻	灰白(釉)オリーブ
3	土師器・皿	8.6	7.2	1.1	1/1	(内)ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂	灰橙
4	土師器・皿	7.6	6.4	1.3	1/1	(内)(外)ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂	淡灰橙

図57　墓２白磁出土状況・出土遺物（縮尺1/10・1/4）

れている。２層中および上面において人骨・小皿が出土したことから、２層は埋土、３層は墓壙掘削後の整地土と考えられる。なお、墓壙西端で検出された礫は、唯一墓壙底面に張り付いて出土していたことから（図56）、３

層による整地行為に関わる可能性があるが、機能や用途は不明である。

遺物出土状況：２層より２体の人骨および白磁碗・皿、土師器皿２点が出土した。人骨は、全体に残存状況がわるい。２号人骨は頭蓋骨が東側にあり、四肢骨が中央～西側に確認された。墓壙の規模や人骨の出土位置から北を向く屈葬であると考えられる。

２号人骨の頭蓋骨の側には伏せた状態の白磁碗・皿が重なった状態で出土した（図56・57）。皿の下部からは、頭蓋骨（３号人骨）が出土した（図57－ａ層）。前頭骨と左頬骨の一部が確認できた。これらは、板材と考えられる厚さ１㎝程の１層・２層の存在から、台のような構造物の上に置かれた可能性が考えられる（図57）。台の大きさは、東西0.32m、高さ0.06mを測る。南北の規模については不明であるが、人骨や墓壙の大きさから東西の規模と同程度かそれ以下と考えられる。台の脚部は２本確認できる。これらは墓壙底面から垂直に立ち上がっていることから、墓壙整地土（３層）にめり込むかたちで、しっかりと据え置かれたものと考えられる。また、墓壙の南東際では２点の土師器皿が正位置で出土した。

墓の特徴と被葬者：本遺構は、台の上に配された頭蓋骨・白磁皿・碗を伴っていた点に大きな特徴がある。被葬者は、２号人骨が性別不明の成年で、３号人骨が性別不明で若年以前と推測されている（第４章１）。２号・３号人骨が同時に埋葬された経緯および人骨間の関係については不明である。

本遺構の時期は、白磁碗・皿（図57－１・２）からは11世紀末～12世紀前半と考えられるが、小皿（同－３・４）の形態を参考にすると12世紀末～13世紀前半と考えられる。したがって、本遺構の時期は12世紀末～13世紀前半と考えられる。

ｄ．溝

溝17（図37・38・58・59、図版７）

調査区東部のBW・BX27、南東部のCB・CC27区で検出した。傾きN12°Eの溝であるが、BWライン以北およびBY～CBライン間では攪乱によって破壊されている。前者の区域では長さ６ｍ程、後者の区域では長さ２ｍ程を確認した。検出面、溝の形状、埋土の特徴などから、これらが同一の遺構であると判断した。

検出面は＜５層＞である。北側のａ断面では、上面は標高1.4m、底面は同1.23m、深さ0.17mを測り、南側のｂ断面では、上面の標高は1.3m、底面は同1.14m、深さ0.16mを測る。南に向かって傾斜する。溝の幅は2.75m程であり、断面は皿状を呈する。埋土は２層であり、砂質土で構成される。両層とも炭を多く含んでおり、特に南のｂ断面１層ではそれが顕著であり暗黒灰色を呈している。

遺物は13号ポリ袋１袋分で、小～細片の土師器杯・皿、鍋が出土した。杯・皿では大型破片や完形のものも少数含まれる（図59）。本遺構の時期は、出土遺物から12世紀前半と考えられるが、11世紀代に遡る可能性もある。

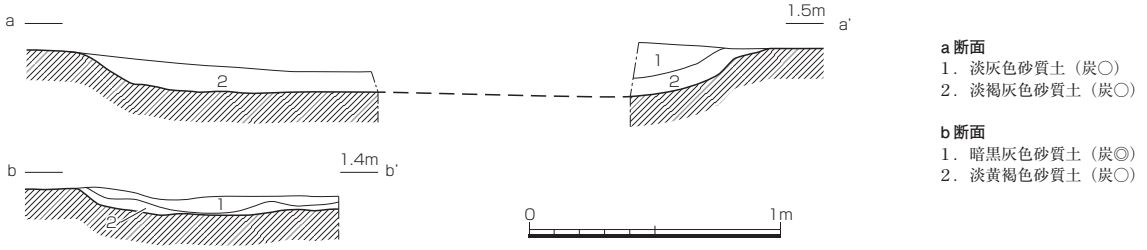
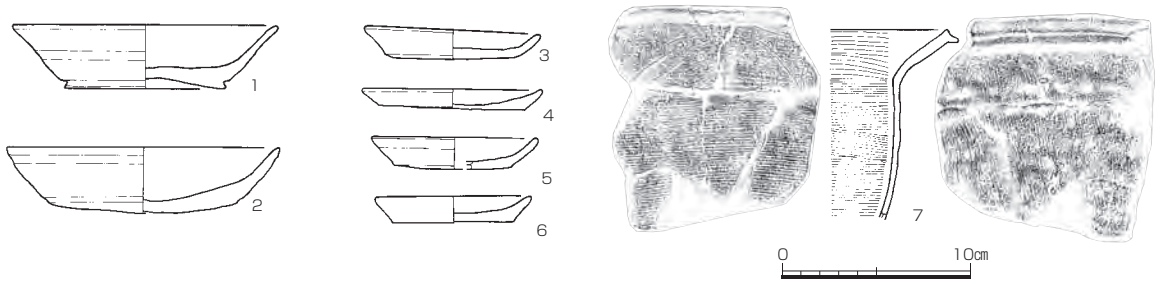


図58　溝17断面（縮尺1/30）



遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	土師質・杯	14	8.6	3.3	口1/2底1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後ナデ・オサエ、内外面磨滅、底面歪み	微砂	淡橙
2	土師質・杯	14.5	9.4×10.2	3.5	口1/6底1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後ナデ、内面磨滅	微砂	淡橙
3	土師質・皿	9.3	7	1.4～1.8	口1/2底1/1	(内)(外)横ナデ・ナデ(底外)篦キリ後粗いナデ	微砂	淡橙黄
4	土師質・皿	9.3	7.6	1.1	口7/8底5/6	(内)(外)横ナデ・ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂	淡橙灰
5	土師質・皿	8.8	6.2	1.7	口1/2底2/3	(内)(外)横ナデ・ナデ(底外)篦キリ後丁寧なナデ	微砂	淡橙灰
6	土師質・皿	8.3	6.4	1.4	口1/2底1/2	(内)(外)ナデ(底外)篦キリ	微砂	淡橙灰
7	土師質・鍋	－	－	－	－	(内)ハケ目(外)縦ハケ目・オサエ、外面煤付着	微砂	淡橙褐

図59　溝17出土遺物（1/4）

溝18（図37・38・60、図版７）

調査区北東部のBT24区に位置する。検出面は＜５層＞である。上面は標高1.25m、底面は同0.8mで深さ0.45mを測る。溝の幅は0.76mを測る。長さ0.5m程を検出した。北側は攪乱によって破壊を受けているが、南側は調査区外まで延びることが確認できる。方向はN5.5°Eと考えられる。断面は２段掘りを呈し、底面の幅0.26mを測る箱形で標高1.15m付近から緩くひらく。箱形の形状から木樋状の構造物が入っていた可能性がある。埋土は６層に分けられる。１層は流入土で、２～４層は木樋状構造物内堆積土と考えられる。

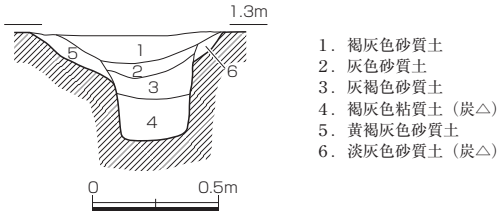
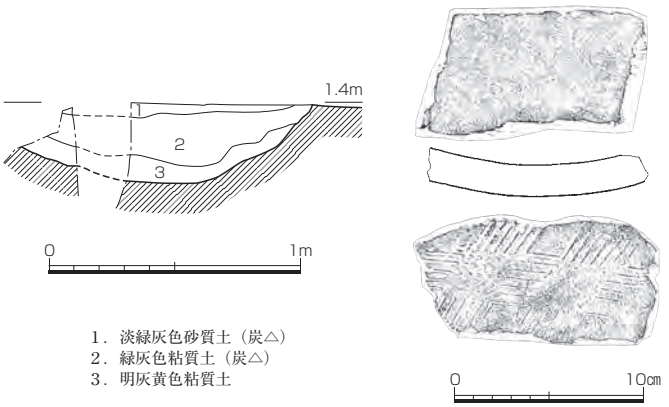


図60　溝18断面（縮尺1/30）

遺物はコンテナ（28㍑/箱）１／３箱程度出土しており、いずれも小片である。吉備系土師器椀が出土していることから、本遺構の時期は中世前半の幅で捉えておきたい。

溝19（図37・38・61、図版８）

調査区北東部のBT～BV25区に位置する。検出面は＜５層＞である。傾きN5°Eの溝で、上面は標高1.39m、底面は同1.08mで深さ0.31mを測る。南北両側ともに調査区外に延び、長さ９m程しか検出できなかった。また、近世の土坑13に切られている。溝の幅は1.15mを測る。断面は椀状を呈しており、埋土は３層に分けられる。１・２層は緑灰色を基調とする砂質土である。砂質土ブロック・炭片が含まれる。溝の廃棄に伴う埋土と判断される。３層は明灰黄色粘質土であるが、砂をわずかに含む。



遺物番号	種類・器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	形態・手法他	胎土	色調：上/下
1	須恵質・平瓦	12.5	6	1.6	上面：布目痕、下面：格子目タタキ	微砂	灰/暗灰

図61　溝19断面・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

遺物は13号ポリ袋１袋分出土しており、いずれも小～細片の土師器椀の他、瓦片が出土した。本遺構の時期は、検出面および出土遺物から中世前半と考えられる。

溝20（図37・38・62、図版８）

調査区北東部のBU25区のほぼ26ライン上に位置する。検出面は＜５層＞である。傾きN11°Eの溝であるが、両端部を攪乱および近世の井戸７に切られており、長さ１m程のみ確認できた。上面は標高1.42m、底面は1.27m、深さ0.15mを測る。溝の幅は0.5mで、断面は椀状を呈する。埋土は灰褐色を基調とする砂質土である。

遺物は土師器小片１点である。本遺構の時期は、検出面から中世前半と考えられる。

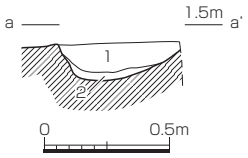


図62　溝20断面（縮尺1/30）

溝21（図37・38・63、図版８）

調査区北東部のBT・BU26区およびBW・BX26区に位置する。傾きN14°Eの溝で、溝19から西へ５m程の場所である。検出面は＜５層＞である。BV・BWライン間およびBYライン以南では攪乱によって消失している。上面は標高1.39m、底面は同1.02mで深さは0.37mを測る。底面は南端においても標高がほぼ同じであったため、傾斜方向は不明である。溝の幅は、1.8mを測る。断面は椀状を呈するが、西側に緩く開いている。埋土は３層に分けられる。灰褐色～緑褐色を呈する粘質土で、全体に粘質土・砂質土ブロックを含む。

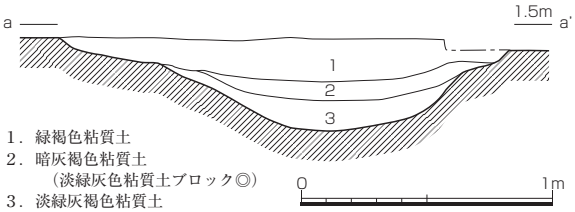


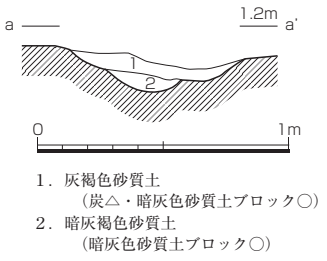
図63　溝21断面（縮尺1/30）

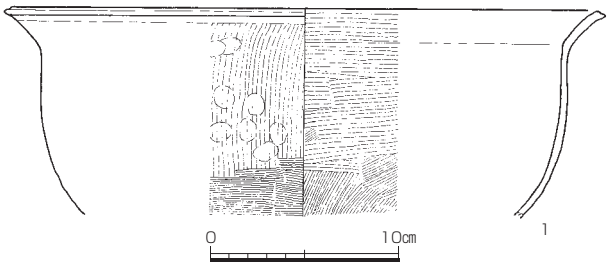
遺物はわずかで、13号ポリ袋１／４袋分出土した。いずれも小～細片の土師器であるが、高台が消えかけている吉備系土師器椀が含まれることから、13世紀末頃と考えられる。

溝22（図37・38・64、図版８）

調査区北東部のBU27・28区に位置する。傾きN108.5°Eの溝であり、＜５層＞掘り下げ中に検出した。27ライン以東および29ライン以西においては確認できず、８m程を検出した。上面は標高1.12m、底面は0.94m、深さ0.18mを測る。溝の幅は0.74mで、断面は椀状を呈する。埋土は２層で灰褐色を基調としブロックを含む砂質土であるが、２層では砂が少ない。

遺物は13号ポリ袋１／２袋程度出土した。鍋の他は吉備系土師器椀の小～細片がほとんどを占める。本遺構の時期は、検出層位および出土遺物から13世紀代と考えられる。





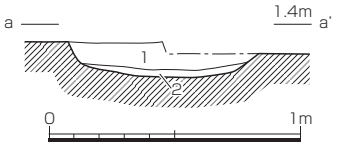
遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器・鍋	32.0	－	－	1/4	(内)(外)ハケ目、外面煤付着	微砂	暗褐

図64　溝22断面・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

溝23（図37・38・65、図版８）

調査区北部のBT・BU29区に位置する。検出面は＜５層＞である。傾きN7.5°Eの溝で、南北両端ともに攪乱によって消失しており、長さ4.5m程が検出でできた。上面は標高1.33m、底面は同1.18mで、深さ0.15mを測る。溝の幅は、0.75mを測る。断面は皿状を呈しており、２層に分けられる。両層ともにブロック・炭片を含んでいる。

遺物は土師器細片約15点である。本遺構の時期は、検出面から中世前半と考えられる。



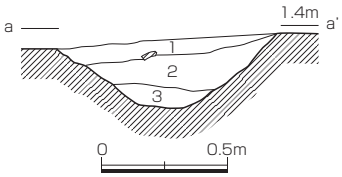
1．暗灰褐色砂質土
（炭△、淡灰色砂質土ブロック○）
2．灰白褐色砂質土
（炭△、淡灰色砂質土ブロック△）

図65　溝23断面（縮尺1/30）

溝24（図37・38・66、図版８）

調査区北部のBU29・30区に位置する。検出層は＜５層＞である。傾きN81.5°Eの溝で、東端を溝23、西端を溝26に切られる。長さ3.5m程を検出した。上面は標高1.38m、底面は1.08m、深さ0.3mを測る。溝の幅は0.85mを測り、断面は椀状を呈する。埋土は灰褐色を基調とする砂質土であるが、下層ほど暗色を強め３層に分けられる。いずれも砂質土ブロックや礫・炭片を含んでおり、溝廃棄に伴う埋土と考えられる。

遺物は、土師器細片20点程である。本遺構の時期は、検出面から中世前半と考えられる。



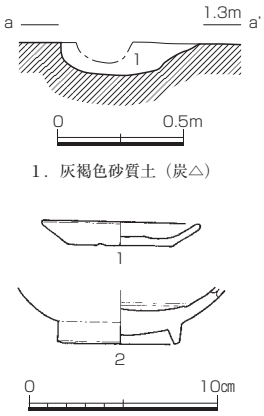
1．明灰白褐色砂質土　2．明茶灰褐色砂質土
3．暗黒灰色砂質土

図66　溝24断面（縮尺1/30）

溝25（図37・38・67、図版８）

調査区北部のBU28区に位置する。溝24から南に２m程離れた傾きN82.5°Eの溝である。検出層は＜５層＞である。東端を溝23および中世後半の井戸６、西端を溝26に切られる。長さ３m程度を検出した。上面は標高1.23m、底面は同1.1m、深さ0.13mを測る。溝の幅は0.55mを測り、断面は皿状を呈するが、北側は緩やかに立ち上がる。埋土は１層で灰褐色砂質土である。砂質土ブロック・炭を含む。

遺物は、13号ポリ袋１／３袋程度出土した。ほとんどが細片であったが、土師器皿と白磁碗の底部のみ図化できた。本遺構の時期は、出土遺物から13世紀前半と考えられる。



1．灰褐色砂質土（炭△）

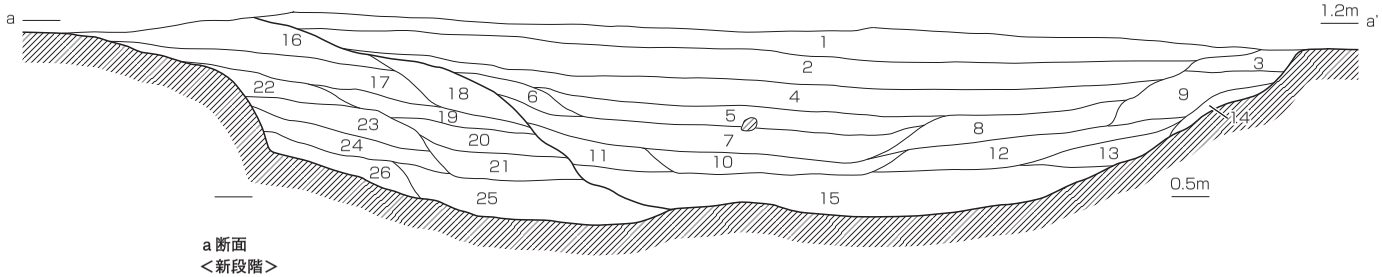
遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器・皿	8.5	5.6	1.3	1/1	(内)(外)ナデ(底外)篦キリ後板目痕	微砂	淡黄褐
2	白磁・碗	－	6.4	－	1/1	削り出し高台、見込みに段、内面～外面上半施釉、高台部は露胎	精緻	淡黄灰(釉)黄白

図67　溝25断面・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

溝26（図37・38・68・69、図版８・９）

調査区中央、31・32ライン間を傾きN10°Eに走る。北端・南端とも調査区外に延びる。旧建物基礎等による攪乱で破壊を受け、調査区北端からBXラインまでの長さ17mおよびCCラインから調査区南端までの長さ７mが確認できたのみである。調査区北側において中世後半の井戸５に切られている。断面では新旧二段階に分けることが可能だが、調査時には一括して調査を行ったため、遺物を分けて取り上げることはかなわなかった。

検出面は＜５層＞で、標高は北端で1.3m、南端で0.7mを測る。底面の標高は北側および南側ともに－0.1mである。深さは残りのよい北側で0.9mを測る。溝の幅は北側で５mであるが、南側では削平が大きく及んでおり、幅４mを残すのみであった。断面形は北側のａ断面では逆台形を呈す。南側のｂ断面では新段階が逆台形を呈す



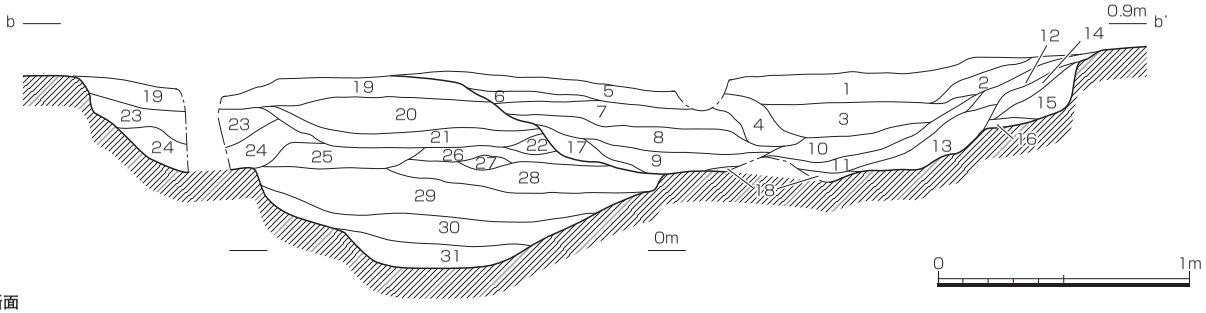
a断面

＜新段階＞

1．明灰白褐色砂質土
2．灰白褐色砂質土
3．灰白褐色砂質土（褐色ブロック）
4．暗灰白色砂質土
5．暗灰白褐色砂質土
6．灰色砂質土
7．暗灰色砂質土
8．暗灰白色砂質土
9．灰色砂質土
10．灰褐色砂質土
11．暗灰色砂質土
12．灰褐色砂質土
13．灰色砂質土
14．灰色砂質土（褐色ブロック◎）
15．暗灰色粘質土

＜古段階＞

16．明淡灰白色砂質土
17．明淡灰色砂質土
18．明灰褐色砂質土
19．暗灰色砂質土
20．淡灰白色砂質土
21．淡灰色砂質土
22．淡灰白褐色砂質土
23．灰白褐色砂質土
24．暗灰白褐色砂質土
25．暗灰色粘質土
26．灰褐色砂質土



b断面

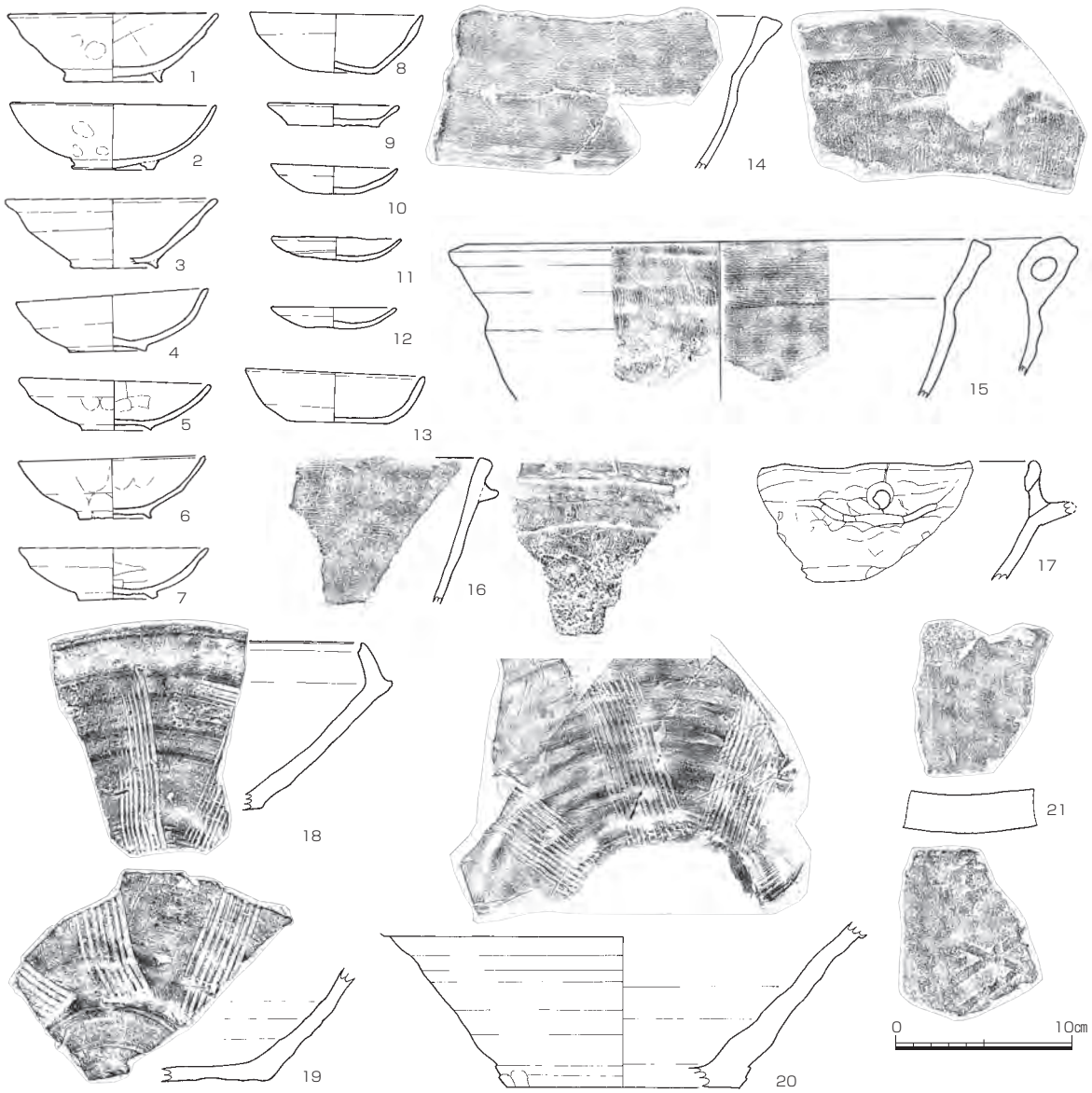
＜新段階＞

1．緑褐色弱粘質土
2．灰色砂質土
3．明緑褐色粘質土
4．明緑色砂質土
5．灰～灰褐色砂質土
6．灰～明灰色砂質土
7．灰～灰褐色粘質土
8．暗灰色粘土
9．暗褐色砂混じり粘質土
10．暗灰色粗砂混じり粘質土
11．暗灰褐色粗砂混じり粘質土
12．明灰色砂質土
13．灰～暗灰色粘土
14．明灰色粘質土
15．明橙灰色粘質土
16．明灰褐色粘質土
17．暗灰色粘土
18．灰～灰褐色粘土

＜古段階＞

19．明灰褐色砂質土
20．灰褐色弱粘質土
21．暗灰色粘質土
22．明橙茶褐色砂質土
23．明灰褐色粘質土
24．灰褐色粘質土
25．暗灰褐色粘質土
26．暗灰色粘質土
27．暗灰茶褐色砂質土
28．暗灰色粘質土
29．暗灰褐色粘土
30．暗灰色強粘土
31．暗灰褐色強粘土

図68　溝26断面（縮尺1/30）



遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	土師器・椀	12	5.6	－	口1/4底1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ・オサエ、内面に重ね焼痕、高台不安定	微砂　礫	淡橙灰
2	土師器・椀	11.6	4.3×4.8	－	口1/6底1/1	(内)ナデ(外)ナデ・オサエ、高台は歪み	微砂	淡橙白
3	土師器・椀	11.2×11.9	5.1	4	口1/5底1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ、内面に重ね焼痕、歪み、赤色粒含む	細砂　礫	灰・黒褐
4	土師器・椀	11.9	4.3	2.9～3.5	口1/2底3/5	(内)(外)横ナデ・ナデ、赤色粒	微砂	黄灰・灰白
5	土師器・椀	10.7×11.2	3.9	3	1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ・オサエ、内面に重ね焼痕、外面煤、歪み、赤色粒	微砂	淡黄白
6	土師器・椀	10.6	4.1	3.4～3.9	1/2	(内)(外)オサエ・ナデ、外面磨滅、外面煤、赤色粒	微砂　礫	黄灰～灰褐
7	土師器・椀	10.7	4.5	3	1/1	(内)工具ナデ(外)ナデ、内面に重ね焼痕、外面に亀裂、赤色粒	細砂　礫	淡橙白
8	土師器・椀	9.8	3.8	3.4	口3/4底1/1	(内)ナデ(外)ナデ・オサエ(底外)オサエによる凹み、外面に亀裂、外面煤付着、赤色粒	細砂　礫	灰白～灰褐
9	土師器・皿	7.3	5.2	－	口(－)底1/1	(内)(外)横ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂　礫	淡橙黄
10	土師器・皿	7.1	2.6	1.6	1/1	(内)(外)ナデ・オサエ、内外面磨滅、赤色粒	微砂	淡橙
11	土師器・皿	7.2	2.7	1.3	1/2	(内)(外)ナデ(底外)篦キリ、赤色粒	微砂	橙褐
12	土師器・皿	7	3	1.2	口1/2底1/1	(内)(外)ナデ(底外)篦キリ後オサエ、赤色粒	微砂　礫	橙褐
13	備前焼・杯	11	5.7	3	口2/3底3/4	(内)(外)横ナデ(底外)糸キリ、内面に自然釉	微砂	赤褐
14	土師器・鍋	－	－	－	－	(口)横ナデ(内)横ハケ目(外)縦ハケ目、外面煤、赤色粒	微砂	暗茶褐/黒
15	土師器・鍋	30.8	－	－	1/3	(内)横ハケ目(外)縦ハケ目・オサエ、外面煤、内耳1ヶ所残存	細砂	暗灰褐
16	土師器・鍋	－	－	－	－	(内)横ハケ目(外)縦ハケ目、煤付着、赤色粒	細砂　礫	浅黄橙
17	瓦質土器・鍋	－	－	－	－	(内)ナデ(外)(把手)ナデ・オサエ、穿孔一カ所(径1.5cm)残存	細砂　礫	暗灰～黒灰/黒灰
18	備前焼・すり鉢	－	－	－	－	(内)(外)横ナデ、8条1組のスリ目、外面重ね焼痕、自然釉	細砂　礫	赤褐
19	備前焼・すり鉢	－	－	－	－	(内)(外)横ナデ(底外)ナデ、7条1組のスリ目、赤色粒	細砂　礫	赤褐～暗赤褐
20	備前焼・すり鉢	－	13.2	－	1/3	(内)(外)横ナデ(底外)オサエ、11条1組のスリ目	細砂　礫	暗褐/橙～暗褐

遺物番号	種類・器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	形態・手法他	胎土	色調：上/下
21	須恵質・平瓦	9.5	7.5	2.2	上面：板ナデ、下面：格子目タタキ	細砂　礫	灰白

図69　溝26出土遺物（縮尺1/4）

が、古段階の溝では底部付近にやや丸みを有する逆台形を呈す。

埋土はａ断面で25層、ｂ断面で31層に分けた。新古の二段階が認められ、それぞれ４群にまとめられる。

新段階の埋土１群（ａ断面：１～３層）は淡灰色～淡灰白色の砂質土を主体とする。２群（ａ断面：４～10層、ｂ断面：１～７層）は暗灰～灰褐色系の砂質土、３群（ａ断面：11～14層、ｂ断面：８～11層）は灰褐色系の粘質土、あるいは砂混じり粘質土と次第に粘性を強め、４群（ａ断面：15層、ｂ断面12～18層）は暗灰色粘質土となる。

古段階の埋土の１群（ａ断面：16～18層、ｂ断面：19層）は明灰褐色砂質土を主体とし、２群（ａ断面：19～21層、ｂ断面：20～22層）は暗灰色系、３群（ａ断面：22～24層、ｂ断面：23～28層）は暗灰褐色系の砂質土が主体であり、下方ほど粘性を増す。４群（ａ断面：25・26層、ｂ断面：29～31層）は暗灰色粘土層である。

出土遺物の量はコンテナ（28㍑/箱）４箱である。その内訳は吉備系土師器椀・土師器皿を中心として、土師器鍋・竈・青磁、白磁、そして須恵器椀等の破片が２箱であり、瓦質土器、須恵器の甕・鉢等および、瓦等の大型品が２箱である。吉備系土師器椀には13世紀後半（図69－１～７）と14世紀前半（同８～12）のものがある。また、同－15は瓦質土器の鍋で内耳がつくもの、同－18～20は備前焼擂り鉢で、18は15世紀に下る特徴を有する。そのほかにスギの曲物底板の小片が出土している。

本遺構の時期については、上述したように13世紀後半、14世紀前半とその他に15世紀の遺物が出土しており、３時期のものがある。また、既調査地点との関係をみると第９・11次調査地点において溝46～48として報告した溝と位置および底面のレベルが合致しており、同一遺構と考えられる。第９・11次調査地点では３条の溝が重複していたものが、調査区北端では、溝47・48の２条に集約されていた。それらの溝の埋没時期は、溝47が13世紀後半～14世紀初頭、溝48が14世紀後半である。これを参考に考えると、本溝の埋没時期は14世紀前半であり、15世紀の遺物については攪乱の程度が大きかったことから、＜４層＞の遺物が混入した可能性が考えられる。

溝27（図37・38・70、図版９）

調査区北部のBU25区に位置する。検出層は＜５層＞である。溝23の西に５ｍ程離れた傾きＮ10°Ｅの溝である。溝は、西半を溝26に切られており、東半およびBUライン以北、BVライン以南は攪乱によって破壊されている。南北８ｍ程が検出された。上面は標高1.04ｍ、底面同0.85ｍ、深さ0.19ｍを測る。溝の幅は0.39ｍが残存する。断面は逆台形を呈するものと考えられる。埋土は１層で淡灰白褐色砂質土である。

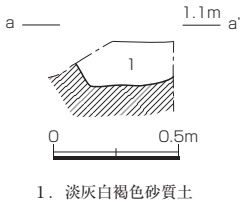


図70　溝27断面（縮尺1/30）

遺物は出土していない。本遺構の時期は、切り合い関係から中世前半と考えておきたい。

溝28（図37・39・71、図版９）

調査区北西部のBW・BX35区に位置する。検出層は＜５層＞であり、上部に＜４層＞が堆積する。傾きＮ23°Ｅの溝であり、BW区北側以北およびBYライン以南を攪乱によって破壊されている。長さ7.5ｍ程を検出した。上面は標高1.29ｍ、底面は1.07ｍ、深さ0.22ｍを測る。溝の幅は1.2ｍを測り、断面は椀状を呈する。埋土は灰褐色を基調とする粘質土で構成されており、４層に分けられる。いずれの層も炭・焼土を少量含み、２層以下は砂も含むようになる。

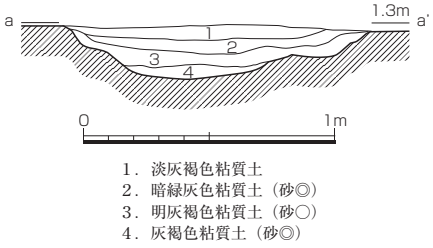


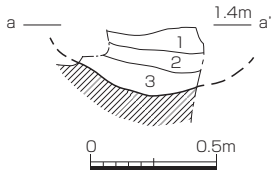
図71　溝28断面（縮尺1/30）

遺物は、13号ポリ袋１／３袋程度出土したが、ほとんどが土師器の小～細片であった。本遺構の時期は、検出面から中世前半と考えられる。

溝29（図37・39・72）

調査区北西部のBW・BX35区に位置する。傾きN18°Eの溝であり、溝28によって切られている。検出層は＜５層＞である。BYライン以南は攪乱によって破壊されているが、北側は収束している。長さ３m程を検出した。上面は標高1.4m、底面は同1.1m、深さ0.3mを測る。溝の幅は0.45～0.5mを測り、断面は椀状を呈するものと考えられる。埋土は３層に分けられるが、緑灰色を基調とする粘質土である。下層ほど暗色がかり、砂を含むようになる。

遺物は、土師器の小～細片で10点程である。本遺構の時期は、検出面から中世前半と考えられる。



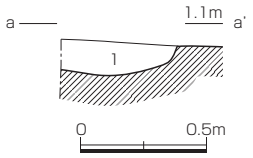
1．淡緑灰色粘質土　　2．緑灰色粘質土
3．暗緑灰褐色粘質土（砂◎）

図72　溝29断面（縮尺1/30）

溝30（図37・40・73、図版９）

調査区南東端部のCD25区で調査区南壁上に位置する。検出層は＜８層＞であり、南北方向の溝の端部と考えられる。長さ0.45m程を検出でき、南へ続く。上面は標高１m、底面は同0.9m、深さ0.1mを測る。溝の幅は、0.83mが残存しているが、1.05m程度に復元できる。断面は皿状を呈し、埋土は１層で砂を少量含む。

遺物は13号ポリ袋１／２袋程度出土したが、土師器の小～細片のみであった。本遺構は、検出位置および遺構底面の標高から、第９・11次調査区で確認された溝42と同一の遺構と判断される。したがって本遺構の時期は、＜８層＞検出であるが、13世紀末～14世紀前半の可能性が高い。



1．暗灰褐色砂質土

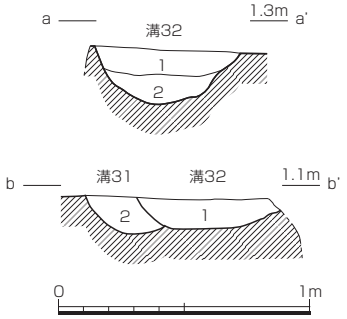
図73　溝30断面（縮尺1/30）

溝31・32（図37・41・74、図版９）

調査区南西部のCB35区で検出した。溝31は溝32に切られるが、両溝とも中世後半の溝40に切られる。いずれも東西方向を基調とする。溝31は北側・東側、溝32は東西を攪乱で失っている。上層が失われていること、調査区四周の断面で確認できないことから、本来の掘削面は明らかでない。いずれも＜５層＞で検出した。規模は、溝31が長さ約1.5m、幅約0.5m、溝32が長さ約４m、幅約0.45mである。検出面の標高は約１m、底面の標高は、溝31が0.95～0.97m、溝32が0.91～0.97mである。溝31は西北西から東南東、溝32は西から東に標高を下げる。

断面形は溝31が丸底、溝32が西側で丸底、東側で平底となる。埋土は、溝31がブロックを含む灰茶褐色砂質土、溝32は鉄分が顕著で、ブロックを含み、砂質を帯びる褐色系の埋土である。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出面および切り合い関係から中世前半と位置付けられる。



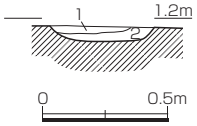
［a断面］
1．明灰茶褐色砂質土（Fe◎、Mn◎）
2．灰褐色土（Fe◎、暗褐色土ブロック○）

［b断面］
1．明黄茶褐色砂質土（暗灰色粘土ブロック○、明黄白色砂質土ブロック○）
2．灰茶褐色砂質土（明黄白色砂質土ブロック○、灰色粘質土ブロック○）

図74　溝31・32断面（縮尺1/30）

溝33（図37・41・75、図版９）

調査区南西部のCB37区で検出した。東西方向に延びる。東側は近世土坑６に切られ、西側は攪乱によって失われている。検出された規模は長さ約1.4m、幅約0.5mである。検出面の標高は約1.2mで＜５層＞に対応する。底面の標高は1.05～1.15mで、東から西にむかって下降する。断面形は浅い皿状を呈し、埋土は灰色を基調とする砂質土と粘質土の２層に分けられる。



1．灰白色砂質土
2．灰色粘質土

図75　溝33断面（縮尺1/30）

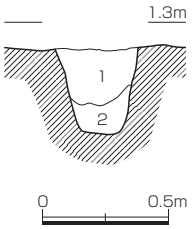
遺物の出土はない。遺構の時期は、検出面から中世前半と考えられるが、上面が削平されていることもあり、それ以降の可能性もある。

溝34（図37・41・76）

CC38区において＜５層＞で検出した。東西方向に延びる。西側は攪乱で失われ、東側は調査区外に延びる。検出した長さ約0.6m、幅約0.2m、深さは調査区壁面で約0.35mである。底面の標高は0.85mである。

断面形は垂直方向に長い逆台形で、２層に分層される。いずれも灰色砂ブロックを多く含む黄灰色砂質土で、土色・土質の差は少ない。

遺物は出土していない。本遺構の時期は、検出面から中世前半に属すると考えられる。



1．黄灰色砂質土
2．暗黄灰色砂質土

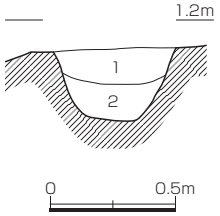
図76　溝34断面（縮尺1/30）

溝35（図37・41・77）

CC38区で検出した。西側は攪乱で失われ、東側は調査区外に延びる。上面の標高は1.1mで、＜５層＞に対応する。検出した長さは約0.4m、幅は約0.45m、深さは調査区壁面で約0.3mである。底面の標高は0.8mである。

断面形は逆台形で、２層に分層される。いずれも灰色砂ブロックを多く含む黄灰色砂質土で、土色・土質の差は少ない。

遺物は土師質土器椀・皿・鍋片が13号ポリ袋１袋分出土した。本遺構の時期は、検出面から中世前半と考えられる。



1．黄灰色砂質土（Fe◎、灰色砂ブロック◎）
2．暗黄灰色砂質土（灰色砂ブロック◎、
暗褐色砂ブロック◎）

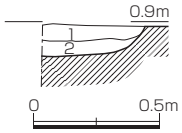
図77　溝35断面（縮尺1/30）

溝36（図37・41・78、図版９）

CB39区で検出した。南・西・北側は攪乱によって失われている。上面は標高約0.9m、＜５層＞中に対応する。検出した長さは約1.9m、幅約0.5m、深さ約0.13mである。底面の標高は約0.75mである。南北方向に延びる溝であるが、調査区南壁では本溝に該当する遺構は認められなかったため、この間で収束あるいは屈曲する可能性が考えられる。

断面形は皿状を呈する。埋土は２層に分層されるが、いずれも黄褐色を呈する砂質土で鉄分、黄灰砂ブロックを含み、土色・土質は近似する。

遺物は出土していない。本遺構の時期を特定することは難しいが、南側の第９・11次調査で確認されている溝33と位置が合うため、中世前半の溝と推測しておきたい。



1．黄灰褐色砂質土
（Fe◎、黄灰砂ブロック◎）
2．暗黄褐色砂質土
（黄灰砂ブロック◎）

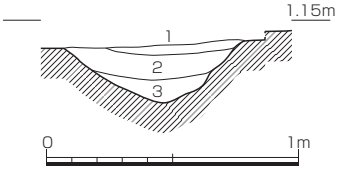
図78　溝36断面（縮尺1/30）

溝37（図37・41・79）

CC39区で検出した。東西方向に延びるが、北・東・西側は攪乱によって失われている。検出面は＜５層＞である。検出した長さは約1.9m、幅約0.72m、深さ約0.17mである。底面の標高は0.8mである。

断面形は椀状で、３層に分層される。１層は灰色の砂質土で、２・３層は褐色系の砂質土である。土色・土質に大きな違いはみられない。

遺物は土師質土器椀・皿・鍋小片がコンテナ（28㍑/箱）約１／６箱分出土した。本遺構の時期は、検出面および出土遺物から中世前半に位置付けられる。



1．灰色砂質土
2．淡灰橙色砂質土
3．灰褐色砂質土

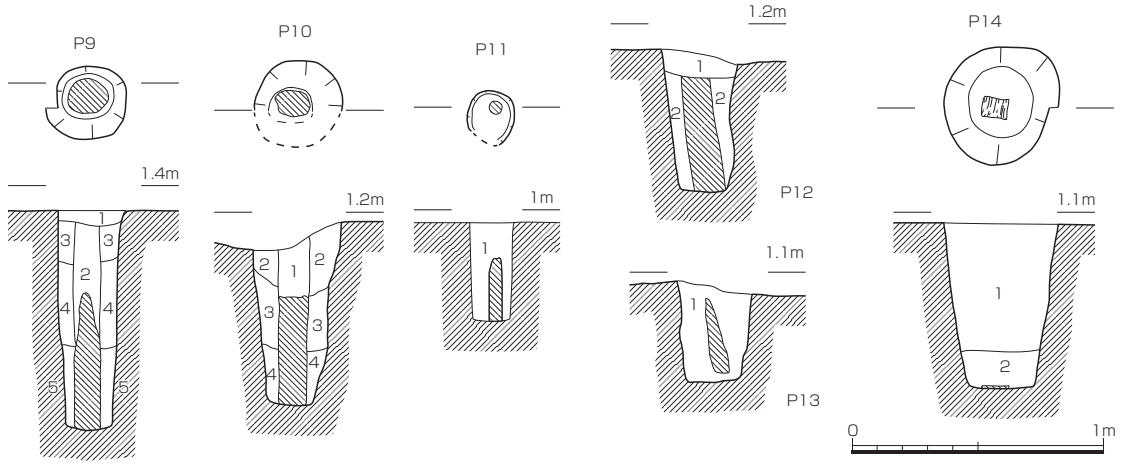
図79　溝37断面（縮尺1/30）

e　ピット群

ピットは＜４層＞・＜５層＞において370基ほど検出された。ただし、帰属する層位について不明確なものが大多数を占めており、＜５層＞検出のピットについては＜４層＞のものと分離することが困難である。ここでは両層においてピットが存在していることを指摘しておきたい。

ピットの分布は、調査区のほぼ全域に広がるが、調査区南西部において極めて少ない状況が指摘される。建物の可能性があるものは、CB・CC27区において2.5m間隔で直線にならぶＰ１・２・３がある（図40）。しかし、ピット底面のレベルが大きく異なっているため、疑問が残る。ここでは、可能性のみ指摘しておく。

大半のピットでは遺物が出土しなかったが、完形の遺物や柱材が出土したものがあり、以下ではそれらについて報告する。Ｐ４～Ｐ８では１／２以上を残す土師器が出土した（図81）。Ｐ４では土師器皿が２点、Ｐ５では１



P9
1．淡灰褐色砂質土
2．暗灰色粘質土
3．淡黄灰色砂質土
4．暗灰褐色砂質土
5．暗灰色粘質土

P10
1．黒灰色粘質土
2．灰黄褐色砂質土
3．名黄褐色砂質土
4．暗灰色粘質土

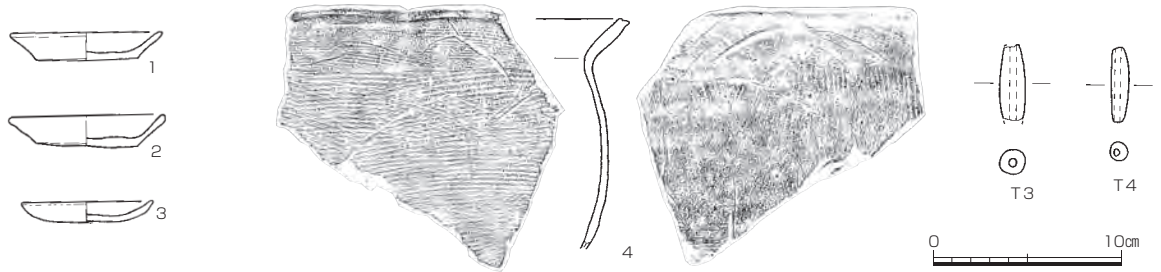
P11
1．青灰色粘質土

P12
1．緑褐色砂質土
2．暗緑灰色粘質土

P13
1．灰褐色粘質土

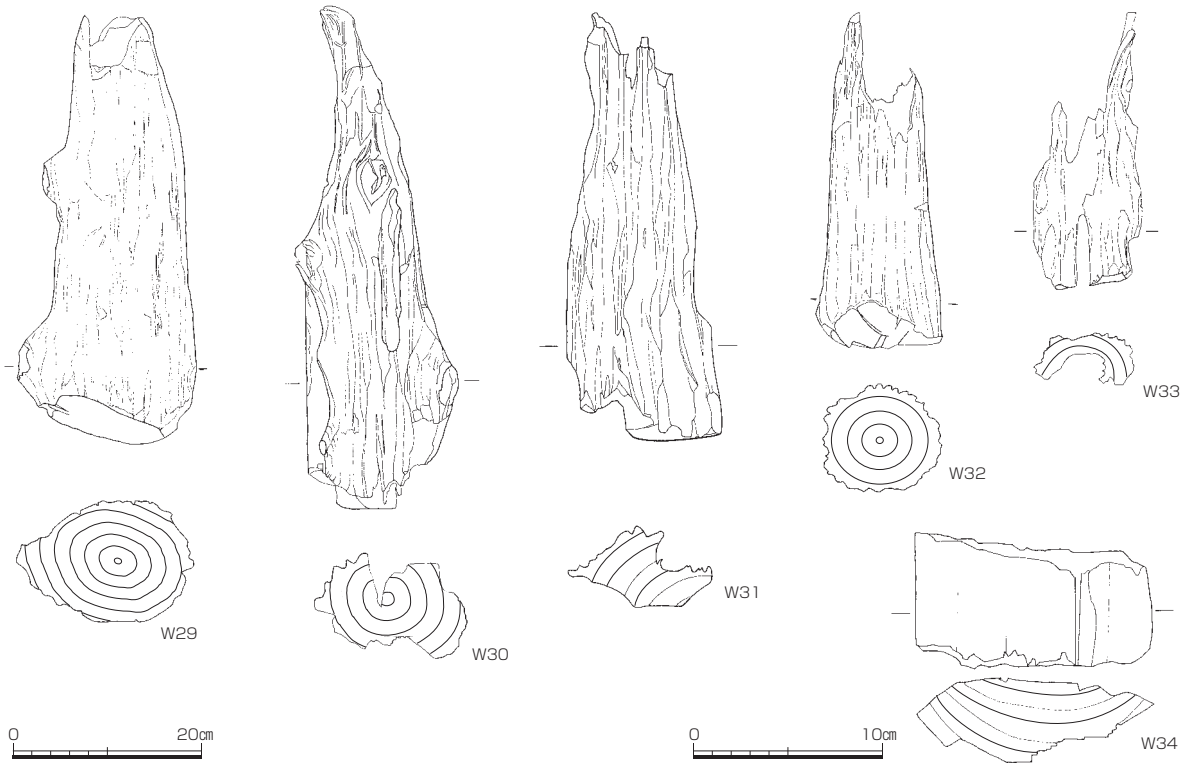
P14
1．暗灰褐色砂質土
2．灰褐色砂質土

図80　柱材・礎板出土ピット断面（縮尺1/30）



遺物番号	出土ピット番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
			口径	底径	器高				
1	4	土師器・皿	8.1	5.2×5.6	1.5	1/1	(内)(外)ナデ(底外)篦キリ後ナデ	微砂	淡橙
2	4	土師器・皿	8.3	5.5	1.6	1/1	(内)(外)ナデ(底外)篦キリ後板目痕	微砂	淡橙
3	5	土師器・皿	7	2	1.1	口1/6底3/4	(内)(外)ナデ	微砂	淡橙灰
4	6	土師器・鍋	－	－	－	－	(内)横ハケ目(外)縦ハケ目・オサエ、外面煤付着	微砂	灰褐
遺物番号	出土ピット番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	重量（g）	形態・手法他	胎土	色調
T3	7	土錘	3.9	1.3	1.3	7.2	管状土錘、孔径0.4cm、ナデ	微砂	淡橙灰
T4	8	土錘	3.9	0.9	1.0	4.2	管状土錘、孔径0.4×0.3cm、オサエ・ナデ、煤付着	微砂	淡橙灰

図81　ピット出土遺物１（縮尺1/4）



番号	遺構	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W29	P10	柱	45.2	18.9	12.8	ヒノキ	丸木	上端・四周欠損、底面加工痕、枝打ち痕
W30	P9	柱	53.5	16	10.3	ヒノキ	丸木	上端・四周欠損、底面加工痕、枝打ち痕
W31	P12	柱	22.7	8	4.3	クリ	ミカン割り	上端・四周欠損、底面手斧痕
W32	P11	柱	35.6	13.3	6.5	クリ	丸木	上端欠損、底面手斧痕
W33	P13	柱	29.4	11.5	5.2	クリ	丸木	上端・四周欠損、底面加工痕、一部炭化
W34	P14	礎板	7.3	12.4	4.5	コウヤマキ	板目	上面平坦、四周欠損、側面手斧痕

図82　ピット出土遺物２（縮尺1/4・1/8）

点である。こうした状況からは、皿が意図的にピットに入れられた可能性が考えられよう。また竈片や土錘（図81－Ｔ３・Ｔ４）が出土している。これ以外に注目される遺物としては、柱材と礎盤があげられる（図80・82）。これらのピットの規模は、直径0.25～0.45m、深さ0.4～0.85mを測る。Ｐ９～14では、長さ23～54㎝、幅８～19㎝を測るクリとヒノキの柱材が出土した。ほとんど丸木取りの材であるが、W31のみミカン割り材が用いられている。またW32の礎盤はP14から出土し、コウヤマキの板目材であった。

第４節　中世後半（室町時代）の遺構・遺物

中世後半の遺構は、井戸２基、溝５条とピットである。

＜４層＞に対応する本時期には大形の溝（溝40）による屋敷地の区画が想定される。溝は南北方向３条（溝38～40）と東西方向２条（41・42）があり、このうち溝40～42により空間が大きく区画されている。溝40は構内座標の36と37ライン間に位置する。これにとりつく溝41・42は接続位置がずれており、クランク状をなしている。溝40・42の埋没時期は15世紀後半～16世紀初であり、溝41も同時期と考えられる。また、調査区の東部分は溝38（構内座標26ライン西側）・39（同31ライン西側）により、約25m間隔に分割される。溝38は15世紀後半に埋没す

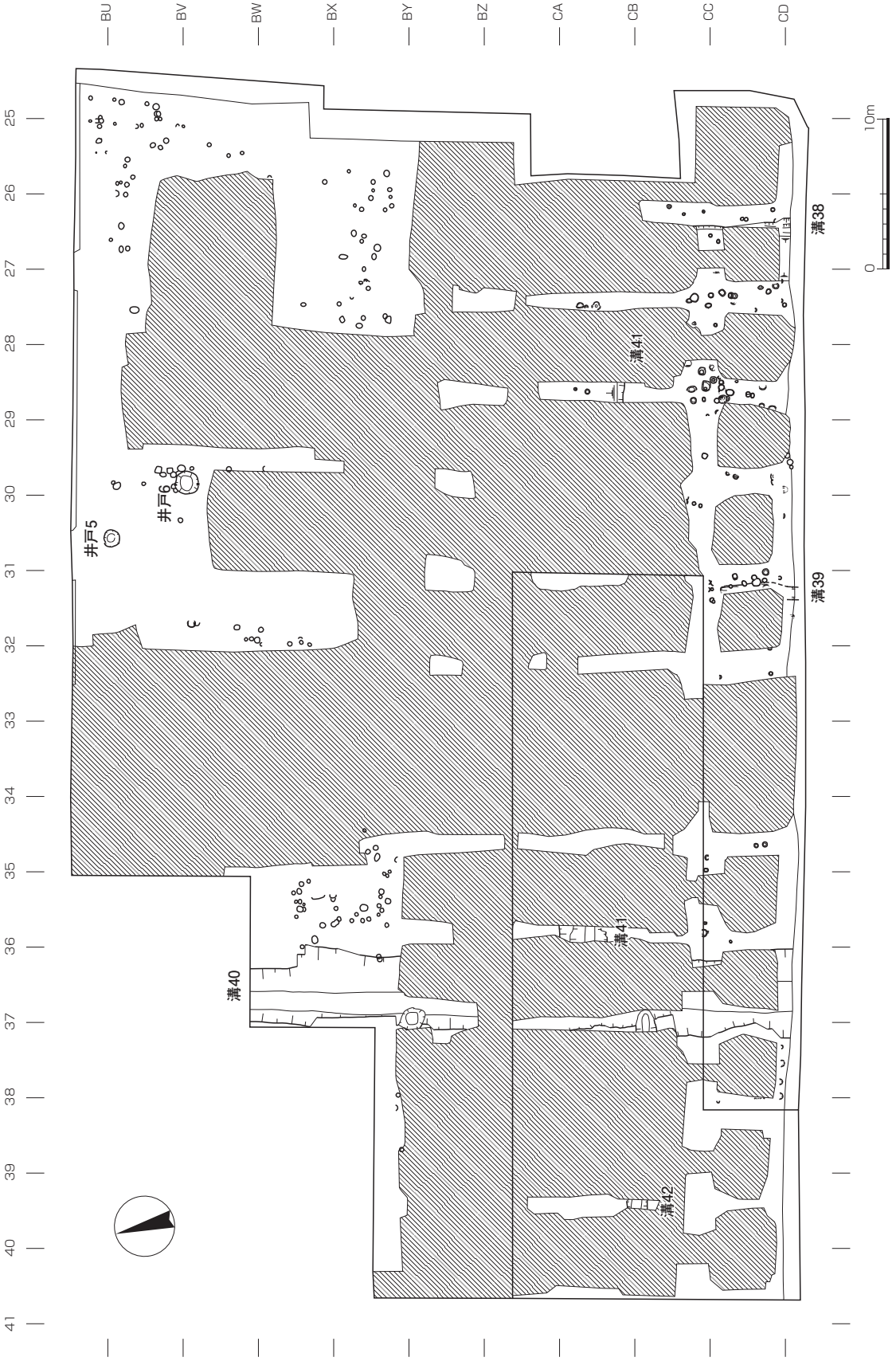


図83　中世後半遺構全体図（縮尺1/400）

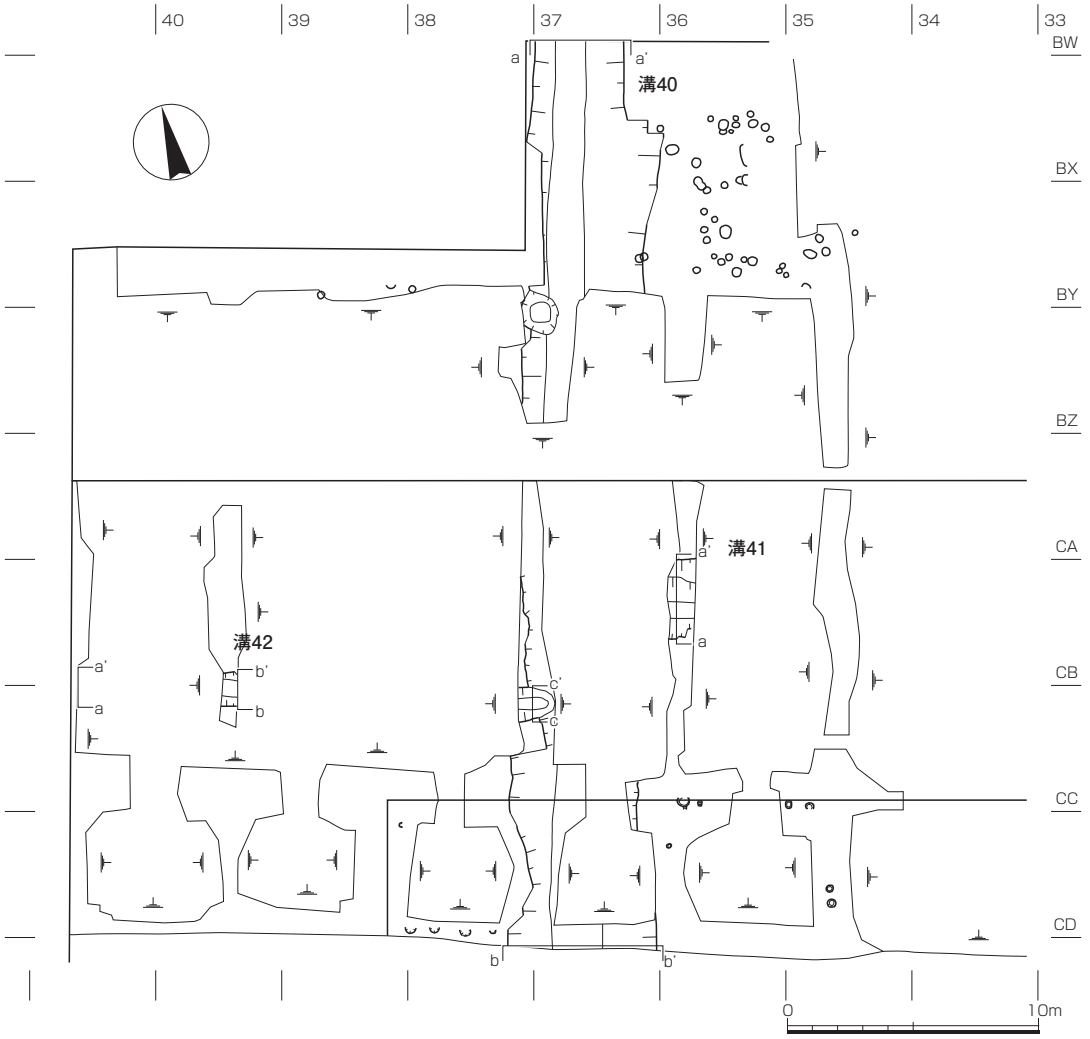


図84　中世後半遺構全体図ー西部ー（1/300）

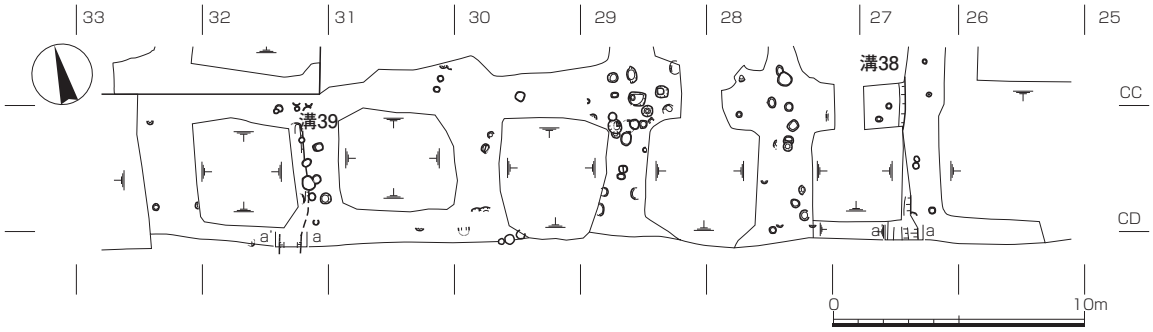


図85　中世後半遺構全体図ー南東部ー（1/300）

る溝である。

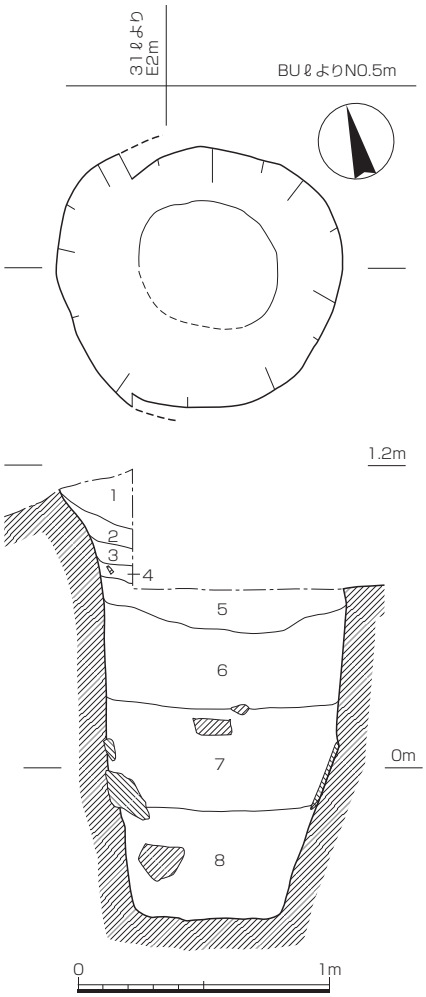
溝40による区画の位置は、前代には構内座標31と32ライン間の溝26から、西へ25m移動したものである。第９・11次調査地点においても、溝46～48（構内座標31と32ライン間）から溝59ａ（同36と37ライン間）へと区画位置が移動した状況があり、これを本調査地点でも追認できた。その移動時期は14世紀前半である。

そのほかの遺構では井戸２基が、溝40の東側で確認された。16世紀中頃に埋没する井戸１基と、もう１基は中世後半のものである。そのほかの遺構の配置は不明である。

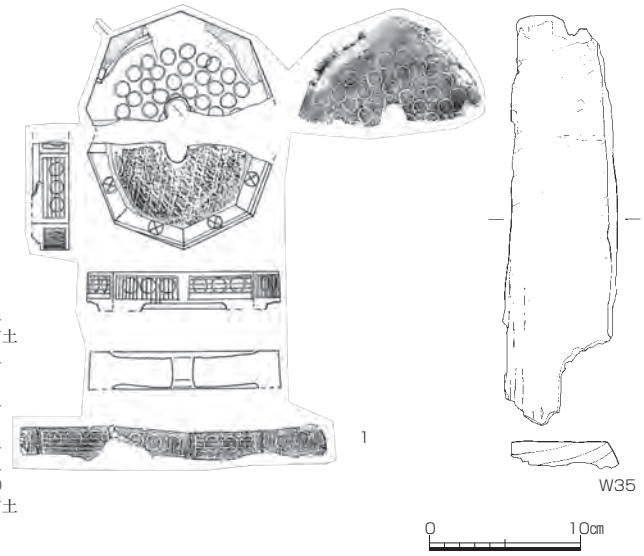
ａ．井戸

井戸５（図83・86、図版10）

BU30区に位置する。溝40の東側28mで検出した。検出面の標高は1.1mであるが、大半は攪乱によって標高0.7



７層中礫出土状況



遺物番号	種類・器種	法量（cm）		残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		残存幅	器高				
1	瓦質土器・不明	10.4	－	－	全体形状は不明。1/2残存の台座部は8角形が復元される。その上部の立上がり部との接合面には、接着のための線刻が残る。台座中央の円孔（径1.2cm）部のみは炭素吸着がない。下面に4箇所の脚部が復元される。文様は沈線の区画内に円文や円×文。裏面には同心円文。	細砂・細礫	黒灰

番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W35	板	27.1	7.2	1.8	マツ属複維管束亜属	板目	両小口・左側縁欠損

図86　井戸５（縮尺1/30・1/4）

mまで削平を受ける。＜４層＞に対応する遺構である。底面の標高は－0.6mで、深さ1.7mである。平面形は径１mの円形、底面は径0.5mの円形を呈する。断面形は逆台形状をなす。

埋土は８層に分けられた。１～４層は灰褐色を主体とする砂質土層である。５層以下は粘質が強く、５層は細砂を多く含む。６～８層は暗灰～黒灰色粘質土である。７層中には10～25㎝大の礫が集中して検出され、その数は40点を数える。内容は川原石・角礫があり、被熱痕はみられないが、大量に入れられていることから祭祀行為の一端が示されている可能性がある。

遺物は12号ポリ袋で１／２袋が出土した。備前焼の擂り鉢のほか、吉備系土師器椀・土師器鍋の小片30片を含む。いずれも小片であり混入の可能性が高い。図86－１は瓦質土器の製品である。平面形は八角形になるものと想定され、中央に径1.2㎝の穿孔が認められる。この穿孔内部のみ灰色地であり、他はすべて炭素吸着により黒色を呈する。上面には何らかの立ち上がりがはがれた状況が窺える。接着面にはそのための刻線が施される。下面には脚状の突出部が４カ所想定され、そのうち２カ所がわずかに残る。底面、側面には円形、刻線により文様が施されている。この製品は、低い脚部や立ち上がりの存在から燭台である可能性が考えられるが、詳細は不明である。そのほかに、マツ属・モミ属の板材、スギの加工材・曲物の小片が出土しており、板材１点（図86－W35）を掲載した。

本遺構時期は、検出面や切り合いを考えると中世後半と考えられる。瓦質製品の時期は不明確だが、中世後半でも新しい時期に属するのではないかと考えられる。

井戸６（図83・87・88、図版10）

BU・BV28・29区に位置する。＜４層＞で検出した。検出面の標高は1.2m、底面は同－0.38mで、深さ1.6mを測る。平面形は上面で径1.5mの円形、下面で１m×0.8mの楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈する。

埋土は16層に分けた。土質・色調から４群にまとめられる。１群（１～５層）は緑灰色～緑褐色系の粘質土で下方に行くほど粘性を増す。２群（６～14層）のうち６～８層は灰色～明灰色の粘質土、９～14層は灰色～暗灰色粘質土を主体とする層で、それぞれの堆積状況が大きなブロック状の単位として把握されたことから、埋め戻しの単位として考えて良いだろう。３群（15・16層）は暗灰色～暗灰褐色の粘土層である。

遺物はコンテナ（28㍑/箱）に１／３箱分が出土した。瓦質土器の羽釜・擂り鉢、備前焼擂り鉢、土師質鍋等のほか、吉備系土師器椀、土師器皿、青磁、

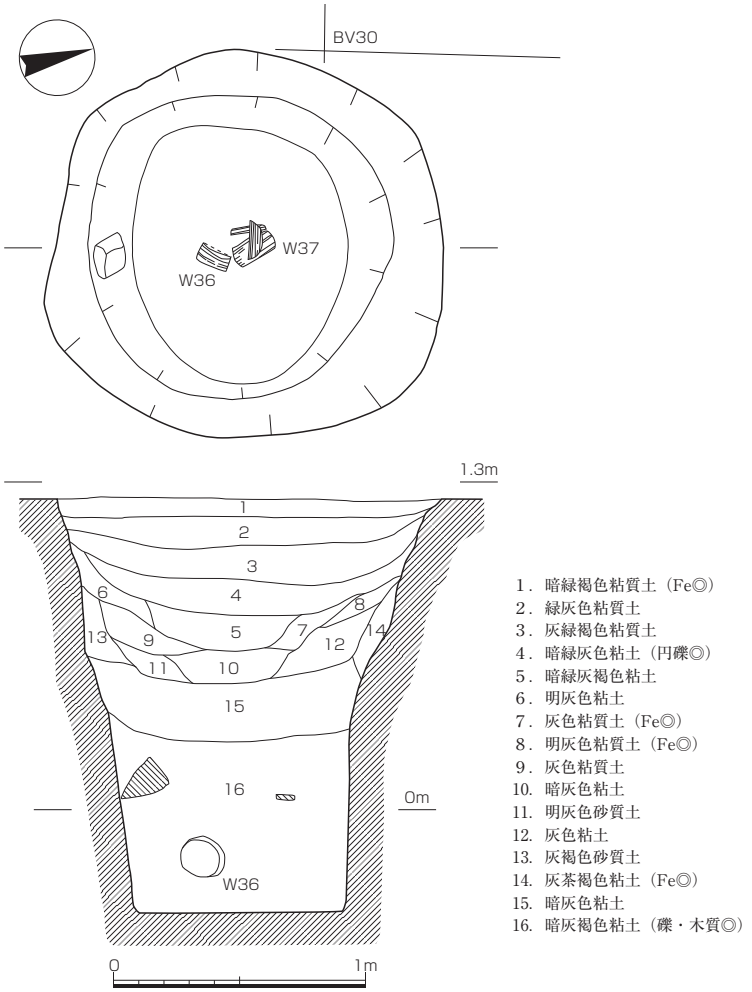
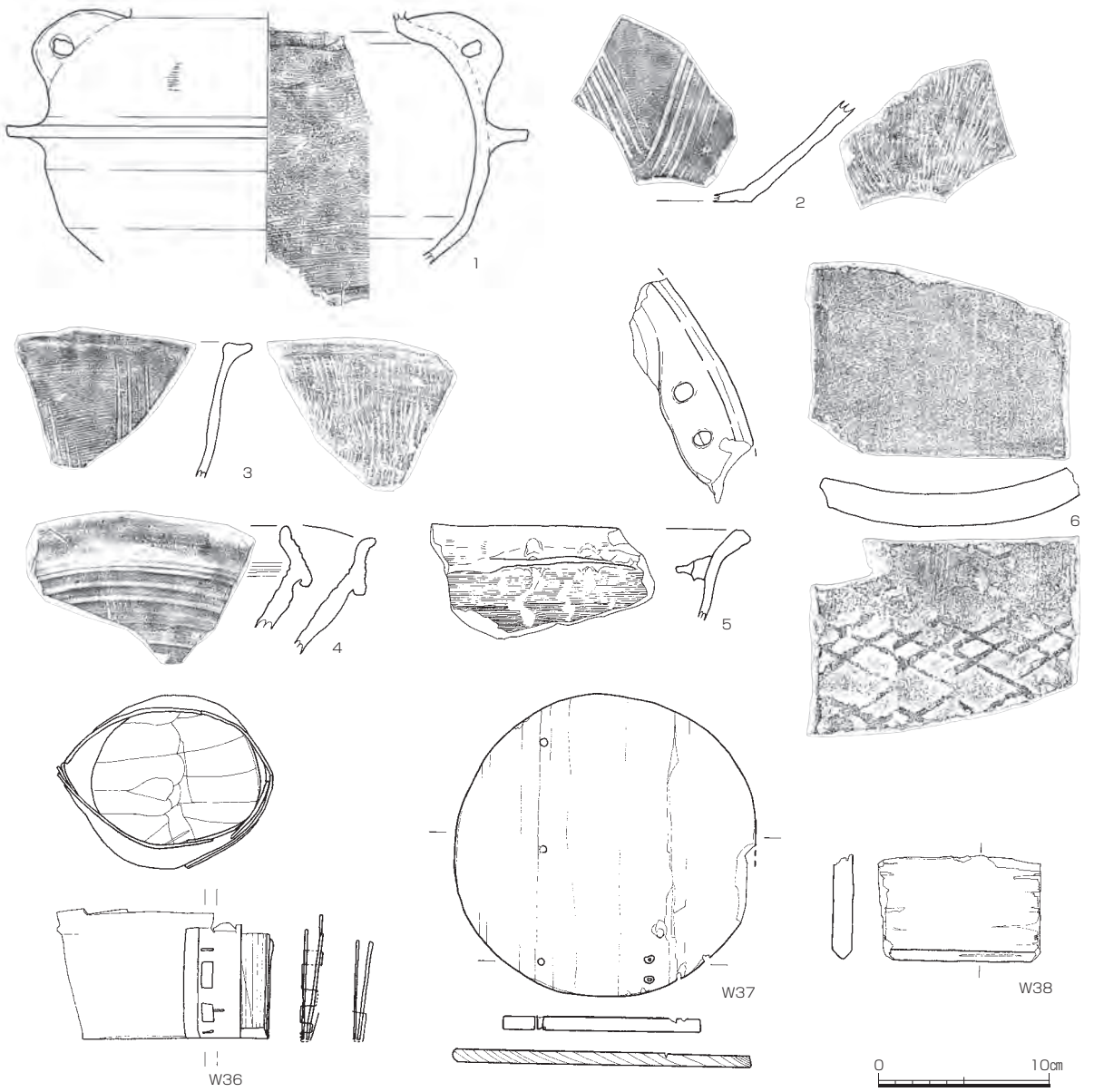


図87　井戸６（縮尺1/30）



遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	瓦質土器・羽釜	－	－	－	－	(内)ハケ目(外)横ナデ、外耳1箇所残存、煤顕著	微砂	灰/黒灰
2	瓦質土器・擂り鉢	－	－	－	－	(内)横ハケ目後スリ目(外)縦ハケ目、5条1組のスリ目	微砂	暗灰
3	瓦質土器・擂り鉢	－	－	－	－	(内)横ハケ目後スリ目(外)縦ハケ目、6条1組のスリ目	微砂　礫	灰褐/暗灰
4	備前焼・擂り鉢	－	－	－	－	片口部、(内)(外)横ナデ、口縁外面に9条の凹線、自然釉	精緻　礫	暗赤褐
5	土師器・鍋	－	－	－	－	(内)(外)横ハメ目、内耳に穿孔2カ所(径0.8cm)	細砂	灰褐

遺物番号	種類・器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	形態・手法他	胎土	色調：上/下
6	須恵質・平瓦	11.0	15.0	2.0	上面：布目痕、下面：格子目タタキ	細砂	灰

番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W36	曲物	径12.6(底9.7)	高さ7.6	幅10.1	側板：ヒノキ　底板：スギ	追柾目	内面縦・斜め方向のケビキ、樺皮残存、底板厚さ0.9cm
W37	円盤	17.8	17.5	0.8	スギ	板目	釘孔6ヵ所確認(径約4～5mm)、左列下部の穴には竹釘が入る
W38	板材	9.5	6.1	0.6	スギ	板目	下端に加工痕、上端・両縁欠損

図88　井戸６出土遺物（縮尺1/4）

白磁も認められるがいずれも小片である。羽釜（図88－１）は、胴部中央に鍔が付き、肩部に穿孔のある一対の釣手が付く。鍋（同－５）は内耳部分に２個の穿孔を有し、15世紀代の特徴を持つ。備前焼の擂り鉢（同－４）

は16世紀に下るものである。須恵質の平瓦（同－６）には、上面に布目、下面に格子目が施される。そのほかに最下層である16層中からは出土した径９～10cmの小型の曲物（図88－W36）１点は柄杓、円盤（同－W37）１点、および板材（同－W38）が出土している。いずれもスギ材が使用されている。

本遺構の時期は出土遺物から16世紀中頃に埋没したと考えられる。

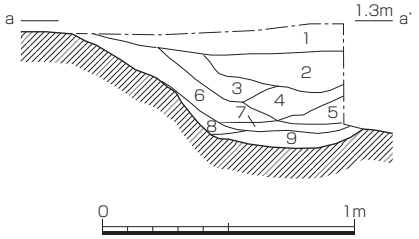
ｂ．溝

溝38（図83・85・89、図版10）

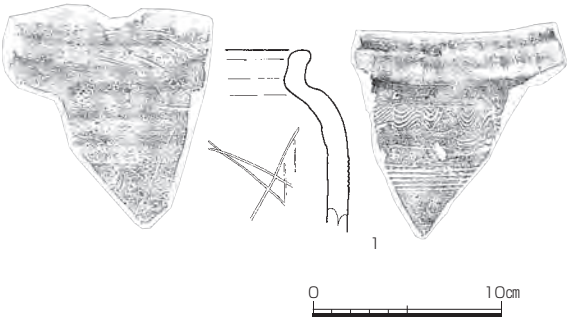
CB～CD26区に位置する傾きN13°Eの溝である。26と27ラインの間において＜８層＞で検出したが、調査区南壁の土層観察から＜４層＞に対応することを確認した。検出面の標高は1.3m、底面は北で同0.8m、南で同0.88mで、深さは0.5mを測る。CCライン付近で幅1.2m、長さ１m程、CDライン付近で幅１m、長さ1.8m程を検出できたのみである。断面形は椀状を呈する。

埋土は９層に分けた。１・２層は淡灰褐色、３～６層は暗灰色を主体とし、７～９層は暗青灰色～黒灰色の砂質土層である。遺物は12号ポリ袋１袋が出土しており、土師器の椀・鍋の小片が含まれる。図89－１の備前焼壺から、埋没時期は15世紀後半と考えられる。

南に隣接する第９・11次調査地点において、溝57として報告したものと位置および本地点南端部での底面標高が0.8mと合致する。底面については検出部分の北端で0.88m、第９・11次調査地点で0.68mとなっており、両者間には約12mで20cmの差が認められることから、南に向かって下がることがわかる。



1．淡灰褐色砂質土
2．暗淡灰褐色砂質土
3．暗灰褐色砂質土
4．暗灰色砂質土
5．暗灰褐色砂質土
6．暗淡灰色砂質土
7．暗青灰色砂質土
8．淡黒灰色砂質土
9．黒灰色砂質土



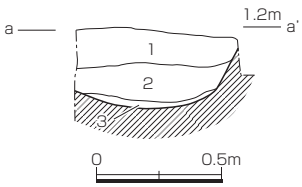
遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	備前焼・壺	－	－	－	－	(内)(外)横ナデ、外面肩部に波状文、内面に箆記号(星形状)	細砂	暗橙

図89　溝38断面・出土遺物（縮尺1/30・1/4）

溝39（図83・85・90、図版10）

調査区南部のCC31区で検出した。31ライン西２mに位置し、傾きN16°Eの溝で、検出面は＜４層＞である。長さ約５mを検出し、北側へはCCライン付近で収束する。上面は標高1.17m、底面は同0.95m、深さ0.22mを測る。攪乱によって破壊されているため、溝の幅は、0.6m以上である。断面は椀状を呈している。埋土は緑灰色を基調とする砂質土である。

遺物は13号ポリ袋１袋分出土しているが、いずれも小片である。本遺構の時期は、検出面から中世後半に属すると考えられる。



1．暗緑灰色砂質土（炭△）
2．淡緑灰色砂質土（炭△）
3．暗淡灰色砂質土

図90　溝39断面
（縮尺1/30）

溝40（図83・84・91～93、図版10・11）

36と37ライン間を傾きN14°Eで走行する溝である。BWラインからBZライン

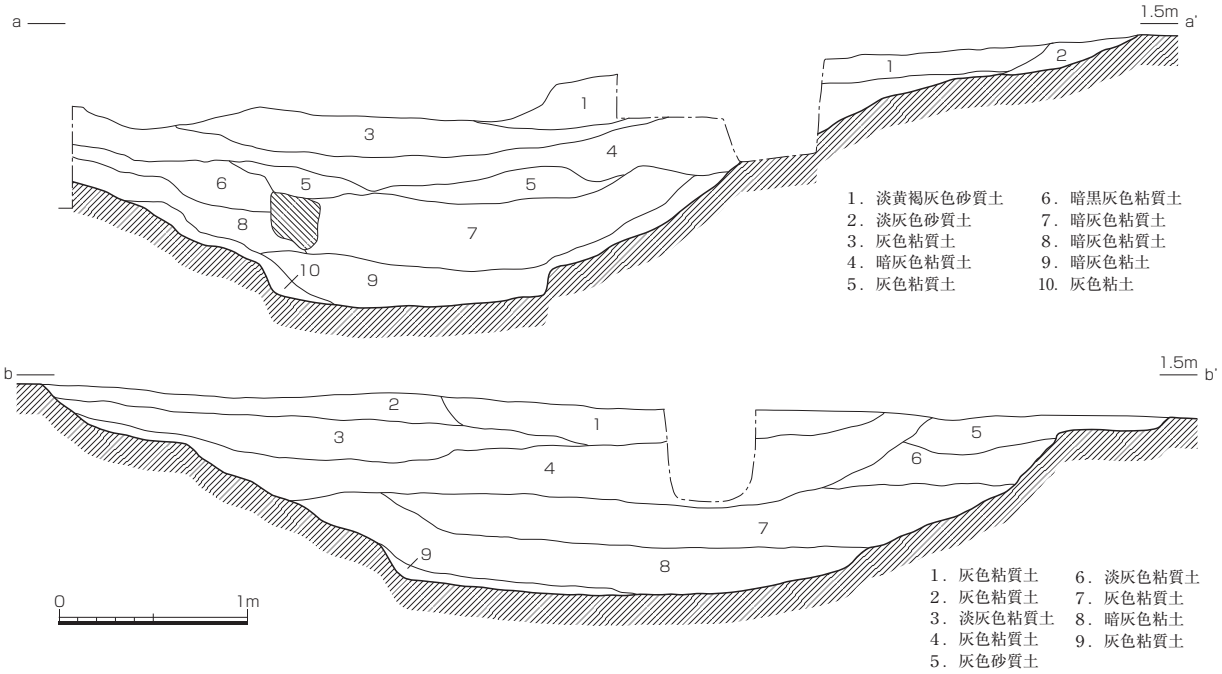


図91　溝40断面（縮尺1/40）

までの長さ15mと、CCラインからCDラインまでの長さ５mにおいてほぼ全体の形状を確認できた。なお、その間のBZ～CCラインでは西側の肩のラインを部分的に確認した。本遺構の上位には近世の溝43が重複しているが、調査時には同一の溝として調査を行ったため、遺物を分けて取り上げることはかなわなかった。

検出面は＜４層＞で、標高は北側で1.45m、南側で1.2m、底面の標高は北側で０m、南側で0.3mである。深さは１mを測る。幅は北側で5.6m、南側で６mが残る。断面形は逆台形を呈する。

埋土はａ断面で10層、ｂ断面で９層に分けられた。土質や色調から３群に分けられる。１群（ａ断面１～６層、ｂ断面１～６層）は、ａ断面では上位に灰色系の砂質土が堆積し、下位に灰色～暗灰色の粘質土が主体となる。２群（ａ断面７層、ｂ断面７層）は暗灰色～灰色の粘質土である。３群（ａ断面８～10層、ｂ断面８・９層）は暗灰色系の粘質土～粘土が主体となる。

またBY36区において溝の底面で土坑状のくぼみを検出した（図92）。検出面の標高は0.2m、底面は同－0.4m、深さ0.6mを測る。平面形は径1.5mの隅丸方形で、溝の肩よりも外側に張り出すものと考えられる。底面では径0.7mの隅丸方形を呈する。断面形は逆台形である。埋土は

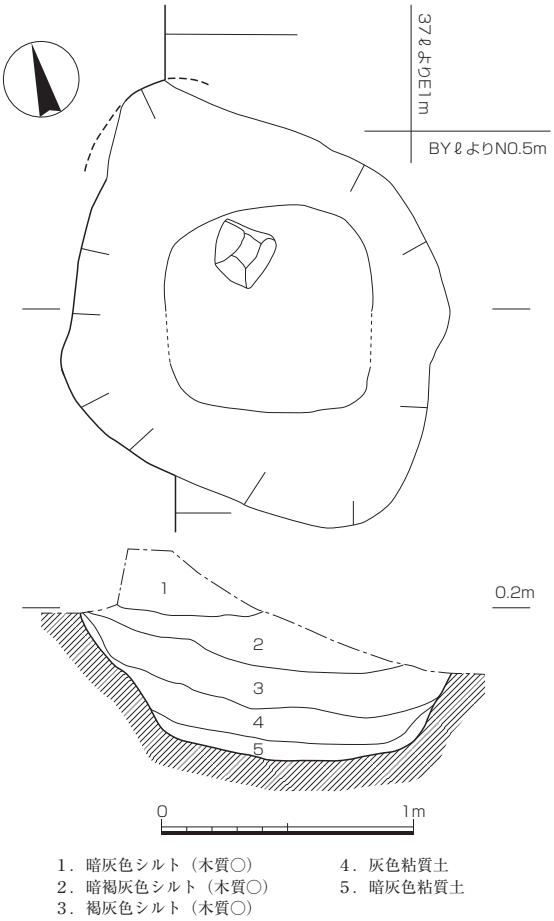
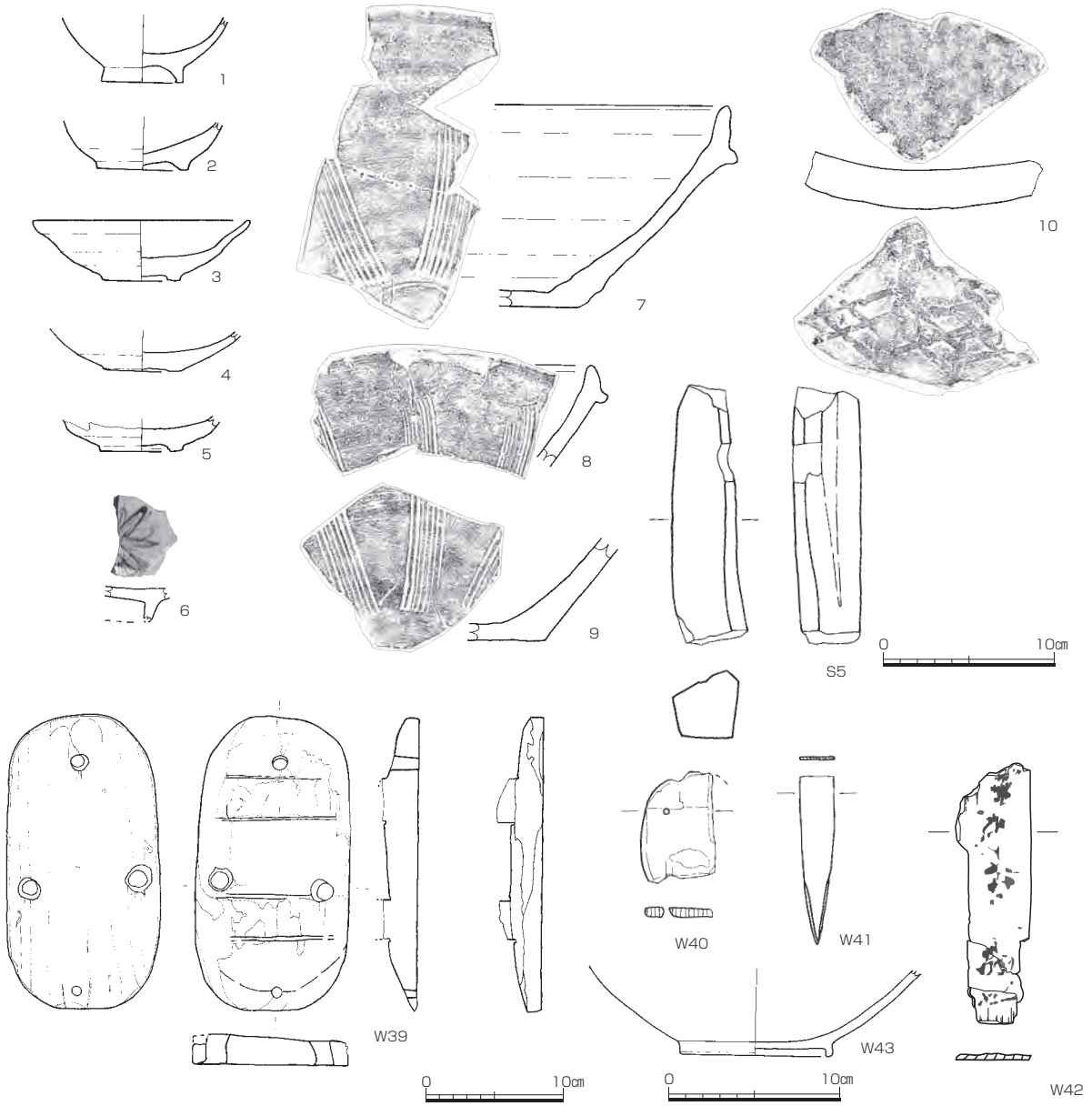


図92　溝40拡張部（縮尺1/30）



遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	肥前陶器・碗	－	4.9	－	1/1	全釉、貫入	微砂	灰　(釉)オリーブ
2	瀬戸・碗	－	5.3	－	1/1	(内)(外)ケズリ・ナデ、全面施釉・貫入あり、畳付露胎	微砂	灰　(釉)オリーブ
3	瀬戸・皿	12.6	4.6	3.5	口1/5底1/2	削り出し高台、内外面施釉・貫入あり、見込みに重ね焼痕・砂目、体部下部～高台露胎	微砂	暗灰(釉)オリーブ
4	肥前陶器・皿	－	4.6	－	1/1	底部削り出し、体部下部～高台露胎、胎土目	微砂	橙灰(釉)オリーブ
5	肥前陶器・皿	－	4.8	－	2/3	内外面施釉、外面下部～高台露胎	微砂	灰褐(釉)オリーブ
6	肥前磁器・碗	－	－	－	－	内外面施釉、見込みに植物文	精緻	灰(釉)淡灰
7	備前焼・擂り鉢	－	－	－	－	(内)(外)横ナデ(底外)ナデ、7条1組のスリ目	微砂	暗橙
8	備前焼・擂り鉢	－	－	－	－	(内)(外)横ナデ、8条1組のスリ目	微砂	暗灰
9	備前焼・擂り鉢	－	－	－	－	(内)(外)横ナデ(底外)未調整、4条1組のスリ目	微砂	暗灰

番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	重量（g）	石材	形態・手法他
S5	砥石	11.3	3.1	3	145.2	砂岩	角柱状、4面に研磨痕、上下欠損

番号	器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚(cm)	樹種	木取り	特徴
W39	下駄	26.5	11.2	3.4	マツ属複維管束亜属	板目	穿孔4、上面前端部に浅いくぼみ(足指跡か)、歯欠損、前後端部すり減り
W40	板材	6.5	3.3	0.6	モミ属	板目	下端欠損、穿孔1カ所
W41	斎串	10	2	0.2	モミ属	板目	下部は両側縁を尖らせる
W42	木簡	15.1	4.3	3.5	マツ属複維管束亜属	柾目	2ヵ所折れ、墨痕あるが判読不能

番号	器種	口縁(cm)	底径(cm)	器高(cm)	残存	樹種	木取り	特徴
W43	漆椀	－	6.5	3.6	底2/3	エノキ属	横木材	口縁部欠損、胴部内外面赤漆、高台内外面黒漆

図93　溝40出土遺物（1/4・1/5）

５層に分けた。１～３層は暗灰色～褐灰色のシルト層である。いずれも木質を含む。４層は灰色、５層は暗灰色の粘質土層である。

既調査をみると、第９・11次調査地点においては同位置に溝59ａが走行しており、本遺構はこれに繋がるものである。同溝では拡張部とされる土坑状のくぼみが２カ所確認されている。本遺構で確認された土坑状のくぼみもこれと同様に溝に付属する拡張部と評価することができよう。

遺物は全体としてコンテナ（28㍑/箱）４箱が出土した（図93）。備前焼・亀山焼の擂り鉢・甕、瓦と国産陶磁器類とがある。このほかに中世前半の吉備系土師器椀と輸入陶磁器が含まれるが小片であり、これらについては混入と考えられる。図93－１～６は国産陶磁器の内１・４～６は肥前のものである。４・５は唐津焼の皿、６は伊万里焼の碗で17世紀前半のものである。同－７～９は備前焼擂り鉢で、７は15世紀後半、８は16世紀初めの特徴を持つ。

そのほかに注目される遺物として、砥石・木製品が出土している。同－Ｓ５は砂岩を用いた砥石でよく使いこまれた使用面が確認される。同－W39は下駄で、マツを材とする。鼻緒の穿孔が３カ所認められる。同－W42は木簡である。わずかに残る墨痕から５文字程度が記されているようだが、判読は困難である。このほかクリを加工した杭、ヒノキ製の曲げ物小片が出土している。

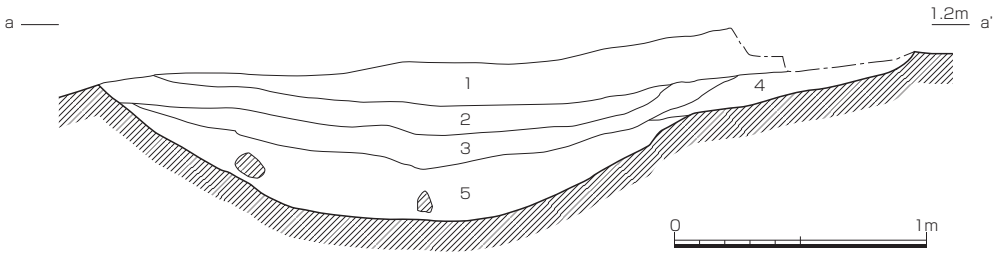
拡張部の遺物としては漆椀１点（同－W43）がある。エノキ属の横木材を用いたもので、胴部外面に赤漆、内面と高台内に黒漆が施される。スギの板材・加工材７点も出土するが、いずれも小片である。

本遺構の遺物は15世紀後半～16世紀初と17世紀前半の２時期があるが、本遺構は上部に重複する近世の溝43の存在を考えると、本遺構の埋没時期は前者にあると考えられる。後者は近世の溝43に属するものと考えられよう。また、木製品は全体に残存状態が良い。粘土中で保存されていた可能性が考えられる。したがって、埋土が砂質土を主体とする近世の溝43に伴うものではなく、本溝に伴っている可能性が高いと考えられる。

溝41（図83・84・94、図版11）

CA35・28区で検出した。傾きN71°E溝であるが、そのほとんどが攪乱によって失われている。CA35区で検出された規模は、長さ約1.5m、幅約3.2mである。溝の上位も攪乱により破壊されているため＜５層＞での検出となった。上面の標高は1.05mである。ただし、一部残りのよい部分では埋土が標高1.2mまで確認できた。従って本来の標高はそれ以上あり、＜４層＞に対応するものと考えられる。底面の標高は西が0.35mで東が0.4mである。検出長は短いが、東から西にむかって下降すると推測される。深さは約0.77mである。一方、CA28区では同一ライン上で長さ1.3m程が確認された。同溝は攪乱によって北側を失っているが、位置関係から同一の溝と判断でき東へ延びていることが確認できる。一方溝40以西においては確認されておらず、溝40に接続する。

断面形は片方が緩やかに開く椀状である。埋土は５層に分層される。最下の５層には拳～人頭大の角礫・円礫



1．暗青灰色粘質土（暗灰褐色粘土ブロック◎）
2．灰褐色粘質土（焼土△、明黄褐色土ブロック○）
3．暗灰褐色粘質土（Fe◎、明黄灰褐色土ブロック◎）
4．明灰茶褐色砂質土（Fe◎、Mn◎）
5．暗灰色粘土（明緑灰色粘土ブロック○、角礫・円礫○）

図94　溝41断面（縮尺1/30）

が散布する。４層は北半部の底面に堆積した砂質土である。

遺物はコンテナ（28㌻/箱）で２／３箱が出土した。ほとんどが吉備系土師器椀と土師器皿・鍋の小片と、僅少の青磁片・備前焼片であるが、いずれも上層からの出土であり混入と考えられる。その他に瓦質土器、丸瓦・平瓦片も出土しており、瓦質土器は15世紀代に下るものと考えられる。

本遺構の埋没時期は出土遺物から15世紀代と考えられる。溝40との関係は、本遺構が溝40以西に延びないことや埋没時期が近似していることから、両溝は接続していたと判断される。なお、本溝の底面は標高0.35～0.4mであるため、溝40へは段をもつかたちで接続していたものと考えられる。

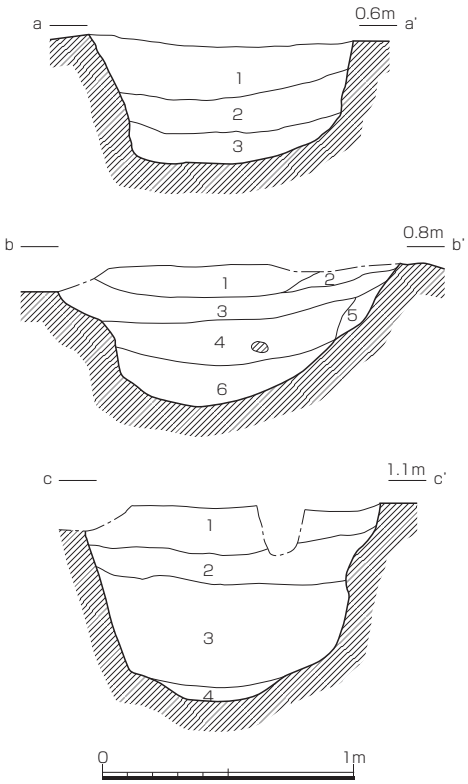
溝42（図83・84・95、図版11）

CB36・37・CB39区で検出した。検出した長さは約18.8m、幅約1.17m、深さ約0.78mである。東西方向に延びる溝で、東は溝40に接続し、西は調査区外に延びる。底面の標高は東で0.22m、西で0.05mであり西へ下がる。

断面形は椀状あるいは逆台形を呈する。埋土は４層に分層され、最上の１層が砂質土、以下の３層は粘質土で構成され、２層上面の層理面で土質が転換する。２～４層では、下半の３・４層には有機質のほか、粗砂や砂質のブロックを含んでおり、２層とは土色・土質の差はないものの、包含物での差異による分層である。

遺物はコンテナ（28㌻/箱）約１／２箱が出土した。吉備系土師器椀・土師器皿・鍋片が多数を占め、少量の瓦質摺鉢片、備前焼片、亀山焼片を含み、近世陶磁器を含まない。本遺構の時期は、溝40と同様、15世紀後半～16世紀初と考えられる。

本遺構は溝40と接続しているが、その底面の標高は0.2mである。溝40の南端の底面は0.3mであり、そこから北へ下がっていくことから、本遺構と溝40の接続部の底面はほとんど同じ標高と考えられる。したがって両溝は、溝41とは異なり、底面を共有するかたちで接続していたものと考えられる。なお、溝40へ接続する本溝と溝41は断面形態も異なることから、その機能に差があった可能性もある。



［a断面］
1．暗灰色粘土
2．暗黒灰色粘土（炭△）
3．黒灰色粘土（炭○）

［b断面］
1．黄灰褐色砂質土（Fe◎、灰色砂ブロック◎）
2．暗灰色粘質土（灰色砂ブロック○）
3．暗灰色粘質土（灰色砂ブロック◎）
4．暗灰色粘質土（灰色粘土ブロック◎、有機質◎）
5．淡灰色粘質土（灰色砂ブロック◎、有機質○）
6．暗灰色粘質土（灰色粘土ブロック◎、有機質◎）

［c断面］
1．淡灰黄色砂質土（Fe◎、灰白色砂ブロック◎
2．暗灰色粘質土（灰色粘土ブロック○）
3．暗灰色粘質土（灰色粘土ブロック◎、有機質◎、粗砂△）
4．灰色粘質土（暗灰色砂ブロック○、有機質△）

図95　溝42断面（縮尺1/30）

第５節　近世（江戸時代）の遺構・遺物

近世の遺構は＜３層＞に対応するもので、井戸１基、土坑９基、溝１条を検出した（図96）。調査区北東部では、17世紀前半廃絶された井戸の他に、土坑が３基分布する。南西部では、土坑が６基分布し、南北方向の溝が１条走る。後者の土坑では、中世後半の東西方向の溝（溝42）に沿うように密集するものもある。こうした遺構の構成から、これまでの調査から明らかになっているように、中世後半の屋敷地から耕作地へと変化する様子がうかがえる。

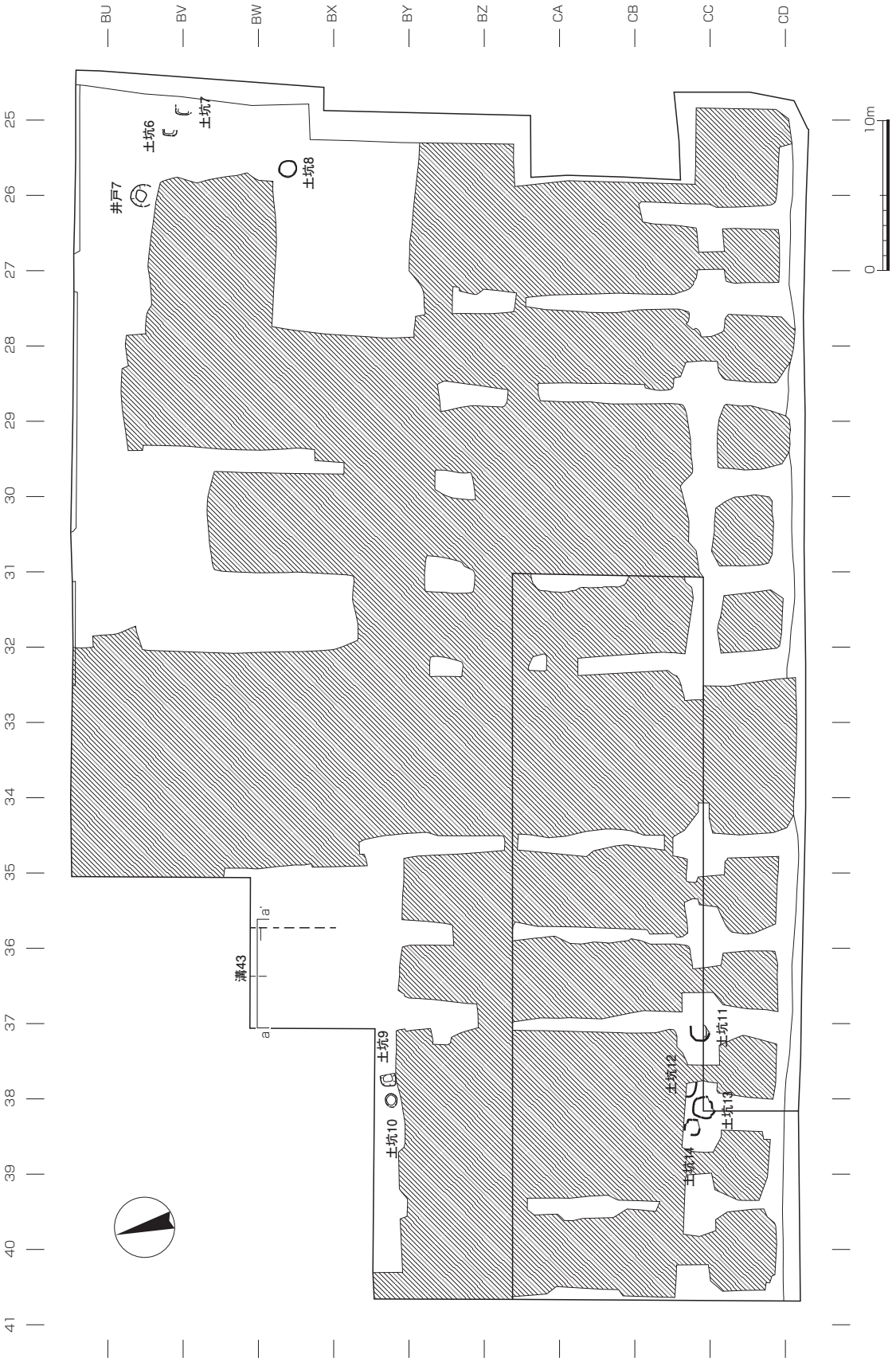


図96　近世遺構全体図（縮尺1/400）

また溝43は中世後半の溝40に重複する大形の南北方向の溝である。井戸と同様に17世紀前半に埋没しているものの、この溝が位置する36ラインと37ライン間は、近世においても土地区画として踏襲されていたものと考えられる。

a．井戸

井戸７（図96～98、図版11）

BU25・26区に位置する。＜３層＞上面で検出した。検出面の標高1.45m、底面の標高－0.35mで、深さ1.85mを測る。南西の一部が攪乱により切られているが、平面形は上面で1.35m×1.45mのほぼ円形を呈し、底面では径0.7mの円形をなす。断面形はＹ字状を呈する。

埋土は９層に分けられる。１群（１～３層）は灰色系の砂質土～粘質土で灰褐色土ブロックを混入する。２群（４・５層）は暗灰色系の粘質土層で、４層には粗砂を多く混入する。３群（６～９層）は黒灰色を呈する粘質土で、６・７層には植物質が認められたが、種類の判別はできなかった。８層中から円盤１点が出土した。最下層９層には混入物はほとんどみられなかった。

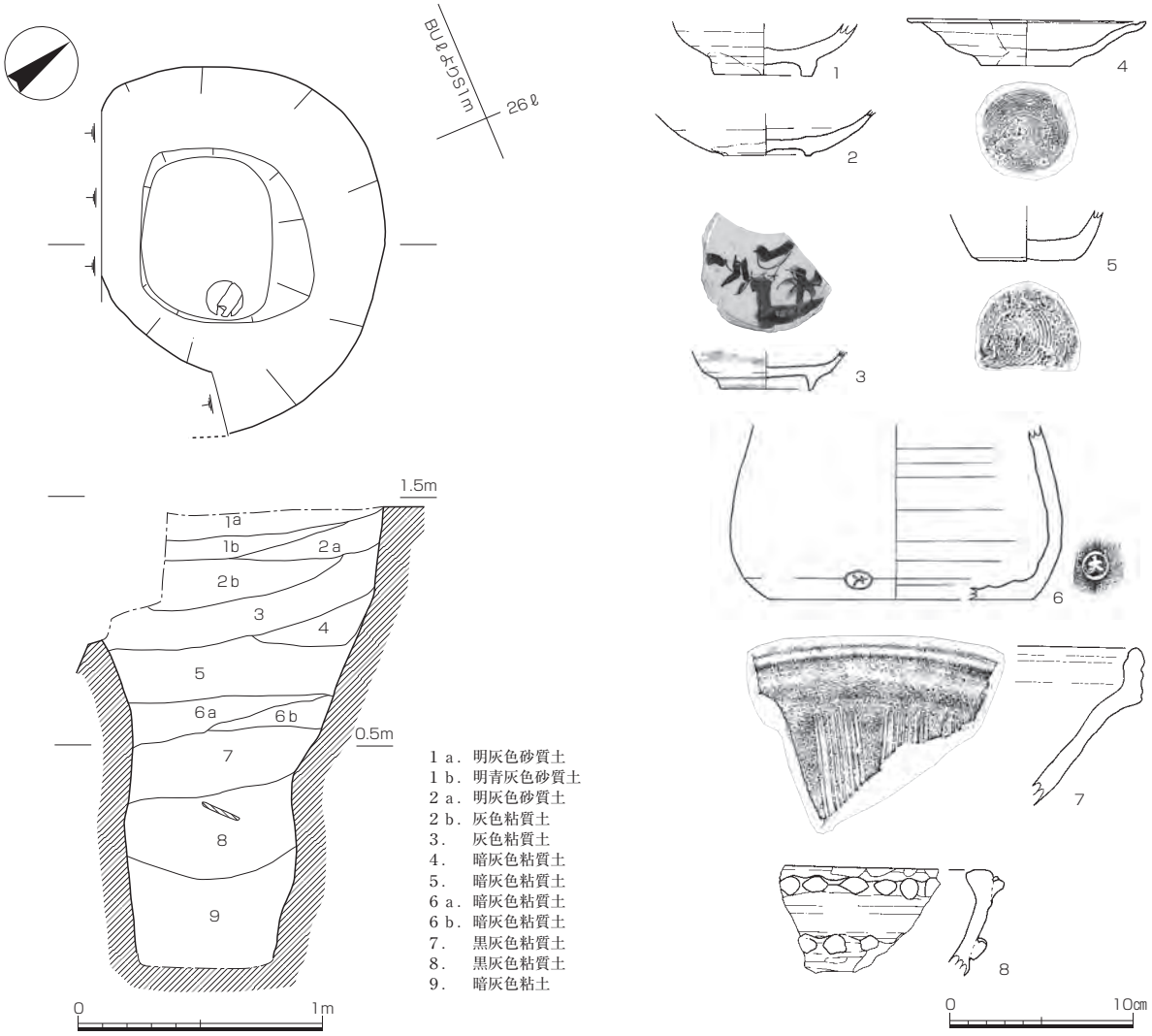
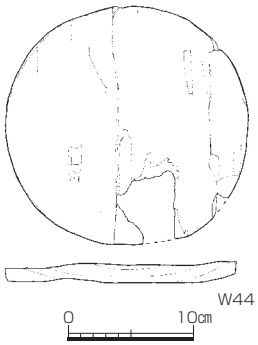


図97　井戸７（縮尺1/30・1/4）

出土遺物は12号ポリ袋１袋があり、肥前陶磁器、備前焼等60点ほどが出土した。図97－３は肥前磁器碗、同－１・２・４は肥前陶器、唐津の碗・皿で17世紀前半のものである。備前焼徳利（同－６）には胴部下方に窯印（○に大）が認められる。備前焼擂り鉢（同－７）は17世紀前半のものである。同－８は瓦質の鉢で、口縁に突帯２条が巡る。そのほかに前述の円盤（図98－W44）、箸片が出土している。

本井戸の時期は、出土遺物から17世紀前半と考えられる。



遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	肥前陶器・碗	－	5.4	－	1/4	内外面施釉、外面一部と畳付部露胎	微砂　礫	淡黄灰(釉)灰白
2	肥前陶器・碗	－	4.8	－	1/2	内外面施釉、内面に貫入・重ね焼痕・砂目痕	微砂　礫	青灰(釉)黄緑
3	肥前磁器・碗	－	5.0	－	1/4	削り出し高台、全釉、染付：見込み・体部・高台に施文	精緻	白(釉)白
4	肥前磁器・皿	13.0	4.8	2.5	口1/4底1/1	(内)(外)横ナデ(底外)糸キリ、内外面施釉、ろくろ回転は右、砂目痕	微砂　礫	赤褐(釉)白・透明
5	備前焼・徳利	－	5.2	－	3/4	(内)(外) 横ナデ(底外)糸キリ、ろくろ回転は左、内面に自然釉	微砂　礫	赤褐(断)灰
6	備前焼・徳利	－	14.8	－	1/6	(内)(外)横ナデ、外面に自然釉・窯変あり、底部付近に窯印(円の中に漢字の「大」)	微砂　礫	暗赤褐/灰褐
7	備前焼・すり鉢	－	－	－	－	(内)(外)横ナデ、口縁部に重ね焼痕、8条1組のスリ目	微砂　礫	赤褐～暗赤褐
8	瓦質土器・鉢	－	－	－	－	(内)(外)横ナデ、貼り付け突帯に指で押圧して凹凸を成形	微砂　礫	暗灰

番号	器種	残存長（cm）	残存幅（cm）	厚（cm）	樹種	木取り	特徴
W44	円盤	13.9	14.3	1.5	スギ	板目	釘穴なし

図98　井戸７出土遺物（縮尺1/6）

ｂ．土坑

土坑６（図96・99、図版12）

BU25区に位置する。＜４層＞上面で検出した。検出面の標高は1.4m、底面の標高１ｍで、深さ0.4mである。調査区の北東端に位置し、東側は調査区外となるため、全形は不明であるが、現状では隅丸方形のものが半裁され、南北幅0.7m、東西幅0.5mが残る。断面形は箱形になるものと想定される。

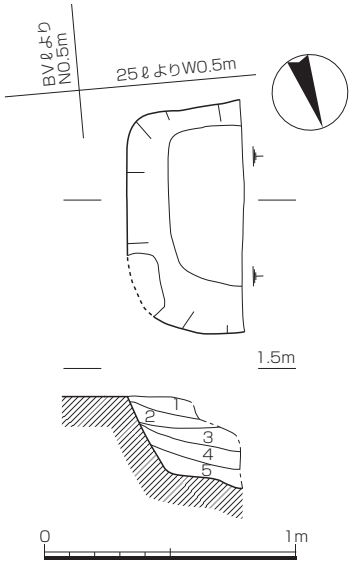
埋土は５層に分けられた。１～３層は青灰色～灰褐色の粘質土で、炭化物を少量含む。４・５層は暗青灰～暗灰色粘質土で同じく炭化物を含む。

遺物は12号ポリ袋で１／２袋が出土した。土師質土器椀・皿・鍋の小片、瓦、備前焼甕小片、青磁碗高台、国産磁器の小片が含まれる。いずれも小片である。

本遺構の時期は、出土遺物から近世と考えられる。

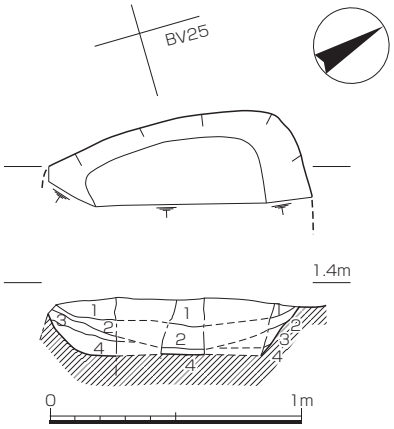
土坑７（図96・100、図版12）

BU・BV24区に位置する。＜４層＞上面で検出した。検出面の標高は1.24m、底面は同１ｍで、深さ0.2mである。調査区の端部にかかっており、南半は調査区外となる。全形は不明であるが、隅丸方形をなすと考えられ、東西1.1m、南北0.4mが残る。断面形は逆台形



1．青灰色粘質土　2．灰色粘質土
3．灰褐色粘質土　4．暗青色粘質土
5．暗灰色粘質土

図99　土坑６（縮尺1/30）



1．暗灰色砂粘質土　2．褐青灰色粘質土
3．灰褐色粘質土　4．青灰褐色粘質土

図100　土坑７（縮尺1/30）

を呈する。埋土は４層に分けられた。いずれも暗灰色～灰褐色を呈する粘質土である。遺物は土師器の小片がわずかに４片出土したのみである。

検出面や出土遺物から時期の決定には至らないが、土坑６との共通性から、近世に属するものと考えたい。

土坑８（図96・101、図版12）

BW25区に位置する。＜７層＞上面で検出した。検出面の標高は１ｍ、底面の標高は0.95ｍで、深さ５㎝である。平面形はほぼ円形を呈し、1.15ｍ×1.1ｍを測る。断面形は箱形である。埋土は灰色粘質土１層で、遺物は土師器・備前焼の小片が10片ほどわずかに出土した。いずれも中世後半以降の時期を示す。

本遺構の上面は大きく削平を受けており、わずかに底部を確認できたものである。周辺の近世土坑の標高を参考にすれば、本来はより上部から掘り込まれた可能性が高い。したがって、本遺構は近世に帰属すると考えたい。

土坑９（図96・102、図版12）

BX37区に位置する。＜５層＞で検出した。検出面の標高は1.4ｍ、底面の標高１ｍで、深さ0.4ｍである。平面形は隅丸方形であり、南端は攪乱によって消失する。上面で東西長１ｍ、南北長は0.76ｍが残る。断面形は椀状を呈する。

埋土は淡灰色を呈する砂質土である１層と、暗灰色粘質土の２層に分けられる。出土遺物は12号ポリ袋で１／２袋が出土した。肥前磁器・陶器碗、備前焼壺の小片のほか、土師質土器椀、鍋等の細片を含む。

本遺構の時期は、出土遺物から近世と考えられる。

土坑10（図96・103、図版13）

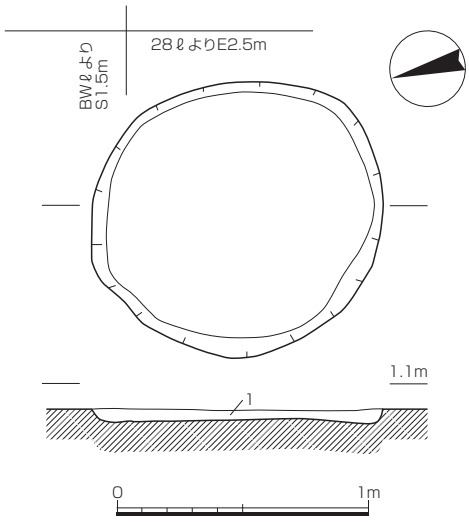
BX37・38区に位置する。＜４層＞上面で検出した。検出面の標高は1.23ｍ、底面の標高1.1ｍ、深さは0.2ｍである。平面形は径0.8ｍのほぼ円形を呈し、北西側の一部を攪乱により欠失する。断面形は皿形である。

埋土は３層に分けられ、１・２層は砂質土、３層は粘質土でいずれも褐灰色を基調とする。出土遺物はみられなかった。

＜４層＞で検出したものであるが、土坑８との類似性から本土坑の時期は近世と考えられる。

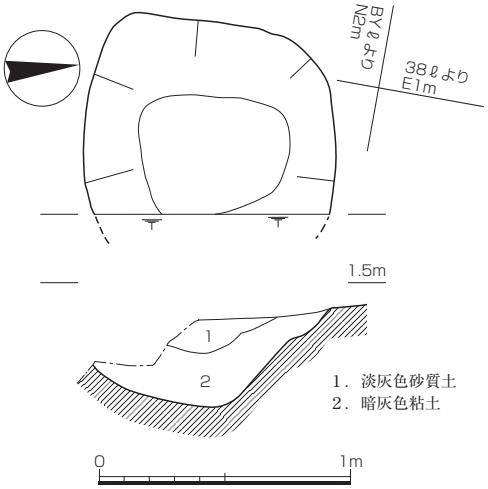
土坑11（図96・104、図版13）

CC36・37区に位置する。＜３層＞において第20次Ａ地点と第25次調査地点にまたがって検出した。溝40を切っている。検出面の標高は1.45ｍで、底面の標高は0.7ｍ、深さは最大0.65ｍを測る。攪乱を受けていたが、平面形は東西に長い楕円形を呈することが断面から判断された。東西1.22ｍ、南北1.2ｍが残る。



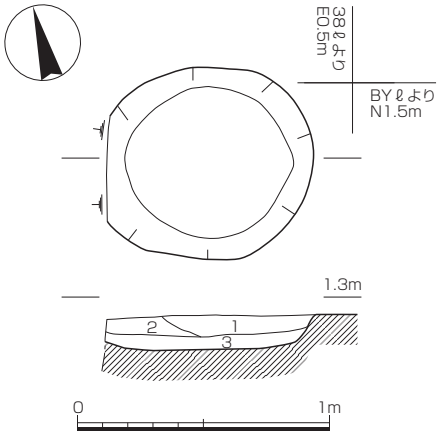
1．灰色粘質土

図101　土坑８（縮尺1/30）



1．淡灰色砂質土
2．暗灰色粘土

図102　土坑９（縮尺1/30）



1．褐灰色砂質土　2．淡青灰褐灰色砂質土　3．褐灰色粘質土

図103　土坑10（縮尺1/30）

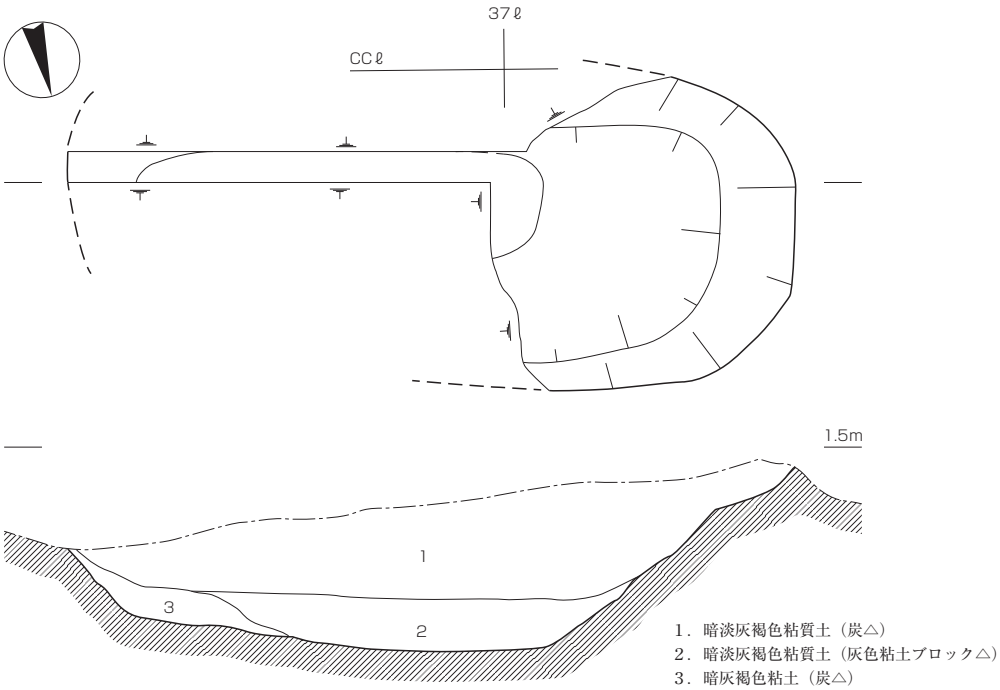


図104　土坑11（縮尺1/30）

断面形は逆台形をなし、埋土は灰褐色を呈する粘質土を主体に３層に分けられる。出土遺物はなかった。

本遺構の時期は、溝40との切り合い関係から近世と考えられる。

土坑12（図96・105、図版13）

CC37区に位置する。＜４層＞上面で検出した。検出面の標高1.2m、底面の標高0.95m、深さ0.25mを測る。東半は攪乱によって破壊を受けているが、全体の形状は隅丸方形を呈すると考えられる。東西長0.6m、南北長0.7mが残る。断面形は逆台形と考えられるが、詳細は不明である。

埋土は６層に分けられた。１～４層は灰褐色系の砂質土を主体とする。５・６層は灰色～茶褐色を呈する粘質土である。出土遺物はみられなかった。

本遺構の時期は、土坑６や７との類似性から近世と考えておきたい。

土坑13（図96・106、図版13）

CB・CC38区に位置する。＜４層＞上面で検出した。検出面の標高は1.25m、底面は0.8mをはかり、深さは0.45mである。平面形は、南東部が攪乱を受けているものの、上面で径1.4mの不正円形と考えられる。底面では0.9m×1.0mの不正円形をなす。断面形は逆台形で、底面にやや丸みを持つ。

埋土は３層に分けられ、１・２層は暗緑灰色～灰褐色の砂質土、３層は灰色粘質土である。遺物は12号ポリ袋１袋が出土した。中心となるのは土師器・近世陶磁器であり、いずれも小・細片である。

本遺構の時期は、出土遺物から近世と考えられる。

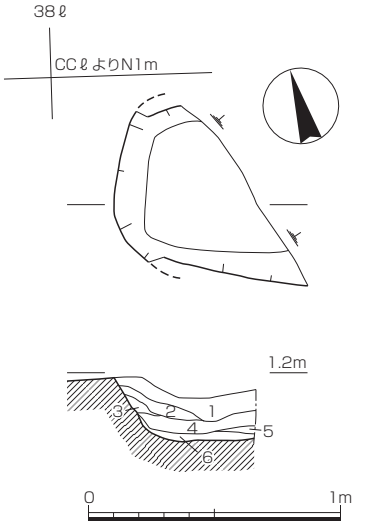
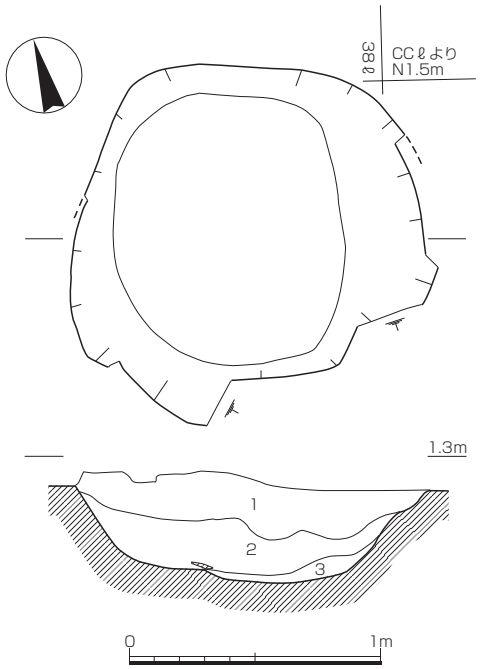
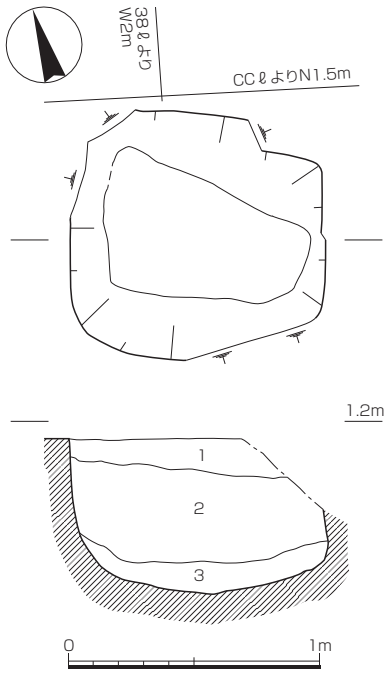


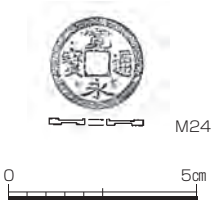
図105　土坑12（縮尺1/30）



1．暗緑灰色砂質土（炭○、明黄色砂ブロック○）
2．灰黄褐色砂質土（炭○、明黄色砂ブロック◎）
3．灰色粘質土（明黄色砂ブロック△、砂○）

図106　土坑13（縮尺1/30）





1．灰白色砂質土
（炭△、焼土△）
2．灰色砂質土
（明黄茶褐色砂質土ブロック◎、炭△、焼土△）
3．灰褐色砂質土
（灰茶褐色土ブロック○）

番号	種類・器種	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	特徴
M24	銭	2.4	2.6	0.15	3.6	寛永通宝

図107　土坑14・出土遺物（縮尺1/30・1/2）

土坑14（図96・107、図版13）

CB38区に位置する。＜４層＞上面で検出した。検出面の標高1.15m、底面の標高0.5mで、深さ0.65mを測る。断面形は底面に丸みのある箱形である。

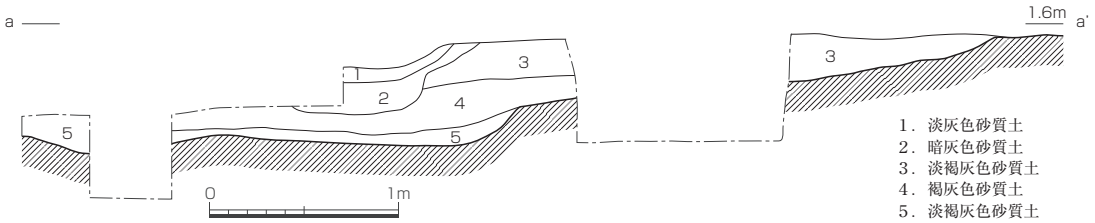
埋土は３層に分けられた。１・２層は灰白～灰色の砂質土、３層は灰褐色を呈する粘質土である。遺物は12号ポリ袋１／２袋が出土した。中心となるのは中世の土師土器、近世陶磁器であり、いずれも小片である。ほかに銭（図107－M24）があり、寛永通宝である。

本遺構の時期は、出土遺物から近世と考えられる。

c．溝

溝43（図96・108）

36・37ラインを南北方向に走行する溝で、前代の溝40と一緒に＜４層＞上面で検出した。そのためプランをしっかりと確認することができなかったが、溝40上に重複していると考えられる。後に断面観察において、＜３層＞上面の遺構であることが確認された。既調査を見ると第９・11次調査地点では溝63として報告した南北方向



1．淡灰色砂質土
2．暗灰色砂質土
3．淡褐灰色砂質土
4．褐灰色砂質土
5．淡褐灰色砂質土

図108　溝43断面（縮尺1/40）

の溝に繋がるものである。

溝43の検出面の標高は1.5m、底面は同0.9m、深さは0.6mを測る。溝の幅は上面で5.1mが確認される。掘り方ラインを参考にすれば、本来の幅は６m以上と考えられる。底面では幅２mが確認されている。断面形は、二段掘り状を示す。

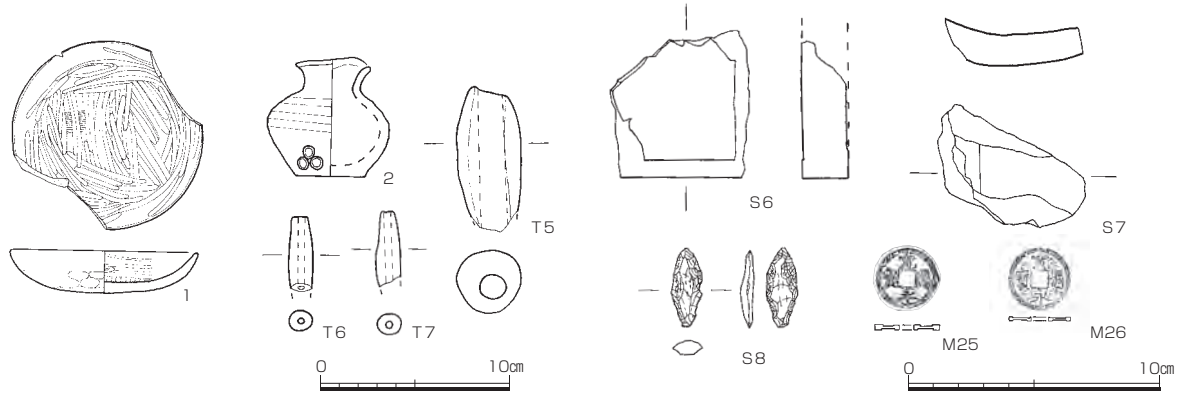
埋土は５層に分けられた。いずれも砂質土である。出土遺物については溝40の項で記載しているので参照されたい。

本遺構の埋没時期は17世紀前半と考えられる。

第６節　包含層ほかの出土遺物

包含層出土の遺物量は、全体でコンテナ（28㍑/箱）３箱におよぶ。ここでは、注目される完形の遺物、土製品・石製品・金属器をあげておきたい（図109）。

＜４層＞からの出土が多い。１は瓦器皿で、２は備前焼の片口小壺である。他に土製品・石器・石製品・金属器があげられる。土錘（Ｔ５～７）、硯（Ｓ６）がある。Ｓ７は滑石片であり、石鍋の欠片の可能性がある。Ｍ25・26はともに寛永通宝である。それ以外では＜７層＞より石鏃（Ｓ８）が出土した。



遺物番号	種類・器種	法量（cm）			残存（－：1/6未満）	形態・手法他	胎土	色調：内/外
		口径	底径	器高				
1	瓦器・皿	10	6.2	2.2	口3/4底1/1	(内)篦ミガキ(外)ナデ・オサエ、重ね焼痕あり	微砂	灰・暗灰
2	備前焼・片口壺	3.8	3.6	6.3	1/1	(内)(外)横ナデ(底外)糸キリ、外面自然釉、体部下端に窯印(三つの丸文)	微砂	茶灰

遺物番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	重量（g）	形態・手法他	胎土	色調
T5	土錘	7.7	3.4	3.3	74.9	管状土錘、孔径1.3×1.4cm、ナデ	微砂	淡橙灰
T6	土錘	3.9	1.2	1.1	5.1	管状土錘、孔径0.4cm、ナデ	微砂	灰橙
T7	土錘	4.0	1.3	1.1	6.5	管状土錘、孔径0.4cm、ナデ	微砂	淡橙灰

番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	重量（g）	石材	形態・手法他
S6	硯	5.9	5.5	1.8	83.0	赤色泥岩	研磨による整形
S7	石鍋	3.5	5.6	1.1	52.4	滑石	加工痕は確認できない
S8	石鏃	3.2	1.2	0.5	2	サヌカイト	凸基式、一部欠損

番号	種類・器種	残存長(cm)	残存幅(cm)	厚（cm）	重量（g）	特徴
M25	銭	2.3	2.4	0.15	1.5	寛永通宝
M26	銭	2.5	2.5	0.15	2.8	寛永通宝

図109　包含層出土遺物（縮尺1/4・1/3）

第４章　自然科学的分析

第１節　鹿田遺跡第25次調査出土の中世人骨

高椋　浩史（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）

１．はじめに

岡山大学埋蔵文化財調査研究センターが実施した岡山市に所在する鹿田遺跡第25次調査において中世に該当する墓から人骨が出土した。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムは、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターから依頼を受け、現地にて出土した人骨の発掘と取り上げ作業をおこなった。出土した人骨はその後、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムに搬入され、整理作業をおこなった。

人骨は２基の墓から出土している。人骨の保存状態は良好ではなかったため、人骨の形質を詳細に知ることができなかったが、後述するように人骨の出土状態はこれまでに類例がなく、中世の墓制を研究する上で重要な事例であると言える。以下に、分析結果を報告する。

なお、年齢の表記に関しては九州大学医学部解剖学第二講座編集の『日本民族・文化の生成２』(1988）記載の年齢区分に従い、幼児（１～６歳)、小児（７～12歳)、若年（13～19歳)、成年（20～39歳)、熟年（40～59歳)、老年（60歳～）とする。

２．人骨の出土状況

【墓１】

墓１からは１体分の人骨が出土しており、出土した人骨を１号人骨とする。墓壙の北側から頭蓋が出土していることから、北頭位で埋葬されたと言える。墓壙の南側から出土した骨は、保存状態が悪く部位を特定することができなかったが、頭蓋との相対的な位置関係と骨幹部が太いため下肢骨と推定される(図１)。その下肢骨と推定される部分は長管骨が‘くの字’を呈した状態で出土しているため、膝関節をやや屈曲して埋葬した可能性が高い。それ以外の埋葬姿勢については出土状態から判断できない。

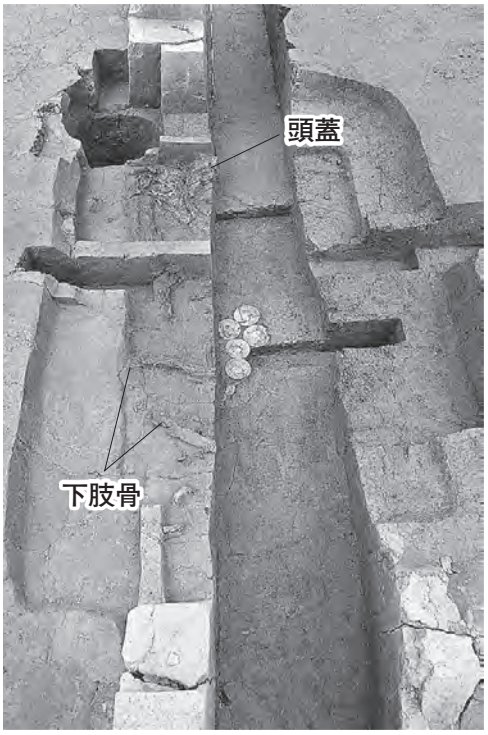


図１　１号人骨の出土状況

頭部については脳頭蓋の一部は残存していたものの、顔面部分はほとんど失われていた。頭蓋と推定される範囲のうち南側から上顎歯牙が検出された。それらは歯列をほぼ保っており、咬合面はすべて南側を向いていることから、人骨の上顎および顔面部は歯牙の北西側にあったと言える（図２)。

また、上顎の残存歯牙は上顎左側切歯、上顎左犬歯、上顎左第２小臼歯の順で出土し、そのうち上顎左第２小臼歯は頬側面が上を向いた状態で出土している。また、上顎すべての歯牙の近心面が南西側を向いている（図２)。

以上のことから、頭蓋は左側面を上に向け、顔面部は南西側

を向いていると推測できる。脳頭蓋の西側からは、頭蓋に沿うように烏帽子が出土している。脳頭蓋と歯牙の出土状況から考えると、南側が前頭部で、北側が後頭部と判断できる。そのため、烏帽子は前頭部から頭頂部に沿うようにして出土していることから、着帽した状態で埋葬されていた可能性が高い。

【墓２】

墓２からは成人骨１体と未成人骨１体が出土しており、成人個体を２号人骨、未成人個体を３号人骨とする。

（２号人骨の出土状況）

２号人骨は、墓壙の東側から頭蓋が出土していることから、東頭位で埋葬されたと言える（図３）。

頭蓋については、前頭骨が北側にあり、左側頭骨が上を向いていることから顔面は北側を向いていたと考えられる。

墓壙の西側からは長管骨がまとまって出土しており、骨幹部の太さ、頭部との位置関係から下肢骨と考えられる。

頭部とその下肢骨の間にも長管骨が出土しており、これらは上肢骨である可能性が高い。しかし、上肢、下肢ともに出土状態から埋葬姿勢を把握することはできなかった（図３）。

（３号人骨の出土状況）

２号人骨の頭蓋の北側から白磁碗が高台を上に向けた状態で出土し、その中からさらに一部白磁皿が被せられた未成人骨が出土した（図４）。出土した人骨は調査現場において土ごと取り上げ、その後室内にて人骨の検出と取り上げ作業を実施した。

人骨は白磁碗・皿のほぼ直下から出土しており、埋土にはほとんど覆われていなかった（図４右側上段）。また、人骨は碗の中から面的に出土せず、やや一箇所に集まった状態で出土している（図４右側下段）。碗内から出土した人骨のうち、部位を特定できたのは頭蓋の左側頬骨と前頭骨の左眼窩上縁部の頬骨突起で、部位の重複は認められなかった。出土した人骨のうち、左側頬骨は白磁碗のほぼ直下から検出され、背側が上を向いた状態で出土している（図４右側下段）。また、左側頬骨、前頭骨の左側頬骨突起は互いが繋がった状態ではなく、離れた箇所から出土している。

その他の骨は部位を特定できなかったが、骨の破片はばらばらの状態で出土しており、すべての破片をあわせても一体分の頭蓋に満たない数である。また、四肢骨片も確認できず、骨よりも残存しやすいとされている歯牙も出土していない。

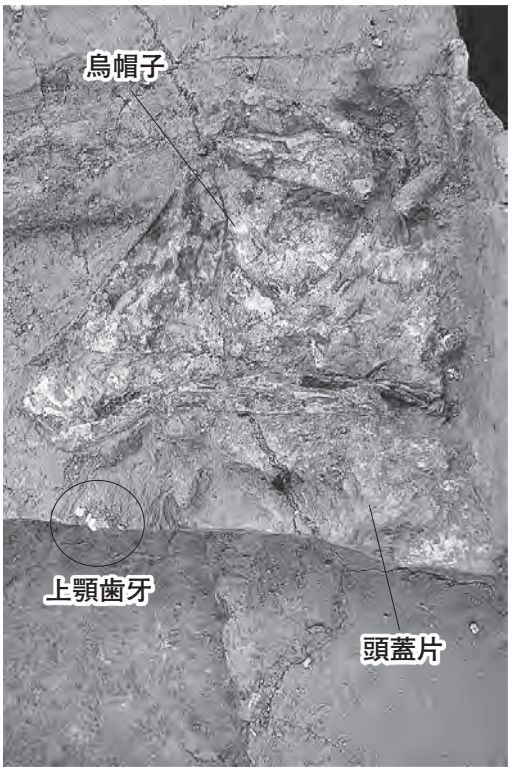


図２　１号人骨の頭部の出土状況

図３　２号人骨の出土状況

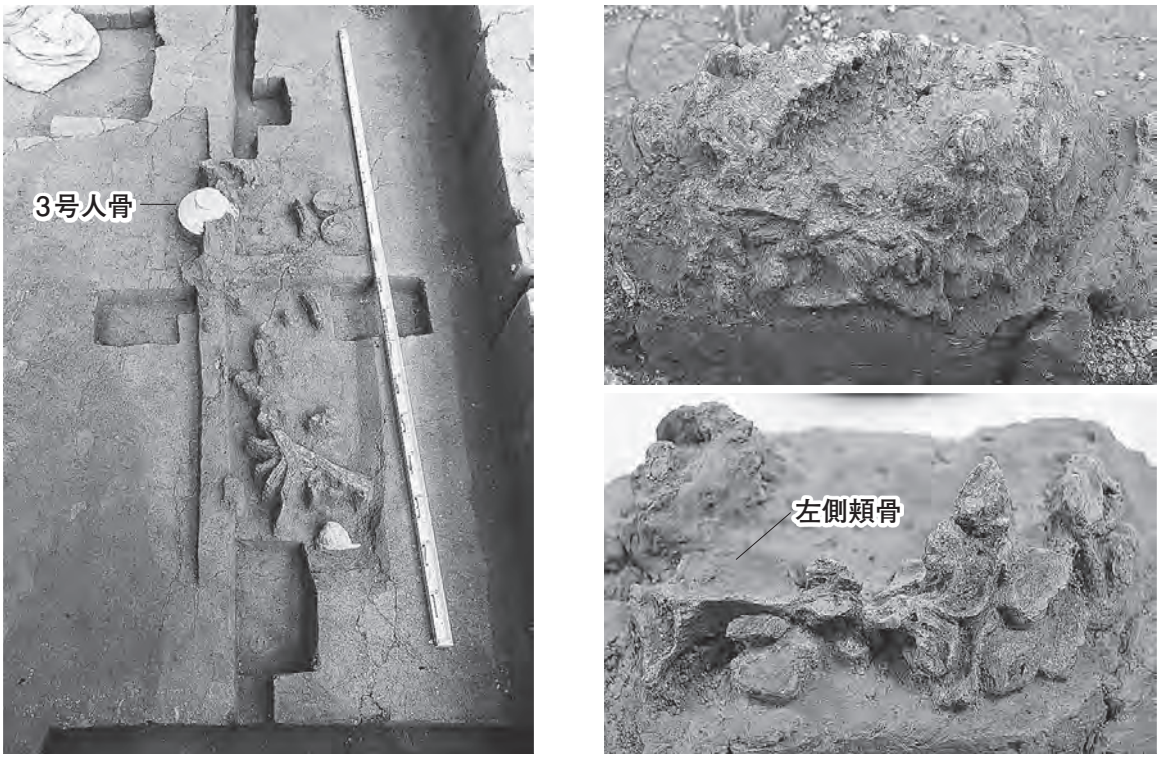


図４　３号人骨の出土状況
（左側：３号人骨の出土位置、右側上段：碗取り上げ後、右側下段：３号人骨検出後）

以上の人骨の出土状態から３号人骨の埋葬方法を推定する。まず、出土した部位が頭蓋のみであり、四肢骨の破片が全く確認できないことから､少なくとも未成人骨の全身骨すべてを白磁碗の中に埋葬したとは考えにくい。埋葬後の二次的な影響により攪乱され、四肢骨等の骨が碗の外に出てしまった可能性も想定されるが、出土した人骨の部位が頭蓋のみであること、また白磁碗に覆われていたことで埋葬後の二次的な攪乱の影響を受けにくいことを考慮すると、その可能性は低い。未成人の遺体の頭部だけに白磁碗を被せて埋葬した可能性も考えられるが、白磁碗の周辺から未成人骨は検出されなかった。

人骨の出土状況から勘案すると（図４右側上段)、①３号人骨の頭蓋のみを取り出し、白磁碗を被せた埋葬法と、②３号人骨の頭蓋の破片を集めた上で白磁碗を被せた埋葬法の二つが想定される。現状では、３号人骨の埋葬方法について、この二つの埋葬法から絞り込むことは難しいが、頭蓋全体を白磁碗で覆って埋葬したとすると出土した破片の量が少ない。一方、３号人骨の頭蓋片を集めて埋葬した場合は、３号人骨の死亡時期と２号人骨の埋葬時との間にある程度の間隔があったと想定される。いずれにせよ、成人骨と未成人骨の合葬事例は縄文時代から近世にかけて一定の頻度で確認されているが、本事例の様に未成人骨の頭蓋に白磁碗を被せて、成人骨と合葬する事例は極めて稀である。成人と未成人の当時の埋葬方法を知る上で興味深い埋葬方法であり、今後の類似事例の増加を期待したい。

３．資料の残存部位・性別・年齢

【１号人骨】

出土した人骨のうち頭蓋については､近接して出土した烏帽子と分離して取り上げることが困難であったため、人骨の取り上げはおこなっていない。

									・	・		・		
／	／	／	／	／	／	／	／	I^2	C	／	P^2	／	／
／	／	／	／	／	／	／	／	I^2	／	／	／	／	／
								・					

／欠損　・遊離歯

歯牙が一部残存しており、残存歯牙は以下の通りである。性別は判定することができなかった。歯牙の咬耗度（栃原1957）から年齢を推定すると、熟年（40～59歳）と推定される。歯牙の咬耗度は栃原（1957）の分類に基づくと、2°aから2°bである。

四肢骨は下肢骨と考えられる破片が残存していたが、破片の接合が困難であったため、詳細な部位の特定はできなかった。

【２号人骨】

頭蓋と四肢骨の一部が残存している。頭蓋は前頭骨の一部と左側頭骨の一部である。歯牙は残存していなかった。四肢骨は破片が多数残存していたが、破片の接合が困難であったため、詳細な部位の特定はできなかった。

性別について残存部位での判定は困難であった。また、年齢は成年以上（20歳～）と推定されるが、それ以上の絞り込みはできなかった。

【３号人骨】

頭蓋が残存しており、四肢骨は確認できなかった。頭蓋は前頭骨の左側頬骨突起部と左側頬骨の一部が残存していた。なお、歯牙は残存していない。出土した頭蓋はその大きさから未成人骨と判断される。

未成人骨であるため性別は判定することができなかった。また、頭蓋の残存部だけでは年齢の絞り込みが難しいものの、頬骨の大きさから少なくとも若年（12～19歳）以前の年齢期と推測される。

４．おわりに

以上、鹿田遺跡第25次調査出土の人骨について記載・報告をおこなった。本遺跡出土人骨は、計測に耐えうる人骨はなく、形質的特徴を把握することができなかった。しかし、人骨の出土状態は極めて興味深い事例であり、墓２における成人骨と未成人骨の合葬例、特に未成人骨を白磁碗で覆う埋葬方法については今後の重要な検討課題である。

（謝辞）

現地での発掘調査の実施、および本報告をおこなうにあたり、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの山本悦世教授、岩﨑志保助教、野崎貴博助教、南健太郎助教、山口雄治助教の各先生方に多くのご教示とご配慮をいただきました。記して感謝申し上げます。

参考文献

栃原　博（1957）日本人歯牙の咬耗に関する研究．熊本医学会雑誌，31：607-656.

九州大学医学部解剖学第二講座編（1988）日本民族・文化の生成２．九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成．六興出版.

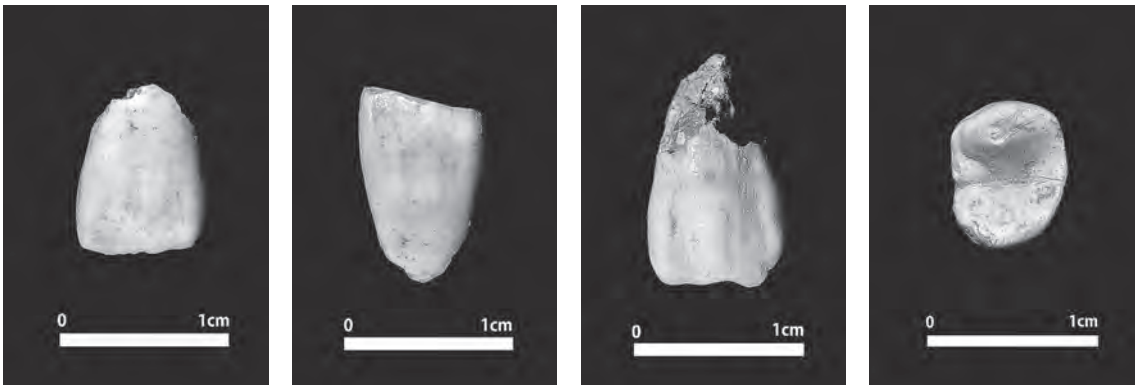


図５　１号人骨（歯牙）
（左より上顎左側切歯、下顎左側切歯、上顎左犬歯、上顎左第２小臼歯）

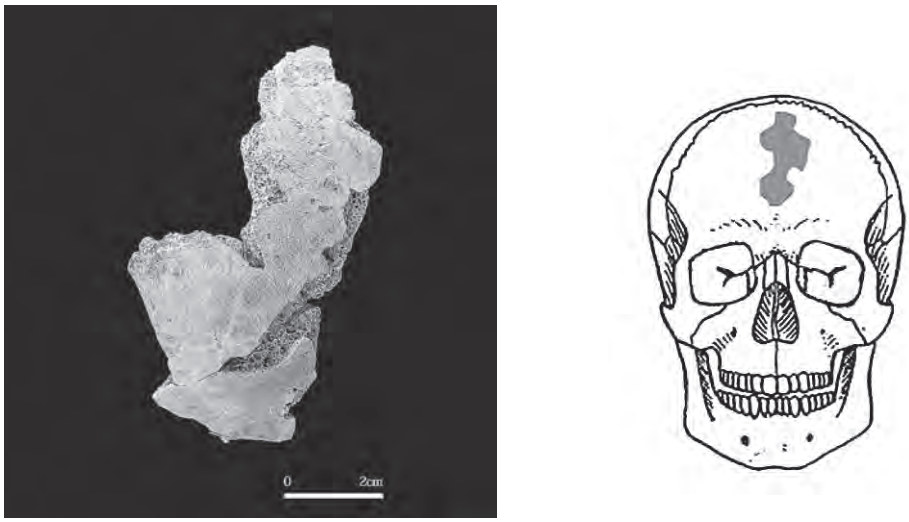


図６　２号人骨（前頭骨）

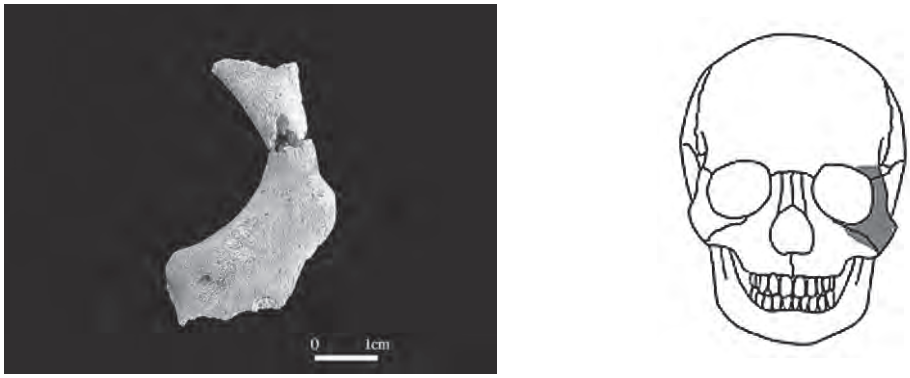


図７　３号人骨（前頭骨・左側頬骨）

第２節　鹿田遺跡第25次調査出土漆製品の塗膜構造調査

㈱吉田生物研究所

１．はじめに

岡山大学構内に所在する、鹿田遺跡から出土した漆製品１点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

２．調査資料

調査した資料は、表１に示す中世の烏帽子１点である。

表１　調査資料

No.	保存処理No.	品名	図No.	概　　要
1	1	烏帽子	1	土の上に一度折りたたまれた状態でのっているこげ茶色を呈する烏帽子１点である。烏帽子の表面の漆膜は平滑であるが、漆に塗りこめられた素地の布目状の凹凸が漆膜の表面にあらわれている。

３．調査方法

表１の資料本体の塗膜付着部分から数㎜四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

４．断面観察

塗膜断面の観察結果を、表２と以下の文章に示す。

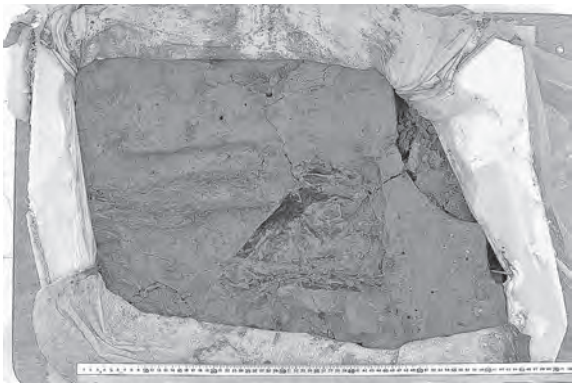


図１　資料No.１

表２　漆器の断面観察結果表

No.	器種	部位	図No.	塗膜構造（下層から）		
				下　地		漆　層　構　造
				膠着剤	混和材	
1	烏帽子	下部の縁	２～７	漆	鉱物	透明漆層４～５層
2	烏帽子	頂部付近	8，9	漆	鉱物	透明漆層４層程

No.１（烏帽子の下部のやや厚みのある部分）

塗膜構造：下層から、下地（素地を含む）、漆層が観察された。

下地（素地を含む）：褐色を呈した漆の層の中に透明の鉱物質、一定の幅で直線状に白く抜けている長い繊維が観察された（図６、７の矢印）。白く抜けた繊維は紙を構成する植物繊維で、このことから素地は紙とわかる。この紙を含む漆層は下地である。

漆層：素地を含む下地の上に黄褐色を呈する透明漆層が４～５層重なっている。この漆層には、層と層の境目に関係なく縦横に白く抜けた部分がみられる。これは土中に埋納されている間の劣化の痕跡である。

№２（烏帽子の上方の薄い部分）

塗膜構造：下層から下地（素地を含む）、漆層が観察された。

下地（素地を含む）：褐色を呈した褐色を呈する漆層の中に透明の鉱物質、一定の幅で直線状に白く抜けている繊維が観察された（図８の矢印）。白い部分は紙を構成する植物繊維で、このことから素地は紙とわかる。

漆層：下地の上に黄褐色を呈する透明漆が４層ほど重なっている。層の中には、層と層の境目に関係なく縦横に白く抜けた部分が見られる。これは土中に埋納されている間の劣化の痕跡である。

５．摘要

岡山大学鹿田遺跡から出土した、中世の烏帽子の塗膜構造調査を行った。

調査のために試料を採取したのは、烏帽子の下部のやや厚みのあるように見受けられる部分と、烏帽子の上方の薄い部分とである。ともに下層には紙の繊維を含む下地層がある。その上に透明漆層が複数層重なっていた。塗膜断面にはあらわれていないが、漆層の下には紙の素地以外にも、漆膜表面に布目状の凹凸が見られることから布の素地が存在していたものと考えられる。この布への漆の浸透があまりなかったため、布の痕跡すら遺存せず布そのものも腐朽したと推定される。

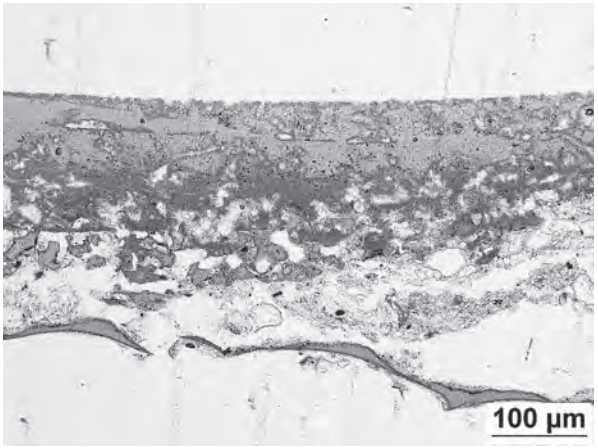


図２　№１断面

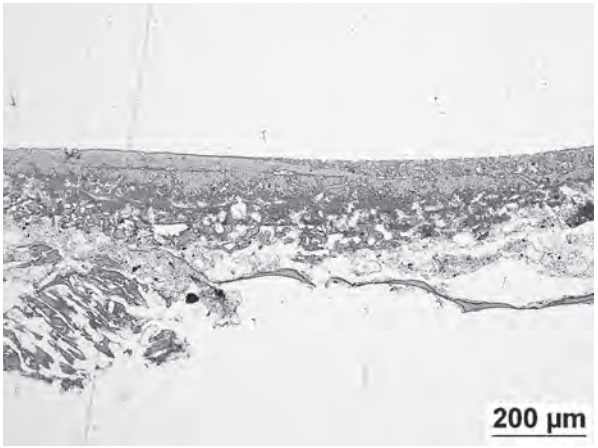


図３　№１断面拡大

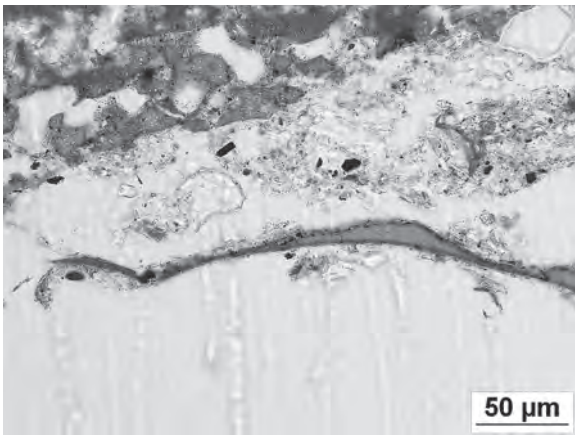


図４　No.１断面拡大（上）

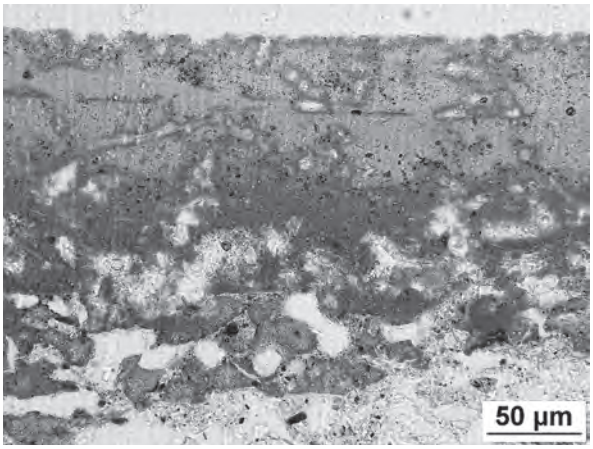


図５　No.１断面拡大（下）

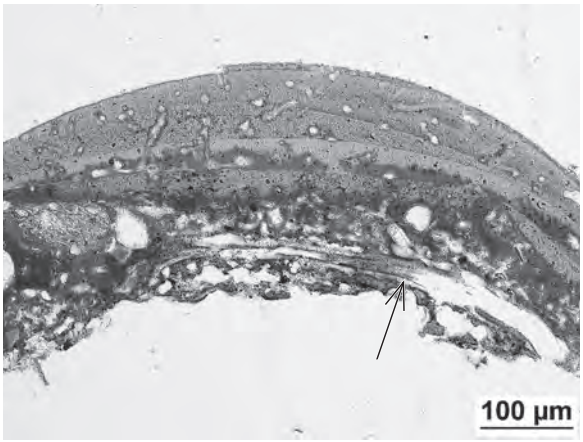


図６　No.１断面

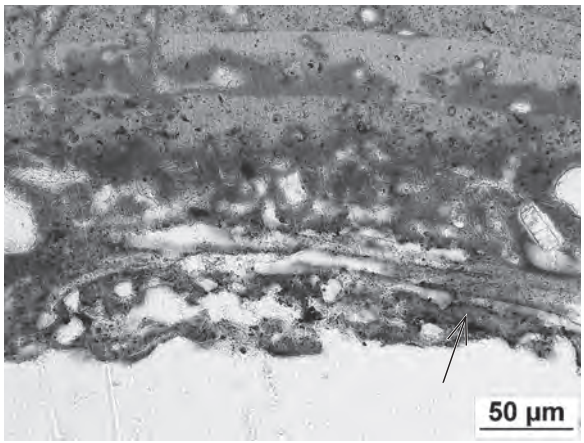


図７　No.１断面拡大

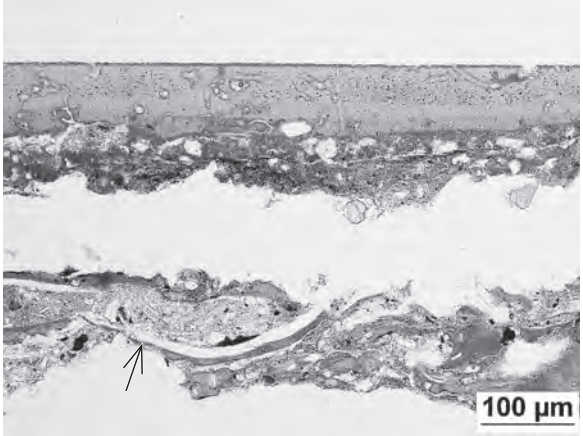


図８　No.２断面

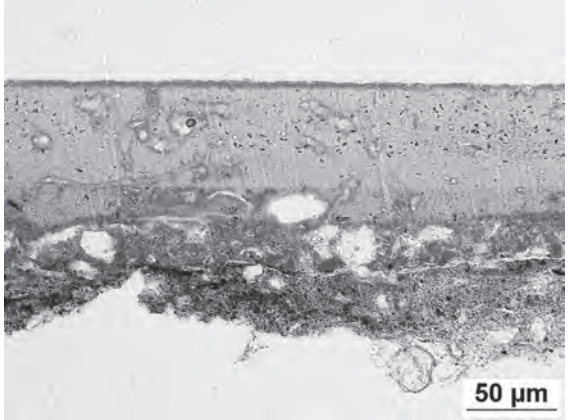


図９　No.２拡大

第３節　鹿田遺跡第25次調査出土折敷の樹種調査

㈱吉田生物研究所

１．試料

試料は岡山県鹿田遺跡から出土した折敷１点である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種同定結果（針葉樹１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）ヒノキ科（CUPRESSACEAE）

木口と板目は採取出来なかった。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型で１分野に数個みられる。

表１　岡山県鹿田遺跡出土木製品同定表

No.	品名	樹種
1	折敷	ヒノキ科

図１　顕微鏡写真

◆参考文献◆

林　昭三「日本産木材顕微鏡写真集」京都大学木質科学研究所（1991）
島地　謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版（1988）
北村四郎・村田　源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社（1979）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所　史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

Nikon DS-Fi1

第４節　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土木製品類と自然木の樹種

能城　修一（明治大学黒耀石研究センター）

１．はじめに

鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査で出土した古墳時代初頭と中世～近世の木製品類と自然木の樹種を報告する（表１）。内訳は、古墳時代初頭が18点、中世前半が33点、中世後半が39点、中世が６点、近世が４点である。

２．方法

樹種同定は、木取りを観察した後、遺物から片刃カミソリで横断面と、接線断面、放射断面の切片を切り取り、それをガムクロラール（抱水クロラール50ｇ、アラビアゴム粉末40ｇ、グリセリン20ml、蒸留水50mlの混合物）で封入しておこなった。各プレパラートにはOKUF-1714～1814の番号を付して標本番号とした。標本は明治大学黒耀石研究センターに保管されている。

３．結果

同定不能のもの１点をのぞいた総数100点の試料中には、針葉樹７分類群、広葉樹13分類群、双子葉草本植物１分類群の計21分類群が見いだされた。

１．モミ属　Abies　マツ科　図１：１ｃ（枝・幹材、OKUF-1786）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩かで晩材の量は多い。放射組織は柔細胞のみからなり、単壁孔が著しい。分野壁孔はごく小型のスギ型で１分野に３～４個。

２．ツガ属　Tsuga　マツ科　図１：２ｃ（枝・幹材、OKUF-1753）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で晩材の量は多い。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、柔細胞には単壁孔が著しい。分野壁孔はごく小型のスギ型～ヒノキ型で１分野に３～４個。

３．マツ属複維管束亜属　Pinus subgen. Diploxylon　マツ科　図１：３ａ-３ｃ（枝・幹材、OKUF-1737）

垂直・水平樹脂道をともに持つ針葉樹材。早材から晩材への移行は緩かで晩材の量は多い。放射組織は柔細胞と放射仮道管からなり、分野壁孔は大型の窓状で１分野に普通１個、放射仮道管の水平壁は鋸歯状。

４．コウヤマキ　Sciadopitys verticillata（Thunb.）Siebold et Zucc.　コウヤマキ科　図１：４ａ-４ｃ（枝・幹材、OKUF-1798）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩かで晩材の量は少ない。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は孔口が水平に大きく広く窓状で、１分野に普通１個。

５．ヒノキ　Chamaecyparis obtusa（Siebold et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　図１：５ａ-５ｃ（枝・幹材、OKUF-1785）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩かで晩材の量は少ない。早材の終わりから晩材に樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は中型のヒノキ型で１分野に２個。

６．スギ　Cryptomeria japonica（L.f.）D.Don　ヒノキ科　図１：６ａ－６ｃ（枝・幹材、OKUF-1735）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩かで晩材の量はやや多い。早材の終わりから晩材に樹脂細胞が散在する。放射組織は柔細胞のみからなり、分野壁孔は大型のスギ型で１分野に２個。

７．イヌガヤ　Cephalotaxus harringtonia（Knight ex Forbes）K.Koch　イヌガヤ科　図１、２：７ａ－７ｃ（枝・幹材、OKUF-1800）

垂直・水平樹脂道をともに欠く針葉樹材。早材から晩材への移行は緩かで晩材の量は少ない。早材の仮道管の壁は厚く、内腔は小さく、晩材の仮道管とそれほど違わない。年輪内には樹脂細胞が散在する。仮道管の内壁には不規則に走るらせん肥厚がある。分野壁孔は小型のトウヒ型で１分野に２個。

８．モモ　Amygdalus persica L.　バラ科　図２：８ａ－８ｃ（枝・幹材、OKUF-1766）

やや小型で丸い道管が年輪のはじめに数列配列し、晩材ではやや急に小型化した丸い道管が単独あるいは２～３個複合して、ときに斜めに連なる傾向をみせる半環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で５細胞幅位。

９．ナシ亜科　Subfam. Maloideae　バラ科　図２：９ａ－９ｃ（枝・幹材、OKUF-1723）

ごく小型で丸い孤立道管がやや疎らに均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は短接線状で、ときに菱形結晶をもつ。放射組織は上下端の３列ほどが直立する異性で１～２細胞幅。

10. ケンポナシ属　Hovenia　クロウメモドキ科　図２：10ａ-10ｃ（枝・幹材、OKUF-1788）

ごく大型で丸い道管が年輪のはじめに３列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した厚壁で丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合して散在する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の３列ほどが直立する異性で４細胞幅位。

11. エノキ属　Celtis　アサ科　図２：11ａ-11ｃ（枝・幹材、OKUF-1813）

やや大型で丸い道管が年輪のはじめに数列配列し、晩材では徐々に小型化した丸い道管が単独あるいは数個ずつ集まって斜めに連なる傾向をみせる環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の３列ほどが直立する異性で７細胞幅位。

12. クワ属　Morus　クワ科　図２：12ａ-12ｃ（枝・幹材、OKUF-1715）

大型で丸い道管がしばしば２～３個複合して年輪のはじめに３列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した道管が数個ずつ丸い塊をなして斜めに連なって配列する環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は上下端の１～３列ほどが直立する異性で６細胞幅位。

13. クリ　Castanea crenata Siebold et Zucc.　ブナ科　図３：13ａ-13ｃ（枝・幹材、OKUF-1760）

大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに１列に配列し、晩材では徐々に小型化した孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。放射組織は単列同性。

14. ツブラジイ　Castanopsis cuspidata（Thunb.）Schottky　ブナ科　図３：14ａ（枝・幹材、OKUF-1720）

大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに数個ずつかたまって散在し、晩材では徐々に小型化した孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。放射組織は同性で単列の小型のものと大型の複合状のものとからなる。

15. コナラ属クヌギ節　Quercus sect. Aegilops　ブナ科　図３：15ａ-15ｃ（枝・幹材、OKUF-1728）

大型で丸い孤立道管が年輪のはじめに３列ほど配列し、晩材では徐々に小型化した厚壁の孤立道管が火炎状～放射状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。放射組織は同性で、単列で小型のものと大型の複合状のものとからなる。

16. コナラ属アカガシ亜属　Quercus subgen. Cyclobalanopsis　ブナ科　図３：16ａ（枝・幹材、OKUF-1730）

やや小型で丸い孤立道管が放射方向に配列する放射孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織はいびつな接線状。

放射組織は同性で、単列で小型のものと大型の複合状のものとからなる。

17. ヤマハゼ　Toxicodendron sylvestre（Siebold et Zucc.）Kuntze　ウルシ科　図３：17 a -17 c（枝・幹材、OKUF-1726）

中型～小型で丸いやや厚壁の道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合して年輪内で徐々に小型化しながら疎らに散在する半環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は上下端の１～２列が直立する異性で２細胞幅位。

18. カエデ属　Acer　ムクロジ科　図３：18 a -18 c（枝・幹材、OKUF-1721）

やや小型で丸い道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にらせん肥厚をもつ。木繊維は横断面で雲紋状を呈する。木部柔組織は年輪の終わりに散在し、多数の菱形結晶をもつ。放射組織は同性で５細胞幅位。

19. アカザ　Chenopodium album L. var. centrorubrum Makino　ヒユ科　図３、４：19 a -19 c（枝・幹材、OKUF-1733）

小型で丸い道管が単独あるいは２～５個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。同心円状の材内篩部をもつ。放射組織は直立細胞のみからなり５細胞幅位。

20. カキノキ属　Diospyros　カキノキ科　図４：20 a -20 c（枝・幹材、OKUF-1717）

やや大型～小型で丸い厚壁の道管が単独あるいは２～３個放射方向に複合して疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は接線状。放射組織は異性で２細胞幅位、層階状に配列する。

21. シャシャンボ　Vaccinium bracteatum Thunb.　ツツジ科　図４：21 a -21 c（枝・幹材、OKUF-1714）

ごく小型で丸い孤立道管がやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は単一および10段ほどの階段状。道管の内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は異性で５細胞幅位。

４．考　察

古墳時代初頭の杭には、ビワかシャリンバイの可能性のあるナシ亜科の植物が３点使われ、その他はクリ、クヌギ節、ヤマハゼ、カエデ属、コナラ属アカガシ亜属、ツブラジイであった。その他では、板にカキノキ属が使われていた（表２）。

中世の木製品類では針葉樹材がほとんどを占めている（表２）。曲物にヒノキとスギが多く、コウヤマキも１点見出された。曲物柄杓でもヒノキとスギで本体が製作され、柄はケンポナシ属であった。下駄にはケンポナシ属とマツ属複維管束亜属が見出された。その他では、中世の柱にヒノキとクリ、礎板にコウヤマキ、中世の杭にマツ属複維管束亜属とクリといった樹種選択が目立つ。中世の板材には、モミ属やマツ属複維管束亜属、コウヤマキ、ヒノキ、スギと多様な針葉樹が見出されたが、板の用途が不明瞭であるため、樹種選択の意味は議論できない。

出土した樹種のうち礎板や柱として使用されていたコウヤマキは、岡山県では西北部の産地に２カ所にしか現在は生育していないことになっている（倉田1964）。しかし、鹿田遺跡では２次調査で古墳時代末期～平安時代初期のコウヤマキの井戸枠が出土しており（畔柳1988）、24次調査でも平安時代末期から鎌倉時代前期のコウヤマキの井戸枠横桟が出土した（能城2018）。その他の岡山市内の遺跡でも、伊東・山田（2012）によると、百間川米田遺跡で鎌倉時代の井戸枠横桟が（パリノ・サーヴェイ1989）、赤田東遺跡で古墳時代末期～平安時代初期の柱が出土しており（藤井2003）、津寺遺跡（畔柳1997；パリノ・サーヴェイ1998）や加茂政所遺跡（畔柳1999）でも鎌倉時代～室町時代の井戸材が出土している。こうした点から考えると、現在の生育地である西北部の山中から高梁川を下してきたコウヤマキが使われている可能性は低く、岡山平野の周辺にもコウヤマキが普通に生育していてそれを利用していた可能性が高い。

引用文献

伊東隆夫・山田昌久編．2012．木の考古学：出土木製品用材データベース．449pp．海青社、大津．

倉田　悟．1964．日本林業樹木図鑑　第１巻．地球社．

畔柳　鎮．1988．鹿田遺跡出土の木製品．「鹿田遺跡Ｉ」、435-442．岡山大学構内遺跡調査報告第３冊、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター．

畔柳　鎮．1997．中谷調査区、高田調査区．「津寺遺跡４　山陽自動車道建設に伴う発掘調査14（第１分冊）」、23-598．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116．日本道路公団中国支社岡山工事事務所・岡山県教育委員会．

畔柳　鎮．1999．加茂政所遺跡．「加茂政所遺跡　高松原古才遺跡　立田遺跡　山陽自動車道建設に伴う発掘調査17」、25-920．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告138．日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会．

能城修一．2018．岡山大学構内（鹿田地区）24次調査出土木製品類の樹種．『鹿田遺跡11』．岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

パリノ・サーヴェイ．1989．百間川米田遺跡木器樹種同定、種子同定報告．「百間川米田遺跡（旧当麻遺跡）３（本文）」、379-402．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告74、岡山県古代吉備センター・建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会．

パリノ・サーヴェイ．1998．調査区の概要．「津寺遺跡５　山陽自動車道建設に伴う発掘調査15」、25-686．岡山県埋蔵文化財発掘調査報告127．日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会．

藤井裕之．2003．赤田東遺跡から出土した木材の樹種について．「岡山市埋蔵文化財センター年報２　2001（平成13）年度」、50-52．岡山市教育委員会．

表１　樹種一覧

標本	No	図番号	樹種名	SR	製品名	木取り	遺構	本文中記載番号	時代
OKUF-	1714		シャシャンボ	S	加工木	丸木	井戸２		古墳初
OKUF-	1715		クワ属	S	加工木	割材	井戸２		古墳初
OKUF-	1716		スギ	S	加工木	割材	井戸２		古墳初
OKUF-	1717	15	カキノキ属	S	板	板目	井戸１	W2	古墳初
OKUF-	1718		カキノキ属	S	加工木	板目	井戸１		古墳初
OKUF-	1719	15	ツブラジイ	S	杭	芯なし材削りだし	井戸１	W9	古墳初
OKUF-	1720	15	ツブラジイ	S	杭	芯なし材削りだし	井戸１	W8	古墳初
OKUF-	1721		カエデ属	S	加工木	割材	井戸１		古墳初
OKUF-	1722	15	ナシ亜科	S	杭	丸木	井戸１	W5	古墳初
OKUF-	1723	15	ナシ亜科	S	杭	丸木	井戸１	W7	古墳初
OKUF-	1724		ナシ亜科	S	杭	丸木	井戸１		古墳初
OKUF-	1725	15	カエデ属	S	杭	丸木	井戸１	W4	古墳初
OKUF-	1726	15	ヤマハゼ	S	杭	丸木	井戸１	W3	古墳初
OKUF-	1727		クリ	S	杭	板目	井戸１		古墳初
OKUF-	1728		コナラ属クヌギ節	S	杭	割材	井戸１		古墳初
OKUF-	1729	15	ツブラジイ	S	杭	丸木	井戸１	W1	古墳初
OKUF-	1730	15	コナラ属アカガシ亜属	S	製品	丸木	井戸１	W6	古墳初
OKUF-	1731		ヒノキ	S	自然木	割材	井戸１		古墳初
OKUF-	1732	86	マツ属複維管束亜属	S	板	板目	井戸５	W35	中世後半
OKUF-	1733		アカザ	S	自然木	丸木	井戸５		中世後半
OKUF-	1734		スギ	S	加工木	板目	井戸５		中世後半
OKUF-	1735		スギ	S	曲物	柾目	井戸５		中世後半
OKUF-	1736		モミ属	S	板	板目	井戸５		中世後半
OKUF-	1737		マツ属複維管束亜属	S	板	板目	井戸５		中世後半
OKUF-	1738	88	ヒノキ	S	曲物	板目	井戸６	W36	中世後半
OKUF-	1739	88	スギ	S	曲物	追柾目	井戸６	W36	中世後半
OKUF-	1740	88	スギ	S	円盤	板目	井戸６	W37	中世後半
OKUF-	1741	88	スギ	S	板	板目	井戸６	W38	中世後半
OKUF-	1742		ヒノキ	S	曲物	板目	井戸６		中世後半
OKUF-	1743	98	スギ	S	円盤	板目	井戸７	W44	近世
OKUF-	1744		スギ	S	箸	割材	井戸７		近世
OKUF-	1745		スギ	S	箸	割材	井戸７		近世
OKUF-	1746		スギ	S	箸	割材	井戸７		近世
OKUF-	1747	93	エノキ属	S	椀	横木材	溝40拡張部	W43	中世後半
OKUF-	1748		スギ	S	板	割材	溝40拡張部		中世後半
OKUF-	1749		スギ	S	加工木	板目	溝40拡張部		中世後半
OKUF-	1750		スギ	S	加工木	割材	溝40拡張部		中世後半
OKUF-	1751		スギ	S	加工木	割材	溝40拡張部		中世後半
OKUF-	1752		スギ	S	加工木	割材	溝40拡張部		中世後半
OKUF-	1753		ツガ属	S	加工木	板目	溝40拡張部		中世後半

標本	No	図番号	樹種名	SR	製品名	木取り	遺構	本文中記載番号	時代
OKUF-	1754		スギ	S	板	柾目	溝40拡張部		中世後半
OKUF-	1755		マツ属複維管束亜属	S	自然木	丸木	溝26		中世前半
OKUF-	1756		スギ	S	曲物	柾目	溝26		中世前半
OKUF-	1757		スギ	S	板材	板目	溝40		中世後半
OKUF-	1758	93	マツ属複維管束亜属	S	下駄	板目	溝40	W39	中世後半
OKUF-	1759		マツ属複維管束亜属	S	下駄	柾目	溝40		中世後半
OKUF-	1760		クリ	S	杭	半割材	溝40		中世後半
OKUF-	1761		クリ	S	杭	丸木	溝40		中世後半
OKUF-	1762		クリ	S	杭	半割材	溝40		中世後半
OKUF-	1763		ヒノキ	S	曲物	板目	溝40		中世後半
OKUF-	1764		マツ属複維管束亜属	S	杭	丸木	溝40		中世後半
OKUF-	1765		スギ	S	曲物	板目	溝40		中世後半
OKUF-	1766		モモ	S	自然木	丸木	溝40		中世後半
OKUF-	1767	82	クリ	S	柱	丸木	P11	W32	中世
OKUF-	1768	82	ヒノキ	S	柱	丸木	Ｐ９	W30	中世
OKUF-	1769	82	ヒノキ	S	柱	丸木	P10	W29	中世
OKUF-	1770	82	コウヤマキ	S	礎板	板目	P14	W34	中世
OKUF-	1771	82	クリ	S	柱	丸木	P13	W33	中世
OKUF-	1772	82	クリ	S	柱	ミカン割り？	P12	W31	中世
OKUF-	1773		スギ	S	板	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1774		スギ	S	板	板目	井戸３		中世前半
OKUF-	1775		スギ	S	板	板目	井戸３		中世前半
OKUF-	1776		マツ属複維管束亜属	S	加工木	板目	井戸３		中世前半
OKUF-	1777		コナラ属クヌギ節	S	加工木	みかん割	井戸３		中世前半
OKUF-	1778		コナラ属クヌギ節	S	加工木	丸木	井戸３		中世前半
OKUF-	1779		マツ属複維管束亜属	S	自然木	－	井戸３		中世前半
OKUF-	1780	44	ケンポナシ属	S	加工木	割材	井戸３		中世前半
OKUF-	1781	44	ケンポナシ属	S	加工木	割材	井戸３		中世前半
OKUF-	1782	44	ヒノキ	S	板	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1783	44	スギ	S	板	板目	井戸３		中世前半
OKUF-	1784		ヒノキ	S	板	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1785	44	ヒノキ	S	板	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1786		モミ属	S	加工木	割材	井戸３		中世前半
OKUF-	1787		ケンポナシ属	S	下駄	板目	井戸３		中世前半
OKUF-	1788		ケンポナシ属	S	下駄	板目	井戸３		中世前半
OKUF-	1789		コウヤマキ	S	板	追い柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1790		スギ	S	柄杓	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1791		ケンポナシ属	S	柄杓	割材	井戸３		中世前半
OKUF-	1792		ヒノキ	S	柄杓	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1793		ヒノキ	S	柄杓	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1794		ヒノキ	S	柄杓	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1795		ヒノキ	S	曲物	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1796		ヒノキ	S	曲物	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1797		ヒノキ	S	曲物	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1798		コウヤマキ	S	曲物	板目	井戸３		中世前半
OKUF-	1799		×	S	自然木	割材	井戸３		中世前半
OKUF-	1800		イヌガヤ	S	自然木	丸木	井戸３		中世前半
OKUF-	1801		ヒノキ	S	板	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1802		ヒノキ	S	曲物	柾目	井戸３		中世前半
OKUF-	1803		スギ	S	加工木	板目	土坑３		中世前半
OKUF-	1804		スギ	S	板	板目	土坑３		中世前半
OKUF-	1805		ヒノキ	S	板	板目	溝40		中世後半
OKUF-	1806	93	マツ属複維管束亜属	S	木簡	柾目	溝40	W42	中世後半
OKUF-	1807		マツ属複維管束亜属	S	加工木	丸木	溝40		中世後半
OKUF-	1808	93	スギ	S	斎串	柾目	溝40	W41	中世後半
OKUF-	1809		スギ	S	板	柾目	溝40		中世後半
OKUF-	1810		マツ属複維管束亜属	S	杭	みかん割	溝40		中世後半
OKUF-	1811		モミ属	S	板	割材	溝40		中世後半
OKUF-	1812	93	ヒノキ	S	板	柾目	溝40	W40	中世後半
OKUF-	1813		エノキ属	S	加工木	丸木	溝40		中世後半
OKUF-	1814		スギ	S	板	板目	溝42		中世後半

表２　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査で出土した木製品類と自然木の樹種

樹種名	古墳初頭				中世		中世前半						中世後半									近世	計
	杭	板	加工木	自然木	柱	礎板	曲物	柄勺	下駄	板	加工木	自然木	曲物	下駄	齊串	製品	容器	板	杭	加工木	自然木	製品	
モミ属											1							2					3
ツガ属																				1			1
マツ属複維管束											1	2		2		1		2	2	1			11
コウヤマキ						1	1			1													3
ヒノキ				1	2		4	3		4			3					2					19
スギ			1				1	1		5	1		3		1	2		5		5		4	29
イヌガヤ												1											1
モモ																					1		1
ナシ亜科	3																						3
ケンポナシ属								1	2		2												5
エノキ属																	1			1			2
クワ属			1																				1
クリ	1				3														3				7
ツブラジイ	2		1																				3
コナラ属クヌギ節	1										2												3
コナラ属アカガシ亜属	1																						1
ヤマハゼ	1																						1
カエデ属	1		1																				2
アカザ																					1		1
カキノキ属		1	1																				2
シャシャンボ			1																				1
総計	10	1	6	1	5	1	6	5	2	10	7	3	6	2	1	3	1	11	5	8	2	4	100

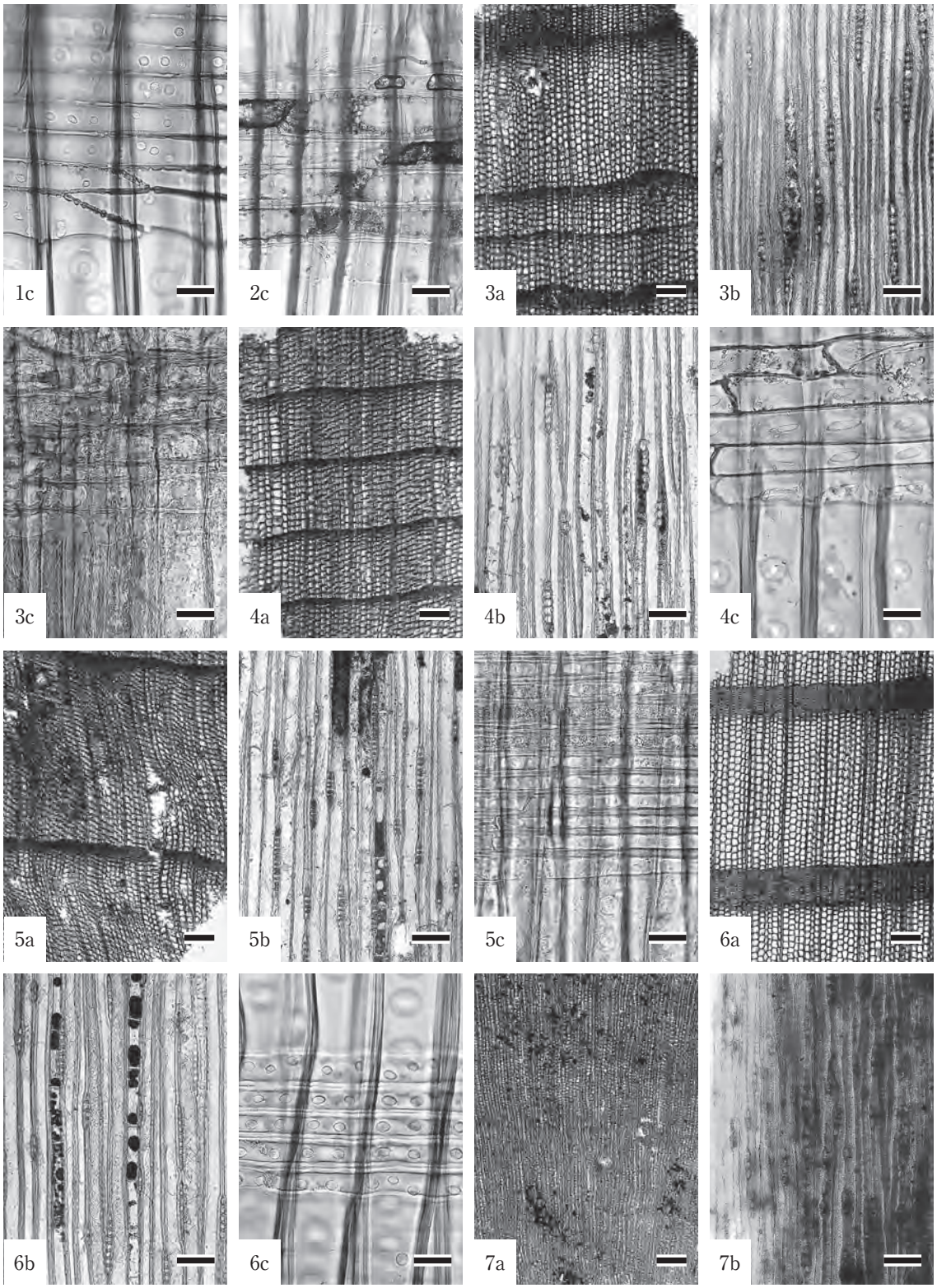


図１　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(1)

1c：モミ属（枝・幹材、OKUF-1786）、2c：ツガ属（枝・幹材、OKUF-1753）、3a-3c：マツ属複維管束亜属（枝・幹材、OKUF-1737）、4a-4c：コウヤマキ（枝・幹材、OKUF-1798）、5a-5c：ヒノキ（枝・幹材、OKUF-1785）、6a-6c：スギ（枝・幹材、OKUF-1735）、7a-7b：イヌガヤ（枝・幹材、OKUF-1800）．a：横断面（スケール＝200㎛）、b：接線断面（スケール＝100㎛）、c：放射断面（スケール＝25㎛）．

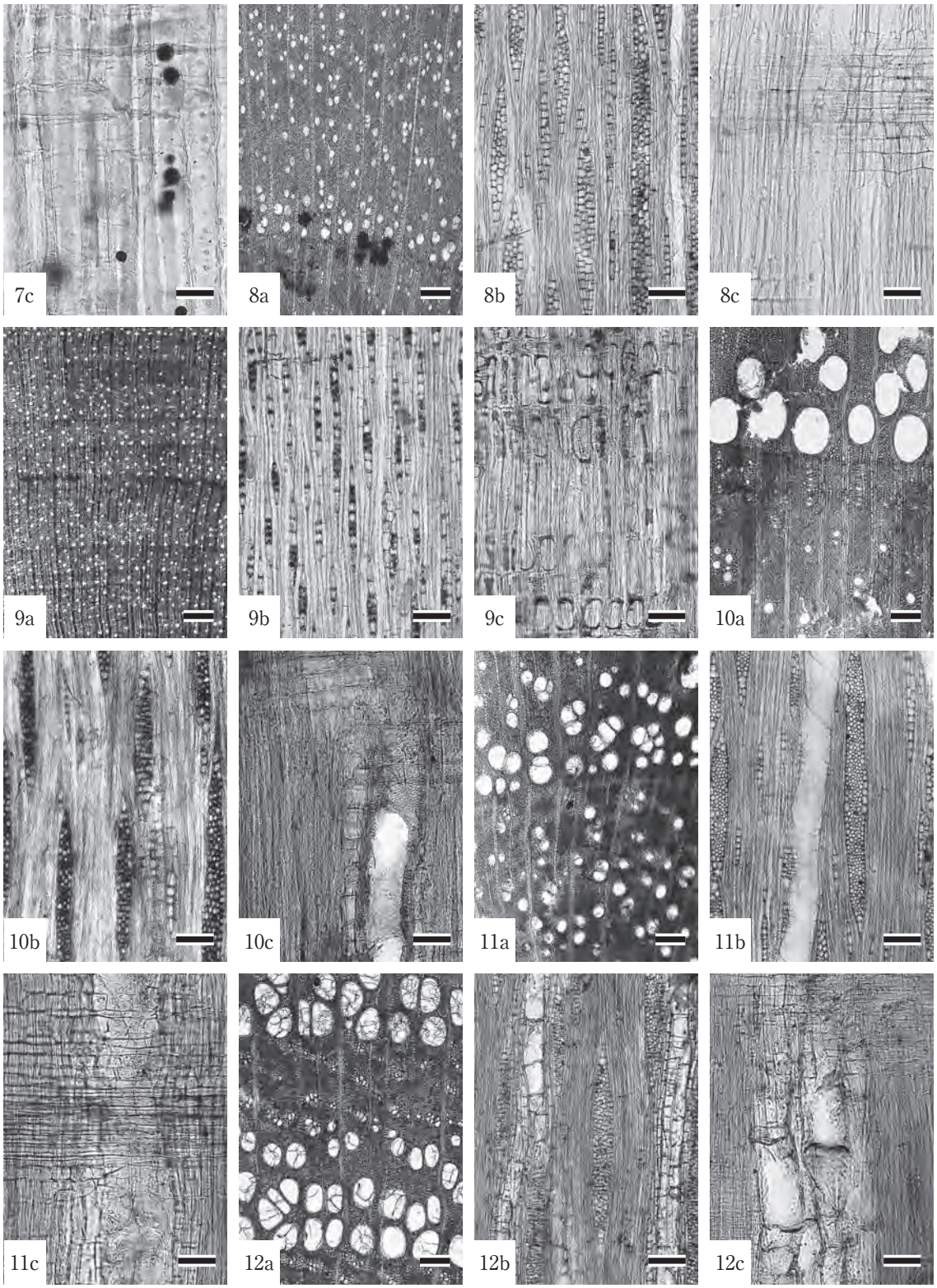


図２　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(2)

7c：イヌガヤ（枝・幹材、OKUF-1800）、8a-8c：モモ（枝・幹材、OKUF-1766）、9a-9c：ナシ亜科（枝・幹材、OKUF-1723）、10a-10c：ケンポナシ属（枝・幹材、OKUF-1788）、11a-11c：エノキ属（枝・幹材、OKUF-1813）、12a-12c：クワ属（枝・幹材、OKUF-1715）．a：横断面（スケール＝200㎛）、b：接線断面（スケール＝100㎛）、c：放射断面（スケール＝25（6c、7c）、50㎛）．

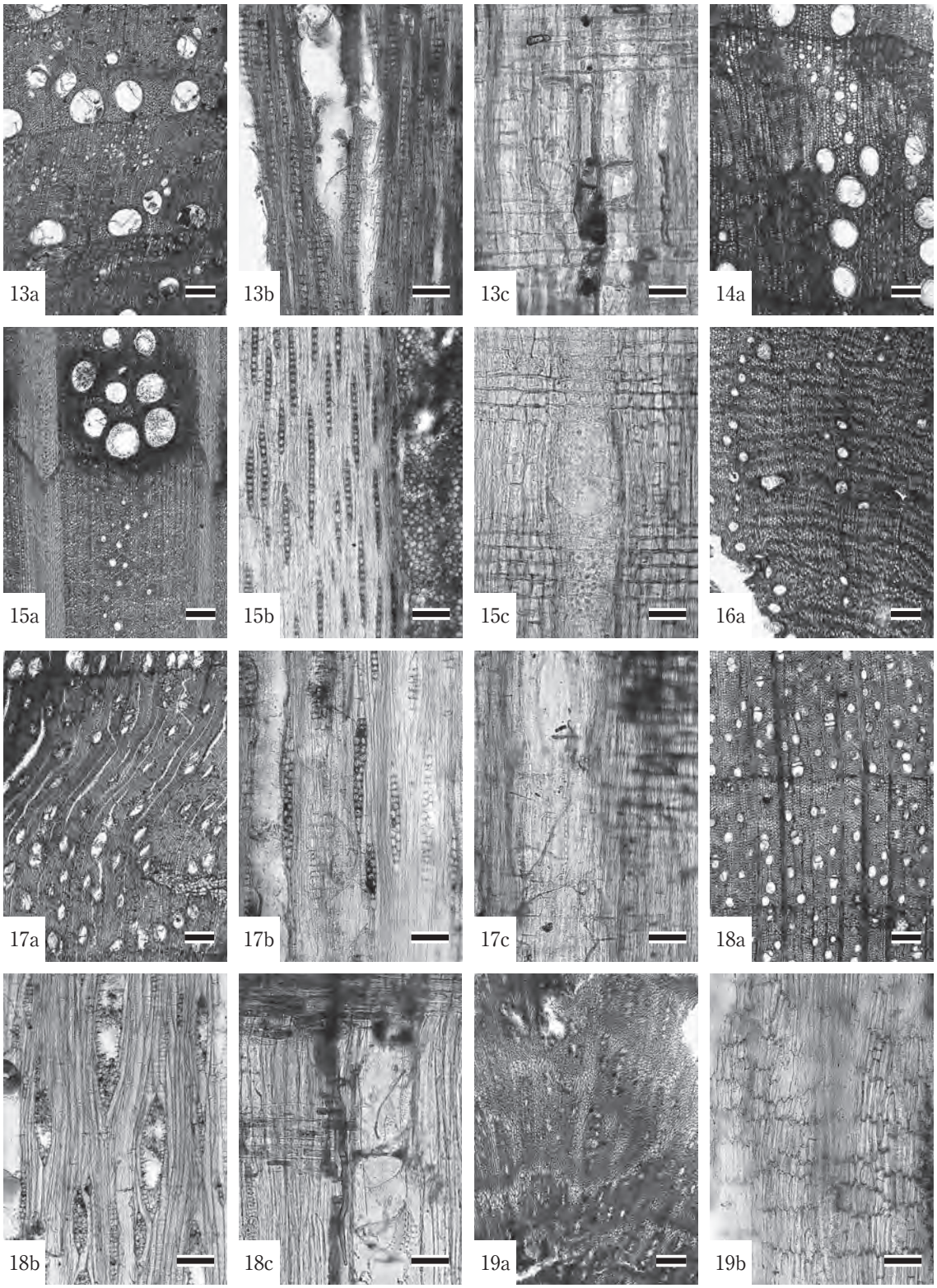


図３　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(3)

13a-13c：クリ（枝・幹材、OKUF-1760）、14a：ツブラジイ（枝・幹材、OKUF-1720）、15a-15c：コナラ属クヌギ節（枝・幹材、OKUF-1728）、16a：コナラ属アカガシ亜属（枝・幹材、OKUF-1730）、17a-17c：ヤマハゼ（枝・幹材、OKUF-1726）、18a-18c：カエデ属（枝・幹材、OKUF-1721）、19a-19b：アカザ（枝・幹材、OKUF-1733）．a：横断面（スケール＝200㎛）、b：接線断面（スケール＝100㎛）、c：放射断面（スケール＝50㎛）．

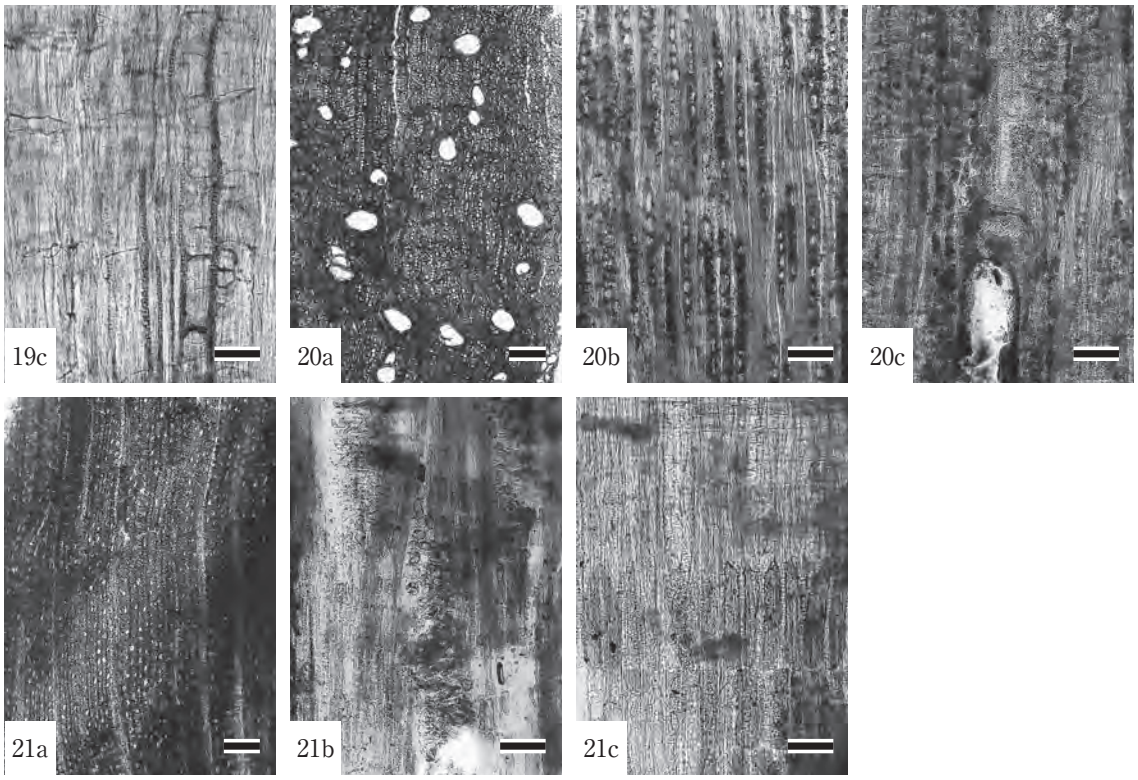


図４　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土木製品類と自然木の顕微鏡写真(4)

19c：アカザ（枝・幹材、OKUF-1733）、20a-20c：カキノキ属（枝・幹材、OKUF-1717）、21a-21c：シャシャンボ（枝・幹材、OKUF-1714）．a：横断面（スケール＝200㎛）、b：接線断面（スケール＝100㎛）、c：放射断面（スケール＝50㎛）．

第５節　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土種子と種子圧痕

はじめに

本節では、鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土の種子および種子圧痕の同定結果について報告する。

１．種子

⑴　分析の資料と方法

井戸１・２・５について、土壌を持ち帰りフローテーション法（0.5㎜メッシュ）を行い種子の検出を行った。種子の抽出、洗浄後に選別を行い、写真撮影と同定作業を行った。また溝26・40については、調査中に目視で確認できた種子を取り上げた後、上記と同様の作業を行った。

⑵　結果

４科４種を確認した（表１、図１）。古墳時代初頭の井戸１・２からはモモと雑草メロンの種子が、中世後半の井戸５からはオニグルミが検出された。中世前半の溝26からはモモ、中世後半の溝40からはヤマモモ・モモ・雑草メロンが出土した。

２．種子圧痕

⑴　分析の資料と方法

本分析では、鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査から出土した土器すべてを実見した上で、植物圧痕のあった資料６点を対象とし、レプリカ法（丑野・田川1991）を用いて６点の圧痕レプリカを採取した。

レプリカ作成方法の具体的な手順は以下の通りである。①圧痕をもつ土器の選定、②土器、圧痕部の洗浄、③土器全体写真と実体顕微鏡による圧痕部の拡大写真撮影、④離型材（パラロイドB72　５％アセトン溶液）を圧痕部とその周辺に塗布、⑤シリコーン・ゴム（ニッシン・JMシリコンまたはモメンティブ・シリコーンTSE350）を圧痕部に充填、⑥乾燥後、シリコーン・ゴムを土器から離脱、⑦圧痕レプリカをオスミウムによって蒸着後、走査型電子顕微鏡（日立製S-4800[1]）を用いて表面観察、⑧圧痕レプリカの大きさを0.01㎜単位で計測、⑨植物の同定である。

⑵　結果

同定できた圧痕レプリカは４点であり、３科３種を確認した（表２、図２）。圧痕はピットや包含層から出土した土器に付着したものであり、いずれも小片であるが中世に位置づけられるものである。アワ・アサ・ササゲが確認できた。

本分析における種子および種子圧痕の同定は沖陽子（岡山大学大学院環境生命科学研究科）が行い、それを基に山口雄治（本センター）が資料をまとめた。文章は協議の上山口が執筆し、全体を両者が調整したものである。

（山口雄治・沖　陽子）

註

⑴　機器の利用に当たっては、岡山大学医学部共同実験室の協力を得た。

引用・参考文献

浅井元朗　2015『植調 雑草大鑑』全国農村教育協会

浅野貞夫　2005『原色図鑑 芽ばえとたね』全国農村教育協会
丑野　毅・田川裕美　1991「レプリカ法による土器圧痕の観察」『考古学と自然科学』24　文化財科学会
中山至大・井之口希秀・南谷忠志　2000『日本植物種子図鑑』東北大学出版会

表１　検出種子一覧

写真番号	遺構	時期	科	種
1	井戸１	古墳初	ウリ	雑草メロン
2			バラ	モモ
3	井戸２	古墳初	バラ	モモ
4			ウリ	雑草メロン
5	井戸５	中世後半	クルミ	オニグルミ
6	溝26	中世前半	バラ	モモ
7	溝40	中世後半	ウリ	雑草メロン
8			ヤマモモ	ヤマモモ
9			バラ	モモ

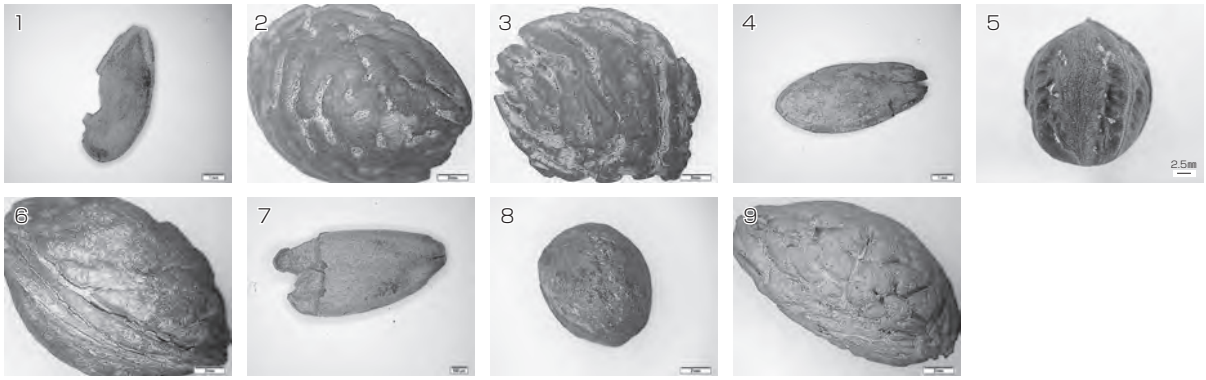
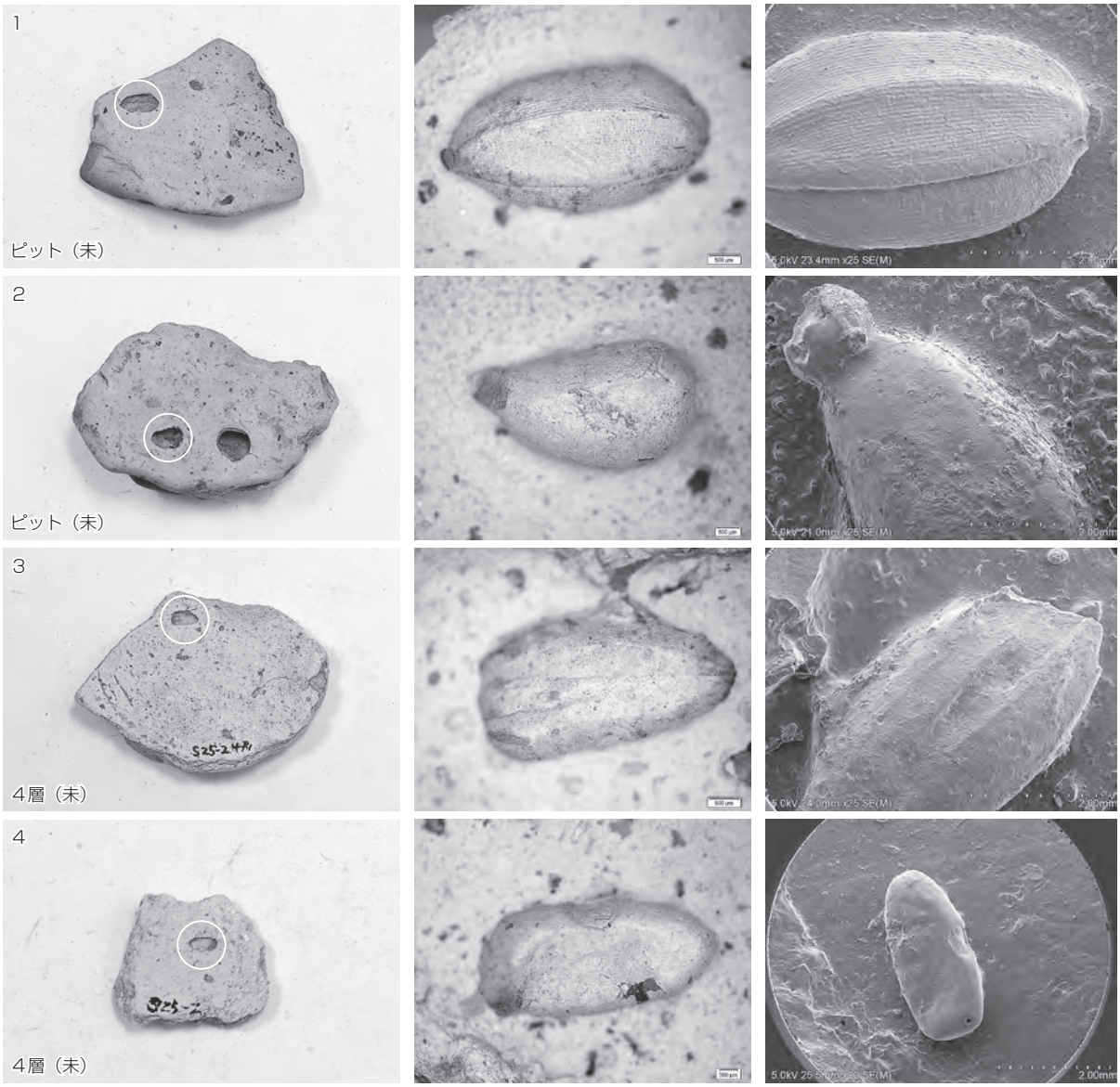


図１　出土種子

表２　種子圧痕同定結果一覧

No.	遺構	報告No.	時期	器種	圧痕付着部	科	種	長さ(㎜)	幅(㎜)
1	ピット	（未）	中世	－	外面	イネ	アワ	5.26	3.18
2	ピット	（未）	中世	－	外面	アサ	アサ	5.94	3.19
3	４層	（未）	中世	－	内面	イネ	アワ	6.38	2.73
4	４層	（未）	中世	－	内面	マメ	ササゲ	3.11	1.42

※報告No.の（未）は未掲載を示す



※写真左の番号（未）は未報告資料を示し、○部は圧痕の位置を示す

図２　土器圧痕の位置・拡大写真とSEM画像

第６節　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土動物遺存体

江川　達也（岡山理科大学）

本調査では、中世に属する哺乳綱が出土した（表１、２、図１）。以下に動物分類に従って出土資料の説明を行う。

１　ウシ目

ウシ　*Bos taurus*

ウシは４点出土した（表２ANo.１～３、５、図１）。鹿田遺跡９・11次調査では中世前半・中世後半～近世初期の層より出土（江川2017）、第14次調査では鎌倉時代、室町時代、近代の層より出土し（立石他2014）、また第24次調査では中世、近世以降の層より出土している（江川2018）。

側頭骨１点、下顎第４前臼歯１点、下顎臼歯１点、後臼歯１点が出土している。最少個体数は１である。

下顎第４前臼歯は萌出途次の段階で、高橋（1984）と比較し、2.5歳程度であると推定された。

２　その他

歯冠の形質から、ウシもしくはウマと推定される臼歯が１点出土した（表２ANo.４、図１）。

謝辞

岡山理科大学生物地球学部富岡直人教授には、比較標本の提供と同定・御教示・御指導を頂いた。また、岡山理科大学生物地球学部学部生の大越司君には同定作業を手伝って頂いた。記して感謝いたします。

引用文献

江川達也　2017　「９．鹿田遺跡第９・11次調査出土動物遺存体」『鹿田遺跡10』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター：pp.213-216
江川達也　2018　「鹿田遺跡第24次調査出土動物遺存体」『鹿田遺跡11』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター：pp.76-81
高橋　学　1984　「ウシの歯槽骨構造の成長変化」『歯科基礎医学会雑誌』26巻４号歯科基礎医学会：pp.1116-1143
立石和也・富岡直人　2014　「３．鹿田遺跡第14次調査出土動物遺存体」『鹿田遺跡８』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター：p.74

表１　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土動物遺存体種名表

大分類		小分類				
門	上綱・綱	亜綱・亜区・目	科	亜科・属	種・亜種	分類名
脊索動物門 CHORDATA	哺乳綱	目科属種不明				Mammalia order indet.
		ウシ目	ウシ科	ウシ属	ウシ	*Bos taurus*

表２　鹿田遺跡第20次調査Ａ地点・25次調査出土動物遺存体属性表

ANo.	遺構名	時代・時期	大分類	小分類	部位名	LRM	雌雄	部分	成長度	破損	風化	色調	図版番号
1	溝19	中世前半	哺乳綱	ウシ	下顎第４前臼歯	L	－	歯冠部	萌出途次	なし	viv	Br	2
2	溝19	中世前半	哺乳綱	ウシ	下顎臼歯	?	－	歯冠部	小窩独立以上	なし	viv	Br	3
3	溝19	中世前半	哺乳綱	ウシ	後臼歯	?	－	歯冠部破片	小窩独立以上	なし	viv	Br	4
4	溝19	中世前半	哺乳綱	ウシorウマ	臼歯	?	－	歯冠部破片	小窩独立以上	なし	viv	Br	5
5	井戸５	中世後半	哺乳綱	ウシ	側頭骨	R	－	岩様部錐体	?	なし	viv	Br	1

図１　ウシ、目不明（ウシもしくはウマ）
1～4ウシ（1側頭骨R、2下顎第4前臼歯L、3下顎臼歯、4後臼歯）
5目不明（ウシもしくはウマ）臼歯　［scale 1×］

第５章　結　　語

本書で報告した第20次調査Ａ地点および第25次調査地点は、鹿田遺跡の南東部に当たる。この周辺では第18次調査Ｂ地点、第14次調査地点、第９・11次調査地点の報告書が刊行されており、およそ6500㎡におよぶ広範な調査成果がある。本報告の調査地点は、これらの調査地点の北側に接する約3,000㎡におよぶ範囲であり、攪乱によって多くが失われていたものの、既報告の理解をより一層深めるものとなった。

本地点では、弥生時代後期～近世までの遺物・遺構が確認された。ここでは、各時代の成果を周辺の調査地点との成果と合わせて評価し、結語としたい。

【弥生時代後期～古墳時代初頭】

本遺跡では、第１次調査地点を中心に弥生時代中期後半から集落が営まれたことがわかっている。また、本調査地点の南側の第９・11・14次調査地点では、この集落に対応する広範な水田域が確認されている。本調査地点は両地点に挟まれた空間であるが、第９・11・14次調査地点と同様に当該時期の水田域を確認することができた。本調査地点は、北東部が高く南西部が低い地形を呈している。明確な畦畔は調査区南端部にのみ確認されたが、調査区北半においても円形溝群に似た溝６や＜８層＞とした耕作土が堆積していることからすると、少なくともBWラインまでは水田域だった可能性がある。それは、BWライン以北において焼土溜まりや井戸などが検出されていることとも整合的であろう。第９・11・14次調査地点から続く水田域は、本調査地点南半まで広がるものと想定できるが、本調査地点の攪乱の多さもあって確証を得ない。この検証は、今後本調査地点の東に隣接する第18次Ａ地点および第20次Ｂ地点と合わせていかなければならないだろう。

【中世前半：平安時代後期～鎌倉時代】

本時期では、屋敷地を区切る区画溝と墓２基が注目される。南北に走る大形の溝26は第９・11次調査地点から続いており、屋敷地を東西に分けている。両調査地点を合わせると、溝の西側で井戸６基・墓２基・土坑３基、東側で井戸４基・墓２基・土坑５基が確認されており、同地点に展開していた屋敷地の内容を把握することができた。

烏帽子を着装したまま埋葬された墓１は13世紀後半～末と考えられ、小刀や白磁皿２点と青磁碗２点といった豊かな副葬品をもっており、加えて木棺下に複数の銭や小皿が埋納されたものであった。また成人と未成人が合葬された墓２は12世紀末～13世紀前半と考えられ、白磁皿・碗と小皿２枚が副葬されていた。この墓２から墓１への時期的変化は、第９・11次調査地点と第５次調査地点においても確認されている。鹿田遺跡における経済活動の活発化やそれを支えた人物を評価する上で良好な資料を提示できたといえよう。特に、墓１の被葬者が、烏帽子の着装から武士と考えられることは重要である。こうした人物が本遺跡に存在したことを示す直接的な資料をはじめて得ることができたといえる。一方で、これら２基の墓は、埋納土坑が付属する点や合葬である点など特異な様相を呈する。こうした葬法とその意味については、今後の課題となろう。

【中世後半：室町時代】

中世後半の屋敷地の改変に伴って、中世前半の大形の溝が埋められた後、再び大形の溝によって屋敷地が区画される。溝の東側の区画は、周辺の調査成果と合わせれば東西115m×南北100m程の規模をもち、西側の区画も同程度の規模をもつものと想定されている。本調査地点では、この大形の溝に東西方向の溝がクランク状に接続し、それぞれの区画を南北に分割している状況を明らかにした。さらに、約25m間隔（１／４町）で南北方向に走る溝を確認でき、土地区画の細分に関する情報をえることができた。これまでの調査によって明らかにされた区画溝の再編を追認し、区画の具体的な分割状況を明らかにすることが課題となろう。　（山口）

遺　構　一　覧　表

a．井戸・土坑・墓・焼土溜まり

遺構番号	検出標高（m）		深さ(m)	上面（残存値）<推定値>		底面（残存値）<推定値>		断面形	時期
	上面	下面		形状	規模（m）	形状	規模（m）		
井戸１	1.04	－0.5	1.54	円形	1.6×(1.35)<1.6>	円形	直径0.8	Ｙ字形	古墳時代初
井戸２	0.88	－0.59	1.47	円形	1.3×1.25	円形	直径0.4	逆台形	古墳時代初
井戸３	1.4	新：－0.52 古：－0.57	新：1.92 古：1.97	新：円形 古：六角形	新：3.32×3.62 古：2.7	新：円形 古：六角形	新：1.1×0.7 古：1.2×0.7	Ｙ字形	13世紀後半
井戸４	1.03	0.29	1.51	円形	1.25×0.6		－	Ｙ字型	中世前半
井戸５	1.1	－0.6	1.7	円形	直径1.0	円形	直径0.5	逆台形	中世後半
井戸６	1.2	－0.33	1.53	円形	直径1.5	楕円形	1.0×0.8	逆台形	16世紀中頃
井戸７	1.45	－0.35	1.8	円形	1.45×1.35	円形	直径0.7	Ｙ字形	17世紀前半
土坑１	0.73	0.52	0.22	円形	1.35×0.52	－	0.7×0.15	皿状	弥生時代後期
土坑２	0.58	0.32	0.25	長円形	0.67×0.62	楕円形	0.45×0.45	椀状	弥生時代後期
土坑３	1.05	0.5	0.56	円形	1.55×0.86	円形	0.65×0.2	すり鉢状	中世前半
土坑４	0.94	0.63	0.31	円形	0.62×1.18	－	－	丸底状	中世前半
土坑５	0.67	0.57	0.1	円形	0.5×0.45	円形	直径0.2	椀状	中世前半
土坑６	1.39	1.03	0.36	隅丸方形	(0.7×0.5)	隅丸方形	0.6×0.3	箱形	近世
土坑７	1.24	1.01	0.23	楕円形	(1.1×0.4)	隅丸方形	0.7×0.25	逆台形	近世
土坑８	1	0.95	0.05	円形	1.15×1.1	円形	直径1.1	箱形	近世
土坑９	1.4	1.01	0.39	隅丸方形	(1.0×0.76)	隅丸方形	0.6×0.5	椀状	近世
土坑10	1.23	1.09	0.14	円形	直径0.8	円形	0.7×0.6	皿形	近世
土坑11	0.705	0.285	0.42	円形	直径0.6	円形	直径0.2	逆台形	近世
土坑12	1.2	0.95	0.25	方形？	0.7×0.6	方形	(0.5×0.4)	逆台形	近世
土坑13	1.25	0.8	0.45	円形	直径1.4	楕円形	1.0×0.9	逆台形	近世
土坑14	1.15	0.5	0.65	隅丸方形	1.0×1.0	方形	(0.7×0.7)	箱形	近世
墓１	1.25	墓壙：1.00 土坑：0.90	0.25 0.35	隅丸方形	1.79×1.12	方形	1.69×1.03	箱形	13世紀後半～末
墓２	1.08	0.91	0.17	隅丸方形	1.23×0.6	方形	1.01×0.51	皿状	12世紀末～13世紀前半
焼土溜まり	0.95	0.87	0.08	不正楕円形	2.28×1.6	不正楕円形	2.15×1.45	皿状	古墳時代初

b．溝

報告番号	検出標高（m）		深さ（m）	断面形	幅	方向	時期
	上面	下面					
溝１	1.05	0.75	0.3	皿状	1.4	N23°W	弥生時代後期
溝２	0.95	N：0.8－S：0.75	0.15－0.2	椀状	0.5	N19°W	古墳時代初
溝３	0.95	0.75	0.2	椀状	0.63	N55°W	弥生時代後期
溝４	1.08	0.80	0.28	皿状	1.15	N55°W	弥生時代後期
溝５	1.05	0.8	0.25	皿状	1.2	N55°W	弥生時代後期
溝６	0.88	0.75	0.13	椀状	0.5～0.6	－	古墳時代初
溝７	0.73	0.65	0.08	皿状	0.3	N61°E	弥生時代後期
溝８	0.75	0.71	0.04	椀状	0.35	N57°E	古墳時代初
溝９	0.79	0.71	0.08	椀状	35	N25°W	弥生時代後期
溝10	0.77	0.68	0.1	皿状	0.45	N74°W	古墳時代初頭
溝11	0.8	0.69	0.1	皿状	0.45	N74°W	弥生時代後期
溝12	0.82	0.76	0.06	皿状	0.24	N74°W	弥生時代後期
溝13	a：0.75 b：0.75	a：0.76 b：0.7	a：0.06 b：0.05	a：椀状 b：皿状	a：0.24 b：0.56	－	古墳時代初
溝14	0.9	0.8	0.1	椀状	0.6	N22°E	古墳時代初

報告番号	検出標高（m）		深さ（m）	断面形	幅	方向	時期
	上面	下面					
溝15	0.9	0.65	0.25	椀状	0.23	N74° W	古墳時代初頭
溝16	0.75	0.5	0.25	椀状	0.3～0.5	N0° E	弥生時代後期
溝17	a：1.40 b：1.30	a：1.23 b：1.14	a：0.17 b：0.16	皿状	2.75	N12° E	12世紀前半
溝18	1.25	0.8	0.45 0.43	箱形	0.76	N5.5° E	中世前半
溝19	1.39	1.08	0.31	椀状	1.15	N5° E	中世前半
溝20	1.42	1.27	0.15	椀状	0.5	N11° E	中世前半
溝21	1.39	1.02	0.37	椀状	1.8	N14° E	13世紀末頃
溝22	1.12	0.94	0.18	椀状	0.74	N108.5° E	13世紀代
溝23	1.33	1.18	0.15	皿状	0.75	N7.5° E	中世前半
溝24	1.3	1.08	0.3	椀状	0.85	N81.5° W	中世前半
溝25	1.23	1.1	0.13	皿状	0.55	N82.5° W	13世紀前半
溝26	a：1.3 b：0.7	－0.1	0.9	逆台形	a：5 b：4	N10° E	13世紀後半～14世紀前半
溝27	1.04	0.85	0.19	逆台形	0.39	N10° E	中世前半
溝28	1.29	1.07	0.22	椀状	1.2	N23° E	中世前半
溝29	1.4	1.1	0.3	椀状	0.45－0.5	N18° E	中世前半
溝30	1.01	0.9	0.11	皿状	0.83	－	13世紀末～14世紀初頭
溝31	1	0.95－0.97	0.03	椀状	0.5	N75° W	中世前半
溝32	1	0.91－0.97	0.1	皿状	0.45	N75° W	中世前半
溝33	1.2	1.05－1.15	0.15－0.05	皿状	0.5	N95° E	中世前半か
溝34	1.2	0.85	0.35	逆台形	0.2	N109° E	中世前半
溝35	1.2	0.8	0.3	逆台形	0.45	N106° E	中世前半
溝36	0.9	0.75	0.13	皿状	0.5	－	中世前半か
溝37	0.97	0.8	0.17	椀状	0.72	－	中世前半
溝38	1.05	0.88	0.17	椀状	1	N13° E	15世紀後半
溝39	1.17	0.95	0.22	椀状	0.6	N16° E	中世後半
溝40	a：1.45 b：1.2	a：0 b：0.3	1.45－0.9	逆台形	5.6－6	N14° E	15世紀後半～16世紀初
溝41	1.2	0.35～0.4	0.77	椀状	3.2	N71° W	15世紀代
溝42	b：0.74 c：1	b：0.05 c：0.22	0.78	椀状	1.17	N72° W	15世紀後半～16世紀初
溝43	1.5	0.9	0.6	皿状	－5.1	N14° E	17世紀前半

c．畦畔

遺構番号	上面高（m）	下面高（m）	高さ（m）	幅（m）	方向	形成層
畦畔１ a	0.88	N：0.83　S：0.78	0.14	0.4	EW	＜９層＞
畦畔１ b	0.92	N：0.85　S：0.83	0.1	0.35	EW	＜９層＞
畦畔２	－	0.65	－	－	EW	＜10層＞

報告書抄録

ふ り が な	しかたいせき12
書　　名	鹿田遺跡12－第20次A地点・25次調査－
副　書　名	岡山大学病院中央診療棟他新営に伴う発掘調査
シリーズ名	岡山大学構内遺跡発掘調査報告
シリーズ番号	第34冊
編 著 者 名	山口雄治（編著）・岩﨑志保・野崎貴博・高椋浩史・能城修一・沖　陽子・江川達也
編 集 機 関	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
所　在　地	〒700－8530　岡山県岡山市北区津島中三丁目１番１号
発行年月日	2018（平成30）年３月30日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	世界測地系	世界測地系			
鹿田遺跡第20次A地点・25次調査地点	岡山県岡山市北区鹿田町二丁目５番１号	33201	県2208	34°39′1	133°55′12	第20次A地点：20090601～20090824 第25次：20140106～20140822	3177㎡（第20次A地点：632㎡ 第25次：2545㎡）	中央診療棟新営他

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺溝	主な遺物	特記事項
鹿田遺跡第20次A地点・25次調査地点	田畑	弥生時代後期～古墳時代初頭	井戸・土坑・溝・畦畔・焼土溜まり	弥生土器・土師器・杭	
	集落	平安時代後期～鎌倉時代	井戸・土坑・墓・溝・ピット	土師器・陶磁器・木製品・漆椀・木簡・小刀・鉄釘・銭・人骨	烏帽子
	集落	室町時代	井戸・溝・ピット	土師器・陶磁器・木製品	
	田畑	江戸時代	井戸・土坑・溝	陶磁器・銭	

2018年３月30日発行

岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第34冊

鹿田遺跡12

編集・発行　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
岡山市北区津島中三丁目１番１号
（086）251－7290

印　　刷　西尾総合印刷株式会社
岡山市北区津高651
（086）254－1111㈹